THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年　第八號

第二百八十一號

田岡嶺雲先生譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也 本叢書は此要請に應じたるもの

●全十二冊完成 總クロース堅牢美本

原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者

●內容裝釘等の詳細見本は郵券二錢を要す

第一編 和譯老子荘子 正價壹圓 郵税拾貳錢
第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵税拾錢
第五第六編 和譯史記列傳 上下二冊 正價各一圓廿錢 郵税各拾貳錢

第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵税拾貳錢
第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第九編 和譯墨子列子 正價壹圓拾錢 郵税拾貳錢
第十第十一編 和譯春秋左傳 上下二 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢
第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵税拾四錢

◎批評◎

『譯文の簡淨、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば做し得ざるの特色あり』（東京朝日）。
『これならば譯と云ひても原文の妙を損ぜず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。
『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

樋口銅牛先生著（再版）

碑碣法帖談

附 孫過庭書譜 ◎ 和漢歴代法書

書道の嗜なきは士人の恥也 本書は書學書道の燈明臺也

菊判總クロース 金文字入美本 全一冊 正價一圓五十錢 郵税十二錢

發行所 東京神田雉子町 玄黄社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五番

見よ

八月號の獅子吼

太陽

八月一日發行 第拾一號 正價卅錢 郵税三錢 前金税共 四册一圓廿七錢 八册二圓四十四錢 十六册四圓六十八錢

◉米價問題 小林博士、河津博士、鹽澤博士、阪谷男爵、堀江博士 諸氏談

○隈伯時感 大隈伯爵
●美術小言 岩村透
●文藝座談 近松秋江
●米價論 本多精一
●文藝時評 金子筑水
●政治外交時評 淺田江村

▽新東京市長阪谷男 南木摩天樓
▽性慾問題に就て 澤田順次郎
▽氣まぐれ日記 內田魯庵
▽汽車旅行の今昔 木下淑夫

□現代の漢字整理問題 後藤朝太郎
□再び國體に關する異說に就て 上杉博士
□試驗制度の廢止に就て 奧田博士
□本邦城郭保存の議 大類伸
□世界の偉觀たる二大競爭 浮田博士

振替東京二四〇番

東京本町 博文館

電話本局三百三番

●好文會文稿 諸家
●生命の迷 永井博士
●小說江藤と余 高濱虛子
●小說封筒 中村星湖
●外時評十數項……
○源義經論 山路愛山

▽小說エリオトローブの匂ひ 水野葉舟
▽出雲新風土記 坪谷水哉
▽不忍池の今昔 福原雨六
▽河南の俠雄王天縱 中久喜信周

◉北米の政局 堀越善重郎、田中萃一郎、福井菊三郎、其他 諸氏談



滋養強壯
ソマトーゼ
衰弱症・虚弱者・肺病
胃腸病者・發育不良
の小兒に卓効あり
横濱市山下町
神戸市明石町
バイエル會社
發賣

英語の必要今日より急なるは無し

狂熱的の歡迎――忽ち拾版――

前田文學士著『英語自由自在』一度出づるや爲めに讀書界は殆んど狂せんばかりの大歡呼を以て迎へたり。茲に於てか始めて知る、今や英語の必要其極度に達せることを――又從來の獨習書若くば通信講義に對し如何に不滿足を感じつゝありしかを。斯くの如き傾向は、やがて英語を知らざる人を實社會より放逐するに至るべし。今日を逸して他に英語修得の好機會斷じてあるべからず。本書(五十回講義)に依つて

本日より講習すれば
來月二拾日に終了し

英字の新聞雜誌を自由に讀み、會話作文を自在になし得るに至らしむ。本書が出版界のレコードを破り、斯くの如き未曾有の狂熱的大歡迎を受くるに至りしは決して偶然にあらざるなり。殊に本書の如き單行本に質疑券を附して絕對に教授の責任を負ふの擧は本書の信用を一層增大せし一大原因なるべし。尙本書は菊判六百頁特製特價金貳圓廿錢送料拾五錢並製上下二冊各冊金壹圓送料八錢。內容見本は東京本郷區大學正門前。英語速成普及會(電話下谷三二一〇番)(振替二〇〇五三番)へ申込み次第無代進呈すべし



本間久氏著 白眼

定價七十五錢 送料八錢

文壇の熱血兒本間久氏は曩に「小說 枯木」を著して文壇を驚歎せしめ全國青年男女の敬慕を一身に集む。その筆たるや自在奔放、彩華英發讀者をして面を向けざらしむ。今や隨筆「白眼」を著して更に天下に問はんとす。此れ著者が偏に新舊想の融合を計り、世の青年男女を導き、併せて父老に諮らんとするものにして、氏が所謂眞人の道、生活の意義、新道德の何たるかは氏の生活を透して[illegible]男子が絶叫の聲を聞け。

本間久氏著 小說 枯木
定價一圓三十二錢 送料八錢

遲塚麗水氏著 小說 乳屋の娘
可憐の小女の運命波瀾曲折の妙を盡す。
定價七十五錢 送料八錢

遲塚麗水氏著 小說 劒之舞
曾て滿都の子女を狂奔せしめたる小說。脚本として數回上場
定價七十五錢 送料八錢

澤田楓窓氏作 小說 純潔
性慾問題を解決せんとする一種風變りの小說。
定價八十錢 送料八錢

桑田春風氏編 日記文の模範 趣味の日記
古今の名家數十氏の模範的日記文を集む。
定價九十五錢 送料四錢

佐藤善治郎氏著 南清紀行
南清の事情手に取る如く吾人の目に彷彿す。
定價五十錢 送料六錢

發兌 東京京橋 良明堂書店
電話京橋長二三四[illegible]

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

尼僧……長田幹彦

夢……正宗白鳥

せん・子……小山内薫

殘酷……德田秋聲

赤蜻蛉……鈴木三重吉

大津淳吉……志賀直哉

重荷……田山花袋

（附錄小說）

の八篇何れも作者苦心の名作にして、我文壇最高位を占むべき雄篇たるを疑はず、特に本號には長篇極めて多く、本號世に出づるの日、必らずや文壇に波瀾を捲き起すべきを信ず。

『中央公論』發行所　反省社編輯部

本書の需要は昨年の夏よりも本年の夏は更に增大せり

文學士水島耕一郎先生著在日本リーチ書伯口繪◎四六判六百頁正價壹圓廿錢送料拾二錢

大好評八版

森林生活

社會の煩雜年一年に甚しくして弊と利と共に漸く大なるを憂ふ僞善を棄て、獨眞を樂むの途如何、涼榻三尺先づ本書に就て生活の要諦を看取せよ。

生活を愛して而も生活に毒せられざらんと欲する者に本書を薦む。

銷夏の好伴侶

尾池宣卿先生著 大歡迎忽三版 **豐太閤** 特價九拾錢 送料拾錢

市原隆作先生著 大好評忽八版 **屋島と壇の浦** 正價八拾錢 送料拾錢

毛内手空君著 大評判忽五版 **名士の片影** 正價四拾五錢 送料六錢

橘澤碁君著 小杉未醒君畫 **番茶一杯** 正價三拾五錢 送料四錢

東京本郷森川町 振替壹九六四七番 **文成社** 送料不用



中央公論第二十七年第八號目次



WATTS.



"THE NYMPH"

至尊御惱

七月廿日宮内省は官報號外を以て突如　天皇陛下の御病症を發表し、爾後毎日之を繼續せり、其の公表せられたる處によれば、　陛下は去る明治三十七年の末に糖尿病に罹らせられ、卅八年の始め腎臟病を併發し玉へるが、爾後病勢に增減あるも、格別の事なかりしに、本年七月十四日に至りて、腸胃病に罹らせられ、十五日より稍々御嗜眠の狀態にあらせられしが、十九日夜に至り、俄かに御體溫四十度を超ゆるに至れるなりといふ、事は總て世人の既に知れる所の如し。

吾人國民は實に憂懼措く所を知らざるなり、御症狀の初めて發表せられし日、我が株式市場には未曾有の暴落を現ぜしといひ、市民が古來盛夏の一行事として殷賑を極め來れる隅田川の川開きを中止し、且つ、一切の興行物自から停止して、恰かも鳴物停止の場合の如き、國民が如何に暗愁に鬱せるかを徵すべく、神社佛閣多くは、御快癒を祈らざるなく、國民また悉く至誠を捧げて神に禱り佛に願ふ、其の至忠至誠、恐らくは天地に感應して、竟に必らず　至尊御快復あらせ玉ふや言を俟たざるべし、吾人は斯く感じ、且つ最も斯く待望す。

陛下御即位以來四十五年、國事に盡瘁し玉へる實に深し、維新の大變革に次て、宏謨漸く成るや、淸國及び露國との戰役あり、有史以來曠古の大事にして、爲めに聖慮を勞し玉へると實に大なりしなるべし、御病源たる糖尿症の發せるの恰かも露國との戰役中にして、殊に旅順の攻落に困難を極めたりし時なるを思へば、而して此の病症の主として腦力を過勞するの結果なりといふを思へば、吾人は　陛下御軫念の竟に御病となれるを推斷して、最ゝ恐懼に堪えずとす。

唯だ　陛下御體質常人に超えさせ玉ひ、且つ多く天佑を得させ玉ふ、此の御大患にも竟に打勝たせ玉ひて、國民擧げて再び天日の淸朗なるを仰ぎ視るに至らん乎、吾人は　陛下が御即位五十年の御大典と御成婚後の金剛石式とを擧げさせ玉はんとを期待し、神佛の冥護の必らず然かあるを祈るや切也。

（七月二十三日商議）

中央公論



第二十七年
第八號
第二百八十一號

支那に對する日露同盟論

（一）

支那の將來は依然として疑問也、去年十月中旬動亂の勃發せる以來、我が外交當局其の觀察を謬まれるに止まらず、元老と雖も、外交當局を攻擊して峻烈を極めたりし所謂支那通の在野政事家と雖も、總て其の判斷を錯まりたりき、唯り我が國のみならず、歐米諸國人また又然り、彼の歐人中第一の支那通と稱せらるゝタイムス通信員醫師(ドクトル)モリソンと雖も、屢々過誤を免かれざりし也。

意想外なる幾多の曲折を經て、今春竟に袁世凱大總統となり、唐紹儀總理大臣となれるも、六國借款のため、唐は端なくも其の地位を去らざるを得ざるとゝなり、後任者陸徵祥の下に於て、今尚ほ大臣の

去就定まらず、且つ列國共に未だ支那政府を承認するに至らざる一方に於て、借款竟に成らず、各省をして任意に資金を調達せしむるの外なからんとす。

茲に於てか支那の將來に就て、第一中央政府は其の政治施設に要する資金を孰れより得るや、第二各省都督等また如何にして所要の費額を調達するやの兩問題を生ず、幸ひにして比較的容易に革命を遂行し得たり、然るも帝政を廢して民國を建設したりといふ空名はあり、民國たるの實を擧げて、制度を整ひ、文物を定めて以て生民のためにせんとする事蹟に至ては未だ寸分だも其の實あらず、苟くも其の實を擧げんとせば、必らずや人と金とを要す、吾人の見によれば、支那未だ民國の實を擧ぐべき人材を有せざる也、民主共和説を執て、多年其の皷吹に努めたりし孫逸仙の如き、畢竟一の學究のみ、經國の業を成すの膽略伎倆に至ては、幾んど一の看るべきなし、况んや孫以下の徒をや、然れども草澤の間古來英雄を生ず、未知の豪傑或は是より風雲に乘じて起るなきを保せず、唯だ黄金に至ては、無より有を生ず可らず、歸天齋正一の手品と雖も、之を奈何ともする能はざるのみ。

果して資財なしとすれば、立國に缺く可らざる軍備も成らず、各般の制度、假令審議せられ立案せらるゝも、畢竟紙上の空案に止まりて、一の實行さるゝものなく、其の結果は無政府に齊しかるべし、否文武官の俸給すら之を支辨するに由なからんとする也。

各省また又中央に同じ、若し各省にして借款を起さん乎、其の擔保とする處の利權に就て、中央政府の承認に踏躇するあるに止まらず、省民中にもまた反對者ありて、徒らに紛糾するに終り、事益々困難

を加ふべし、假令幸ひにして各省の借欵成るも、此がため省の權勢加はるに比例して、中央政府の威令彌よ行はれず、其の結果民國の存立を疑はるゝにも至るなきを保せず。

(二)

支那人は其の政治思想極めて幼稚にして、未だ全く國民性を有するに至らず、且つ古來一種の謬想に囚へられ、苟くも仁政といへば、必らず租税を減免するものと做し、此の仁政のみを歡迎して、帝政たると民主政たるとの如き素より問ふ所に非ず、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずと稱して、執政者の何たるの如きは毫も之を問はず、彼の三百年來主權者たりし清帝廢せらるゝも、一人の起て節に殉する者なく、隨つて民國を建設して其の政體を一變し、由て以て多年の宿望を逐すと稱するも、一富豪の其の資を献するあらず、唯だ利あるを知て義あるを知らざれば也。

故に支那人は猶太人の如く、人種としては侮る可らざる勢力あり、貨殖に長じて多く富を畜積し得んも、國民として嚴然たる國家を建設し得んとは全く不可能なるも未だ知る可らざる也。

近く事實に就て考慮するも、彼の百萬に餘れる南北の軍隊は之を奈何すべき、其の組織を繼續し、之を訓練し陶冶して精鋭と爲らしむる、妙は則ち妙なれども、平時百萬の大兵を常備するは、大なる富國と雖も能くせざる所、支那は到底其の負擔に堪えざる也、若し之を解散せん乎、俸給の外尙ほ十分なる手當を給せざる可らず、少くも彼等が差當つて無職のため糊口に窮せざるの手當を支給せざる可らず、此がためには多くの資金を要し、隨つて六國借欵の必要殆んど焦眉の急と稱せられたりき、或は今や農

繁の時、軍隊を解散するも、彼等は直ちに農家に傭ひ入らるゝを以て最も好機會なりと稱する者あり、然れども支那には多くの勞働者あり、如何に農繁の時と雖も、決して勞力の缺乏を訴へざる也、彼の車夫馬丁若くば土方立ん坊たりしに、一朝の變に軍隊となり、銃を肩にし劍を腰にして勢威を揮ひ、且つ比較的美食に飽けるもの、忽ち丸腰となりて元の車夫馬丁土方立ん坊たらんとするは難し、農家に雇はれて純良なる雇人となる最も難し、兵の散じて盜となり、所在に亂を起すと、實に支那古來の風習にして爲めに英君賢相は、外征の師を起して以て功名を彼等に分つ乎、然らずんば之を鋒鏑に斃れしめて以て其の兵氣を銷するを常としたりき、今や支那の中央政府地方政府共に財貨に窮して外征を爲すが如き思ひも寄らず、而して之を解散せば、或は叛亂を蔓延せしむるの虞あらんとす、其の窮厄實に意料の外にあり。

一人亂を作せば十人之に應じ、亂に乘じて剽掠を逞くするは支那人の習俗也、財物を刧略し、婦女を凌辱する者出づれば、甚だしく純良ならざる者の外は、相率いて之に倣ひ、爲めに區々の小亂をして倏忽變じて大亂たらしむるは支那古來の常習たり、故に軍隊の處分は、實に禍亂の一源也。

(三)

支那の將來は實に測り難し、現に綱紀地に墜して確乎たる統治の責任を負ふものなし、其の商取引の十分確實に行はれざる、素より絮說を俟たざるのみ。

假令變亂の間にあらざるも、又將來の事豫測す可らざるも、支那人としては食ふ物丈けは食はざる可

らず、又着る丈けは着ざる可らず、故に其の消費業より平時より減ずるも全く絶無とはならず、隨つて彼等も亦賣る丈けの物は之を賣らざる可らずして、不完全ながらも通商尚ほ行はる、況んや眼前に小康を得る今日に在てをや、然れども信用全く破壞せられて、商取引の十分に行はれざるがために、將來を見越して賣買を約するが如きは、異常なる冒險者流に非ざれば斷じて爲さゞる所にして、我が商工業者の支那に對して尚ほ全く悲觀する、實に其の所なりとす。

此の形勢にして永續するとは、我が國の到底堪へざる所にして、支那と通商して利害の關係ある列國また實に然り、殊に今日眼前の小康すら保つ能はずして、兵亂各地に起り、各省の平和得て確保しがたきに至らん乎、列國商工業者の損害幾んど量る可らず、是れ亦列國の永く堪ゆる能はざる所とす。

故に眼前の小康と雖も、形勢未定のまゝに永續せんとは、通商上默止す可らず、況んや變亂所在に起りて秩序全く紊れ、商取引悉く杜絶せざるを得ざるに至るをや、支那の將來は、到底列國の坐視し能はざる所たるや明らか也。

然らば則ち列國の支那に對する態度は如何、分割乎、共同干渉乎、二者必らず其の一に居らん、此の世界有數の尨然たる一大國を擧げて、一のバルカン半島たらしめんとす、之と隣接する我が日本の受くる影響の大なる、識者を俟たずして知るべきのみ、乃ち之に對して、我が大に備ふる所なかる可らざるや論莫しとす。

(完)

バルカン問題の紛糾せる以來、既に百年に餘れるも、未だ之を解決するに至らず、依然として歐洲列國を惱ますは他なし、其の問題解決の主人公たるものなければ也、一方に獨墺伊あれば、一方に英露佛あり其の力相角するに足つて孰れも他を壓倒するに至らず、而して二派の見また竟に一致する所なし、若し英露獨の三國一致せん乎、然かも佛にして之と同じからずんば、英露は佛を助けざる可らず、墺又は伊の希望之と異ならん乎、獨は勢ひ自ら退きて其の同盟國たる墺又は伊を助けざる可らず、然かも英露佛獨墺伊の意見一致するが如きは、實に稀有にして而して枝葉の小問題のみ、根本的問題に至つては、容易に一致する所あらず、隨つて英も其の一存を以て事を定む可らず、露も獨力にして押切るを得ず、而して獨逸また然るのみ。

支那をして第二のバルカンたらしめ、常に紛糾を絶たず、百年を經るも其の運命を決する能はざらしむるが如きあらば、之と隣接せる我が國は始終之に惱殺せられ、幾んど他事を顧みるの遑なく、國運ために萎縮するの虞なきに非ず、彼の朝鮮問題が雄略推古間の我が列朝政府を惱ましたるの如何に深かりしを回想せよ、而して明治初年以來、併合遂行まで又如何に我が國民を惱ましたりしかを思へ、我れは此がために實に淸國及び露國との二大戰爭をすら敢てしたりしに非ずや、朝鮮すら既に然り、況んや之に百倍する支那に於てをや。

速かに支那問題を解決して、第二のバルカンたらしめざらんと欲せば、我が日本は獨力を以て能く之を處分し得るの實力を有せざる可らず、少くも英露兩國と協力し、三國相倚り相助けて以て其の解決の

任に當らざる可らず、英國とは既に同盟せり、更に露國とも同盟するを要す。

其の海上は英米獨の海軍之を治め、其の陸上は日露兩國の陸軍之を鎮せば、支那問題の解決は實に理想的なるを得べし、然れども此の多くの國と相計りて、而して若しバルカン問題の如く、各自の一致點を得ると難くんば、其の弊や擧げて言ふ可からざる也、故に露國は北よりし、日本は南よりして陸上を治め、而して英國は海上を鎮すべく、斯くしても萬一尙ほ一致する能はずんば、則ち我が日本は獨力を以て支那を處分すべし、其の陸を治むると共に海も亦之を鎮すべきのみ。

此の大なる覺悟あり、實力ありて始めて能く速かに支那問題を解決し得、徒らに列國共同の美名に拘泥して、此の大覺悟と實力とを欠かば、支那は必らずや第二のバルカンたらん、我が國の之に惱殺せらるること幾んど百年以上ならん。

吾人は此の見解よりして軍備を定め、且つ外交方針を決定すべきを主張す。其の基礎なくして海主陸從を饒舌し、或は外交の能不能を喋々するも、畢竟は空談徒說、事に寸益なきのみ。

（五）

英國の外交當局は、近時頻りに日英同盟の効果を頌し、支那の變亂中、列國の之に乘ずべき機會多かりしに拘らず、竟に其の事なくして、幸ひに領土保全主義を支持し得たりしものは、實に日英同盟の儼存するが爲めなりしといへり、洵に然り、去れば英國が今後尙ほ日本との同盟を堅くし、此の同盟によりて支那に於ける通商上の利益を保全し、併せて其の勢力圏内なりと自信する揚子江流域を支持せんと

期待するは當然にして、我れ亦毛頭も之に異存なし。

然れども支那の領土保全主義が、其の本部に止まりて外藩に及ばざることは、英國が彼の滿洲問題に對する獨逸の提議に同意したりしに徴して明白也、支那の變亂以來、露國が力を蒙古に用ゐんとするに對し、日英兩國の新聞紙中、領土保全主義の存在を疑ひ、延きて日英同盟の効果如何を議せる者ありしも、實は英國政府の心中を解せざるのみ。

英國は西藏問題の解決に食指を動かすもの也、英國にして若し眞に領土保全主義を外藩にまで應用せんとせば、豈之を敢てす可けんや、故に日英同盟の領土保全主義なるものは支那の本部に止まり、然かも獨逸の租借地たる膠州灣の如きものを除外せざる可らざる也。

此の解釋によりて、吾人は露國との同盟を確實に締結し得べしと信ず、我れ既に露國と一戰し、其の南滿州に於ける出口を防遏して、以て我が利權の擁護を全くしたる以上、露國をして更に他の方面に進出せしめて、之を防阻するなきは當然にあらずや、若し極端まで支那の領土保全主義を恪守して、以て正面より露國と爭はゞ、是れ單に日露兩國の確執によつて兩國民を疲弊せしむるに止まらず、實に東洋の禍根を据えて、永く其の平和を亂す也、斷じて非人道的也、兩國たるもの宜しく世界人道のため、平和のため、茲に握手を緊くして腹藏なく其の利害を商量し、其の進むべき所、止まるべき所を協定して以て同盟の誼を訂すべき也、是れ國家百年の長計にして、又實に平和のため也、人道のため也。

露國は支那と境壤を隣接すると最も廣くして、利害の關係隨つて深し、支那問題を解決するに方つて

之を疎外せんとするも能はざる也、乃ち相倶に謀りて、支那處分の主人公たるべきのみ、之がために兩國の同盟を訂し、攻守相倶にするは寧ろ當然ならずや。

且つ古來詐術を以て外交の妙なりと自信せる支那は、近時米國に倚り、獨逸に頼りて日露兩國を離間せしめ、其の相爭ふによりて鷸蚌の利を收めんと欲し、密かに畫策する所ありしが如し、而して滿州問題以來、日露に快からざる米國は、容易に支那の計略に籠絡せらるべく、獨逸に至ては、畏るべき露國をして歐洲問題に容喙せしめざるがため、專ら日本に對する復讐戰のみに專念せしめんとす、支那の計略の如きは寧ろ其の歡迎する所たらざるを得ず、斯くして支那の外交に勝利を得せしめば、形勢は屋上に屋を架するが如く、根本的に支那問題の解決に着手する能はずして、却つて滿州問題にのみ出頭し沒頭し、相互に紛々擾々たる間、狡猾なるものをして密かに志を逞くせしむるの虞なきに非ず、故に速かに露國と同盟し、之によりて日英露佛の聯鎖を堅くするは、是れ總ての詐略僞謀を豫斷して、支那問題を純良に解決し得る所以の捷徑なりとせざる可らず。

（六）

吾人は支那に對する今日までの日露兩國の態度を視て、頗ぶる心を安んずる所あり、其の竟に同盟を訂するの形勢を馴致したるとは、例へば渠の巳に成れるが如し、水自から到るべきのみ。

支那人をして支那の事を始末せしめよと謂ふと勿れ、國民性を缺くと甚だしき彼等をして自由に振舞はしめば、支那は唯だ禍亂あるのみ、秩序全く紊れて、外國人は虐殺せらるべく、其の通商の利益は全

く杜絶せらるべし、支那を處分するものは日英露の三國也、然り、日本實に案内者となり主人役となりて以て英露と斡旋し、主として列國の同意を得て以て之を解決すべき也。

(七)

列國若し支那問題の解決に一致せずんば如何、曰く、日英露の自由に處分すべきのみ。若し英露相一致せずんば如何、曰く日本宜しく獨力を以て之を處分すべきのみ、是れ望ましからざる事なりと雖も、洵に已むを得ざるのみ。

英國との同盟と雖も或は竟に渝るなきを保せず、露國の外交また又然り、況んや露國には進退に巧妙なる獨帝の親戚として相近くあり、方針の變、晨或は夕を保つ可らず、故に最後に恃むべきものは我が實力のみ、千萬人と雖も我れ之くの大覺悟と實力のみ、是ありて而して後始めて同盟あり、對抗あり。

故に若し露國との同盟を恃みて、我が陸軍の勢力を減ずべしといふ者あらば、是れ實に度す可らざる愚論也、英國との同盟によりて、海軍は毫も減ぜずして、益々擴張の必要あるに非ずや、支那をして第二のバルカンたらしめず、速かに之を處分せんとするは、是れ日本をして純乎たる大陸國と同じく、大に力を大陸に用ゐざるを得ざらしむる也、陸軍は多々益々增加せざる可らず、支那問題を解決せずして可なりといはゞ則ち已む、支那問題の解決に於て、日本他の指導を俟つの客たるに甘んずべしといはゞ則ち已む、苟くも然らざる以上、軍備、殊に陸軍の擴張實に已む可らざるのみ、國運國命茲に繫る。

奢侈を戒めよ

（一）

米價昂騰は現今の最大問題たり、吾人は今此の大問題に就て直接に卑見を述ぶるに非ず、唯だ之に伴ふ生活難に對して、國民一般の奢侈與つて力あるとを明らかにし、以て汎く反省を促さんと欲するのみ。

世には簡易生活の必要を唱ふる者あり、然り、斯る議論を要するまでに、生活は實に複雜となれる也複雜とは單に面倒なる謂のみに非ず、又徇に高價を意味す、即ち複雜なる生活は、面倒にして而して又實に甚だ高價なるもの也、今や我が上下一般之に囚へらるゝに至ては、而して生活難の愁訴嗷々たるに至ては、また慘なりと謂はざる可らず。

（二）

東京に於ける中流生活の狀態を案ずるに、二十餘年前までは、其の全收入の一割を以て家賃に充て、家族の要する食物費は、大要米價を一とすれば副食物費を一乃至二とするを通例としたりき。

米國の都會、殊に紐育市の如きに至ては、收入の二割五分を家賃と爲し、四割を食費となすの例なりと聞く、今や我が東京に於ける中等階級の生活狀態は如何、家賃は必らずしも全收入の一割に止まらざる也、試みに妻子と一家五人なる中等社會にして、一ヶ月の收入五十圓なりと假定せよ、彼等は決して十圓以下の家賃の宅には住まざる也、其の食物の費用も、一日米一升五合、此の代價四十五錢にして、

其の副食物の費は四十五錢乃至九十錢にては足らざる也、若し十圓の家に住み、米價十三圓五十錢と、副食物の費額其の二倍二十七圓を要すとするも、既に五十圓の收入にては足らざるに非ずや。

若し夫れ一家族夏冬の衣服費、教育費、租税其の他の所要を合算すれば、少くも八十圓の收入なかる可らず、五十圓の收入あるに八十圓の生計を立つ、窮せざらんと欲するも能はざる也。

然れども斯の如きは尙ほ恕すべくして而して憐まざる可らず、何となれば一家五人にして、然かも中等階級に立たんとせば、到底十圓以下の家に住む可らざれば也、唯だ吾人の指摘せんとする所は、必要以外の奢侈を敢てする者是れ也。

（三）

僅かに十五圓の收入ある者にして、日々煙草の敷島一函以上を喫するものあり、毎日一函宛とするも一ケ月三圓にして、正さしく其の全收入の二割に相當す、煙草は決して必要品にあらず、寧ろ咽喉より胃腸を害すべき毒物たり、然るも好んで全收入の二割を拾つ、奢侈にあらずして何ぞ、若し其れ父兄より學資の供給を仰ぐ學生にして、煙草を喫するに至ては、言語道斷のみ、然かも天下滔々風を爲して一人の怪むなきは驚ろくべき也。

晨を戴いて出て、星を踏んで歸る農夫又は勞働者に在ては、酒は實に天の美祿也、一杯の濁醪今や自家釀造を禁ぜられて飮む能はず、隨ってアルコール分の多き淸酒を飮む實に餘儀なき必要に出づ、然れども學生にして、殊に勞働者にも非ざるものにして、好んで酒を飮み、然かも一升一圓前後のものにあら

されば口にしがたしといふが如きは、又實に贅澤ならずや。

斯の如き贅澤を敢てしながら、米價昂騰すれば則ち嗷々愁々として天に怨へ人を怨まんとす、然かも自制して其の贅澤奢侈を全廢又は減殺する所以を思はざるは何ぞや。

信州上州の宿屋に在ては、飯粒を粗末にする客を視て、是れ必らず越人なりと言ふを例としたりしと聞く、彼等の多くは病氣中藥料とするにあらずんば幾んど米飯を喫せざりしといふ、曾て稗、豆、粟等を米に和して食せる農家の大部分と雖も、今や實に米飯を常食とするに至れり、吾人は素より之を以て不相應なる奢侈と目するものには非ず、然れども象箸を造るもの何ぞ粗糲に甘んぜんや、米飯を常食とする農家の生活は、又實に一般に向上して、幾んど奢侈と稱すべき程度に接近せるや蔽ふ可らざるのみ。

吾人は曾て山間の一小藩に家老たりし者の次男が、十七八歳に至るまで刺身の喰ひ方を知らざりしと聞けり、今や其の一小藩の在りし土地に於ては、客あれば則ち一貧家と雖も料理屋の仕出しを取ると聞く、生活の進歩は必らずしも交通機關發達の結果のみに止まらず、一般に奢侈に流るゝ傾向は何人も之を否定し能はざる也。

（四）

富者の奢侈に至ては、更に驚ろくべきものあり、吾人は何よりも先づ彼の自働車を指摘せんと欲す。

勿論多忙にして、短時間に多くの事業を爲さんとするものに在ては、人力車は素より遲し、馬車も亦馬をして奔命に疲れしめて、幾んど視るに忍びずと做さば、自働車を用ゆる洵に可也、此がために通行

者をして時々肝膽を寒からしむるまでの危險あるも、又彼の臭氣紛々たる石油の煙と塵とを揚げて、甚だしく非衞生的なるも、齊しく之を恕して、寧ろ益々自働車の利用を慫慂すべしと雖も、何等の必要あるにもあらず、又素より多忙なるにもあらずして、單に一種の虛榮心より之を驅り、甚だしきは晩間の散步用として、之を飛ばすものに至ては、唯だ驕奢を示す痴態といふの外、殆んど許すべき言辭を有せず。

若し我が官憲にして眞に常識あらば、自働車を驅つて公園に入ると、劇場角力場其の他の娛樂場に至るとを禁止すべき筈也、少くも單に事務用として之を用ゐしむべし、其の他には用ゐしむ可らず、自働車が歐米の都市とは遙かに異なる道路の狹き我が東京を馳驅し、甚だしく非衞生的なる惡瓦斯を發散しつゝ飛ぶは、到底許す可らざる一種の罪惡なれば也、殊に慰みに事を缺きて、藝妓輩を同乘せしめて市中を飛び廻り、行人の狼狽して路を避くるを笑ふが如きは、腹を割きて胎兒を殺せる虐王にも齊し、其の心事の殘忍なる、實に言語に斷ゆ、必らずしも驕奢のみと謂ふ可らざる也。

富豪等が事務用の外にまで自働車を驅るに視るに、驕奢の程度略々察すべし、素より彼等は國家組織の中樞に非ずと雖も、平生四民瞻望の地位に立つに於て、深く戒むる所を知らざる可らず。

且つ富豪の多くは、其の妻子をして驕奢の極、濃抹盛粧、或は及ばさるを恐れて、竟に藝妓輩と擇ばさるまでに至らしめ、隨つて其の品性をも墮して藝妓の如くならしむる者なきに非ず、是れ實に國民の健全淳樸なる風を害し俗を破るものとして、吾人は皷を鳴らして之を責めざるを得ざる也。

（五）

吾人は今更ながら勤儉を勸告せざる能はず、此の點に於ては、獨逸國民實に我が範とすべきものあり。獨逸の國務大臣は十餘年前まではセルロイド製のカラア、カフスを用ひて其の卑吝を英人米人佛人等に嗤はれたりき。此等のカラア、カフスは洗濯なしに永く使用に堪えて、甚だ經濟なれば也、又獨逸の婦人は、夜中家に居て電燈瓦斯を點ずるを不經濟なりとし、商店に至りて珈琲を飲みつゝ、悠々として編物を爲す等、其の所謂勘定高さと、實に意想の外にありといふ、然かも記せよ、獨逸の製產力の旺盛なる、今や駸々として幾んど旭日登天の米國を凌ぎて、世界第一の稱呼あるとを、如何なる獨逸の敵人と雖も、其の國民の勤勉と節儉とは、之を稱せざる能はさる也。

我が同胞は宜しく之に倣ふべし、之に倣ふて一方に大に勤むると共に、一方には大に質素儉約を守るべし、我が國の狀勢は、今や實に臥薪嘗膽、大に屈して而して大に伸ぶべき時也、意氣盛滿、竟に驕奢に流れ、上下貧富相率ひて身分不相當の贅澤なる生活を爲すが如きは、實に思はざるの甚だしき也、何ぞ况んや之がため生活難の愁訴に嗷々たるが如きをや。

公論

太閤論

福本日南

彼の洒脱

太閤の天性豪放てあつたから、其洒脱なことも亦甚しい。彼は貧賤に長なつた上に、一生の大分を戰鬪攻伐の事に委ねたのて、文字などはネッから多く御存じ無い、が亦少しもそれに頓着せぬ。是れは多分醍醐の花看の時てもあつたらう歟、彼は佑筆を呼んて、一篇の通牒文を起草させた。佑筆畏こまつて起草に取掛つたが、中途て筆を停めて何やら考へて居るのを視て、『何を按じて居る歟』と問はれた。佑筆は恐縮して『實は醍醐の「醍」の字を失念仕りまして、稽へて居るのて御坐りまする』と答へれば、彼は焦立て『益たいも無い事に屈詫する奴ぢや。それは斯様書けば宜しい』といひながら、指にて疊の上に「大」の字を畫いて示された。（老人雜話）

斯かる調子てあるから、自分て人に與へる手柬や、軍中への奉書など、大部分は平假名て、偶〻本字て書けば、充字が多い。其上文面の拙い所は消しながら、又書續けた。（遺存の手書及老人雜話參照）それて當時お草紙の御文書といつたといふ。併しそれが亦難有いので、諸將は其お草紙の御文書を頂戴するを、非常な榮譽としたといふ事てある。

自身斯様に文字が無い。それて能書家があると、珍重して物を書かせた。其一例とも見る可きは、蒲生氏郷を東奥の重鎮會津に封じた後てあつた。氏郷は一日彼の機嫌を伺ふと、他事は擱き『オヽ好い處に來られた。貴殿は手を能くされる。謠本を一番書いて呉れられよ』と頼みながら、左右を顧み『硯と紙を持つて來い』と命ぜられた。（老人雜話）

是れは或歳の事てあつたが、東山に松茸が大層生へたと聞き、近日大いに茸狩を催して遊ばうといはれるので、役人ども下見分にと出掛けて見ると、早く諸人分入つて取去つた跡て、殘り少なになつて居る。是れては定めて興を醒まされやうと、内々手を旋して、處々の松茸を取寄せ、巧みに植置いて、其日を待つた。すると太閤は奥の女性達を許多召連れて、山へと登り茸の多いので大御氣嫌。如何にも滿足の體てある。之を見てお側の女性達が『自然に出ましたのと、人の植えましたのとは、何處と無う運ひまする。それを殿下はお氣づき遊ばしませぬ歟』と袖を引く。彼は手もて其辭を遮り『言ふな〱、乃公を始め、其方どもまて悉ばせうとて、皆の骨折は幾ばくか知れぬ。其骨折を買ふのぢや』とほゝ笑まれた。（言行錄所引）

又山城の内にて山里といふ地を、梅松といふ御坊主に預けられた事がある。すると其御坊主セッセと松を植えたが、幾ほども無きに、斯う松茸が生へましたといつて献上した。太閤笑ひながら『それは妙ぢや』と賞美したから、御坊主は得たりと附込み、其後も兩三度献上と出掛けた。固より是れは餘所から買調へて來るのてある。太閤は當初からチャーンとそれを知つて居る。そこて今其献上再三に及ぶと、侍臣を呼んで『モー已めさせよ。餘り茸が生過ぎる』と斷られた。彼の寛仁と洒脫とは、唯此「生過ぎる」といふ一句に見える。（老人雜話）

彼の面白さは、物に拘々たらぬ處に在る。是れは小田原落後の事歟、一日太田三樂を呼んて、種々軍事を談じさせ、之を聽きながら、感嘆して居たが、良あつて『其方は智・仁・勇の三德を具へた良將ぢや。それに

引きかへ、自分には其一德も無い。併し不思議は、其方はそれで一箇國だに取得ぬに、自分は天下を取つて居る。何でも天下を取ることは、乃公の得手ぢやと見ゆる」と笑はれた。（言行錄所引）

彼は常に身命を輕んじて、更に危險を危險ともせぬやうな行ひがあるので、前田德善院玄以は深く之を心配し、今少し御持重なさるやうにと諫言すると、彼は打消し『否や心配するな。天下に乃公ほどの主は無いはづぢや。誰が謀叛するもの歟』と平氣である。（同上）

或時黑田如水の話に『自分は大の將棊好きであるから、折々召されては、太閤樣・關白樣の御相手をした。が、御兩公の御勝負ぶりが渾て違つて居た。其中秀次公は自分よりか少々お上手であつたから、自分多くは負けた。すると公には其都度每に、態と負けるのぢや無い歟、本統に負けたの歟、本統に負けたなら、負けたと誓言せよと責付けて、恐入らせては、又始められた。處が太閤樣と來ては、ヤッと駒の遣樣を御存じなさるといふに過ぎなかつた。それで天下の名人をお相手になさつて、其れが態と負けて上げるのを、眞々御承知なされながら、押付けて勝つては、ハッ〱と笑つて、喜んで居らせられた。それでこそ御遊技ぢや。秀次公の彼お拘はりては、殿下の後を受嗣いて、天下を治めさせられる事は六ヶ敷いと申して居たが、遂に彼御成行となつた』といつた。太閤の洒々落々たる、是れても見える。（同上）

彼は平生鶴を愛して、之を苑中に飼はせて置いた。一日監者誤つて之を取逃がしたから、恐惶頓首して、御處分をと申出た。彼は聽きながら『逃げたら外國に飛んで去なう歟』と問うた。『否や、飼鳥の事に御坐りますれば、左樣遠くは參りませぬ』と答へれば、彼は微笑し『國外に出ねば、何處も矢張吾樊の中ぢや。放つとけ〱』といひながら、監者の失職を問はうともしなかつた。（同上）

一年大洪水が出て、淀川堤を押切つた。彼は之を巡見し、棄置けば、攝津・山城は一面の湖水となる可きを察し、忽ち乘物から飛んで下り、四邊に居た宮部善

祚房繼潤の家臣友田左近右衞門といふ者を見て『其方は乃公と好比の相肩ぢや。それ朸の一方を擔げ』といひながら、其れを摩いて、ウン〳〵と土俵を運ばれたから、誰か傍觀して居られやう。お供の大名小名から、僧俗男女に至るまで、我も〳〵と土を持ち、咄嗟に復舊工事は出來あがつた。（同上）此氣合なり。大敵をも擒ぐ可く、大業をも成就す可く、一國の頽勢をも挽回す可しぢや。

是れは又遠征の擧發して、彼、名護屋に向ふ途次、博多に宿陣中の事であつた。『明韓人は髭を尙ぶといふ事ぢやが、乃公には髭が無い。職人に假裝髭を申付けよ』と命ぜられた。侍臣畏こまつて、職人を彼の前に呼出すと『どうぢや、顏の寸方が要るなら、遠慮無う寸を取れ』との事。それには及びませぬと、引きさがつて、乃て調製して差出したのを取上げ『是れて好い』とて、其髭を着けて、博多から發陣された。（同上）

彼の鑑識

太閤ほど善く人才を登庸した人も尠ないが、其の又鑑識の明も、世に多く比類を睹ぬ。試に其一端を擧げやう乎。小寺官兵衞孝高（後の黑田如水）を始めて知つたのは、孝高が小寺政職の使節として織田家に來た際に、秀吉接待係となつた時からであるが、一見舊の如く、乃て自家の參謀長に任じて居る。（黑田家譜）加藤淸政は如何にといへば、彼が伯父にて同苗喜左衞門といふ人が『自分の甥に元氣な奴が一人ある。臺所に置いて、飯を食はしては呉れられぬ歟』といふのを引受け、それを連來させ『賢こう見える』といふので、僅に五石を與へたのが初まり。程なく二百石。賤ヶ岳七本鎗の戰功で三千石。終には肥後二十五萬石にまで取揚げた。（老人雜話）蒲生氏鄕とて元は江州日野二萬石の領主。其を勢州松坂にて十五萬石。後には會津百萬石に封じて居る。（同上）石田三成はと顧れば、十歲の寺小僧を鷹野の小憩の折見出して、佐和山二十三萬石、五奉行の筆頭にまで登庸した。（碎玉話其他）數學先生の長束正家を聘して、直ちに一萬石を與へる。陣僧の安國寺惠瓊を採用して、政

務に預からせる。など一々擧げ來れば、日も亦足らぬ。而うして其見出した所の者、皆一世の俊傑ならぬは無い。

彼明智光秀が夙に叛心あることを透見して『貴殿は近頃周山に夜普請して、謀叛を企てるといふぢや無い歟』と戯れた一事の如き、彼の烱眼炬の如きを感ずる。而うして信長薨後、倶に天下を爭はん者は、自分と此光秀であるといふ事も、亦夙に豫見して居た。それは中國大返しの際である。多分軍略としてであつたらう、陣中に居た施藥院秀成に歸京を允し、且つ之に告げて『今後天下を取る者は、自分歟、日向歟、必らず兩人の中であらう。顧ふに其方は仕合者ぢや。日頃自分にも日向にも親しいから、孰れが天下を取つても、身を起すに都合が好い。先に往いて、日向に、近日上洛して、雌雄を一戰に決しやうと、傳言せい』といつた。秀成道を急ぎ、光秀が下鳥羽の陣に到着して、此意を傳へると、光秀も亦『何れ天下は自分歟・筑前歟の物ぢや。それにしても其方は仕合者、兩人に懇意であるから、孰れにしても出世が出來る』いつたと云。曾行錄所引 光秀の目も亦秀吉の見る所を視拔いて居た。施藥院秀成とは、多分丹波全宗の事であらう。

是れは小田原役中の事であるが、八王寺城を陷落させて討取つた所とて、前田利家からは首三千級些と誇大らしいが原書のまゝ 上杉景勝からは首百五十級を、小田原の大本營に送致したので、人々打寄り『上杉殿は日頃武功の御仁と聞えるにも似ず、其討取首、前田殿に比べれば、十分の一にも過ぎぬ。扨は前田殿の御手並遙に勝れておはすと見える』など批評した。すると秀吉之を聞かれ『何も知らずして、倥侗た事を申すな。元來が八王寺の一城ぢや。城兵の多寡も略知れて居る。上杉から寄越したのもは、何れ相應な者の首と認める。前田からの分は、大概雜人百姓の首であらう。以後狂けた雜評は相愼め』と叱せられた。仝上

關東・奥羽平定の後、彼は諸將に向ひ『會津は奥羽の要鎭ぢや。此重任に當るには誰が適當歟。銘々かくし起請を以て伏藏なく申出よ』と命ぜられたから、諸將

は各〻見る所を書きつけて呈出した。乃て之を開披すると、細川忠興への投票が最も多い。彼は熟之を見て『矢張乃公が天下を取つた筈ぢや。人々の著眼皆當らぬ。此重任に任じ得る者は、蒲生忠三郎を措いて、外には無い』といひながら、氏郷を召して、之を同地に封じ、百萬石の大身に取立てた。（老人雜話）

明智光秀が未だ志を得ずして、越前の朝倉義景を頼んで居る頃であつた。義景は光秀が曾て海内を遊歷し、各處の地理に通じ、兼ねて要勝の見地を有すると聞き、北陸地方にて、據つて以て爲すある可きの地を問ふた。すると光秀『越前に於ては、平城ならば北庄、山城ならば長泉寺。加賀に於ては、小松寺の邊歟』といふ。然らば畿内にてはと問へば、『京都近傍に於いては、然る可き場所も見當り申さねど、攝津に於ては、御緣者の本願寺上人が住せられる西山（大阪）卽ちこそ無雙の勝地て御座りまする』と答へた。義景は沒眼の將てあつたと見え『十兵衞は寺跡ばかり心がける男ぢや』と笑つて居たが、其雄の見る所は自ら相同じて、秀吉志を得るに及び、其攝州の西山に築いて、此に大阪の大都會を劈開した。（言行參酌錄）

又之と對照す可き事がある。小田原の役に、一日秀吉は德川家康を從へ、地勢の觀察を試みやうとて、唯二人にて石垣山に登りかけた其途中、彼は足を駐めて小便を仕初めながら、家康を顧みて『此脚下の北條が滅亡も近日の內ぢや。跡の關東は貴殿に進じやう。それにならば、貴殿は何處に本據を据えられる』と問ひかけた。家康は畏こまり『御諚忝けなう存じまする。若し左樣な事にも相成りましたならば、矢張此小田原を治城と致すの外は御座りますまい』と答へれば、『それはゆかぬ。此んな陲近な邊土の城は、家臣に申付けて守らせたまへ。自分嘗て繪圖て調べて置いた。此から東二十里程な地に、江戸といふ處がある。三方は所謂武原藏て、一方は海を控え、隅田の川さへ帶びて居る。東國第一の形勝と存ずる。其處を拓いて、城郭を興し、永く其れを治城とせられよ』と諭されたので、家康は謹んで命を拜し、後日終に此に乘込むには至

つた。當時の江戸を顧みれば、太田道灌が建造の餘情こそ存じて居れ。城といふもほんの形ばかり。城下の町屋とても百戸に過ぎず。誰とて此に念ひ寄る者も無く、關東八州の治城といへば、在來の儘ならば、小田原歟、新に興すなら、矢張鎌倉舊府の跡であらうと、人々許し合うて居たのである。然るに此命があつたので、皆其意外に驚いたといふ事である。野史引く所の豐臣家譜、松窓漫錄及言行錄參酌 今其れ一方は光秀と秀吉、大阪の形勝たるを觀取したる、二人の見正に一致する。然るに一方の秀吉と家康とを察すれば、家康の目は月並たるを免かれぬ。彼が異日天下を取つたのは、英雄去後、時運到來の賜のみ。而うして三百年後の今日、大阪は關西商業の中心となり、江戸は帝國の首府となつた。太閤の遺業は是ればかりでも澤山である。自分が日頃國に英雄なかる可からざるをいふのは、此である。處が今日、當年の江戸開府が太閤の指導に由つた事を、社會は忘れて居る氣味がある。それで此に罰當りどもに敎へて置く。

扨關東・奥羽平定の翌年、奥州の葛西・大崎の邊一帶に土寇が大いに蜂起した。是れは伊達政宗が内々煽動したのである。併しながら蒲生氏郷の威武に賴つて、日ならず平定された。此事秀吉の耳に入つたので、政宗に上洛を命じ、彼が賊に通ずる手柬を證據に突きつけて糺問せられると「是れは實に迷惑千萬で御座りまする。私書きまする鶺鴒の華押には、必らずチャンと目を點じて置きまするのに、此書に限つて目の無いのが僞造の證據。畢竟是れは私を陷れやうが爲に、何人かの作る所で御座りませう」と爭うた。然らばとて彼が諸大名に贈つた自筆の書數通を徵して看られると、如何にもそれには目があるので、秀吉は全く疑を霽らしたかの如き顏色して、其罪を赦された。之を聞いた井伊直政、徳川家康に向ひ「私當時奥州にて見聞しました處では、政宗の異心は歷然で御座りました。然るをムザ〳〵赦免せらるるとは、近頃殿下の御眼鏡違ひかと存じまする」といへば、家康頭を振り「否や左樣で無い。太閤の豪い處は此に在る。今度の御赦

免は、政宗謀叛を企てながら、當時から後日の申排きを心掛けた其遠慮と、御召に從つて早速上京し、黑を白と申立てる其大膽サとを取られたまでさ。政宗も橫着は橫着であるが、太閤の膽略は又それに百倍する。所詮政宗などの企てゝも及ぶ所で無い』といつて居た。果せる哉、太閤乃て名護屋に在陣の日、政宗渡韓して、各地に奮戰した。施藥院全宗之を太閤に上申し、頻に其戰功を稱揚すると、太閤忽ち色を作し『前年奥州の賊徒蜂起は誰の煽動と思ふ。其罪を赦して、本領を安堵させて置いたのは、今日の御用に立てんが爲ぞ。さるを曉々しく其戰功など褒立てる事やある。其方は政宗から賂はせられて居るのであらう』と叱せられた。（言行錄所引）

是れは又彼が大佛の開眼式に臨んだ際である。同日大小名我も〳〵とお供をするのに。前田利家のみは病氣の爲に、其の列に就かなかつた。すると『加賀殿には御謀叛の御企と聞えますれば、今日の御成、十分御用心あらせられますやうに』と密告し出た者があつた。彼は之を聽いて居たが、勃然として憤り『何者なれば左樣な事を言ふ。我等身まからん時、落涙して嘆き呉れん者は彼利家ぞ。それを謀叛の企があるなどゝは、扨も〳〵憎き事を申す奴ぢや。引捕へて利家に渡せ』と命ぜられたから、其場に取押へ、寺西筑後守押送して、主命を傳へた。利家感喜極まり無く、病をおして太閤に見え、恩意の忝さを拜謝した。すると太閤は涕を流し『貴殿を捨が傅に賴んだので、何者か目算違ひ、お互兩人の交情を割かんとの才覺かも知れぬ。精々糺問をして見られよ』といはれたので、利家は拜謝し、感涙に咽んで退いた。（同上）

最後に一寸した事ながら、彼が如何に萬事に明敏であつたかを觀る可き談がある。それは伏見の殿中にて、彼は大書院に出てたるに、風と其席上五腰の刀に目を注め、試に此刀の主をあてゝ見やうかとて、是れは誰。其れは誰の差料と、一々其主の名を指された。前田玄以驚いて、深く其神智を感稱すると、彼は打笑ひ『何の仔細も無いことぢや。第一に秀家は立派な事が好き

であるから、黄金作をそれと見た。次に景勝は先代からの家風故、長刀をそれと知つた。第三に利家は兎角又左衞門時代に自ら手を摧いて働いた事を忘れぬ仁。革緤の刀が、即ちそれぢや。輝元は一風異つた事を好まれる。それて其刀も見れる。第五に家康は刀の裝飾などに頓着が無いから、無雜作なのをそれと指した』といはれたが、果して其の通りであつた。（同上）

彼の工夫

彼は固より先天的偉人である。併しながら後天的工夫に由つて得た所も多い。彼の一生に彼が如き顯赫の地位と功業とを築き出したのは、半ばゝ其結果と謂はねばならぬ。

一代の大業を成功した者は、それ相當に工夫を凝らして居る。德川家康は戰鬪を論じて、

『戰は競ひにかゝつて勇みたるが好し。勝負は運次第と心得たるが善し。願ふても當らず、願はても當る事があれば、要らぬ事に氣根を費すは損なり』（武功雜記）

といつて居る。太閤も亦同一の場合を餘程工夫したものである。彼が自筆の日記を見ると、色々な事が書きつけてある。尤も日記といつても、日を逐ひ・月を追ふて、其日〳〵の出來事を記したものでは無い。兵馬倥偬・軍國多事の時に當つて、彼の思想に浮んだり、又は再思するに必要な事を一寸〳〵留めたのであるから、其日記はノート・ブックともメモランダムともいふ可きである。が、其中に左の語が見える。

『勝たんと思へば、勝つ。負けんと思へば、負くる』

是れ一句。

『負けて勝つ。勝ちて負くる』

又一句。前の家康の語と對照すれば、其意は瞭然。彼が工夫の存する所、亦以て想見される。

從つて彼が事に當つて、工夫を費した跡が、種々な場合に見える。今其一二例を擧げてみやう。彼が小田原長圍中の事である。彼は山中山城守に命じ、密に書を在城の一敵將成田下總守氏長に送つて、説くに利害

を以てし、之を誘はせると、氏長も心動き、降參す可き旨の返書を寄せた。すると秀吉は更に家康に長き誘降書を書かせ、前の氏長が返書をも其中に封入して、今度は之を北條氏直に送りつけ、貴家の宿將成田下總守すら斯くの通りてある。況して其他の諸將の內通は推して知らる可し。分別あつて然る可しと勸告させた。氏直書を獲て、大いに驚き、直ちに氏直を取押へたのが始まりて、城中互に疑ひ出し、蜚語百出して、人心離反し、氏直も終に降を請ふの已むを得ざるに至つた。（家譜逸史）

又何れの年てあつた歟、諸浪人高野山に聚合した事があつた。注進の者來つて、其勢日々に增加いたせば、今のうちに御手當を加へさせられずむは、大事に至るやも測り難いと報告した。彼は之を聞いて、ハツ／＼と笑ひ、衆人の並居る前にて『場處もあらうに、殺生さへ禁じられた彼高野山に聚まるとは、善く／＼の腰拔け、長袖流の奴原てあらう。不愍至極ぢや。放つとけ／＼』と大音にいはれた。此語乃て四方に播がり、高野に聞えた。諸浪人固より氣を負ふ者、我等打物取つて、人に後れを取らぬ者が、さも命でも惜いかの如く、此地に聚つたと思はれるは殘念ぢや。此處はよして、別に後圖を爲さうと、思ひ／＼に離散した。（言行錄所引）一兵をも動かさず、一卒をも用ゐず、命知らずの連中を紀陽の絕險に據らせなかつたのは、秀吉方寸の工夫に由る。

柳生又右衞門宗矩（後の但馬守）は劍道の達人て、無刀にて人に對し、人の切掛け來る刀を素手にて取るに妙を得て居るとの評判が高いので、一日關白秀次之を召し、其傳授を受けたいと望まれた。宗矩畏縮し『それは萬一刀脇差取合せぬ場合は如何にと存じ、申さば道樂に試しましたまての事、固より御傳授など申上ぐ可き事ては御坐りませぬ』と辭退する。其辭未だ終らぬに、秀次佩刀を拔放ち『何といふぞ』と立向はる。呀やといふ間に、宗矩は走寄る。秀次焦つて拜打ち、流石の豪傑も眞二つかと思ひの外、彼は其身をかはしさまに、ズンと蹴れば、秀次堪まらずヨロ／＼、太刀は其

人の手を放れ、プーンと飛んで、二間許りの彼方に落ちた。其時宗矩透かさず驅寄り、秀次の手に取りついて「失禮相働き、恐入り奉る」と、其手を戴いた。秀次頻に「名譽〳〵」と感嘆して、直ちに宗矩が門弟となられた。其後ち秀次は木下半助を以て、當時の有様を太閤に申達し「殿下にも御入門あらせられ、無手勝流を御稽古遊ばしては如何が」と勸告させた。太閤聞いて懌ばず。「唯今其方陳べたる通り、關白慥と申された歟」――「慥に仰せて御坐りまする」――「果して左樣歟。若しも左樣な分別ならば、秀次は所詮我後を嗣ぐこと成間敷きぞ。天下を治むる身分として、白刃にて吾身を斬らせ、それを取つて何の益がある。自分は群雄を征伏したが、今日まで吾刀にて未だ曾て人を斬らず。人は人に斬らせる分別を以て、是迄天下を治めて來た。彼秀次の倥侗奴が」と憤恨これを久うした。（同上）

彼の思慮斯くの通りであるから、古今の人物を品評するにも、亦自ら一隻眼を具へて居た。或時諸將と人物論が始まつた。戰國時代の風氣であるから、兎角に攻城野戰の名將が、人々の理想に上り易い。談は忽ち源九郞義經に及び、彼一ノ谷・八島の働き、古今獨步の名將は彼であらうと、人々いふを、太閤は一言に斥けて「成程義經の勇氣は稱す可し。さりながら彼は第一に威嚴といふものを缺いて居る。それは梶原と逆櫓の論の處で知れる。彼は賴朝の連枝なる上に、平家追討の大將軍ぢや無い歟。それが梶原平三づれに猪武者などと罵られるは、畢竟威嚴が無いからの事である。彼は將帥の器で無い。自分が見る所では、古人にて眞の將帥と稱す可きは、唯賴朝一人のみぢや」といひながら、果ては賴朝と自分との成功難易論になり、白旗宮に詣でた時の言と同一の意見を繰返された。（同上）

彼の主義

彼が絕倫なる精力主義の人であつた事は、何人も認める通りである。それは彼の精力の處で述べた一端でも槪見されやうが、彼自身の口から此主義を人に話した事もある。それは彼が成功の後であつた。彼の參謀

長として智慧袋の評があつた黑田如水は一日彼に向ひ「殿下の今日あらせられるは、殿下の御天性萬人に優れさせられるに由ることは勿論で御坐れど、其間には深い御分別もおはしました事と存じまする。其の秘訣が伺ひたう御坐りまする」と問うた。すると彼は打笑ひ、

「口傳も秘訣も何も無い。が、過去を追はず、未來を憂へず、唯今日今日の業を一心不亂に勉めたのみぢや」

と語つた。即ち彼が精力主義にして、同時に勤勉主義の人である事が知れる。が、又一面には如何にも氣嫌の好い樂天主義の人たる事も亦察せられる。

それから自分が最も彼に敬服するのは、彼の進歩主義である。之に對しては、吾日本人中に在つて、古來今往恐らく彼の右に出る者はあるまい。斯くいふ間から、忽ち憶ひ起すのは、彼の歌である。それは彼が尙ほ織田家に在つて、諸將と比肩して、信長に仕へて居た頃であるが、或時同僚と會して、四方山の談中に、一人が云ふには『近世の武士中にて、文武兩道の士と謂ふ可きは、畠山義就の家臣河内介某であらう。彼は打物取つて萬夫の雄であつたのみならず、文學の嗜までも深く彼が五尺許りの前立には、右方に「運在二乎天一。見レ敵勿レ退」と鐫りつけ、左方には「人は皆さし出てぬこそ好かりけれ、戰にだにも魁をせば」と刻して居た。實に天晴れぢや。我々も彼にあやかりたい』と稱揚すれば、滿坐之に同意した。すると秀吉は微笑を湛へ『其歌聞えぬでは無けれども、自分の分別は左樣で無い。

人は皆さし出づるこそ好かりけれ、戰の時も魁をして。

と斯うありたい』といつたので、『復た藤吉郎の本色が出た』と、人々笑ひ興じたといふ事である。願ふに太閤一生の行事と・彼が滿腹の進歩主義とは、此一首の歌に盡くして居る。豪とし偉として稱せざるを得んや。

それで彼は人の爲す事なら、何事でも爲した。彼が得意全盛の時代となつては、式法の御歌會などの際にも、衣冠束帶にて禁裏に參內し、公卿の間に上坐して、

自分にも題詠をされたと、「老人雑話」にも見える。さもある可き筈と思ふ。但し同書に『其際は友古といふ歌人が御前に近づき、感吟の體にて退いて、坐中に披露したが、其實は皆友古が代詠てあつたといふ』といふのは、當時臆測の惡評と思ふ。如何にも友古が添削はしたらうが、彼太閤が歌の詠めぬ人て無かつた事は、自筆の日記を見ても知れる。

併し彼の進歩主義は突飛急激な進歩主義ては無い。後世の語を假りて之を名狀するならば、オーギュスト・コントの所謂「秩序的進歩主義」てある。即ち一歩〱に其歩を進めて而も已まぬといふ主義てある。是れも亦彼の明言し・顯現した所てある。其一例として擧げやう乎。彼が木下藤吉郎時代の事てあるが、一夜親友相會して、各〻其希望を述べ合ふと、豪傑連の事てあるから、大國の領主となりたいといふ者もあれば、天下を取つて見たいといふ者もある。乃て藤吉郎は『自分は六百石取りになりたいと存ずる』といひ出したので、『貴殿平生の大膽にも似合はぬ怪些な望みぢや御坐らぬ歟』と滿坐は哄と笑ひ出した。すると彼は眞面目。

『否や方々は屆きさうも無い事を望まれるが、自分の所存はそれと違ふ。藤吉今日三百石を取るやうになつたのは、千辛萬苦の結果てあるが、骨折れば此までなつた。それて今後は其一倍六百石を取るやうにならうと、寢食を忘れて、日夜奉公一圖に心掛けて居る故に、乃ては屹度成つて御覽に入れる。六百石から千二百石、一段〱に遣りつける。工夫は自ら胸中に御坐る。』

といつたので、何れも成程と感服した。（言行錄所引）

此に至つて一言せねばならぬのは、俗史家輩の太閤觀である。彼等は太閤が一歩〱其地歩を占めて進むといふを聞いて、彼の志望は此に盡きるかのやうに速了し、彼は決して最初から大志を抱いて居たものでも何でも無いなど〻、得意げに鼻を蠢かす。蠡足を以て天を測るとは、其れ是等の謂ひてあらう。全體人には理想の生活と現實の生活とがある。而うして天分に富んだ人ほど洪大なる理想を有し、それを現實にせんと

勉めるのてある。唯其れに接近するに秩叙に由る歟・由らぬ歟が問題だ。太閤の豊富なる常識は夙に社會及人生の天則を認め、秩叙に由つて、現實の生活から理想の生活に進み入らんと心掛けたので、此が彼の實際的にして、空想的ならぬ處てある。是をこれ察せずして、彼は單に現實の生活のみに甘んじ、理想の生活を有しない人とすれば、彼は尋常一様の凡俗、英雄でも何でも無い。太閤豈斯くの如き蠢物ならんや。彼が理想の生活上には、夙に如何なる大志を抱いた乎は、實試に先だつこと十五年前に、早く大陸統一の希望を信長に言明したのに視ても察す可し。餘り馬鹿をいふものでは無い。

次に彼は又極めて欽慕す可き平民主義の人てあつた。尤も彼が關白となり、太政大臣となり、己を殿下など稱させる處から視ると、貴族主義てゞもあるかのやうなれど、それは權力を集中して、群雄を駕御せんが爲の手段に過ぎぬ。彼は百萬石の大名に對しても、市井の匹夫匹婦に對しても、更に格式などに拘はらない。

或時、立花宗茂は太閤の氣嫌伺ひに上阪し、進物として銀子百枚を臺に載せ、之を前に置いて、殿中に控えて居た。すると奥の方から賑やかな聲がして、太閤を眞先に、續いてドヤ／＼と大奥の人々が走り出た。是は秀頼の慰みに飼つてあつた雀の子が逃げたのを追驅けて來られたのである。視れば太閤は帶もしだらにて、太刀は尼の孝蔵主に持たせられ、後ろには乳母に抱かれた秀頼も見える。斯くして風と宗茂を見つけ『オー左近將監、見舞に參られた歟。何、此銀子は土産とな。それは過分ぢや』といひがなら、手づから臺上の銀子一枚を取收め『是は自分申受ける。が、殘りは其方に參らせる。京都は中々面白い處ぞ。之を持參して上京し、緩りと遊山して歸られよ』とは、何等の快感ぞ。（言行錄所引）

又一年正月元日、大阪城に於て年賀を受けらるるといふので、大名小名は未明から登城し、千疊敷の大廣間に詰掛けた。未明からの登城てあるから、有明の燈

火席を照らし、池田炭を福々とおこした火鉢は幾十となく各處に配置してある。乃て大小名の揃うた時分、太閤は寢卷の儘、髮さへ未だ梳らず、尼の孝藏主に太刀を捧げさせ、奧女中に手燭を携へさせて、無雜作に出來り『未明からの登城大義〳〵。今朝は一入寒い。人々火に寄られよ。さぞ寒かつたてあらう。酒一つ參らせう』とて、一令を傳へらるれば、豫め準備は整ひ居り、小姓の面々手に〳〵酒盃を捧げ出て、一同へ御酒頂戴。其酒良行亙つたと見える時、去來坐席を定めやうとて、誰は彼處、某は此處と一々指圖したる後『さらば自分も裝束を着けて參らう』と奧に入り、乃て再たび立出て、、正式の禮を受けた。同上 其氣易さも亦想ひ見る可しだ。

尙ほ彼が如何に平民主義の人てあつた乎を徵す可き書に、博多の茶博士宗湛が書遺した「茶日記」がある。當時の文書といへば、大概舊來の文體てあるから、痒い處に手の屆かぬ感があるが、宗湛日記に限り、太閤の口語は口語其儘、言文一致て書いて置いたから、隔世の英雄に親炙する氣持がする。其二三例を擧げれば、宗湛上阪して、同じ茶博士の紹介に由り、人々の後に從つて、始めて謁見すれば、太閤は左右に向ひ『筑紫の坊主はどれぞ』と問ひ、乃て大茶會席上の語としては、『今日は多人數なるほどに、四十石の茶ばかりにては、足らないほどに、其撫子と松花の茶を今ひかせて各に飮ませよ』と言ひ、宗湛再たび上京して、聚樂の邸にて謁見すれば、『かわいや、遲く上りたるよな。やがて茶を飮ませうぞよ』といつて居る。それから坊主三たび上京して、桃山の殿中に伺候した際には、太閤は茶室に居て、此處に招き、自ら床を離れて、障子を開きながら『はい入れや』といひ、手づから茶を點じて馳走せられたなど見える。簡易・眞率・洒々・落々英雄の面目・意氣、此應接の間に躍如たるを覺えずや。宗湛日記參酌

彼の同情

支那戰國の時代といつたら、七國互に雄を爭うて、

戰鬪攻伐の絕間なく、何時までも〳〵戰爭狀態が繼續するので、人心は實に厭ぐみ果てた。其の厭ぐんだ一人梁の襄王は一日時の大賢孟子を見て『天下惡んか定まらん』と問うと、孟子は唯一言に『人を殺すことを嗜まざる者、能く之を統一せん』と答へたのは、寔に千古の名言であつた。蓋し當時戰國の氣習は血を見るに慣れ、王公相將何人でも殺を嗜むが普通であつたから、孟子は其有樣を承けて、さう言つたのであるが、彼の眞意は『人道を尙ぶ者、能く之を統一せん』といふに在る。而うして千百年の後、之と同一狀態の時代に出て、孟子の言を實現したのが、吾太閤秀吉であつた。彼は生得博愛心に富み、其の知ると知らざるとを問はず、個人に對しても、公衆に對しても、如何にも瑞々しい同情を有して居た。それが彼の一生を通じて、物に觸れ・事に接しては顯はれて居る。其一端を此に擧示しやう。

天正六年、荒木村重の叛は、其間に種々の事情纏綿し、已むを得ずして信長に弓を挽くに至つたのである。が、既に意を決し、攝津の伊丹城に據つて、叛旗を飜へすに至つたので、昨日まで肩を駢べた同僚の諸將連、皆征伐の鋒を向けた。處が秀吉は日頃から村重と最も懇意であつたから、深く其の自滅を取る事を氣の毒に感じ、單騎馳せて伊丹城に入り、村重に會見して、百方叛意を飜へさせやうと勗めて見たが、志を得ぬので、淚を揮つて、一端空しく引歸して來た。それでも彼は尙ほ斷念せず、再たび部下の一將小寺孝高（後の黑田如水）を遣はして、更に再たび勸說させて居る。全體彼の此行は極めて冒險な仕事であつた。彼の伊丹城に入るや、村重の部下河原治冬は密に村重に向ひ『筑前守は織田殿股肱の一人で御坐る。今城中に投ぜしこそ好機會、一刀に彼を刺さば、一軍を取るより以上の利得では御座らぬ歟』と勸說した。併し村重も亦名譽の男子『筑前日頃の交誼を重んじ、危險を冒して來たものを、ムザ〳〵殺すは弓箭の恥辱』といひて、之を聞かなかつたから、免かれた。（黑田家譜、古郷物語、太閤記）而うして後年彼の天下となつた日、村重が藝州に流浪して居るのを呼上せ、

攝津の菟原に隱居料を與へて、晩年を無事に送らせて居る。(野史所引)

彼の朋友に對する、概ね斯くの通りであつたが、是は獨り朋友のみに止まらぬ。設ひ敵將と雖も、氣節あり、才幹ある者は、成るだけ生かして、之を使はうと務めて居る。彼佐久間玄蕃盛政の如きは、柴田勝家在世の間、隨分秀吉に激しく反抗した一敵將であるが、秀吉は毫も意に介せず。逮捕の後、之を降伏させて、自家の用を爲さしめんが爲には、非常に心を盡して居る。其他佐々成政にせよ、瀧川一益にせよ、一たび降れば、舊怨を思はず。此種の類例を擧ぐれば、日も亦足らぬ。

彼の未だ大いに志を得ざる時、家臣にして暇を願出る者があると、人を以て其者に暇乞として罷出るやうにと傳へさせる。其者出頭すると、手づから茶などを點して饗なした上に、刀・脇差などを與へ『何方へ行つても思はしく無くば、早々歸參せよ。何時にても使つて遣る』と優しい辭を掛けられる。其者他方に赴いた後、身を立てかねて立歸れば、前約に違はず、亦元の知行を與へて、使用された。(言行錄所引)

平常既に斯くの通りであるから、戰爭の際には、殊に士卒の難苦を思遣り、極めて深厚な同情を寄せた。彼中國大返しから、明智征伐の時の如き、彼は運命を天に委せ、大血戰をする積りであつたから、部下にも後顧の憂なからしめんと欲したものと見え、途中姫路に立寄つて、貯蓄の金穀を取調べた上、白銀七百五十貫・黄金約千枚・米八萬五千石を取出させ『孰れも今度は九死一生の戰ぞ。皆の者どもに十分の仕度をさせよ。殊に足輕・弓・鐵砲の者共の妻子は扶持米が賴みぢや。此際銘々へ祿高の五倍にして取らせよ』と命じて居る。(川角太閤記)

それから賤ヶ岳合戰の當日であつた。時は天正十一年四月二十一日の朝から、非常な激戰であつたから、身方に於ても手負・死人數を知らず。是等は山野に横はり、炎熱な日光に照りつけられて居た。秀吉は一々戰勝の後を巡閲しながら、是等の死傷者を睹る毎に、其

場に居合せた者の笠を借受け、手づから一々其上に被せて、それを勞はつたので、見る者、聞く者、皆之を感稱した。（言行錄所引）顧ふに是は賤ヶ岳のみで無く、何れの場合でも箇樣であつたらう。此に至つて忽ちナポレオン一世を聯想し來るのである。彼も亦一役了る毎に、戰場を巡按し、恰度秀吉の爲した通りの事をした。それて死ぬ者も感喜して死に、生ける者は奮勇して、斯人の爲に死力を出した。彼は實に西洋の太閤と謂ふ可く、是は亦東洋のナポレオンと稱す可きである。

尙ほ彼が士卒に對する同情は、大陸遠征の役でも見える。當時彼が彼地に在る海軍の諸將に與へた手書を看ると『水夫どもは絕えず海上に居るから、嘸辛からう、成るだけ手當を十分にして遣はされよ。寒中だけは艦隊を本國に返して、休養させたらば如何だ』などの意も見える。

以上は專ら戰鬪員の上に就いて觀察したのであるが、彼の同情は僅に此に局限せられたもので無い。其の洪大なる慈悲心は斯世の生民の上に在つた。それて彼は畢世の大部分を戰鬪攻伐に捧げたとはいへ、彼の希望は決して〳〵斬將搴旗などの小功に在らぬ。即ち彼の大目的は『戈を止むるを武といふ』といふ其武に在つた。此が彼の好んで「位詰」の戰略を用ゐた處てある。何となれば、既に敵軍に倍蓰する勢力を以て、位詰と出掛けるから、敵たる者如何に永く對抗しやうと思ふても、力が及ばぬから、結局降を乞ふの外は無い。而うして降を乞へば、早速に嘉納して、士民を安堵させた。それて彼人にならば、城門を開いて降參しても、決して後て虐殺なんぞされる氣遣ひが無いと、時人も信じて疑はなかつたのである。

今彼が如何に民命を重んじた乎を顧れば、戰鬪の際にまて、深き注意の跡を留めて居る。それは山崎大戰の前夜、堀尾吉晴を偵察に出しながら、其訓令に、『敵前の人民は皆逃竄して、民屋は皆空屋と見える。偵察隊は其空屋に潜んで、夜襲の來る歟來らぬ歟を偵察せよ。敵若し襲ひ來ると見なば、成るだけ離れて小さい建物に火を放けて、相圖をせよ。家屋の立

並ぶ處を燒くことは相成らぬ。小屋一軒を焚立てゝも、火は十分に見えるものぞ」とある。川角太閤記 注意のほどは、是れでも知れる。

次には九州征伐の際であつたが、彼は進んで肥後に入り、前軍をして堂々として薩摩の國境に逼らせた。時に彼は八代の本營に在つて、熟思惟した。『大阪雷發以來、幾多の敵地を通過し來たが、手にたつほどの者も無く、頑强と聞えた島津父子も降伏せんは旬日に在る。こは吾武徳とはいひながら、畢竟は天佑と存ずる。さらば民を安んじて、天眷に答へ奉らねばならぬ』と、乃て石田三成・安國寺惠瓊を召し『早く軍門に來つて、恭順の意を表する者は、是迄の通り、何れも所領安堵せしむ可き旨を觸出せ』と申付けた。すると惠瓊『御諚では御坐りますれど、大軍の通過した地方の士民は、此邊一帶にかけ、多くは山林に逃竄れ、人烟稀少に見えまする。從つて難有き御趣意のほども、布令しやうが御坐りませぬ」と答へた。『さらば高札を處々に立てゝ、吾意を知らせよ」と命ぜられたから、二奉行相議して、其の通りに執行した。サア此高札が建つと、四方八方大評判、未だ三日を出でざるに、名ある士豪の八代に參陣する者、早く六七十人に上つた。言行錄及野史參酌

彼が一代の偉業の根本は、實に此慈悲心・博愛心・同情心に基する。人道の前には勁敵なし。孟子を復活し來つて見せたなら、如何に喜んだ事であらう。

彼の孝行

忠といひ、孝といひ、慈といひ、愛といふも、其根源を問へば、瑞々しい情想の發揮である。唯其の對する所に從つて、稱呼を異にするに過ぎぬ。昔から『忠臣は他なし、其君に情ある也。孝子は他なし。其親に情ある也』ともいひ、或は『忠臣を孝子の門に求む』といふのも、これからである。彼太閤が群下及一般人民に對してまで、深厚な同情を有して居た事が、上に述べた通りである以上は、其人の親に至孝なる可きは、申すも愚かである。併ながら孝は情想中の至美なるもの、所謂「百行の基」とも稱す可きものであるから、

特に之を述べねばならぬ。彼は未だ物心の著かぬ裏に父を喪ひ、母と倶に艱難辛苦を嘗めて來たからでもあらうが、母に對して極めて孝心が深かつた。其の諸方に流浪中にも、絶えずお袋の事が氣になつたと見え、織田家に始めて仕へる時にも、先づ家に歸つて相談し、お袋に安心させやうと勉めて居る。(素生記參酌)それから追々立身して、或は江州長濱の城主となり、或は播州姫路の城主となれば、到る處に母を迎へて、奉養を怠らぬ。而うしてお袋の方でも亦秀吉が大の想兒で、彼中國大返しの途中、姫路に立寄られた際の如き、お袋からは片時も早く會ひたいと申越されゝかば、秀吉も亦軍務蝟集の間に、何は扨置いて、其機嫌を伺つて居る。(川角太閤記)天正十三年三月、彼が内大臣に任ぜられた後、朝廷からわざ〳〵勅使を大阪に立てさせられ、自今秀吉母儀を大政所と稱す可き旨の御沙汰を賜はつたのも、恐らく秀吉の奏請に由つたのであらう。

但だ其翌年九月、德川家康を羅致せんが爲に、大政所を人質として參州岡崎に送つたのは、政略の爲には母を死地に入れるをも忍んだ氣味がある。併ながら當年德川氏との關係は既に親交の端を開き、同年の春三月には、彼の令妹朝日君は早く家康の簾中となつて、濱松に入輿された後である。加之、彼の明敏なる、母儀を彼地に遣はせば、家康は之を優待し、自身必らず入覲す可き事を、先の先まで見透した上の事である。それで秀長等の之を憂慮するに向ひ『母上のお出ましは、畢竟天下統一の爲で、ほんの暫時の間であるから、心配するな』といつて居る。(野史所引)果して其見の通り、家康は早速參朝し、乃て歸國するや否や、直ちに多くの護衛を添へて、大政所を還して居る。

彼は戰陣中に在つても、常に大政所の機嫌伺を怠らぬ。大政所も亦節々使を發しては、其消息を問はせたのである。天正十九年四月、彼が小田原の行營中から贈つた手柬を讀めば、其間の事情が目に睹るやうてある。

『さい〳〵文給候。御うれしく候。こなたの事あんじなされまじく候。いよ〳〵小だわらかたくとりまか

せ（即ち堅く取卷せ也）候により、はや〳〵くに〳〵ちの物（即ち國々地の者也）ばつ（罰）など申け候て、百せうどもまてめし出し、しゆ〳〵と申つけ候。小だわらの事は、くはんとう（關東）ひのもと（日本）までのおきめ（即ち制裁）にて候まゝ、ほしころし（即ち乾殺）に申つく可く候間、としをとり可申候。たゞわがみは、そもじさま又はわかぎみ（即ち若君）みまいながら、としの内に□候て、御めにかゝり可申、御心やすく可被存候。かしく。

五月一日

大まんところさま

てんか

かへす〳〵、わが身事、御あんじなされまじく候。一だんとそくさいにて、五ぜんもあがり候まゝ、御心やすく可被存候。そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候。又大□んごそくさいのよし、なにより〳〵御うれしく候。……『高臺寺文書』

彼の母を思ふ事は、右の通りてあるから、其奉養は至れり盡せりてあつた。

文祿元年、大陸遠征の壯擧起り、同年三月、彼が京都を發して、名護屋の本營へと赴くや、大政所の心配は實に非常て、其結果は乃て重き病の床に就かれたのてある。其病狀報告が秀次の許から、日々のやうに行營に達して來た。すると太閤は寢食をも安んぜず『終の別に一目見奉らねば、人の子たる甲斐も無い、』といひながら、軍務を家康・利家の兩人に委任し、七月廿二日、名護屋を發し、夜を日に繼いて東上した。其間にも諸社諸山に代參を立て『母の命を今一年、それが協はずば、半年ても、三箇月ても、せめては自分が歸り着くまてとも生延びさせ給へ』と祈願させた。彼が所謂與次兵衛ヶ瀨門の大危難は此歸航中の事てある。斯くて同月晦日京都に驅着けたが、既に遲かつた。彼は母上薨去の事を聽くや否や、アッと叫びながら卒倒して、人事不省に陷つたので、殿中は沸くばかりの大騷ぎとなり、典藥等が馳集まつて、種々に介保したので、漸く蘇生し、はふり落ちる涙を拂ひながら『殘

念々』と言續けて居た。（甫庵太閤記、及野史其他參酌）

彼は悲泣の裏に大政所を紫野の大德寺に斂め、壯大なる葬儀を行つたが、追慕の情は年を經ても尙ほ痛切であつた。文祿三年三月には、自身高野山に詣て、先妣天瑞院の爲に、靑巖寺といふ莊嚴な一新寺院を建て、又一大齋場を開いて、一山の衆徒に齋を供養し、同時に壹萬石を高野山に寄附して、先人の菩提を弔はせた。（野史所引）彼が惻怛の孝情も亦實に掬す可きては無い歟。

彼の戀愛　（淀君の年齢）

是から彼と北政所、彼と淀殿及其他の姬嬪との關係を述べやうと思ふ。が、其前に淀殿の上に就いて辯じて置きたい事がある。何故かなら、之を辯ぜねば、淀殿の上、並に彼女性と太閤との關係上に、明確な印象を得ぬからである。

彼女性の母上は、人々の知られる通り、信長の令妹て、名を市姬といひ、夙に江州小谷の城主淺井備前守長政の許に入輿されたので、世に其人を小谷の方と稱して居た。斯くて市姬と長政との間に三人の姬君をまうけられた。總領が茶々姬、後の所謂淀君である。次は初姬、後に京極高次に嫁せられた所謂常高院。季は達姬（一說には、江與姬又督姬）後に德川二代の將軍秀忠の簾中となられた所謂崇源院は此方である。

是からが悲劇である。戰國の習とて、通家の間柄ても賴みにならぬ。一旦淺井・織田兩家の格執が起り、長政は遂に信長の爲に滅亡されたので、市姬は泣々令兄の許に引取られ、欝せき月日を送られる中に、柴田修理亮勝家の許に再緣される事になり、御子達三人を引連れて、勝家の領國越前の北庄に入輿され、伉儷の情も睦ましく暮らされる中、今度は勝家と秀吉との戰爭となり、賤ヶ岳の一戰に勝家は敗績して、萬事休するに至つたので、數奇なる小谷の方は夫勝家と倶に自盡して、悲慘の最後を遂げられた。其際三人の姬君だけは、勝家の子ても無く、信長の姬御てあるから、設ひ今敵身方とはなつても、此お子達は助けて貰ひたいと、秀吉に托された。秀吉それを引取つて育て上げた結果

が、月下氷人の徒らとなつて、淀君は一朝秀吉の側室といふ事になられたのである。

處が此に辯ぜねばならぬのは、其淀君の年齢である。由來傳はつた諸書に徴すれば、元和元年五月、大阪城中にて自殺された時三十九歳とあるので、「逸史」や「野史」なども之に據つた。が假に之を事實とする時は、辻妻の合はぬ話が續々として持騰る。兎いふは、元和元年に三十九歳なり、天正十七年五月に長子鶴松を娩まれた際は、十三歳て無ければならぬ。十三歳のお袋樣も些と可笑しい。尤も此鶴松の誕生に就いては、「系譜」や「家譜」や「豐鑑」や「實錄」には、天正十九年四月となつて居るので、「野史」なども之に從つた。が、高臺寺文書中に遺存する天正十八年四月十三日附て、小田原陣中から北政所に贈られた秀吉肉筆の手束に「若君戀ひしく候へども……」など見えるを如何にする。生れても居らぬ若君を戀ひしがつて、歸つて見たいといふ馬鹿があらう。それて是は「御年譜」に在る天正十七年五月の誕生とあるを事實とせねばならぬ。すると十三歳のお袋樣が出來る。可笑しいといふのは、此てある。併し美人は早く成熟するともいふから、何とも知れぬといふ人もあらう歟。なれど、是よりもまだ〲可笑しいのは、元和元年淀君の薨年三十九歳とすれば、其生年は天正五年てなければならぬ。處が君の生父淺井備前守長政の切腹は、天正元年八月廿七日てある。信長記元年に死亡した人の實子が同じく五年に生れやう筈が無い。お負に淀君の下に尙ほ二人の姉妹もある。是に於て乎薨年三十九歳といふの出鱈目たるは彰然てある。

さらば其薨年は何歳てあつた歟と顧るに、何として據る可きものも無い。が、幸にして一つ手掛りを得た。それは淀君の季の妹御達姫の崇源院が薨年てある。此方は上にもいふ通り、秀忠の御臺所て、寛永三年九月十五日、享年五十四歳にて薨去せられたと、「以貴小傳」に見える。德川氏の全盛時代に在つて、二代將軍の簾中の薨去を記したのてあるから、無論間違なきものと信ぜねばならぬ。此薨年から溯算すれば、崇源院

の生年は天正元年、即ち父長政自殺の年の誕生である。そこで母市姫の小谷の方が淺井家に居られた期間を考へれば、永祿十一年に長政に配し、天正元年に生家へ歸られたのであるから、其中間は足掛け六箇年であつた。是に於て知る事の出來るのは、淀君の誕生せられたのは、永祿十一年から元龜二年に亘る四箇年の中であつたといふ事である。して見れば、彼女の自殺された元和元年の比ほひには、既に四十七八歲、若しそれより若くても四十四五歲にはなつて居られた事が分る。

是から推せば、天正十七年に、鶴松を娩まれた際には淀君は、廿一二か二十歲頃。又文祿二年に、秀賴を産まれた時には、既に廿五六か廿三四頃である。而うして太閤の年齡を顧みれば、天正十七年に於て五十四歲、文祿二年に於て五十八歲であるから、太閤と淀君との年齡の差は、由來の歷史が傳へたほど・世上一般が想像したほど甚しからず。之を近頃見聞する田中伯と小林孝子との關係などに比べれば、何でも無い。從つて淀君の腹に秀賴を宿されたのは、石田三成の手傳ひであらうの何のといふは實際を知らぬ齊東野人輩の邪推に過ぎぬ。今日普通一般のヘナチョコ男でも、五十七八歲で子供を造る者は、ソンジョそこらに幾らもある。况んや精力旺盛なる英雄太閤に於てをや。天若し彼に壽命を假さば、淀君の腹は幾便々、アラ腹たお御帶、又た御帶と、大阪の大奧はさゞめき渡つた事であらう。本問題に入込むに先だつて、一寸疑問を方づけて置く。

彼の戀愛　彼と北政所

彼が藤吉郎時代からの戀女房は、最初に述べた通り杉原助右衛門が長女にして、淺野又右衛門が養女のお禰々御寮である。彼が此女と結婚したのは、永祿七八年、即ち彼が廿九歲か三十歲の頃と思はれる。彼の年齡三十歲の時、お禰々御寮は花も羞らふ十七歲であつたから、同僚からも羨まれるほどの若い花娵であつたらう。顧ふに彼秀吉は此頃ほひまで、其身を立てるに

急なので、自然妻縁も遲くなつたものと見える。それて思ひ切つて妙齢な細君を迎へたのであらう。處が彼は呼當てた。此女中々の別嬪て、お負に優しく、大人しく、其上理發な性質の、才貌兼備な夫人てあつたから、伉儷の情も亦極めて濃かてあつた。

人の事業は往々世上の目に見えぬ所に成るものてある。彼秀吉の成功は天下の豪傑を收攬した結果だとは何人も言ふが、之に就いては、お禰々御寮が人知れず何程骨を折つたか分らない。加藤喜右衛門が妳の虎之助を連れて來て、臺所に置いて、飯を食はせて吳れよと頼めば、厭やな顔つきもせず、之を養つたのは、此女性てある。福島市松が轉げ込んで來たのを、收容したのも、此女性。其他木下・淺野・三好等の親族を近づけて、夫の用を爲さしめた内助の功は如何ばかりてあつたらう。從つて秀吉の之を大事にしたのも亦尋常て無い。天正十三年に、彼始めて内大臣から關白に進むや、彼の内奏に由つたのてあらう。朝廷からわざ〳〵勅使を大阪に立てられ、第一には母儀に大政所の榮稱を賜はつたが、同時にお禰々御寮を北政所と稱す可しとの宣旨をも下された。（任官記）要は秀吉糟糠の妻に自個の光榮を頒つたのてある。而うして此女の如何に婦德を具へて居られた乎は、太閤全盛の日になつても、豐臣家勳舊の諸將が、誰も彼も、北政所殿〳〵と尊崇して、慈母のやうに景附して居たのても知れる。

それて太閤は外に隨分馬鹿もしたが、其れても北政所を何處までも正室として、立派に立通し、自身四方の征戰中ても、絕えず其地から消息を往復した事は、前にも擧げた九州征伐中肥後からの手柬ても、其一端は見えるが、尙ほ天正十八年、小田原の本營から彼女に復した返書がある。

『さい〳〵人給、御うれしく候。小だわら二三てうにとりまき（即ち取卷き）ほり・へいふたへつけ（即ち堀塀二重附け）一人もてき（即ち敵）出し候はず候。ことにばんどう八こくの物ども（即ち阪東八國の者共）こもり候間、小だわらをひごろし（即ち乾殺）にいたし候へば、大しゆ（奥州）まて、ひまあき候間、滿足・申すにおよばず候。にほん（日本）三ぶんの一ほど

候まゝ、このときかたくとしをとり候ても申つけ（即ち越年しても是非く致分し）ゆく／＼までも、てんかの御ためよきようにいたし候はんまゝ、このたびてがら（即ち手柄）のほどをふるい、ながぢん（長陣）をいたし、ひやうろ（即ち兵粮）又はきん／＼（金銀）をも出し、のちさき（前古後世）なのこり候やうにいたし候て、がいぢん（凱陣）可申候間、其心えあるべく候。此よしみな／＼へも申しきかせ候べく候。かしく。

四月十三日　　てんか

五さ　返事

返々はや／＼てき（敵）をとりかご（籠鳥）へいれ候ておき候間、あぶなき事はこれなく候まゝ、心やすく候べく候。わかぎみ（若君即ち鶴松の謂）こいしく候へども、ゆく／＼のため、又てんかおだやか（即ち天下泰平）に申つく可候と存候へば、こいしき事もおもいきり候まゝ、心やすく候べく候。我等もやいとう（灸治の謂）までいたし、みのようじやう（身の養生）候まゝ、きづかい候まじく候。おの／＼へも申ふれ、大めうどもににうぼう（女房）をよばせ、小だわらにありつき候へと申ふれみぎとうり／＼（右通々）のごとくに、ながぢん（長陣）を申つけ候まゝ、其ために、よどの物（淀の者即ち淀君也）をよび候はん間、そもじよりも、いよ／＼申つかわせ候て、まへかどによをい（用意）させ候べく候。其も（じ）につゞき候ては、よどの物、我等きにあい候ように、こまかにつか（は）れ候まゝ、心やすくめしよせ候よし、よどへも、其もじより申やり、人をつかわせ候べく候。我等としをとり（越年の謂）可申候とも、としの内に一どう（即ち一度）は其方へ参（り）候て、大まんどころ又はわかぎみをもみ可申候まゝ、御心やすく候べく候。』（高臺寺文書）

と申遣つて居る。是時に當つて、淀君は既に世子鶴松君のお袋様となり、其地位も普通のお妾でない。若いの好きな彼秀吉の事であるから、慾火の上からは、淀の者の方が、四十を越えた半お婆アさんの政所よりも勿論面白くなつて居た頃である。それでも政所に遠慮して『そもじに續いては、淀の者が我等の氣に合つて

使ひ好いから』など世辭をいひ、且つ正室を何處までも正室に立て、『淀へ關東下向の用意するやうに、そもじから申遣はして貰ひたい』といふ處に味がある。而うして彼は其世を終るまで、此北政所を御臺とし夫婦の愛情を保つたのである。天若し早く此夫人に一男子を授けて産ませて居たならば、豐家の天下は啻に太閤の一代に止まらなかつたらうなど、詮なき愚痴が言ひたくなる。

因みにいはう。此政所は流石に賢夫人であつたゞけ自然に『明哲身を保つ』の理を覺り、太閤棄館の後は京都の高臺寺に隱居され、半世の榮華を黃粱の夢とあきらめて、七十六歳の長壽を保ち、寛永元年九月六日、大往生を遂げられた。

彼の戀愛　彼と諸嬪

多情多血は英雄の特質、秀吉亦箇中の人である。それて彼はお禰々御寮だけでは物足らぬ。其身の發達するに從つて、段々道樂が滋長して來たらしい。それて

お禰々御寮から内々信長に訴へて、意見を加へて戴きたいと懇願したものと見える。之に對して極めて興味ある信長の返書がある。

『おほせ(仰)の如く、こんどは(今度は)このちへ(此地へ)はじめてこし(始めて越し)げざん(見參)に入、しうちやく(祝着)に候。とにに(殊に)色々うつくしき、中々目にもあまり、筆にもつくしがたき、しうぎ(祝儀)をくりに(贈りに)此方よりも何やらんとおもひ候へば、其方より見事成物もたせ候間、べつ(別)に心ざしなく候まゝ、まづ〳〵此度はとめ(止)なし。かさねて(重ねて)まいるのとき(參るの時)それにしたがふべし。就中、それの見め・ふり(振)・かたち(形)まで、いつ(何時)ぞや見まいらせし折ふしよりは、十の物廿ほど見あげ候。藤吉郎れん〳〵(連々)ふそく(不足)の旨申のよし、ごんごだうだん(言語同斷)くせ事(曲事)に候歟。何方をたづね(尋ね)候とも、又二たびかのはけねずみあひもとめがたきあひだ(相求め難き間)これよりいご(是より以後)のみもち(身持)ようくわびになし(好ら華美になし)いかにも(如何にも)かみ様(上樣)なりに(風に)おと〳〵しく、りんき(悋氣)などに、たち入

候ては、しかるべからず。しかしおんなのやくにて候間、申ものゝ・申さぬなりに、もてなし、可然、なをふんていにはじいりはいせんてひねがふものなり。又々かしく。

御朱印　　　　　のぶ

藤吉郎をんなども　（武家事紀所載）

文意は『今度此地に出て、久々振に逢つて滿足した。それに結構な品々贈られ、祝着千萬ぢや。何ぞ返禮にと存ずれど、旅中の事て、心に任せぬから、是れは此次の度まて預りにして置く。それはそうと、其方の見目なり、振りなり、容まて、何時ぞや看た折よりも、十のものなら二十も美くしうなつたのに、藤吉郎が種々不足を言ふそうなが、言語同斷、近來の曲事ぢや。併ながら彼はけねずみ（此語一寸思ひ得ぬ。が、藤吉郎を指すものと見える。或は彼人小鬢など拔上り、而も希代の敏捷家てあつたから、禿鼠など綽名を附して居られたのてはあるまい歟）……は中々の英物、彼んな夫は外には無いから、以來はそもじも、身形も奇麗にし、如何にも上流らしくなり、起居物ごし上品にし餘り吝氣などせぬやうに心掛けて貰ひたい。兎はいふものゝ、吝氣も亦女の役、焦くも惡いが、焦かぬも惡い、此の處、言はゞ申すものゝ・申さぬなりにして、厭かれもせず、馬鹿もさせぬやうに、致したいものである』といふのてある。織田右府といへば、殺伐粗暴て、芋の蔆えたも御存じ無い大將てあつた歟の如く、普通一般に思うて居るが、左樣な事て、天下の取れやう筈が無い。彼の世態人情に通曉して居た事が、是に由つても察せられる。それにしても亦當時の主從關係が如何に親密てあつた歟も、亦又由つて知ることが出來る。但し彼お禰々御寮が夫の浮氣をまでも主君と話の出來る處を見れば、其の初め彼女と秀吉との結婚が信長の指圖から出たといふ「永夜茗談」の傳說の信に幾きを思ふのてある。

扨彼お禰々御寮が氣を揉んだのも、無理ならぬ事實がある。それは淺井長政の未亡人小谷の方に望を懸けたのも、其の一つてある。是は前にも述べた通り、主

君信長の令妹で、天正元年の秋、夫長政に生別れ、三人のお子達を引連れて、お里の織田家へと歸られた。天の成せる麗質にて、當時日本第一の美人といふ名が高かつた。（淺井三代記）而うして令兄信長は一旦長政を滅ぼして、彼方を取還されたもの丶、心に氣の毒なといふ感じもあつたらう。誰ぞ部下の諸將中に再縁させたいといふ希望を有せられた。其時秀吉は淺井の跡一職を賜つて、小谷二十二萬石に封ぜられ、柴田や丹羽と肩を並べる大名となつたので、彼市姫に醮しても恥かしからぬ地位である。そこで此方を申承けたい野心を起した。尤も是には信長の世子信忠といふ荷擔者があつて、内々降嫁の運動をされた。すると一方には其競爭者が見はれた。それは織田家の一老柴田修理亮勝家である。此方には信忠の令弟神戸信孝が同意者で、是も熱心に周旋された。が、當時に在つては、名望・地位ともに勝家の力がまだ〳〵勝つてあつたと見え、信孝の運動が功を奏し、結局小谷の方は勝家に降嫁せられる事になつたのである。（川角太閤記）秀吉當時の落膽左もこそと想はれる。後年亡右府の御繼嗣問題發つた時、勝家は信孝を推し、秀吉は信忠の公子三法師を推したのは此邊にも胚胎すると、「川角太閤記」に見えるのも、强がち無稽の臆測でも無からう歟。

旣にして天下の局面は一變し、山崎の戰捷以來、彼は忽ち戰國劇の大立物となつた。此處まで來ると、都ての慾望が增大すると倶に、道樂も亦一層芽を擡擧げる彼は段々若いのに目が着いて來たらしい。茲に京極高次の姉に亦非常の美人があつた。此方は夙に若狹神宮寺の名族武田孫八郎元次に嫁して、二男・一女を擧げられた。當時若狹は、半國だけ丹羽五郎左衛門長秀の所領で、其の他の半國は諸豪族の分領に屬して居た。其中天正十年六月、京都本能寺の變となり、續いて山崎の大戰となり、長秀は秀吉と連合して、先づ自國一圓を切從がへんと志し、翌七月、貝津に出て、元次を其地に招いて、之を法道院に誘殺し、直ちに兵を遣はして神宮寺を襲擊させたから、元次の一門は遂に滅び其子女も散り〳〵になつた。此際京極氏は丹羽兵の爲

に擒へられて、京都に押送せらるゝの不幸に遭遇したすると秀吉、一つには其境遇を愍み、又一つには其美貌に惚れて、乃て之を側室にし、一甲第を伏見に築くに及んて、松の丸の御殿に置いて寵愛した。世に松の丸殿と稱したのは、是からてある。（野史所引）

今京極高次の薨去を按ずれば、慶長十四年五月にして、享年四十七歳てあつたと云。（野史所引）是から推せば、天正十年には二十歳てある。次に同年慘死しだ武田元次は三十一歳てあつた。（同上）すれば二十歳の弟・三十一歳の夫を持つて居た松の丸殿は多くても二十四五歳より以上には上らなかつたてあらう。而うして同年お禰禰御寮は三十四の大年增てあつた。秀吉の目が松の丸殿に注いたのも、此邊て大概推知せられやう。

此松の丸殿は容貌ばかりて無く、其心ばへも優しい人てあつたらしい。自分が曾てフィリッピン島の首府マニラに在るゼシュイット教の本山から得て來た史料の裏に『太閤の宮中に居た京極殿といふ貴夫人は、自身も内々基督教を奉ぜられたとの聞えある方てあつたが、左右に仕へた宮女に信仰の自由を允し、善くそれを保護されたと見える。太閤の宮中に居た貴夫人て京極殿といへば、松の丸殿より外には無い筈ぢや。蓋し彼女は悲慘の境遇を經て來たので、自ら宗教に心を傾けたのてあらう。因みにいはふ、彼女は太閤の薨去後は壽芳院と稱し、令弟京極高次の許に歸り、慶長五年東西の爭ひの際などは、大津の城に高次と倶に籠り、艱難せられた事などが見える。（野史所引）が、其後天壽を以て終られた。

それから松の丸殿を閨閤に納れたのと餘りに間なかつたらう。蒲生右兵衛太夫賢秀の令女を納れて側室とした。此賢秀及子息忠三郎氏郷（後の飛驒守）は織田家の部將時代に、秀吉とも親しく、柴田勝家とは殊に懇意てあつた。處が右府の薨去後、兎角に秀吉と勝家との間が面白く無い。而うして賢秀父子は義人てあるだけに、夙に秀吉が山崎の一擧を多なりとして、此頃から彼に心を寄せたので、謂はゞ質子意て氏郷の同胞を納れたものと見える。（野史參酌）彼女の年齡は知る事が出來ねど、

天正十年には、氏郷二十七歳であるから、其人の妹と見れば、是れ亦前の松の丸殿と姉たり難く、妹たり難き年配であらう。三條殿と稱せられたのは、此方である。

次には織田右府の令女をも側室に納れた。三の丸殿は此方である。（野史所引）右府の姫君は十一人もおはしたから、其季の方は餘程若かつたに相違ない。

彼の戀愛（彼と淀君）

彼の若いの好きは、年と倶に益嵩じて來た。而うして最も不思議な關係を生じたのは、淀君とのそれであつた。天正十一年四月、彼女が母君小谷の方及繼父勝家に別れ、姉妹三人引取られて、秀吉の許に到られた頃を顧れば、一番季の達姫が十一であるから、茶々姫もまだ十四五であつたに相違ない。それで最初は單に不愍な氣の毒なお子達だといふので、吾子のやうに可愛がつたものと見える。處が織田家の系統は有名な美男・美女を出す家筋で、信長の如きも、容貌端嚴な人であり、殊に茶々姫の母君小谷の方は天下第一の美人と評判されたほどであるから、茶々姫も亦其麗質を承けられた。そこで十六となり、十七となり、次第に長ならるゝに從つて、愈々嬋妍さが增して來る。是に於て彼の若いの好きな先生の事であるから、此女に對する當初一片の愛情は、何時しか不可解な戀情と變化し來つたものと見える。

彼の初めて志を天下に得るや、早くも有名な聚樂の邸を京都に興し、天正十四年二月から此に徙り、十六年四月には、天皇・上皇の御臨幸を仰いで居る。彼が茶々姫との關係は此間から出來たらしい。而うしてそれが漸く公となるや、北政所と一つに聚樂に置くのは面白くなかつたと見え、別邸を淀に作つて、其處をお部屋樣の御住所に充てられた。それから後、秀吉は彼女を淀の者とも、又單に淀とも呼んだので、一般は淀殿若くは淀君と稱するやうになつた。

爾後彼の戀情は專らうら若い此淀君に聚まつた歟、天正十七年五月に至り、君は一男子を分娩された。鶴

松君と稱せられたのは、此お子である。（御年譜）是時秀吉は五十四歲、淀君は二十の頃である。さなきだに想を離れぬ此君てあるのに、年頃日頃得たいと念願し居た世嗣の男子を舉げられたので、愈々益々悦に入つた。上にも引いた北政所へ宛てた手柬に見える通り、翌天正十八年、小田原征伐の役を興すに及び、長圍の陣を張る見込にて、わざ〳〵此君を行營にまで呼寄せた尤も此間に一言せねばならぬのは、右の北政所宛・四月十三日附・小田原發の書には、直にも淀を寄こせと見えたが、其後事情があつて、遷延したものらしい。それて九月に入つて、彼は左の消息を淀君に遣はして居る。

『そのいご（以後）文にても申まいらせ候はて、御心もとなくおもひまいらせ候。わかぎみ（若君）いよ〳〵大きくなり候や。そこほどのひよじん（火用心）、又はしたゞ〳〵まで（下々迄）みだれにたきように、かたく申つけられ候はん事せんに候。廿日ごろにかならず參り候て、わかぎみだき（若君抱き）可申候。そのよさに（其夜さに）そもじをも、そばにねさせ（傍に寢させ）申候可候。せつかく御まち候可候。かしく。

おちや〳〵　　　　　　てんか

かへす〳〵、わかぎみひやし候はぬように（若君冷し候はぬ樣に）申つけ候可候。なにかにつけてゆだんあるまじく候』（史徵墨寶考證）

流石の英雄も若いのを殘し置けば、頗る氣に掛る容子が見える。それだけ愛情は溢れて淀君母子に降濺がれた。併し此際は、其書と行違ひに、同月廿五日、淀君は行營に到着したから、太閤の悦は如何てあつたらう。

處が不幸にも其翌年、即ち天正十九年八月に至つて鶴松君は生れて僅に三歲にして早世された。太閤の落膽は如何てあつたらう。併しながら越えて三年、文祿二年八月に至つて、淀君は又復た一男子捨丸（後の秀頼）を舉げられた。時に太閤は五十八歲、淀君は廿四五の頃てある。彼女既に御世繼若君のお袋樣となり、太閤の寵愛を一身に鐘めた。權威も自ら加はらざるを得ぬ。而うして其自負心も此に至つて、大いに加はり來つたと見える。既にして太閤は又更に小幡伏見に大建築を計

始し、四年三月に其の所謂桃山御殿に引移つた。此際淀の離城をも大いに修築し、主は伏見、意中の君は淀に在り。中間に龍頭鷁首の舟を泛べ、セッセと通うて贅を極めた。逸史

是に至つて、更に復た一言せねばならぬ事がある。當時の風氣としては、大名が三人や四人の側室を置くのは、普通一般の常にして、敢てそれが不道德となつて居ない。是は啻に當時の風氣であるのみならず、明治初紀の「新律綱領」てさへ、親族例に於て妾を權妻として、之を二等親に認めて居る。况んや太閤時代に於てをや。それて今日から觀ればこそ、妾の淀君を公然お部屋樣に立て、御臺にも拮抗するやうな地位を有せしめて居るが、可笑しく思はるれど、第一彼女は故主の連枝て、其素生貴きが上に、若君のお袋樣と來たから、側室といふよりも、寧ろ別妻と稱す可きてあつた現に「太閤素生記」などには北政所を本妻・淀君を別妻と記して居るのても、當時の事情は推知される。併し其間に在つて、太閤が何處までも本妻は本妻として立通し、故主の連枝ても、別妻は別妻として、之を第二位に置いた處に、彼が愛情に溺れぬ本色が見える。

顧ふに北政所も美人てあつたが、此人は淸楚にして、愼深く、物事に思慮があつて、それだけ内助の功も多い。申さば彼女は世話女房。それて太閤は十分其人の功績も認め、又年月倶にして來た艱難辛苦も思遣り只管之を愛したらしいが、淀君は又趣を殊にし、豐艶にして、如何にも無邪氣に、而も活氣があつて、年が若いから、其處に先生打込んだと見える。之を譬ふれば、政所は梅て、淀君は櫻、モ一つ謂へば、政所は梨花て、淀君は牡丹歟。それて太閤の世を終るまて、彼は愛情を雙方に振分けたのてある。

談じて此に至れば、坐ろにナポレオン一世が其皇后ジョセフィヌとマリー・ルイズを前後に愛して、二后の特長を比較したのが、念頭に浮ぶ。彼は言つた。『ジョセフィヌは除才なくて、愛嬌に富み、自分の色を觀・意を察して、事前にチャント物事を處理し、痒い所に手の屆くやうてあつた。且つ金が要る事があつても、未

だ嘗て自分に請求した事が無い。代りに到る處に買掛りを作つたのは、隨分弱らせられた事もあつた。之に反して、マリー・ルイズは如何にも無邪氣で、手短かに言へば、直情徑行、氣がねも無ければ、手管も無い。金が要るといへば、何時でも求める。何でも物は即坐に金を拂はねば買へぬものと心得て居たらしい。長所は各其處に在つた。但し孰れも溫なしく、且自分を大事に思つた心切は、二人ともに同一であつた」回想錄とは、必らずしも自惚て無い。今彼二人と此二人とを對比すれば、兩々の性情、一々當らぬ點もあれど、何處やら政所はジョゼフィヌの如く、淀君はマリー・ルイズに似た氣味がある。而うして孰れも溫なしく、且つ太閤を大事に思つた心切は、政所も淀君も同一てあつた。世には太閤の在世中から、淀君と三成が可笑しいの、太閤の閨閤がメチャ〳〵であつたのといふは、徳川時代の惡たいて、齊東野人の妄語に過ぎぬ。

彼の戀愛

定まつた彼の妻妾は以上述べた人々であるが、彼の女道樂は中々盛んであつたと見え、此他に種々な逸話がある。其の一つは、武藏の忍の城主成田下總守氏長が息女に一人の美人があつた。天正十八年、秀吉關東征伐の時、父氏長は小田原に籠城したので、彼女は忍城に留守したが、其中石田三成等の一軍此忍城に取掛けた。處が彼女は美人の上に男優りであつたから、家の子郎黨を勵まして、防戰に努めたので、是には三成の軍のみならず、之が應援に赴いた淺野幸長等の寄手も隨分惱まされた。其中に氏長降を請うやうになつたので、此城も開渡したが、小田原陷落の日に至り、氏長は曩に降を請ひながら、遲疑して早く決しなかつたといふに由つて、城地を取上げられ、お負に黃金千枚の償金まで課せられて、僅に其死を免かれた。が、氏長の岳翁・息女の外祖父は有名な太田三樂で、彼は秀吉の敬重する所てあつたから、其間に居て或は周旋の勞をても取つたものてあらう。此秋、秀吉下野の小山に到る際、彼女は御氣嫌伺に出た。すると物好きな英

雄の事であるから、其の美人にして勇烈な處が氣に入つたと見え、其儘留めて寵愛し、歸洛の後、乃て其れを呼上せた。翌年、父氏長が新に野州烏山の城主に取立てられたのは、此美人の哀願の結果だといふ事である。（野史所引參酌）

それから本願寺の顯如上人の裏方は細川右京太夫晴元の息女（或はいふ三條西氏）て、是も中々の美人と聞えた。が、上人の寂後に法統繼嗣の爭が起つた。すると若未亡人は光昭（後の准如上人即ち西本願寺の祖）を立てたいのて、文祿二年の八月、光昭を連れて、有馬の温泉に入浴中の太閤を見舞ひ、光昭へ相續の義を聽許せられるやうにと嘆願した。此際太閤から手を出した歟、それとも彼の好者を承知て持掛けたか、兎に角二人の關係が出來たので、光昭の准如上人が本派本願寺の法主に定まつた。（野史所引）と傳へて居る。併し是は其際敗れた敎如上人（東本願寺の祖光壽）の方からの讒謗かも知れねば、當てにはならぬ。

此種の談は幾らもある。蒲生飛彈守氏郷の奥方は、故織田右府の姫君てあつたから、言はてもの美人てある、處が文祿四年の二月、夫氏郷が薨去せられたのを見て、太閤は想を懸け、頻に招げども、夫人は節を守つて、如何しても應じない。そこで若し聽かれねば、子息秀行の爲に不利益てあらうとまて、人を以て嚇させたので、蒲生家の面々も已むを得ますまいと勸めるに至つた。なれど未亡人の操守は益々固く、黒髪を落して、拒絶の意を示されたので、其事は沙汰やみになつたが、未だ幾ばくならざるに、秀行は會津百萬石を召上げられて、宇都宮十八萬石に轉封された。（野史所引）と寔しやかに傳へたが、是は氏郷毒殺說・蒲生家搔亂し說と一般て、讒誣の甚しきものである。兎いふは會津は奥羽の重鎭・關東八州の押へてあるから、是非とも重望の人を要する。氏郷の封ぜられたといふのも是が爲てある。然るに其人か棄館したから、上杉景勝を以て之に易へたまでゞ、全然海内統治上の駕御法から來たのである。且つ氏郷と織田家の婚姻を顧みれば、氏郷十四歲の時、初陣に殊功を建てたのを賭て、信長之を激賞し、收めて行々自家の一臂としやうとの意からて

あつたらう、其姫君を之に妻やはされた。是が永祿十二年八月の事である。藩翰譜逸史 而うして信長の女子十一人あつた中では、此姫は餘程上のお子らしく、恐らく氏郷より歳上なる可く、さらぬまでも同年ぐらゐより下るまい。すれば氏郷の薨年には四十以上の姥櫻、以前は如何に美人であつても、彼若いの好きな太閤か何で左樣に執着しやう。

又千利休が一人娘にお吟といふ尤物があつて、一たび萬代屋宗安といふ者に嫁し、夫身まかつた後、寡居して京の父の許に暮らして居たのを、天正十八年の春とかや、秀吉黒谷の邊を散歩の折柄かいまみて、是非宮仕せれと迫らせたが、本人が不承知、父に諭せば、娘を賣るのは眞平御免と、撥付けたのを根にもつて、事に托して、終に利休に切腹させた。野史所引 といふ名高い話もある。お吟の美貌に一寸懸想したくらゐな事はありそうな談ながら、其戀の協はぬのを遺恨に利休を殺したとは、例の誣罔である。彼に死を賜ふたに就いては、別に立派な罪狀がある。

德川時代の下等動物どもが、太閤に寃罪を被らせた事も亦實に甚しい。併しながら彼の女好きは、當時に於ても有名な者であつたらしい。畢竟此凹んだ處にあらぬ奴等がつけ込んだのである。彼をして之を聞かせたなら『エー何も仕方が無い。税ぢや〳〵』と笑つたであらう。

全體彼は人に懷つこい。一世の好漢に對し、其才を愛する處は、即ち一代の美人に對し、其貌を愛した處であらう。尙ほ彼が如何に女性に脆かつた乎は、遠征の役起つて、十餘萬の征夫彼岸に渡航した中に、鍋島家の士に瀨川釆女といふ者があつた。其妻菊子夫を慕ふの餘り、長き玉章を便船に托送したが、其船途上に難破して、筑前の傳多に漂着した。海邊の者共難破物を取上げた中に、品好き文箱に水莖の蹟も拙からぬ文あるを見て、地方の役人に差出したのが、轉々として名護屋の本營にまで奉られた。太閤之を披き見れば、絶えも入りたいほど切な情緒を陳べて、其末に、

斯くあらんゆくへを知らで賴みつる我心をば誰にか

こたん。

とあるに到つて、坐ろ同情を禁ぜず。直ちに其夫に歸朝の命を傳へさせた。(太閤記) 若し其當時征人の家室をして悉く書を發しさせたらば、莫らん莫らん遠征莫からんなれど、兎にも角にも彼の美性と女に脆い愛情とは、是に由つても察することが出來る。

彼の戀愛　太閤と家康

太閤の戀愛を述べ來れば、自然家康を連想せざるを得ぬ。此先生の好色も亦決して太閤に讓らぬ。否な寧ろそれよりも甚しい。が、兩者の間に際立つて見えるのは、其好色サの別てある。

太閤は妾を置くにも、堂々たる家柄の娘を擇んで居る。松の丸殿のお里京極佐々木家はと顧みれば、鎌倉・室町に亘り、世に聞えた名族である。三條殿の生家蒲生氏とて、世々江州の一城主。三の丸殿は名に負ふ織田右府の御姫君。成田氏はと問へば、關東隱れも無い武州忍の城主の息女。別妻淀君に至つては、織田家の御連枝、淺井家の嫡流。以上揃いも揃うて名家の姫御前であつた。

轉じて家康の諸妾に看到れば、西郡の局と呼ばせたのは、配下鵜殿藤助が娘。次にお萬の方、後に小督の局など品好く稱へさせた女は、參州池鯉鮒の永見某が娘。築山殿の小間遣ひに上つて居たのに、手を着けたのである。次に下山殿とお妻の方とは孰れも甲州の秋山某が娘と聞えたが、銅雀臺で無い濱松の城中に、二喬を納れて、二人ともに賞玩した。それからお茶の局と呼ばせた女は、遠洲金谷の名も無い者の娘て、お八といつて、土地の鍛冶の女房となり、女の子まてまうけられて居たのを、地方の代官が其の濫皮の剝けた處に惚込み、無實の罪を亭主に被せて之を殺させた上、横取りしやうとした。お八悔やしさ腹立たしさに堪へず、娘を抱いて、濱松の城に驅込訴へに及んだのが始まりて、お慈悲な殿樣、不憫な者やと、其儘留置き、代官の罪科を正された上、お八は乃公がと來たのてある。次にお勝の局といふは、太田新六郎なる者の妹、

十三の時からお小間遣ひ、それに乃て手を着けた。次にお龜の方と聞えたのは、石淸水八幡の修驗者志水某といふ者の娘。それから今一人のお萬の方は、北條の家士蔭山長門が養女て、實は同家士正木左近の娘といふ事てある。此女は氣丈な者て、言行の觀る可きものが遺つて居る。次に今一人のお茶の局は飯田筑後といふ者の娘て、今川の家人神尾孫兵衞か妻となつて、一男子を擧げ、其中夫に死別れ、終に家康の奥に入つて最もお氣に入りの一人となつた。彼は中々の女策士て慶長十九年、大阪の冬の役に、常光院と共に城中に入つて、講和の扱などしたのも、此女であつた。それからお愛の方の西郷の局はと顧れば、遠州の地士戸塚某が娘て、同苗右京進といふ仁に嫁して、是も男女二人まて子をまうけた者。それが奥に奉公に出ると、年子に二人まて孕ませられた。其一人が後の二代將軍秀忠公と來た。以上十人の里方は、一度や二度聞かされても、一寸記憶しかねるくらゐの者てある。唯名家の娘らしく見えるのは、お松の方の新館御料人のみてある。是は武田信玄の姫御と言觸らして居れど、德川氏の時代てさへ異說紛々てあるから、其れは些と怪しいが、兎に角武田家類族の人てはあらう。十八の歲に一門の族滅に遭うて、世をはかなみ、武州の横山に匿れて、淸操を守つて居たのを、家康聞出して、信切ごかしに連來らせ、遂に逼つて物にした。彼が一生に此女に對してだけてあつたらう、別殿を造つて、そこに圍ゐ、そして新館御料人など特に是のみ稱した處から見ても、彼女だけは身分があつたらしい。此外「土屋覺書」に據れば、お睦の方といふのもある。是は甲州武士三井左衞門が女房て、一人の子持てあつたのを引上げ、名護屋陣にまて連行き、陣中て一子を擧げさせたが、產後の日立ちが惡くて、母子ともに身まかつた。それから豐臣家から入輿された御臺のお腰元大さいに小さいとふい二人をも引掛け、乃て大さいの腹を膨らませた。が、是だけは何か極りの惡い事てもあつた歟、お土產持參て小笠原越中守に下されが難有い。○以上以貴小傳及野史參酌

要するに、太閤は名門好きの・美人好き、それて人

に對しても、臆面も無く『彼は故右府のお子よ』と歟、『是は飛州が妹だ』と歟、パッパと言つた方であるが家康の方は、達者筆を撰まずの類歟、お竹や・お松や・ドンドコやて、お嚢どん好きの・後家好き・纏縱買。若し人から彼女はなど、聞かれると、左右を顧み、不明瞭な言語て『彼は其の……何ぢやテ』と歟。『否や何ても御坐らぬ。只の召使』など胡麻化す方てあつた。彼等二英雄を生けしめて、之を今日の民間に在らせたなら、一方は新柳二橋中一等の名妓を落籍せて得意がり、他方はお嚢に給料を増して、お摩りを命じ、米の高いを附目にして、戰死中少尉の未亡人を信切ごかしに引摺り込むて何するの玉てあらう。孰れも感伏して學ぶ可き次第のもので無けれど、誰やらの語氣を借用して之を謂へば、『お摩りを取らん乎。姉サンを取らん乎。我は山出しのお摩りを棄てゝ、意氣な姉サンを取らん者也。』

　但し家康の正妻築山殿だけは立派な家系、父は關口刑部少輔親永、母は今川治部大輔義元の妹御、而うして義元の養女として妻やはされたのである。それから次に入輿された朝日君は人も知る通り、太閤の妹御てあつた。是だけは家康の爲に眉を揚ぐ可きてある。併し此二方に對する夫婦恩愛の情はと問へば、築山殿は義元の戰死後は駿府へ置去り。三年過ぎて岡崎へ引取るは引取つたものゝ、それは名のみ。其の嫉妬深いといふを口實に、勢州に逐遣つた。彼れだけ夫に襤褸買をやられては、嫉妬もせずには居られまいが、敗者に口なし、永く失徳な夫人に列せられ、其の終りが岡崎に還つて、陰謀を企てたといふので、野中三五郎なる者に命じ、其人を連出させて、小藪といふ地にて、無慘にも殺害させて居る。（以貴小傳及野史所引）是には入組んだ事情があつて、必らずしも夫人が惡いとのみも謂へぬ事は、近頃出た「史疑」にも見える。次に朝日君は如何にと問へば、天正十四年、一旦濱松に入輿されたものゝ翌々十六年には、母君大政所の看病を名に、京の聚樂御殿に還られた切り、終に殿中て薨ぜられたから、是も今の民法語ていへば、中途から夫婦の別居。愛想

も顧想もあつたものでは無い。

之に反して彼立派好きでも、太閤の正室だけは、太閤と同じく寒素の出身。若し彼英雄をして輕薄ならしめば、『富には交を易へ、貴には妻を易へる』と出たらうが、『糟糠の妻は堂より下さず』、自身關白となれば、お禰々御寮は北政所の地位に就け、淀君に世子が出來やうが、其人の色香が失せて來やうが、生きては偕老・死んでは同穴の契を失はず。太閤の太閤たる所以は此に在る。之を約言すれば、太閤には人らしい戀愛がある。家康に至つては、徹頭徹尾只動物的慾火の發動、戀の何のと言はんは勿體ない。

最後に尙ほ一言せねばならぬのは、則ち當時の男色沙汰である。家康は大の「衆道」家で、井伊萬千代などは、彼の最も執着した一人であつた。其れに安藤帶刀が一夕忍んだのを瞥見して、一生根に持つて居たといふのでも知れる。處が太閤と來ては、此方には至極の淡白。筑前時代に織田信忠と關係があつたの（川角太閤記）石田佐吉の三成がそれであつたのといふは、當業法の出鱈目に過ぎぬ。其一證とも觀る可き話は、彼一日大阪の殿中に居た際、小姓の美少年某を密に居間に招いた事がある。當時一般の風習から、何人も早く氣を回し、彼方お嫌ひな殿下には珍らしい事もあると私語て居たが、御用は直に濟んで、させる樣子も無いので、好者が在つて、それと無く占問うて見た。すると無邪氣な某は之に答へ『其方には女の兄弟は無い歟と、唯其れだけ御尋であつた』といつたとの事である。即ち彼の欲する所は、矢張彼に在らずして、是に在つた事が知れる。戰國時代の氛圍氣に包まれて居ても、彼は人間に不自然な雞の眞似など厭がつたのが分る。此邊も一寸彼の面白い處である。

彼の慈愛

太閤の人に對する同情心や斯くの如く、溢れては好色の一端ともなつたくらゐであるから、其人の子煩惱たる可きは、勿論である。が、生憎彼は子供に緣が薄い。然るに天正十七年五月、彼五十四歲の時、長子鶴

松君が始めて誕生したので、彼の悦は非常であつた。それは前に擧げた彼の手柬、即ち翌十八年、小田原の陣中から大政所や・北政所乃至淀君に贈つた手柬に、若君が戀しい／＼と言續けて居るので知れる。處が又其翌年、天正十九年八月に至つて、此掌中の珠を失つた。彼大陸遠征の役は、彼が畢生の宿志で、鶴松を喪うた悲し紛れの遣消の擧て無い事は言ふをも待たねど、世上一般をして左様想像せしむるほど哀傷したのが察せられる。而うして其れも亦遠征を急ぐの一端となつたかも知れぬ。

幸にして文祿二年の八月、彼五十八歳に至り、淀君は更に亦一子を擧げた。時に彼は名護屋の行營に居たが、此報を聞くと。可喜しくて堪らぬ。軍務を前田利家に托し置いて、直ちに上京した。が、恐悦とは斯かる場合の謂でもあらう乎、喜悦の極は、若も此兒が成人てもし無かつたら大變との懸念となり、延喜も取り御幣も擔がざるを得ぬ。世俗に兒供の育たぬ家は、其兒を捨てると成長するといふので、捨兒の形式にして侍臣に拾ひあげさせた。而うして其幼名を拾丸と命名したが、殿中の者共はお拾樣／＼と呼んで居た。（野史所引其他参酌）後の内府秀賴は此お兒であつた。

太閤は成るだけ此兒に早くから重みをつけて、己沒からん後の世繼にしやうとの意があつたらう。慶長元年五月には、四歳になつた拾丸を連れて參内し、早く初階を受けさせ、翌二年九月にも亦伴うて參内し、左近衞少將の任官を拜受させた。（野史所引）此際の光景を目に睹るやうなのは、「老人雜話」の記事である。

「秀賴五歳の時、參内あり。伏見より行列をなす。太閤二三日前に入洛ありて、中立賣最上殿の屋敷に御坐す。參内の日に迎に御出あり。室町通を南へ指す見物群集す。太閤立髮の馬に駕り、びりやうの闊袖の羽織に・鳥を背縫にし、襟は摺箔也。底なしのなげ頭巾を着せり。馬の左右に五十人許徒立あり。半町許間ありて、又者千人許從ふ。大佛邊にて秀賴公に御出合ひ、太閤輿に乘移り、秀賴を前に置けり。錢を筥へ入れば舞る人形を、輿の先にもたせ、諸大

名は大房の馬にのり、二行に供奉す。是は聚洛の城終て後、中一年ありての事也」

といふもの、即ち是れてある。是時に當つて、如何に諸侯は爭うて媚を獻した歟。同日其輿が御幸町に差掛かると、供奉の一人伊達政宗「若君！　今度は私が人形を舞はして御覧に入れますよ」といひながら、强ひて箱を引つたくり、自身背負うて、輿前を歩いた。老人雜話政宗の心情、今から想うても汗が出る。是れ併ながら太閤の氣に入りたいが一杯の擧てある。それだけ太閤の子煩惱たる事も、亦見える。

それから立花宗茂が大阪の殿中に伺候した時、太閤は帶おずる〳〵の儘て、秀頼の爲に、雀の子を追つて走出たのに邂逅た事は、前にも述べたが、何樣此兒の爲には無束てあつた。而うして慶長三年、彼が薨年の夏四月には、此兒の爲に從二位權中納言をまて申受けて居る。のみならず彼曠世の英雄が末期の悲懷を察すれば、只此一粒種の愛兒の行末のみてあつた。

是に至つて、亦吾連想を撼揺かし來るのは、ナポレオン一世てある。彼も亦子といふは、僅に羅馬王ジョセフ一人てあつたから、其熱愛は亦太閤と同一てあつた。彼がセント・ヘレナの孤島に多年暴虐及瘴癘と闘ひ、全く一身の健康を傷ひ、死期の漸く近づくを察した時此處まて附隨つた忠臣ド・ラ・カーズに向ひ『自分は自分が遺骸の解剖を、豫め遺命し置く。昨今間斷なく吐を催す處から考へれば、自分の病根は胃に在るらしい。顧へば先考の世を早うせられたのも、矢張胃病が元てあつたから、何ても是は遺傳と察せられる。それ故解剖の際は、十分此に注意させ、詳細な報告書を作らせて、皇后及皇太子に送致し、皇太子をして豫め之に對する注意と藥用とをさせるやうに』と遺詔して居る。聖ヘレナ日記彼は一身を解剖に附してまて、其子の健康に資せんことを希望した。兩英雄の悲懷を追想すれば、今尙ほ暗涙の横生を禁じ得ぬ。『旅人の宿りせん野に霜降らば、吾兒はぐゝめ天の鶴群』此情なからん者は、竹頭木屑、人にして人に非ずだ。

彼の素養

由來太閤を論ずる者、動もすれば彼を無學といふ。如何にも無學といへば、無學であつたに相違ない。さりながら、それを論ずれば、信長も無學なれば、家康も無學、其他の諸豪傑も亦概ね無學である。綜括し來れば、當時の日本社會が無學であるから、太閤一人を特に無學といふ譯に行かぬ。但しそれは多く書を讀まず、多く文字を知らぬといふ事であらう。若し彼の素養はと顧みれば、當時の社會の必要に應ずるだけのものは、十二分に備へて居たのである。

如何にも彼には文字は無かつた。それは其筈、若し彼が机に對して、讀書・習字をした事があつたとすれば、鄕里に居た頃、光明寺の子僧に遣られた時ぐらゐなものであつたらう。其れ以來、彼は諸方に漂泊し、次いでは織田家の部卒となり、部將となり、進んでは海内の平定、大陸への用兵にまで至つたのであるから、殆ど彼の一生を通じて、間隙が無かつたであらうと思はれる。それにしては彼の天禀にも由る歟、彼の遺墨を觀るに、假名文でこそあれ、文字の遒逸にして氣品ある、自ら彼の人となりと相協へるものがある。

彼は右の如くして、机に對してこそ書を讀み、理義を講じなかつたけれども、實際事業の上に於ては、非常な修養を積んで居る。彼の主として學んだのは、信長の戰術・戰略及將帥術、それから政略及外交術である。全體信長の用兵上に觀る可きは、時代の僻見を棄て、能ふだけ最新の武器を用ゐたのと、機敏と疾速とに由つて勝機を制するに在つた。今川義元の不意に出て、桶峽の戰捷を奏じたるが如き、臆病陣と嘲けられながら、銃隊を利用して、長篠の大勝を博したるが如き、それである。太閤亦善く此意に通じた。中國大返しに由つて、光秀の不意に出て、山崎の全勝を收めたるが如き、岐阜を棄てゝ、柳ケ瀨に出て、賤ケ岳に奇功を建てたるが如き、銃隊を萃めて、勝家が後衛の決死隊を全滅し、直ちに北庄に殺到したるが如き、巧みに一齊射擊を用ゐ、勝に乘ぜる家康の軍を樂田に擊

退し、長湫の敗兵を收容したるが如き、其一端を察す可しだ。それから信長時代に至るまでは、群雄割據し、て、所在に勢力匹敵の對手と抗爭し、互角の戰鬪に心力を傾倒して居たのを、信長は一新機軸を出だし、難きを後にして、易きを先にし、所謂「はかをやる」の戰略を用ゐて、大いに境土を開拓し、而る後ち倍加の勢力を集中し、所謂「位詰」を以て、强敵を壓迫した。太閤亦此妙諦に通曉し、而も師の信長よりもより善く應用した。之れと相竝んで、所謂「調略」の外交を用ゐ、敵國を樽俎の間に屈服せしむるもの、亦信長の發明とも謂ふ可き歟。但し信長自身は餘りに性急にして實際多くの成功を見なかつた。が、太閤此點は出藍も出藍、古今稀なる調略の達人となつた。從つて山崎大勝以後、戰はずして毛利氏を招致したのも「位詰」であれば、島津父子をして兜を脫がせたのも「位詰」。設ひ關白軍の一部分に對してとはいへ、家康をして戰鬪には克ちながら、遂に馬を聚樂の門前に繫ぐの已むを得ざるに至らしめたるも、一半は「位詰」にして、一半は「調略」。小田原北條五世の業を一朝に拔取つたのも亦此「位詰」及「調略」の竝用の結果であつた。それから信長の將帥術は如何と顧みれば、彼の人を用ゐる標準は、只其才器如何に在る。苟も才器の取る可きあれば、廁養走卒論ずる所に非ず。若し又之に反すれば、世臣宿將と雖も寬假せぬ。木下藤吉郎を草履取から拔擢して、方面の重寄を托し、明智十兵衞を浪人から取立てゝ、一州の領主に任ずる傍には、佐命の功臣佐久間左衞門が石山征伐の不成功を認むれば、直ちに之を高野山に追ひこくつたのでも見える。是れ亦太閤の深く感得した處であつた。それで彼が織田家に奉仕した期間を通算すれば、實に三十年。彼が大軍人たり、大政治家たるの大資格は、此三十年間に亘る信長學校の修業から成つたのである。

彼は斯くの如くして、信長から多く軍事的及政治的智識を得た。併ながら彼は之を見習ふ傍には、亦信長の短所を鑑察し來たのである。それで彼は大成功の後或人の問に對し、自家の胸臆を披瀝した。

『古右府は如何にも勇將ではおはした。併し良將とは申されぬ。公は剛の柔に克つことのみを知らせられて、柔の剛を制することを御存じ無い。一度公に敵する者に對しては、何時までもそれを胸に持たれ、根を斷ち、葉を枯さうとせられたから、始終讎の絕間が無く、詰まりは、人に畏れ憚られこそされた、衆に愛し親しまれるといふ事がおはさなかつた。之を贊ふれば、公は虎の如き御大將、それて人々は只噬まれんことを怖れると共に、隙間があらば、仆したいと思ふた氣味がある。明智が謀叛の生じた譯であらう。自分は深く此に鑑みたから、敵する者は退治したが、降伏する者は譜第同樣、心置き無く、其人に接した。其のせいでもある歟、昨日まで敵對した者も、身命を惜まず、忠節を竭くし、新たに謀叛する者も無い。是が早く天下を平治した所以であらう』（言行錄所引）

といつて居る。實學と工夫の結果と思はれる。

斯うして彼の修養は成功の日に至つても、其業を廢てぬ。彼は閑暇ある時は、博識の士・碩學の僧を召して、明君賢相の治績・名帥良將の戰功、扨は治國平天下の政道・攻城野戰の方略などを語らせて、之に耳を傾け、心に會得し、思に契合すると、何時かそれを自家の事業に應用するに務めたのである。（言行錄所引）講學の目的は、畢竟此に外ならぬ。彼は事實上好學の人と謂はねばならぬ。

是に至つて、風と思に上るのは、大隈伯と故伊藤公てある。或人嘗て自分に語つて『大隈伯は自ら善く談じもされるが、又善く人に聽きもされる。併し餘り書を讀まれるといふ事を聞かぬ。故伊藤公に至つては、閑暇ある時には、舶來の新刊書などを善く繙かれた。即ち彼境遇に至つても、尙ほ修養を怠られぬ處、公の方、伯よりも偉かつたやうてある』といつた。自分は答へて『それは畢竟書生の見たるに過ぎぬ。少年時代に在つては、讀書力の多少を問ふ必要あるも、地位ある公と伯との如きに至つては、其聰明を保てば足れり。耳目は孰れも收智の門戸てある。苟も新らしい智識を

收めて、吾有と爲す以上は、其の目から入ると、耳から入るとは、問ふ所に非ずだ。之を譬へれば、耳目は正門と脇門のやうなものである。財寶來つて吾有に歸した以上は、其寳が正門から這入つた歟・乃至は脇門から持込まれた歟を論ずる要がなからう。目に新らしい書物を讀むも、耳に學者の新説を聽くも、修養する所以は即ち一なのだ。公と伯との老ひて益々聰明なる所以は此に在る。耳目に拘はるは、門戸の見、近頃通論とか思はれぬ」といへば、其人も首肯して去つた。太閤の修養は正しく大隈伯のそれと一般であつた。

彼の詩想

太閤は無學であつたといふ處から、文學などに對しては、渾て沒眼・無識の人かと速了し、俗人の俗想を以て『奥山に紅葉ふみわけ啼螢』などと愚にもつかぬ句を捏造して、彼の吐囑だなどと誣ひて來たのは、片腹痛い談である。胸に光風霽月を懸けること彼が如き英雄にして、豈人に超越する詩想なからんや。「細川家記」に據れば『禁中の作法等を菊亭右府晴季公に學び幽齋君に和歌を學び給ふ。先連歌より立入、後には和歌をも詠ぜらる』といふもの、以て證とす可きである。即ち彼は晩學ではあるが、幽齋や紹巴などを師友として、大いに研究したのである。而うして彼は斯道に餘程趣味を有し、それが好であつたと見え、機に觸れ、折に會しては、自家の所懷を詠出して居る。今其一斑を此に紹介しやう。

紀州へ發向のをり、和歌浦玉津島にて、

打出てゝ玉津島より眺むれば緑たちそふ布引の松。

當時古溪和尙は之に感じて、七絶一首を賦した。それが傳播して、五岳の名僧等爭うて之に和した云。（秀吉事記）

それから是は天正十四年二月廿八日の事であつた。禁苑の櫻花今を盛りと咲出でたと承り、彼は不公式に參内して、内拜觀と出掛けた。するとそれが主上の叡聞に達し、御寵眷厚き御事とて、『へだちよの色香も殘る花盛り散らで雲居の春やへぬべき』との御製を、

近侍の勸修寺大納言をして、彼に賜つた。彼は之を忝なみ。

忍びつゝ霞と倶に眺めしも見はれけりな花の木のもと。

を詠出した。其人の面目が躍如として見える。（御湯殿上日記）

又天正十五年六月、彼は九州を征定して、凱旋の途次、數日筑前の筥崎に駐陣した。此處は有名なる千代の松原て、風景絶佳の地てある。一日彼は松原を逍遙し、利休を召し、松が枝に自在を懸けて、茶を立てさせ、打興じた事があつた。其折の詠てあると思はれる。

凉しやとこの木のもとに立寄れば波の音そふ松風ぞ吹く。

天籟の聲、茶鐺の響、收めて一首の中に在る。

同じ滯陣のをり

唐も斯くやは凉し西の海の波路吹きくる風に問はゞや。

一誦すれば、思も遠く、意も遙に、凉風腋下に生ぜずや。（豐前覺書其他參看）

又天正十八年の春、小田原征伐の際、關東下向の途すがら、富士の高嶺を打仰ぎ、

都にて聞きしはことの數ならて雲居に高き富士のねの雪。

と詠じ、歸途田子の浦を過ぎ、再たび富岳に對すれば

名にしおふ田子の浦波たちかへり復も來て看ん富士の白雪。

と口吟んだ。三國一の英雄を以て、三國一の不二を詠ず。其感一層深きを覺ゆ。而うして一たび淸見ヶ關に差掛かれば、

淸見潟花の春こし歸るさは波の關守る紅葉をぞ見る。

風流千古と謂ふ可しだ。（豐公歌集所引）

又文祿三年の春、芳野の花看を催された時、關屋の花の木のもとにて、

芳野山誰とむるとは無けども、今宵も花の陰に宿らん。

思を峯の白雲に寄せては、遲々たる春日、尙ほ其の歸

ぞを忘れ、一夜を花下に托せんとせり。（甫庵太閤記）

又秋月に對すれば、

憂き事も夜はに忘るゝ此比の月に嵐の雲拂ふ空。

と其托興を歌ひ出た。（自筆日記）

彼や天性有情の人、其情緒亦風詠に托して、時に發露せざるを得ぬ。何れの折にか、

寄夢戀

思ひ寢の心や君にかよふらん今宵相見る手枕の夢。

一時の題詠といふと雖も、彼の意必らず屬する所があつたらう。其人は誰ぞ、アヲ心憎や。（豊公歌集所引）

彼が吐囑の一斑は斯くの通りである。其詠は朗々誦す可しだ。顧ふに彼は前半生を辛苦・艱難・風塵・世波に埋め且つ漂はせたる人、一卷古人の歌集すら看ることを得なかつたてあらう。それにしては晩學を以て此に至る、亦彼の彼たる所以てある。但だ憾む所は、彼をして壯年に餘裕あらしめ、平安朝以上の歌風を知らせたならば、彼が風詠の技倆は、其人胸中の磊塊と相待つて、一層高く且つ遠く、萬丈の氣焔を揚け、鎌倉の右大臣實朝をも凌駕するものがあつたに違ひない。が、惜い事には晩學の上に、三鳥三木の傳授などを墨守した冷泉家一流の歌人幽齋等の爲に、八代集的桎梏を受け、歌は左樣よむ可きものと誤了し去られて仕舞つたから、此に擧げた以外の作には、月並の窠臼に墜ちたのも多い。併しそれは數百年來因襲せる痼疾の結果てあるから、幽齋必らずしも尤む可きに非ず。太閤亦疚む可きに非ず。只備はらんことを英雄に求むる、贔負の慾目から然かいふのみ。

從つて彼の眞面目は、寧ろ彼が歌格・歌語に拘はらず、思ふ存分・在りの儘に切つて放した處に飛動する例へば前にも擧げた通り、古豪傑の作を添削して、

人は皆さし出づるこそ好かりけれ戰の時も魁をして。

の如き、其一てある。又或時彼は用兵の道を概言して、

武邊をば今日せず明日と思ひなば人におくれて恥の鼻あき。

亦其一てある。（備前老人物語所載）而うして是れ豈用兵の道のみな

らんや。人世の事を處する、皆斯くの如けんのみ。
廣い場合に於て、俳句が歌よりもより善く國人の性情を流露するが如く、太閤も亦連歌に於て、よく多く彼の詩想を發揮したらしい。此方に在つても、可なり多くの遺吟がある。又種々の佳話をも傳へた。彼が自筆日記の中に『我等はるの發句にて、百いんいたさせ、是も京へつかはすべし』と端書して、扨其發句として、

春

日の本は花にまばゆし今朝の春。

夏

螢火も風の吹たつる光哉。

秋

かゝるべき雲なき御代の秋の月。

冬

寒さをも重ねし衣に知られけり。

など見える其一班である。

彼が風詠に志した事斯くの通りである。從つて彼は相應に「古今」や「新古今」等の歌集をも讀み、其中の氣に入つた歌は諳じて居たものと見える。斯くいふには證據がある。例へば前に彼が工夫といふ處でも一寸言つて置いたが、或時彼は推敲した上、

月看れば唐人の心さへ空に知らるゝ秋の夜は哉。

と詠出して居る。(自筆日記) 彼の作中佳作の一てある。が、此作のドン底には、「新古今」中の名歌『遙なる唐までも行くものは秋の寢覺めの心なりけり』がチャーンと陣取つて居る。即ち彼は此歌から著想した事が知れるそれにしても「新古今」の集歌數千首中から、是等の名歌を見出だして、牢記して居る處、彼が詩想の尋常で無かつたのをも觀る可きである。

尙ほ彼が歌學上の智識に就いては、感稱するに堪へた一佳話がある。彼が名護屋に在陣の時であつた。一日彼は諸營を巡檢して、馬を進める中に、風と目に注まつたのは、小さい陣屋の門上に掛つた額てある。拙なからぬ筆蹟にて「朧月夜」の三字を題した。彼は馬を駐めて、暫く凝視して居たが、莞爾と打笑み『主人出い! 何者ぞ』と大喝した。聲に應じて『野間藤六

に候ふ」と出てゝ馬前に畏まる。太閤頗るの氣嫌にて『オー藤六、敷物が無い歟。不便であらう。今に取らせるぞ』と言棄てゝ。再たび手綱を掻繰りながら、他の營々へと向はれたが、乃て本營に入られた後、多くの御座疊に白米まで添へて下賜された。近侍の士共は未だ其意を解し得ぬ。『殿下は徒の御通りがけに、如何にして藤六が陣屋に敷物の無いのを御感知あらせられたのであらう」と。評し合つた結果、進んで之を彼に問うた。すると彼は得意の體。『知らぬ歟、古歌に「照りもせず曇りもはてぬ春の夜は朧月夜にしくものぞなき」といふ名吟がある。藤六奴敷物の無いのに困じて、早速の謎。彼中々面白い奴ぢや。それて其謎を解いて遣はした」と一笑した。無學は太閤に在らずして、寧ろ多くの豪傑原に在る。彼は何して隅には置けぬ。（盛正記、備前老人物語參酌）

彼の詩想や斯くの通りてあるから、獨り野間藤六のみならず、斯道に心得ある者に逢へば、大いにそれを推奬した。彼が九州征伐中、進んで薩州の國境に入り太平寺に陣した時、深水宗方といふ歌人が伺候し、旨に應じて一首を詠進したのが、頗る氣に入り、「さらば連歌をしやう。發句を一つ」と求められた。宗方畏こまり。

夏山の梢や下枝岸の松

と遣れば、『我名の松を持込んだのは、當意即妙ぢや。さらば脇句をつけやう』とて、

雲間もり來る月の涼しさ

と即吟した。（歴代參考）因みにいふが、「松」とは斯道の上に於ける彼の稚號て、今に遺存する彼の短冊には多く什下に「松」の字が署してある。

最後に尙ほ一言せねばならぬのは、彼の美くしい人世觀てある。それが亦三十一文字を假り、機に觸れては托出して居る。それは彼が童坊某の過失を恕するとて、

世の中は今日ばかりこそ悲しけれ昨日は過ぎつ明日は知られず

にても、早く其一端を示したが、又其自筆日記を看れ

ば、

如何にして慰むものぞ浮世をも背かで過ぐす人に問はゞや。

と書きつけた。如何にも彼の直情であつたらう。又何れの時であつた歟。

露と散り雫と消ゆる世の中に何と殘れる心なるらん。

と詠じて居る。八條宮の之に題して『世中のはかなき事をきこしめして、佛のみちに、さてくらからぬ御心ありしにや』と詞書遊ばしたのも、實にさる事と思はれる。豐公歌集所引

彼は豫め辭世の歌を賦して曰く、

露と置き露と消えぬる我身哉浪花の事も夢の又夢。

然も是は薨去の際でない。伏見の大城落成し、天下の侯伯桃山に伺候して、祝詞を申述べた時であつた。即ち是れ昌盛繁榮の日、早く既に此言を爲した。而うして慶長三年八月十七日、彼臨終の際に至り、孝藏主に命じて、其稿を取來らせ、更に之を自書し了り、筆を投じて、溘焉として瞑目し去つた。野史及豐公歌集所引參酌 吁英雄頭を回らせば即ち神仙。彼一代の大事業、全く此一首に盡きた。人世の事畢竟斯くの如きのみ。讀み去つて覺えず一嘆喟を發する。是れ豈人の上のみならんやだ。

彼の趣味 彼と茶儀

國史あつて以來、太閤ほど多趣味な人は無い。破壞を謂へば、大破壞を好み、戰鬪にも趣味を有つたらしいが、創設を論ずれば、亦大創設を好み、世界の統一まで志した。女は固より大の好き。文學の一分にも趣味を有すれば、美術・技藝にも面白さを感じた。其日常の生活上に看れば、茶儀は最も彼の嗜好して、終身措かない道樂の一つであつた。

全體茶の支那傳來たるは、申すまでも無けれども、茶讌に一種の式法を加へ、所謂茶儀・茶式を設けたのは、吾國の發明で、起元を問へば、東山以來である。而うして之を群雄駕御上の政界に用ゐ、大いに一世の好尚を惹起したのは、織田信長からである。本阿彌光

悦は嘗て之を論じて、

「茶道具の値段高値になり候事は、信長公知行代りに遣はされし故に、自然と高く相成候。例へば千石の御加増に茶具一品にて千兩の品を遣はさるゝ如き、人聞はよく候ふて、御加増代りには、拜領の人餘程の損なれども、御尤なる御事なり。斯樣の事には、殊に恐ろしき工夫のある大將なり」

と謂つたのは、評し得て妙である。蓋し惟ふに、茶儀政略には三つの得がある。第一には、茶儀を行ふには行ふ者に一定の格式を與へ、無格式の者には之を許さぬのである。之を當時の語にて「茶湯政道」と稱したらしい。それて茶儀を行ふ事を允さるれば、其者は非常の光榮とする。且つ通例の場合には、主と膝を交へて閑談するなどは、當時の社會には容易に出來可からざる事てあるのに、一たび御茶に召さるれば、親しく主と歡語する事も出來る。其面目は此上も無い。故に是を用ゐて豪傑の心を收攬するの得がある。第二には如何なる英雄ても、有する邦土には限りがある。部下への論功行賞に當り、一々土地を與へんとすれば、所詮遣りきれぬ。そこて斯道を奬勵すれば、光悦が論じた通り、例へば千石御加增の代りに、茶具一式て取切られる得がある。第三には密議を爲すに、殊更に之を開けば、人目に觸れて、物議の種ともなり、敵國などに漏洩するの端ともなる。之を茶會に托すれば、決して其虞が無い。以上の三得があるので、智謀の信長は盛んに茶儀の政略を行ふたものと見える。

一世の風尙は、何人も其外に出ることを許さない。彼秀吉も信長幕下に在つて、茶儀格式を得た際には、如何にも之を光榮に感じたらしい。それは彼が中國探題の際てある。當時彼が織田信雄・信孝に寄せた披露狀中に左の如く言明した。

『播州に在陣致候所、三木の別所謀叛を企て、筑前迷惑に及候所、重ねて荒木攝州伊丹に是在り、謀叛を仕、上が上へ通路を取切申候と雖、遂に別所が首を刎ね申候次、上樣重く御褒美御感賞に預り、其上但州金山茶の湯道具を湯釜迄取揃へ下され、御茶の

湯御政道是ありと雖、我等をば許しおかせられ、茶の湯仕るべくと仰出され候事、今生後生忘れがたく候。誰やの御人が許す茶の湯させらるべくと存候へば、夜晝涙を浮べ申候」

如何にも難有さが目に睹える。併し彼は其の難有さを感ずる傍には、同時に此茶儀政略の妙用をも亦深く感得したのである。それて彼、一世に雄飛するに及んで先代のお譲りともいふ可き千宗易の利休などを一廚寵用し、更に幾倍信長の茶儀政略に輪をかけた。

兎はいふものゝ、政略のみの爲ては、事ほど左様に熱心になられるものでは無い。夫の淨室に亢坐して、窓前の景趣に對し、一葉の墜落に天地の秋を知り、親朋と相會して、古今の理亂を談じ、一碗の抹茶に人情の濃淡を味ふが如き、此儀に伴ふ一種の禪味は、天性飄逸洒脱なる彼英雄が極めて快とし歡ぶ處。それて彼は自身亦大いに此儀を修め、何時しか早く三昧に入つた。從つて其什器を問へば、天下の名器といふ名器を蒐め、又其數奇屋は如何と顧みれば、大阪に、聚樂に、名護屋に、伏見に到る處に其の好みを極めた。例へば名護屋の本營の如きは、元一時的假設に屬するものであるにも關はらず、本丸及山里の數奇屋に、それ〲濃淡儉奢の趣を肆いまゝにした。多分本丸の數奇屋の方てあつたらう。柱も・閾も黄金の延金づくめ、四邊燦爛として人目を奪うた。是のみて觀れば、如何にも成金式、倶に茶道を論ずるに足らないやうてあるが、それは明韓の使節などに一驚を喫しさせやうとの戯れてあつたらしい。併し是は彼の本色ては無い。甫庵が作事の記に據れば、其の山里の數奇こそ『老松の聳えたりし便りとして一興とせり』とあれば、彼が本趣味は恐らく此方に在つたらう。

さらば彼自身が點茶の手前はと察すれば。斯道に由つて太閤の眷顧を受けた博多の神屋宗湛が日記に、手づから好んで茶を點じ、自分も飲み、人にも振舞はれた様が、仔細に見える。斯かる次第てあるから、征戰の間にも此樂みを棄てぬ。天正十五年に於ける九州征伐の役でも、文祿元年に於ける名護屋在陣の際でも、

茶博士利休を陣中に伴ふて居る。恐らく其他の役中ても左樣てあつたらう。而うして彼の風尚は、前にも述べた通り、九州から凱旋の際、筥崎の風景を賞し、利休に命じて、松間に茶の湯を開かせ、一碗の茶に心神を澄ませて、「松風」の什を賦したのても知れる。

が、尚ほ一つ傳ふ可き佳話がある。それは名護屋在陣中の事てある。定家が筆蹟小倉の色紙を獲られたといふので、色紙披きの茶會を催された。席は多分山里の數奇屋てあつたらう。此に招かれたのは、利休を上客に、外にお相伴三名と聞えた。一切主公創意の御馳走との御觸出し。お負けに夜半過ぎから入來あれとの事てあるから、如何なる御趣向かと訝りながら、何れも前後して伺候した。時は卯月二十一日の夜半、今ならば午前何時といふ所。諸賓次第に從つて坐に就きみるに、席上には短檠の火さへ無く、聞えるものは、茶鐺の湯に松風の響を傳へるのみてある。靜けさ言はん方も無い。時刻は漸く推移る。折柄押明け方の月、山の端に上りしと見え、利休が着坐せる後の障子、ほの／＼と明るくなつた。扨は月のさし出でたと見えますると、利休は手を掛け、障子を颯と押開けば、月影は一面に小座敷に充ちた。見視れば、床の間に色紙の御掛物。扨は今夕御披露なのは是なる歟と、人々にじり寄つて拜觀すれば、後德大寺左大臣の歌にて、

ほとゝぎす啼きつる方を眺むれば只有明の月ぞ殘れる。

の什であつた。一坐は孰れも感に入り、扨も稀代の思召しつき、後代までの御名譽やと、利休を始め、人々心から稱贊する乃て主人の手前にて茶を點ぜられ、之を坐客に振舞はれた。（備前老人物語）玆に見る可し、彼が逸想亦人表に超出せることを。

最後に一言せねばならぬのは、有名なる彼が北野の大茶の湯てある。全體茶儀は、文藝ならば小品と一般四疊半式の小室に於ける小集のものである。彼太閤の豪放磊落なる、豈此一方面の儀式のみに滿足する者ならんや。それて彼は此儀に就いても、更に一新生面を開創した。天正十三年といへば、彼が關白に任ぜられ

た年であるが、九州の島津・關東の北條など尚ほ未だ降伏せず、海道の德川とて僅に約束に就いたといふまでゞあるのに、早く既に御代泰平であるかの如く、茲に天下と樂む可き大仕掛の茶會を企て、當時布告の一方法たる高札を洛の上下・奈良・堺まで建てさせた。其文に、

『來る十月朔日、北野の松原に於て茶の湯を興行せしむ可く候。貴賤に寄らず、貧富に拘はらず、望之面々は來會せしめ、一興を催す可く、美麗を禁じ、儉約を好み、營み申す可く候。秀吉數十年、求置きし諸道具、かざり立ておくべきの條、望次第、見物す可き者也。

八月二日

と大書した。而うして前田德善院玄以と千宗易を茶儀に關する奉行とし、諸侯は勿論・士庶人に至るまで、斯道に志あると聞えた者三百五十餘名へは、それ〳〵案内を出し、銘々秘藏品をも此に持出して、各々茶儀を催すやうにと諭達させ、尚ほ又福原右馬助・蒔田権佐・中江式部大輔・木下大膳亮・宮木右京大夫の五人を事務奉行として、九月中旬から北野に出張させ、數寄屋の建築・四邊の裝置から、參會希望の面々への地割・關割等に任じさせた。それで此會に列せざる者は、人に對して再たび好を言ふ可からずとの勢であつたから聞傳へ申傳へて、我も〳〵と上京し、思ひ〳〵の意匠を凝らして、此處にも彼處にも茶席を設けたので、凡そ北野の四方一里許の間は、皆此大會の境内となつた。

扨も當日關白様御道具として陳列せられたる品々は、

一青楓
一虚堂の墨蹟
一鐘の繪
一にたり
一あらみ茶杓
一七つ臺
一珠德の茶杓
一白天目
一長そろり
一鏑無　別處に無なしの花入と見ゆるもの是ならん
一內赤の盆
一紹鷗の天目
一そろりの花入
一瓢簞
一紹鷗の茄子　別處に茄子の茶入と見ゆるもの是ならん
一尼ケ崎臺

一象牙の茶杓
一かねの蓋置
一紹鴎の水翻
一御釜こあられ
一五徳の蓋置
一せんかう香爐
一備前筒の花入
一志賀
一めんはく（四方盆に居とあり）
一やせかけの天目
一細鏃
一かねの水さし

一ほうろく釜
一芋頭（別處にいもがしらの水さしと見ゆるもの是ならん）
一柄杓立桃尻
一緣桶（別處にゑんをけの水さしと見えるもの是ならん）
一胡桃口の柄杓立
一朝山
一四十石
一新田肩衝
一かめぶたの水翻
一折ための茶杓
一井戸茶碗

等であつた。是等の道具が如何に珍品であつた乎は、後年明使の饗應の際などにも、此内の品目が見え、又太閤の薨去後、遺物として其内から各一品を安藝中納言・毛利宰相などに贈られたのでも知れる。

是を中心として、宗易・宗及・宗久等の茶博士等も競うて自家の珍藏を持出す。それを人々の縱覽に委せられたから、何れも其結構に驚いた。手も無く是れ亦吾國に於ける展覽會の開基である。斯くて關白は自身の指圖にて仕つらはれた數奇屋に於て、來會の月卿・雲客・扨は親信の大々名等は手づから點じた茶を振舞はれた後、小姓十餘名を從へて、各處の茶席に立入り、打寛ろいて其饗應を受けられたから、會衆の歡は言はん方なく、風流一時に海內を靡動した。甫菴當時の光景を狀して、

『此度の數奇を見て、一きは心をみがき、數奇の學を得んと思ふもあり。又價貴き肩衝を諸侯へめしおかれしかば、俄に德人と成て、彌此道に思ひ入侍るはいとめでたう見えけり』

といつた。是から一層茶儀に一代の好尙を萃めたらしい。惟ふに此擧にも例の茶儀政略は加味せられたに相違ない。併し一世に太平の氣象を興させ、獨り樂して樂しまんよりは、衆と樂して樂しまんとする、彼英雄の本色が見える。斯くの如きは他人の味ひ得ざる彼が茶道の一味であつた。（甫菴太閤記參酌）

彼の茶趣味はマア此れくらゐて止めて置かう。序に酒は如何てあつた乎と顧みれど、我等の寡聞にも由る歟、好きとも、嫌ひとも、上戸とも、下戸とも、聞く所が無い。多分大いに飲まなかつたのてもあらう歟。

彼の趣味　彼と能

彼が大いに志を得た後に、又新たに加はつた道樂の一つは即ち能てある。此道樂に就いても、亦茶儀のそれと一般、天下の名人を惹着けた。今春八郎（今春、後世に金春と改む）も來れば、同じく源左衛門も來る。暮松新九郎も來れば、春藤六右衛門も來る。大鼓には大藏平藏・樋口石見・小鼓には觀世又次郎・幸五郎次郎など最も名を得た者共てあつたが、其他の妙伎も數を知らず。前關白太政大臣が名護屋の本營には、是等の能役者共を召し閑暇無聊の折々に、營中能を催して、自分も樂み、人にも樂ませた。是れ亦人心をして倦まざらしめんとの一方略も加はつて居つたらう。（甫菴の太閤記、武功雜記、野史參酌）が、元來多趣味な先生の事てあるから、何時の間にか段々興味が加はり、果ては當時伺候の大夫呉松越後今春八郎を合手に、自ら能を遣り始めた。（同上）思ふに呉松越後とは、上に擧げた暮松新九郎と同一人て、恐らく暮松は呉松の當字、新九郎は任官前の名てあつたらう。而うして何事にかけても器用なる彼太閤は、其技の上達し來るに從つて、舊來の作曲のみに滿足せぬ、其頃名を得た由己法橋に命じて、自分一代の勝事を謠曲に作らせた。其曲名は、

明智討　　柴田討　　北條攻
芳野花見　　高野詣

の五番てあつた。作曲の如何は題名が說明する。其中最後の高野詣には、大政所の幽靈現はれ『あら有難の御弔や』などいふ處もあり。何れも大將の得意ならぬは無い。それて主として之を今春八郎に素習させ、自分も加はつて、且つ〳〵通ずると、早速の先生、文祿三年三月十五日、早速新曲披露の能樂を大阪の殿中に催した。大名・小名から諸家の士大夫にまて拜觀仰付けられるといふ沙汰、自家大奥の簾中へも之を覧せ

たといへば、政所・淀君・松の丸・三條・三の丸・成田の御など、美人花の如く春殿に滿ち／＼たてあらう、其前にての晴れの能、乃公の手並を見よとの事らしい。舞うて明智討に至れば、山崎の佳人といふ處から、光秀の役に吳松太夫を當らせ、追つて／＼追ひまはした定めて滿場アッと動めき渡つたてあらう。爾後明智討といふと、何時も此吳松を相手にしたといふ事てある。（甫菴太閤記及老人雜話參酌）

斯くの如くして、折々申樂を張つては樂んだ。が、終には之を主上の叡覽に入れ、天機を慰め奉らうと思立ち、奏請する所があつたと見え、乃ては宮中御能の御催しとなり、其度每に今春八郎・大藏道喜・吳松越後等の名人等を從へては參內し、多く是等を相手にして、自身得意の新曲などを演じ、屢々陛下の叡感を忝なうした。而うして能役者共に御褒美など下される時には自身も其役者に雜り、一同と倶に恩賜を頂戴し、それを肩に引掛けて罷りさがるなどの可笑みを見せた。或時の如きは、自身、德川家康・前田利家を相手に、三人狂言をして御覽に入れ奉つた。毛利輝元は皷の役。大藏・吳松など囃子を務める。一代の英雄揃の狂言、太閤の器用に、家康の不器用サと、互に相對映して、主上も御腹を抱へさせられたてあらう。（老人雜話）

是等を觀れば、一面からは、慢氣の沙汰・侫侗の所爲とも謂ふ可きやうなれど、それに浮身をやつして居る最中ても、一たび軍國の大事に會へば、能も狂言もあつたものて無い。之を證す可き一話がある。それは名護屋在陣中の事、一日例のお能拜見諸將士の前にて自身井筒を舞はれ『井筒の蔭に隱れけり』といふに至つて、中入をなし、裝束を取更へられる處に、朝鮮の吾軍から糧食の事を申越した。すると太閤は一々聽取り、それは兎せよ角せよと、自らそれ／＼指圖を爲し了り『オー中入が永過ぎた。只此儘ては出られまい。ソレ笛を吹け』と命ぜられたから、笛の手嚠喨と小笛を吹起せば、拍子に乘つて、する／＼と立出てられた（武功雜話）彼の意氣なり、面目なり、躍々として睹るやうてある。箇樣な次第てあるから、少々彼が馬鹿をしやう

が、侫何をしやうが、外間でも敢て批議する者が無かつた。（市菴太閤記參酌）

今其れ太閤と家康とを比觀すれば、太閤は器用にして、家康は不器用。太閤は淬拔けして、家康は土臭い。二人の道樂と趣味からいふも、太閤は絶世の美人を好めば、家康は尻の太つたお爨を喜び、太閤は能樂の遊味を賞すれば、家康は三河萬歳の『ヤンレ目出たや』より理解せぬ。蘇秦・張儀を以て之を評すれば、「蘇君の時、張何ぞ敢て言はんや」だ。張儀が羽を展したのは蘇秦六國の印綬を解いてからである。家康は到底太閤の儔匹では無い。

彼の趣味だけに就いても、尙ほ建築があり、美術があり。それから公生活に入つて、今一層精細に彼の政治・外交・戰略・將帥術等を觀察しやうと思へど、餘りの長談に亘つて、聽者も迷惑、本人も少々草臥れたから、此邊で一先づお仕舞としやう。（完）

日露の國際關係と其經濟關係

夏秋龜一

凡そ一國の國際關係と其經濟關係とは密接相離るべからざるものであつて、經濟上の關係が密接なればなる程其國の政治關係も親密になるもので、經濟的關係が複雜に且つ濃密になれば其間に戰爭などの起らないと云ふことは三尺の童子と雖も之を知つて居る。歐洲中原の風雲が屡々爆發せんと欲して尙未だ容易に爆發せざる所以の如きも要するに相互の經濟的關係が密接錯綜して居るからであると云へるのである。

然らば日本と露西亞との國際的關係並に經濟的關係と云ふものが此原則に適合して居るかと云ふに、殘念ながら全く相反して居ると云ふの外はない。日露の國際的關係は今日は非常の親密を加へて居る。それは茲

に三つの大なる事件を引出してお話すれば、分明てあらうと思ふ。無論是は日露戰爭後の事であるが、日露戰爭後に三つの大なる事件があつた。其大なる事件と云ふのは第一露西亞が米國から提議せる所の攻守同盟を拒絶した事、第二は昨年ノックス氏の提議に係る滿州鐵道を國際鐵道とする――東淸南滿兩鐵道を國際鐵道とするとを日露兩國共同して拒絶したる事、第三は最も最近に起つて今尙繼續して居る所の露米條約の破毀である。此の三つの事件を通觀して見ると、日本と露西亞との關係が如何に密接であるかと云ふことが分るのであるが、今日露の關係を述ぶるに當つて殊更に米國の例を引いて來たのは何かと云ふと、日米の關係日露の關係其の他東洋に於ける米國の近年の活動の模樣を知つて居らるゝ人には成程と首肯かるる事があるだらうと思ふ。此外尙ほ日露の關係を露骨に申せば或は霞ヶ關あたりからお目玉を頂戴せぬとも限らぬから今は茲に申しませぬ。

露西亞が米國の攻守同盟を拒絶した事は、日本に取つては直接關係のない事のやうにも思はれるが、然し是は近來に至つて非常なる影響を及ぼして來たことは明瞭なることてある。世人も記憶して居らるゝ通り、丁度日露戰爭が過ぎてから二年も經たぬ頃、明治四十年に其時の米國陸軍大臣タフト卿が日本を通過して西伯利亞鐵道に依つて聖彼斯堡へ行かれたが、其の時に何か秘計を懷いて居るに違いないと私は窃に觀測して居つた、日本あたりの新聞も矢張り何か臆測を書いたやうてあつたが、其臆測たるや頗る薄弱であつて一向世人の注意を惹かなかつたと記憶して居る、それてタフト卿が聖彼得斯堡を去られてから間もなく、私は後藤男爵の命を奉じて南方露西亞を旅行して居つたが、其時不思議な事實に遇つたと云ふのは、南方露西亞の陸軍士官連中が英語を研究し始めたことてある。陸軍士官の英語研究――どうも不思議な事てあると思ひながら段々聞いて見ると、何ても米國て露西亞の軍人を傭ふ、それて英語さへ分れは本國に居るよりも四倍乃至五倍の高い月給て傭はれて非常に安樂な生活が出來

る、それだから吾々は英語を研究して居るのだといふて居る。併し是も可笑な話である、何故米國が露西亞の軍人を傭ふ必要があるか、へ、ア是は屹度タフト先生が何か露西亞に對して旨い事を言つたに相違ないと思つて私が段々研究して見ると、成程露西亞に向つては非常に有利なる攻守同盟を提言したのである。所が露西亞は斷然之を拒絕した、其の拒絕した理由は今此處に述ぶる場合でもなく又頗る冗長に流れるから略するが勿論其時に於てはまだ日露戰爭後二年も經ないのであるから、露西亞は日本と提摯すると云ふ意思も無かつたであらうし、又日露の關係と云ふものは雨になるか風になるか分らない時代であつたのであるから、此米國の攻守同盟を露西亞が拒絕したことが日露同盟の前提であるとは申されませぬけれども兎も角之を拒絕した以來と云ふものは、東洋に於ける米國日本露西亞の行動か頗る變態を來たしたと言つても宜しからうと思ふ。若し此際露西亞が日本に對する復讎心に驅けられて、オイそれと言つて米國の攻守同盟を贊成したとすれば如何であらう。必ずや今日の東洋の有樣と云ふものは非常なる變態を來たしたに相違ない。併しながら幸にして露西亞が拒絕したものであるからして東洋は何等の變化もなくして現今の狀態に在るのである。

第二はノックス氏の南滿鐵道に東清鐵道を國際鐵道とすることであるが、是は却て日露兩國をして少くとも滿洲に於ては互に提摯して歩調を一にして行かなければならぬと云ふ信念を抱かせたに過ぎなかつた。

第三の露米通商條約の破毀、是も無論其の原因は露國の對內政策にあつて日本とは直接の關係はないけれども前に述べた通り日露の關係日米の關係を熟知せらるゝ人にとつては興味の多い事と思ふから何故に此葛藤を生じたか其の原因に付て一言しておきたいと思ふ。露西亞は日露戰爭後國會を開設致しましたが、其國會開設以來澤山の黨派が出來た、先づ其の黨派を大別すれば右黨と中央黨と左黨である。此中右黨と中央黨とは日本で云へば政友會見た樣なもので概して政府黨

と言つても宜ろしい、所が此政府黨が昨年であつたかポーランド自治問題に關して時の宰相ストレーキンと非常に衝突をした、それからと云ふものは中央黨の中堅とも稱すべきジユーカス黨は露西亞政府の御味方をしないやうになつた、斯うなると露西亞政府も大に考へざるを得ない、そこでどうしても議會で多數を得るのには先づ中央黨と左黨の向ふを張る所の何にか有力なる黨派を拵へなければならぬと云ふので、昨年まではまだ微々たりし國民黨を扶けて、本年の總選擧に於ては國民黨をして議會に大多數を得せしめんと苦心して今尚大に苦心しつゝあるが、此の國民黨の綱領とする所は一言にして言へば露西亞はスラブ人の露西亞である。それであるからスラブ人以外の人種は露西亞に於てはスラブ人と同等の權利を得ることが出來ぬと云ふのである。詳言すれば露西亞に於てはスラブ人を除く所の數多の人種 ——即ちポーランド人、アルメニヤ人、フイニヤ人、猶太人などはスラブ人と同等の權利を得ることは出來ぬと云ふのであるが、其中で最も國民黨の目差して敵とする所のものは猶太人である。それが爲めに昨年の春頃から非常に猶太人を壓迫し始めて、住居地を制限するとか其他各種の公權私權を制限して壓迫を加へた。さうして又極東地方竝に西伯利亞地方からもドシ／＼猶太人を放逐せしめたのである、所が露西亞にも露西亞の臣民でなくして米國の臣民たる所の猶太人が大分居る、然るに之に向つて猶太人と同樣の壓迫を加へた、そこで米國は之に對して非常なる抗議を申込んで、米露條約には米國の臣民たる猶太人は他の米國人同樣に取扱はなければならぬと云ふとが書いてあるのに、米國人たる猶太人に斯樣なる壓制を加へるは條約違反であると云ふので抗議を申込んだ、其抗議の最中慥か本年の初めと思ふが、二十何人かの米國人民たる猶太人が聖彼得斯堡にやつて來た所が、露西亞政府は之に向つて二十四時間内に斷然退去せよと云ふ嚴命を下して、二十餘人の米國人民たる猶太人を放逐した。乃て米國政府は大に怒つて、宜しい、お前の方で條約を蹂躙するならば此方でも通商條約は

認めない、破毀して仕舞ふと脅喝した、所が露西亞政府はヤンキーの脅喝に恐れるものではない、宜しい、あなたが破毀するならば此方も破毀してやると云ふことになつて、今既に露西亞と米國の間には通商條約はなくなつて居る。併ながら此形勢が今後如何に成行くか未だ明言するの時機に達せぬけれども、或る確かなる筋より聞く所に依れば露西亞に於ては米國から頭を下げて來ない以上は斷じて讓歩しないと云つて居るさうである、其の毅然たる態度は所謂コーコクトー一流の特色を發揮して居つて大に吾人をして快哉を叫ばしめるので、某國の外交の如く米搗き蜂蚱主義とは雲泥の差があると思ふ。

斯の如く露米の關係が惡くなるに從つて日露の關係は益々親密を加へて來た、此日露の關係が益々親密であると云ふことは、私の申すまでもなく東洋の平和は勿論世界の平和にも與つて大に關係があるからして、吾人は益々日露の關係を親密ならしめるやうに盡力しなければならぬ、是が吾人の努むべき重大の任務であると信ずる。

扨て日露の國際的關係は益々親密であるが、是と密接して相離るべからざる所の日露の貿易は如何であるかと云ふと、之は實に情ない狀態にあるのである。戰後浦鹽に於ては五千人ばかりの日本人が居たが、自由港が閉鎖されて以來浦鹽竝に極東露西亞に於ける日露貿易は微々として振はず、當時浦鹽に在りし五千の日本人は今や三千に足らぬ有樣である。斯の如く日露の貿易が不振を極むる所以は何處にあるかと云ふと、それには種々の原因もあるが先づ大別すれば三つに別けることが出來る。第一露西亞の輸入税が頗る高率であること、即ち殆ど禁止的重税を課せらるゝこと。第二は露西亞は農産國であるのに日本は尙農産國の範圍を脫せず其の工業は頗る幼稚であるから彼我交換すべき物資が少ないと云ふこと、第三は互に相知らぬと云ふことである。

それで第一の原因に付いて攻究するのに、露西亞が輸入税に對して高率を課するのは、是露西亞が數百年

來執つて居る極端なる保護政策であるから今俄かに之を如何ともすべからずである、併乍ら斯の如き重税を課せられながらも外國の製品は年々數億萬圓露西亞に入つて居るのである。日本の品物は行なけいのに外國の品物は重税を課せられつゝも尙入つて行くのは何所の點にあるかと云ふと、即ち第二として擧げた原因が日本にはあつて外國には無いからである。然らば日本の工業が幼稚であるから日露貿易は絶望であるかと云ふと又そうではない、現今露西亞の經濟狀態及日本の經濟狀態に於て、十分完全には行かぬけれども尙頗る日露貿易を發達せしめる所の手段方法無きにしも非ずである。其の手段方法は無きにしも非ずであるけれども、詰り互に相知らないと云ふ第三に擧げた所の缺點に依て遂に日露の貿易が振はないのである。それ故に互に相知ると云ふことが必要になつて來るが、扨て如何にせば互に相知るやうになるかと云ふに、去年後藤男爵が聖彼得斯堡に參られた際に時の大藏大臣コーコフトと日露貿易の事をお話しになつたことがある。其の折にコーコフトが言ふのに露西亞人でも日本語を知つて居る者が少ない、日本語の研究は困難である、又日本人も露西亞語を知つて居る者は少ない、詰り互に相知らないのである、そこで互に相識る一法としては互に語學の研究をするやうにしたら宜からう、互に啞では何にもならない、即ち互に語學を研究する間に親密なる或るものの交換も出來るであらうからして、若し尊公にして露西亞の方へ日本人を派遣せられるならば相當の便宜を圖るであらうといはれたと記憶して居る。詰り語學を研究して互に相識ることをしなくてはならぬと云ふので、是は如何にも尤もな次第である、コーコフト藏相の言は平凡であるが眞理である、併し語學の研究と云ふものは唯第一着歩に過ぎないのであつて、第一着歩を如何に研究しても第一着歩は第一着歩である、第一着歩をして彼岸に到達せしめるには尙ほ一つの必要なる要旨がある。其必要なる要旨とは何かと云ふと一つの魂である。私は今此魂のことに付て一言しやう。

近來我國の經濟界を觀るに、物價は益々騰貴して輸入超過は愈々大となり、正貨は年々海外に利子として五千萬圓以上も流出して居る、本年の如きも輸入は益々超過して上半季に於て最早一億二千餘萬圓の輸入超過である、人口は增加する、物價は騰貴する、細民は益々困ると云ふ有樣であつて此勢にて進まんか日本帝國は數年の後に非常なる危急存亡に陷らぬとも限らぬ、併ながら朝野唯駭然として爲す所を知らず、在朝者は民間の者は如何にも意氣地がないと罵つて居るし、民間の者は政府が無能だからこんなことに成つたのだと云ふので、蟬噪蛙鳴互に喧々囂々として罪を他人に嫁して居るのみて、如何にせば之を救濟し得るかと云ふ方法は一向に講じない、然らば其方法は何かと云ふと一言にして言へば上下心を一にして海外に發展すると云ふより外はないのである。

前にも述べた通り日露の貿易は如何にも困難であるけれども相當なる方法を實行するに付ては一つの精神が要るといつた。其の精神は何かと申すと、即ち露西亞て一番流行して居る所のニチウオー主義である。ニチウオー主義とは「何でもない」と云ふ事である。失敗をしやうがどんな事があらうが「何でもない」と云ふことである。此「何でもない主義」さへ十分發揮して行つたならば天下の事何ぞ恐るゝに足らんやと思ふ。日露貿易の發展何ぞ憂ふるに足らんと申せば大變大言壯語するやうであるが、實例を擧げると日本あたりでは堅忍不拔とか忍耐とか云ふやうなことは論語や孟子に記載してあつて、聖人君子にあらざれば實行することが出來ぬやうに思つて居る。所が露西亞では普通一般の人民等が平氣の平左で之を實行して居る。是は何故であるかと云ふとニチウオー主義の結果である、露西亞ては二十年三十年はおろか、一生涯も門番若しくは巡査をして居ることは珍らしくはないが日本では異例と思はれて居る、又商業に付いて一例を擧げて見ると先年日本の商人が來て哈爾賓の方へ一つセメントを賣込みたいといつて來た、乃て私はセメントを賣つた經驗も無く又暇もないから、之を露西亞人がやつて居る哈

爾賓で屈指のチユーリン商會へ紹介致した、所がチユーリン商會では快く引受けて初めは一樽十樽百樽と僅かづゝ始めて居つたが段々大分見込が立つて來た、それで其時私が其商人に向つて忠告して言ふのには、哈爾賓と云ふ處は海外市場の影響を受けない處であるから、セメントの値段を濫りに上下されては困ると度々忠告をしたそれで昨年は兎に角無事であつた、今年に至つてチユーリン商會の盡力が漸次其の功を奏して註文が大分增加して來た、すると日本のセメント會社に於ては日本に於てはどうもセメントの賣行が盛であるから一樽に付て五十錢程値上して貰ひたいと言つて來た、註文が多いのに却つて値段が高くなつて來ると云ふのは不思議な現象であるのみならず、セメント一樽に付いて四五十錢の値上は非常な値上である、其上又一方に於ては日本のセメントに品質に於て劣らない所のセメントがあつて、丁度日本の商人の言ふ値段よりも四五十錢位の安價でチユーリン商會へ勸誘に來て、どうだ澤山品物がある値段が安い、品物が上等であるから買ないかと云ふので一方は値段を上げて居るのを一方は安い値段で之を勸誘して居るのである、それであるから私は自分の仕事ではないけれども、兎に角日本の品物が一品でも餘計に賣れるやうにしたいと云ふ志望であり、日本人は一人でも餘計に外國で發展するやうにしたいと云ふのが私の希望であるから、まあおせつかいながらも其の中に入つて――日本のセメント會社とチユーリン商會の間に入つて非常に盡力した、と云ふのはどうもセメント會社の行動は不信極つて居る、昨年あれだけ事情を話して斷じて値段を上げるなと忠告して置いのにそれを肯かない、それに本年此地盤を取られて仕舞ふと來年は最早や駄目であるから、僅かばかりの利は見ないで斷然値上を見合せろと云つて電報若しくは書面で再三交渉したけれども、日本の商人は眼前の利益に目が眩んでどうしても肯かないのであつた。乃て私も已むを得ず逐一之をチユーリン商會に話をして、斯うなつた以上はチユーリン商會の番頭と雖も大に怒つて日本セメントとは取引せぬと云ふ

てあらうと思つた所が、豈圖らんやニチウォーで、今年は損をしても來年を樂みに取引をしませうと云ふので矢張註文をした是が日本商人と露西亞の商人との區別のある所と思ふ。日本の商人は少しばかりの利益があると直ぐ其れに目が眩んで仕舞ふが露西亞の商人は今年は損しても明年があると云ふので氣長く待つて居る。是が日本貿易の發展しない一大原因であるが、是のニチウォー主義が露西亞をして今日の大を成さしめた原因であつて、ナポレオン一世も此ニチウォー主義には非常に恐れを爲したと云ふことである。

其れからもう一つも同じく私の實驗であるが、慥か二年前であつたが、撫順炭の販路を哈爾賓方面に開けと云ふ命令を滿鐵から受けた、其時私の考へるのに、どうも是は露西亞人相手である、露西亞人を相手にするのにはニチウォーの本場へ行かなくてはならぬ、ニチウォーの本場へ行つてニチウォーに勝たなければいけないと決心を固ためた、けれども哈爾賓へ行つて見ると石炭の使用と云ふものは極く微々たるもので、僅か一製粉會社が之れを使つて居ると云ふ有樣てある、乃ち石炭を用ゐるに足る所の製粉會社とか電燈會社に交渉したが何時も門前拂ひを喰ふ、正面からは迚もいけなぬから裏面から行く、或は機關手に賄賂をやる、或は火夫に賄賂を使ふといふやうに漸々とニチウォー主義て仕事を始めた、又或時は露西亞人や支那人は石炭の焚方を知らないからと云ふので、南滿から火夫を傭つて來て石炭の焚方を敎へたのである。所が不幸にも日本の火夫が石炭を焚いて居た時に機關が破裂して、日本の火夫一名支那の火夫二名即死し、日本の火夫支那の火夫露西亞人の數名は熱湯を被つて重傷を負つた、是れが爲めに多くの人々は石炭を以て敵と思つて居る所へ、新商人は石炭は頗る危險であると云ふので新聞などに書き立て、大に吹聽したが、私は此處がニチウォー主義の發揮所であると思つて大に辛抱をして、漸く其製粉會社にも釜を修繕させて石炭を使はせるやうにしたりして、漸く三年を經てどうやら撫順炭の販路が哈爾賓方面に於て固まり近來に於ては遠くブ

ラゴベシチエンスク或は齊々哈爾地方まで行くやうになつた、それ故に露西亞人を相手に貿易をするにはどうしても此ニチウオー主義を發揮して行かなければならぬ、此ニチウオー主義を十分發揮さへすれば日露貿易何んの憂ふるところかあらんである。

幸にも我國に於ては日露協會などいふものが出來、是から十分日露の親交並に日露貿易の發展に付いて盡力すると云ふ話であつて是は私の双手を擧げて贊成致す所であるが詰り此の日露協會の仕事と云ふものは日露兩國人間に立つてさうして日露貿易の中心となり指導者となり露西亞人が此方へ來ればそれに對して相當の便宜を與へる。又日本人が彼方に於て仕事をせんと欲すれば相當の便宜を圖ると云ふ外に、尙十分此ニチウオー主義を鼓吹して貰ひたいと思ふ。若し此ニチウオー主義「何でもない主義」を鼓吹して十分に浸込まして仕事をするやうになれば日露の親交は益々鞏固になり。日露の貿易は益々發展するとは斷じて疑を容れぬ所である。斯の如くして日露協會が一つ成功した實例を示すと、今度は或は日佛協會も出來るであらうし、或は日英協會、日伊協會、日獨協會等も段々日露協會の例に倣らつて、大に海外に向つて發展するの策を講じて、日本人が愈々益々海外に向つて發展するやうになるのは疑もない事であらうと思ふ。

ニユウ・ジヤアナリズム

逸名氏

五月號の本誌には黑岩淚香氏の『新聞紙論』が載り、六月號のにはまた無名氏の『英米新聞界の趨勢』といふ長篇の文字が揭げられてゐたのは、未だ讀者の記憶に新しい事であらう。流石に長い間斯界の經歷を有つて

なる人達だけに、二氏の意見と紹介と兩つながら他を益するものが鮮くはなかつた。で、自分もその顰みにならつて、新新聞業(ニユウ・ジヤアナリズム)について少しく紹介を試みることにした。自分のこれに就いての智識は大部分彼方の書物から來てゐるので、これが意見についても成るべく紹介を主にしたが、この世界を通じての流行たるニユウ・ジヤアナリズムに對する自分の批判も加はつてゐるのは言ふまでもない。また曩に無名氏も言つたやうに新聞業の本場は何といつても米國にあるので、紹介もそれについての意見もすべては米紙をもととしてゐる事を豫め斷つておく。

▲新聞業の發達

新聞雜誌(ジヤアナリズム)は實業として時代の文化を進める點において他と類を異にしてゐるのみならず、其の進歩においてもずばぬけて他に傑れてゐる。一八五〇年以來(このかた)他(ほか)の實業は約十五倍しか發達してゐないのに、新聞雜誌業は殆ど三十倍にもならうとしてゐる。その數はといふと、米國がざつと二萬一千、獨逸と英國とが各八千づつ、佛蘭西が五千、日本が二千、伊太利が一千五百、墺匈國、西班牙、露西亞、がこれに次がうといふ順序だ。何といつても米國が第一位で、その資本總額が二三九・五〇五・九四九弗、總計の發行高が一三九・九三九・二二九、一年の發行高總計が一〇・三二五・一四三・一八八、消費紙が二・七三〇・〇〇〇噸にも及ぶといふ事だ。そのうち日刊新聞の數が二・四五二で、その三分の一は朝刊、三分の二は夕刊だ。週刊(ウヰクリ)の數が一五・〇四六、月刊(モンスリ)が二・五〇〇隔週刊(バイウヰクリ)、半週刊(セミウヰクリ)、毎季(クヲタリ)はいづれもたいした事はない。この刊行物は最近二十五年間に倍に殖えてこれだけになつたので、現在では月刊物が一番に殖え、次ぎは週刊で、日刊物の殖え方が最も遲いやうだ。で、この米國全體の二萬一千餘といふ刊行物自身から生み出す收入が一四五・五一七・五九一弗その廣告から入つて來る收入が一一一・二九八・六九一弗に達する。

恁ういふ風に米國は勿論、他の邦々でも新聞雜誌が段々殖えてゆく。それには種々な原因もあらうが、そ

のうち何處の國にも共通な主だつたものが六つばかりある。それは、鐵道郵便電報電話の遞信事業が發達し、その料金が廉くなつたので、新聞材料が極手輕に集められ、出來上つた紙が迅速に配達出來るのが一、Lino-type machine やその他の印刷機械が發明使用せられて、時間と勞力とが兩つながら節約出來るが二、寫眞版の技術が進歩して、從來の木版銅鐵版に比べて、插繪が自由に低廉になつたのが三、用紙の製造が容易になつたので、從つて價値が廉くなつたのが四、教育が普及して讀者が多くなつたのが五、廣告の素晴しい發達が六、——といふやうな順序だ。

新聞の多くは何處の國でも都市で發行せられてゐる。新聞の發展が都市の發達に負ふところが少くないと共に、都市の發達もまた新聞に負ふところが多い。一つの都市で發行せられてゐる新聞は、その都市自身のみならず、都市を中心として附近の地方に多くの讀者を有つてゐる。印刷機械と電車汽車の交通運輸機關との進歩したお蔭で、二百哩四方までは其の日の新聞が朝の十時までに配達する事が出來るので、その配達區域は新聞の有つてゐる勢力範圍である如く、ある意味においてまたその都市の勢力範圍と見ても差支ない。もし旅人が米國を東から西へ向けて旅行したなら、途々種々な新聞の勢力範圍を通過するに相違ない。紐育を發つて暫くは、タイムス・サン、ヘラルドといつたやうな同市の新聞を見るが、それが減つて來ると市俄古の新聞がそろそろ顏を出し初める。市俄古の次ぎにはサルト・レエキ、最後にはサン・フランシスコのといつたやうな順序に新聞が眼に觸れる。これがやがて新聞の勢力範圍なのだ。日本の新聞の勢力は東京と大阪とに二大別せられてゐるが、それでも縱に全國を旅行してみたら、重立つた各都市の新聞に、狹いながらにそれぞれ極つた勢力範圍があるのに氣がつくだらう。

近世の都市は國家の生活、産業の中心である。都市で發行せられる新聞はその生活に發表を與へる機關で、輿論はその力に依つて形づくることが出來る。どこの國でも都市をめぐる地方の住民は、その生活の樣式に

すべて都市を眞似るもので、渠等は新聞を通じて其の都市と呼吸を通はしてゐる。だから都市の新聞は啻に都市自身のみならず、その周圍の——交通運輸機關によつて新聞の配達せられる地方の全讀者を代表してゐることになる。

▲ニユウ・ジヤアナリズム

米國の新聞界は、今では悉皆(すつかり)ニユウ・ジヤアナリズムに支配せられてゐる。ニユウ・ジヤアナリズムといふのは、所謂黄色新聞のことで、黄色新聞はいふまでもなく營業本位の、導くよりは從へて、何よりも俗受が第一となつてゐる。近世ジヤアナリズムの元祖ペンネツトが、ある時嚴(しか)つべらしく新聞の天職を論ずる青年に向つて『なに、讀者を數へるのだつて、——そんな事は新聞の天職ではないよ。もしか新聞に天職といふものがあるとしたら、それは讀者を吃驚させるか嬉しがらせるかの此の二つさ。』と言つたといふが、ニユウ・ジヤアナリズムの特徴はこの一言で盡きてゐる。一體現代人といふのが、何かしら物が讀みたい讀みたいて、新らしいものを讀んで興味を感じ、一寸感情を唆られたら後は如何ならうと一向構はないといつたやうな輩なのだから、欲するものは與へよて、從つて恁うしたジヤアナリズムが時めくやうになつたのだ。

この流行は現代の新聞界を通じて、押しなべての事實であるが、國民にはそれぞれの特質と好みとがあるから、ニユウ・ジヤアナリズムが幾ら勢力を逞うするといつても、國に依つて、地方に依つて其の色付けが異つてゐるのは別に言ふを俟たない事だ。例へば新聞の內容材料から言つてみても、英國のは政治論説、政治記事。佛蘭西のは政治、美術、劇、雜話(ゴシツプ)、獨逸のは內政、科學、藝術、米國のは新事實、遊戯、政治といふ順序で、國々によつてそれぞれ特徴が異つてゐるが、何といつてもニユウ・ジヤアナリズムの最も極端に實行せられてゐるのは米國で、米國でも聖路易(セントルイス)が一番その調子に富んでゐるといはれてゐる。

▲黄色新聞の特徴

黄色新聞の特徴は材料を創造(クリエエト)するにある。渠等の眼

と耳と神經とは常に緊張して、絶えず新らしい出來事を發見しようとつとめてゐる。若し發見出來なければ自分で發明しようとする。渠等は詩人のやうに豐富な想像と敏捷い筆とをもつていつ何時でも讀者の氣を牽きさうな事を書きあげることが出來るのだ。渠等はどんな場合にも忠實な、そして臆病な事實の報道者となるだけに甘んずる者ではない。事實の背には必ず渠等の感情が縫ひつけられてゐる。或人は他の新聞が意見を持つところに、黃色新聞は感情を持つのだと言つたが、全くその通りで、渠等はまるで感情を有つた動物のやうに、愛したり、憎んだり、哀れがつたり、喧嘩腰になつたり、感情といふ感情は何一つ殘さず有つてゐる。唯一つ缺けてゐるといはれるのは、他でもない良心だ。

何か眼新らしい問題にでもぶつつかると、黃色新聞の記者は極つたやうに一寸小首をひねる。――これは讀者受けはどうだらうか。――恁うして其の態度は決められるのだ。一體現代の新聞記者は自分の心といふものを有たない。有たないのではない有つてはならないので、渠等はどんな場合にも公衆の意志、選擇を代表すればそれで十分なのだ。紐育のある新聞記者が懺悔して『私は自分の欺かない意見を發表する必要がある時には、何の關係もない紙上に公にする事に決めてゐる。もしか自分の新聞紙で公然にそんな事でもしようものなら私の地位はオセロではないが、二十四時間經たないうちに失つてしまはなければならない。正直のところ紐育新聞記者の職責は、眞理を附會け、平氣で嘘をつき、誘惑し、惡口をつき、福の神の脚下に膝まづき、日常の麵麭のために一切を犧牲に供する事だ。自分達の才能と生活とポシビリチイとすべて他人の財産で、自分達はある意味において精神的娼婦だといつて差支ない』といつたが、米國黃色新聞の實狀を知つてゐるものには、この言葉が必ずしも矯激に失しない事が解るだらう。

黃色新聞はまた赤インキで事々しい大見出しを使つたり、他を吃驚させなければ止まないやうな奇拔な插繪を入れたり、太文字や大袈裟な文句入りで盛んに誘

惑的記事を載せるのを厭はない。そして絶えず目新しい材料を材料をといつた風に出來事を追驅け步き、間がよくば特別種を攫まうとする。何事に限らず、穩密の性質を帶びたものは、讀者の興味を牽くものなので、他が迷惑しようがしまいが、そんな事には頓着なく、渠等は見付り次第いつてもそれを紙上に素つぱ拔くだけの用意を有つてゐる。一體往時の新聞といへば大抵が集まつて來る材料を、いい加減に安排するので滿足したものだが、今は獵犬のやうに此方から新材料を驅り立て驅り立てして、追驅けまはさなければ承知しなくなつた。だから記者を勤めるには何よりもこの新らしい材料を嗅ぎ出す鼻が大事なので、もと紐育ヘラルドの主幹をしてゐたフレデリック・ハドソンはこれをNews senseと呼んでゐた。ハドソンの考によると、新聞といふものは毎日の紙上に、一般に興味のある新材料の大物を一つか二つかは必ず出さねばならないのださうだ。勿論毎日毎晩大地震が搖れるとか、戰爭がおつ始まつたとか、大統領の豫選大會があつたとかして、翌朝の紙面に逸早くそれを載せるといふ事は迚も出來さうにはない事だが、けれどもハドソンの考は實際しようと思へば實行出來るので、彼自身は十分それを知つてゐるのだ。何故といつて彼にはそのNews Senseといふ一種の才能があり餘る程あつたのだから。丁度鑛山師が禿山の岩の上に立つて、底の黄金脈を嗅ぎあてたり、蟲屋の卵拾ひが曠い野原の草の根から夏蟲の卵を産みつけた土塊を拾ひ出すやうな、熟練から來たある才能なのだ。

バラアド・スミスといへばハドソンに信ぜられた腕利きの記者だが、この人もNews Senseは非常に發達した人だ。いつだつたか仲間うちで、不漁期といはれる時、材料が足りなくて明日の紙面が出來かねるので、種々な通信材料を調べてゐると、三行ばかりの棄兒の記事があつた。よくある事なのだが、唯例のと違つて著てゐる被服がかなり立派だつたといふので、直ぐに記者を棄兒の發見せられた場所に送り、拾つた巡査に面會させ、養育院を訪ねさせなどして夜半頃までに一頁

の面白い讀物を拵へあげたのは彼の逸話として聞えた事實だ。近代のジャアナリズムではこの News Sense はどうかすると企業的精神と一緒になつて現はれる。リヸングストンを捜すためにスタンレイを中央阿弗利加に派遣したのはこの一例だ。

ジャアナリストにはまた第六感の作用が要る。この第六感といふのは News Sense と一寸似てはゐるが、決して同じものではない。記者は掲載の價値あるものを見分けるために。編輯者ならば紙面を作りあげる種々な材料に對する割合を、探訪者ならば取扱つてゐる記事を組立てる割合を知るために News Senes を有たなければならない。第六感作用はそれとは異つた神秘な本能的の働きともいふべきもので、これは誰もが持つてゐるにはゐるのだが、唯それを支配し。それに信頼する事が出來ないばかりだ。人は時々自分の判斷に背いて動いたり、間違つてゐると感じた事を爲ようとする事があるが、さういふ時にもどうかすると第六感の暗示が動いてゐるのだ。ジョン・ボガアトはジャアナリストとしてのこの經驗を Current of news と名づけてゐた。ある日の事、彼が町を歩いてゐると、ふと道の片側に土窖があるのに氣がついた。空氣の容子から何かから何だか其處から Current of news が出て來て、自分を取り捲くやうに思はれた。彼は立ち止つて四邊を見まはした。やがて土窖へ下りやうとして、一歩階段を踏むと、だしぬけに短銃の音が響いた。ある男が相手の男を狙擊したので、その瞬間彼はその現場に立つてゐたと言つてゐる。倫敦のイヴニング・ニユウスのバルクもまたそんな經驗を語つてゐる。かつて紐育のある町で某夫人が慘殺された事があつた。犯人がまだ揚らないので、警察では極力その逮捕につとめてゐる頃、バルクは丁度ボストンに居て、ある晩夕飯をしたために往かうとして町を急いでゐると、ふと肌の色の黑い男が眼についた。誰しも紐育にあつた慘殺事件とボストンの町を徜徉いてゐる男とを結びつけて考へるのは餘り方圖のない事だと思ふだらうが、彼はこの男こそ紐育の警察が血眼になつてゐる大事件の關係者に相違

ないと睨んだ。て、その跡をつけて往くと、所もあらうにある教會に入つた。勤行の間じつと男の素振を見てゐると男は側にゐる婦人の相手に何處かで竊取ねたらしい寶石を見せてやつてゐるので、彼はいきなり教會を飛び出して、市の警察署にかくと報告した。捕まつてみると、それが紛れかたもない紐育事件の犯人であつたさうだ。

近世のジアナリズムは材料を捜すためには、時としては記者の身の危險に瀕するをも厭はず、ある限りの手段を取らせる。パル・マル・ガセットのトマス・フィルダアスが一度こんな事をした。彼はある事件の探訪のために紐育埠頭のある汽船に乗り込んだ。て、どうにかかうにか自分の欲しがつてゐる材料が手に入つたので。急いで編輯局に歸らうとすると、都合あつて翌朝まで船を立ち去る事は出來ないと拒絶された。この命令には彼も流石に困りはてて、舷に立つて恨めしさうに凝と海を見おろしてゐると、此方の舷腹に沿うて小船が一艘下を通りかかつてゐる。それを見ると彼は吐嗟の間に欄杆を躍り超えて、動いてゐる小船の舷をさして飛びおりた。て、到頭數ある記者のなかで唯一人彼が材料を持つて歸つた事になつた。

また英國の某貴族の邸宅で盛大な饗宴が催された事があつた。ある社から腕利きの記者をおくると、暫くして體よく入場を拒まれたといふ電報が入つて來た。て、社の方では、仕方がない、記者も程なく歸つて來るだらうと絶念めてゐると、夜になつて宴會の模樣が立派に手にとるやうに電報で送られて來た。如何した事だらうと思つて、記者が歸つてから其の理由を訊くと、彼は樂長に交渉して、樂器を持ち運んで夫を按排よく整列するといふ約束で、囃子方の制服を着込んで邸に入つて往つた。だが、音樂といつてはバイオリンの弓の磨り方一つ知らないので、太鼓の蔭に小さくなつて、誰に氣取られるでもなく、安心して邸内の模樣を見て來たのだつたさうだ。最もひどいのは英國で今顏の賣れた文學者になつてゐる男だが、それが若い時郵便物の行嚢を盗んだ話で、何でもその中には是非と

も間に合はさなければならない書類が入つてゐる筈なのに。當り前だと翌る朝まで待たなければ配達されさうにもないので、彼は遞送人からそれを奪ひ取つて一散に逃げ出した。で、後から追ひ縋られて釣瓶打ちに短銃で狙はれたさうだが、間がよく擦り傷一つ負はなかつたさうだ。またある時巧く機械職工に身をやつして、キプリングの家に入込み、何喰はぬ顏をして詩人と談話を取り交はして來た記者がある。佛蘭西の新聞といへば、英米のそれに比べて材料の探訪にのろくさい點があるのは誰しも知つた事だが、その佛國新聞の記者ですら、ある時ゾラに會はうとして、こんな業をしたことがあつた。一體ゾラは聞えた訪問嫌ひだつたが、丁度その頃はドレエフス事件の最中で、彼の態度は一般にとやかく噂されてゐたので、猶更新聞記者の訪問をうるさがつた。それを知つてゐた記者は、この小說家の玄關で取次の者に會ふと、眞面目くさつた顏をして、フランソア・コッペエが恰ど今死にかかつてゐるから、その由を御主人に傳へて欲しいと言つた。效目は直ぐに見えた。ゾラはこの名高い友達の不意の出來事に吃驚して、詳しい談話を聞かうとしてそそくさと出て來た。成程コッペエはその時分一寸加減が惡かつたには相違なかつたが、何も生きるの死ぬのといふ程の事ではなかつた。記者は落ち付き拂つて、實はお目に懸つて斯々の事件について御意見を伺ひたいための方便で、コッペエは死んだのでは御座いませんと白狀した。ゾラは一頻り靑筋を立てて怒り散らしたが、それでも記者の望みを叶へてやらずには置かなかつたさうだ。

取つて來いと命令けられた、または自分で取つて來ようと思つた材料は、たとひ火の中水の中へでも飛び込んで取らなければ止まない。――これは言ふまでもなく良い記者で、それが出來ないのは惡い記者といふ事になつてゐる。今のジャアナリズムではこの二つの間に灰色のが入るだけの餘地は殘されてゐない。

絕えず讀者を娛しませよう、吃驚させようとするから、今のジャアナリストは自然と小說のやうな興味の

ある記事を捜さう捜さうとする傾きがある。マックス・オレルは米國新聞は驚嘆すべき短篇小説の集まりだと言つたが、實際その通りで、世界中何處の國の新聞を見ても、米國の黄色新聞程小説的記事の多いのは見當りさうにもない。いくら突飛な米國だといつて毎日さうさうそんな小説めいた事件の起る筈はない、大抵は記者の手で手療治されるので、あれだけ豐富な想像があるのだつたら、神樣の相談役にでもなつて創造の事業に携はつてゐたら、世間はもつと趣向のあるものになつてゐたらうと思はれる位だ。豐かな想像と敏捷い筆と——この二つはジャアナリストに必要なやうに、神樣にも必要でない事はない。

いつだつたか、こんな事實があつた。紐育のある男が西部アメリカへ講演に出掛けて往つた。すると其の地方のさる大新聞の探訪員が早速訪ねて來て、一體誰を攻撃しに態々出掛けて來たのだと訊くから、いや他の攻撃になぞ出掛けて來はしない。今度は講演に來たのだといふと、講演なら別に私が顏を出さなくともよからう、では何卒今度の演題とそれから最初の言ひ出しと最後の結びだけここで聞かせて欲しい。あとの文句は歸つて編輯局でいい加減に拵へておくからと言つたさうだ。これなぞもニュウ・ジャアナリズムの手療治を證據だてる面白い事實だ。

黄色新聞はまた餘りに市井の瑣事を事々しく吹聽し過ぎる。一寸した失策や無駄話や笑ひ草の種にしか過ぎない事を、一國の政治問題や思想問題やを取扱ふ時にも負けないやうな大袈裟な文字で載せたがる。新聞の"Trivializing"といふのはこれで、どうかすると讀者をして社會の出來事に對する價値の判斷を失はしめる虞がある。

黄色新聞はまた社會上といはず、政治上といはず、凡ての問題に對して何時でも批評し、反對し、抗撃する用意を執つてゐる。渠等の利害に關する事か、もしくは渠等の神經に觸角に觸れるやうな事がありでもしたら最後、渠等は蝮のやうに全力を盡して敵を攻撃しなければ止まない。恁うして渠等は民衆の間にいつの

まにか心の懷疑的態度を植ゑつける事になる。近頃は新聞といふ新聞は、恰て吾々の日常生活に一善をも認めないやうに、その紙面は社會の惡風で一杯になつてゐて、どうかするとそれを挑發的な煽動的な文字で掲げるやうな事をする。恁ういふ事は知らず知らずの間に讀者に厭生と不安と不信との思想を孕ますやうになりがちなものだ。

現今の新聞紙は特別の記事を除く外は、大抵無記名なので、紙上に現はれた記事は社內の共同責任といつたやうなものになつてゐる。共同責任といふのはやがて無責任だといふ事だ。ずつと以前記事に個人的の色彩をつけることが許された頃には、新聞記者といふものは一つの職業としての面目を有つてゐたが、今の黃色新聞の狀態ではもう商賣になつてゐる。記者の無責任はとりもなほさず新聞紙が社會の教育的または道德的勢力としてだんだん衰へて來た事を意味するものなのだ。

片つ端から數へ立ててみても解る事だが、今の新聞といふ新聞は、大抵政治もしくは實業におけるある黨派の機關になつてゐる。だから自分達の仲間のために都合のいい事は、猫の兒の產れ落ちた事まで書かうといふのに、反對派の利益になるか、または自分達に都合の惡い事は其の儘握り潰してしまふか、それとも極く手短かな文句で何氣ない風に書き流してしまふ。それからまた近代の民主的傾向に媚び、所謂衆俗の御機嫌をとるためには政府の當局者、公吏、世に時めく學者、藝術家といつたやうな、すべて社會の表面に活動してゐるものに向つて、理由のない漫罵と諷刺とを浴びせかける。これは記者の方でも讀者の方でも輕い笑ひを買ひさへすれば十分な場合が多いのだらうが、恁ういふ事が幾度か重つて來ると、いつの間にか讀者の胸に社會の組織を輕く見るやうな癖を植ゑつけないとも限らない。眞正面に社會の弊所病所を指摘しようといふのでもなく、新社會新道德を齎すために古い社會の一切の因襲と戰ふのでもない、言はば社會そのものを茶番狂言のやうに、人生そのものを嘲の種のやうに

見ようとするのだ。

▲新聞紙の廣告本位

ニユウ・ジヤアナリズムは何處までも金儲けに重きを置くので、その最も大きな特徴として自然廣告本位といふ事になるのは止むを得ない。記者たるものは新しい讀者を得ると共に、廣告を殖やすに足るやうな記事を掲げなければならない。日本の商人は自家の商賣高に對してどれ程の廣告費をつかつてゐるか知らないが米國の商人は一年一千五百萬弗の商ひをするのに、五十萬弗の廣告費をつかつてゐるものは少くないといふ事だ。兎に角商人が自家の商品を鬻がうとするには、何よりも初めに新聞廣告といふ事を考へなければならなくなつた。それと共に新聞の方でもまた廣告といふ事を考へずには、編輯の筆が執れなくなつたのだ。

三十年前に米紙の販賣收入は、廣告收入に一一・〇〇〇・〇〇〇弗程超過してゐたものださうだが、二十年前には殆ど同じ額に平均して來た。それがどうだらう、今日では販賣收入に比べて廣告收入の方が約三五・〇〇〇・〇〇〇弗程超過するやうになつたといふ事だ。一八八〇年に米紙の廣告費は一人前七十八錢の費途にしか當らなかつたものが、一九〇五年には一・七九に上つて來た。ところが販賣收入はさうは往かない。何故といつて理由は極簡單だ、近年になつて紙價は段々下る一方なのだから。

一體廣告といふ事からいふと、今では特別の商品と特別の場合とを除く他は、新聞よりも寧ろ雜誌の方が効目が多いといふ事になつてゐるが、その雜誌の廣告もたいして古い事ではない。米國では一八六〇年の二月にザ・アトランチック・モンスリイに現はれたのが初めてださうで。なかには廣告などは御免だといつて素氣なく斷つた雜誌もあつたといふ位だのに。今では廣告が無くては雜誌も新聞と同じやうに殆ど立ちゆかなくなつてしまつた。そして廣告といふと、挿畫も文章もだんだんと善くなつて、單に文章といふ點から言つてみても、雜誌の内容それ自身よりも無駄が少くなつた。考へてみるとそれも尤な事で、廣告するものは

自家の廣告で數千の讀者を牽きつけなければならない必要があるのに、雜誌の寄稿者は唯一人編輯人の氣に入りさへすれば十分なやうなわけなのだから。それだけに廣告には嘘といふものが少くなつて來た新聞雜誌の方から言つても、信用を維持する上には、つとめて詐欺的の廣告を揭げてはならなくなつたのだ。

いま米國の主だつた四十種ばかりの雜誌の廣告收入を調べてみると、一年にざつと二八・〇〇〇・〇〇〇弗、それに對する販賣收入は一年に一五・〇〇〇・〇〇〇弗ださうて、これで見ると月刊雜誌は廣告收入と販賣收入とが略同じ程度のものになつてゐる。そして週刊雜誌は廣告收入が販賣收入の約四倍に當り、日刊新聞は廣告收入が全收入の約九割といふ事になつてゐる。だから若し廣告收入が一文もないといふ事になれば月刊雜誌は定價を二倍に、週間ものは四倍に、日刊ものは十倍にしなければならなくなる譯だ。

ある人が The Ladies Home Journal の遣り口を批評して、若しか那の雜誌の持主カアチス君をして正直に白狀させたなら、『私の雜誌は廣告主のために出版せられるのだ。』と言ふかも知れないといつたが、唯々 The Ladies Home Journal に限らない、米國雜誌の多くが讀者の氣を牽くやうな記事を載せたり、見た眼に面白い挿繪を入れるのは、どちらかといへば高い廣告料を仕拂ふ得意先を搜す方便に過ぎないのだ。だから廣告は唯新聞雜誌の廣告欄に見出されるものとのみは限らない、いつどんな眞面目らしい記事が廣告代りに使用されてゐるかも解らないやうな始末だ。恁うして廣告の勢力が殖えて來ると共に、一夜のうちでめきめきと頭を持ち上げて來たのは廣告部長で、今では事實上新聞雜誌を支配するものは廣告部長だといつて差支なくなつた。以前は主筆の個人性といふものが、新聞雜誌にとつて第一の要件であり資格であつたものだが、今では段々それが衰へて來て、獨立の意見を唱導すべき社說にすら廣告の勢力が及ぼして來るやうになつた。

社說に廣告の勢力が及んで來る――といふのは、何も

露骨に社説で廣告の吹聽をするのをいふのではない、言ふべき議論があつても、それが廣告に影響でもしようといふ場合には、何喰はぬ顏をして默つて過ごすといふやうな態度を指すのだ。記者の自由を束縛するものは惡性の痲痺質斯(リゆうまちす)でもなければ、新聞條例でもない。尊敬すべき衆俗(ブオルジヨア)の團體たる購讀者と廣告主とだ。荒物(あらもの)喰ひの彼等の眼に、萬一巨大胃(メガロガスト)の記事でも見つからうものなら、彼等は自分の事でも書かれたやうに思つて、遠慮會釋なく明日(あす)が日(ひ)から購讀を止め、廣告を斷つて來るかも知れない。こんな窮屈ななかで何か議論でもしようといふには、唯一(たつた)一つの途しか殘されてゐない。――他(ほか)でもない、それは誰も同意をするか、または誰も注意をしない事を論ずるといふことだ。

現に亞米利加では、公明で獨立の意見を持つてゐる主筆を追はうとして、新聞雜誌から廣告を撤回した例は幾つかある。ある歳の『インデペンデント』に夏休みには故郷の田舍へ歸つたがよからうといふ記事を掲げたら。その翌(あ)くる日からホテルの廣告がすつかり無くなつたといふ事だ。彼等廣告主はこれ程までに正直であり、また殘酷である。少し談話は違ふが日本(こちら)でも算盤高い大阪の商人なぞは、商品の廣告をするのに新聞によつて店(みせ)の町名(まちな)を色々と書き更へて見る。――譬へてみたなら一つの新聞へは道修町四丁目と書き、他の新聞へは心齋橋筋道修町角と認める。そして地方からの注文を其の肩書通りに集めてみて、二つの新聞の勢力區域から販布狀態が解ると、直ぐさま廣告の手加減を初めるやうな事をする。かういふ事は新聞社にとつて苦い經驗たるを失はない。そんなことで紐育のある新聞社の編輯局にはよくも惡しくも書いてはならない有名な人達の人名表が、二尺許りの紙にずらりと書き聯ねて貼り出されてゐるさうだ。もしかこんな人達の觸覺に、一寸でも觸つたが最後、記者は二十四時間と經たないうちに、永久に編輯局を見捨てなければならないかも知れない。

新聞を政治爭ひの道具とした時代は徐々(そろそろ)もう過ぎ去らうとして、今では新聞は一つの金儲けの途に過ぎな

くなつた。ある人が「政争(ポリチツクス)」といふ天麩羅鍋(フライパン)から出て、「商賣(コムマーシヤリズム)」といふ火のなかへ飛び込んだまでさといつたのは、よくこの事實を穿つてゐる。

▲新聞紙の感化

英國では職工の末に到るまで新聞を讀むが、歐羅巴の諸國では讀者は大抵上流中流に限られてゐる。下流は無智無邪氣無關係で、おまけに身體が餘り忙がし過ぎると來てゐるので、新聞一つ讀まうとはしない。(日本もどちらかといへば英國よりは歐羅巴諸國に近い方だらう。)

新聞は長い間に「新聞讀者」といふ一階級を造つて、それを次第に發達せしめて來た。彼等のなかには一語一句皆殘さず飲み盡して、彼等の神學と政治と道德とを新聞の各行各句より引用し、信仰し、またそれに生活してゐるものが少くない。さういふ讀者にとつて新聞は一つの小宇宙(マイクロコスム)で、小宇宙でないまでも驚くべきFilmであるのは失はない。其の讀者にも種々の階級がある。——普通もしくは普通以上の敎育をうけて、政治、社會、道德、文藝などの問題について、一通りの智識をもつて自分自身でそれを考へる事の出來る階級と、敎育の無い、日本でいつたら振假名を賴つて拾ひ讀みをする階級と、少年少女と先づざつと恁ういふ風に分けられる。で、これらの階級に、新聞殊に黃色新聞がどんな影響感化を與へるかといふのに、第一の讀者は、他の出版物に對する時と同じやうに、新聞紙のすべてからさうさう感化をうくるものではない、この場合新聞紙の感化は讀者自身の抱く意見によつて定まるのだ、だから熟練な、狡猾い(ずるい)記者は自分の意見に「輿論」といふ衣裳を被せかけて巧みに成効する。が、つまるところ讀者の方からは、自分に關係のない記事や、重要事件について下された月足らずの、不確かな、判斷や、面白くもない問題についての偏見やを讀むために、多くの時間と勢力とを徒に費させられるといふ損がある。第二の無敎育な讀者は、自分で物を考へる事を知らないだけに、新聞記者の黨派心や、營利的の目論見のために、ひいては階級間の偏見を有たせられる虞が

ある。第三の少年少女に對しては、彼等は日日の新聞に現はれるやうな輕い安價な文字に讀み馴れた結果、それが癖になつて立派な著述や、深い、偉大な思想に對して逡巡んだり、毛嫌ひしたりするやうな傾向を起さしめる患がある。――それからまた是等の讀者のすべてを通じての、國民的生活に對する影響を考へてみる必要がある。

多數の讀者を有する新聞雜誌が、多數を相手の評判を維持するためには、嚴密に彼等のコンヱンションに從はなければならない。列へば曩にもいつたThe Ladies Home Journalがこれまで婦人の參政權運動についてついぞ一言も言つた事がないのは、多數の讀者の氣うけを考へるからの事で、新聞雜誌の經營としてはかなり利巧な遣り口だらうが、その結果一代の衆俗をして自己と自己の周圍とをさも價値あり權威あるもののやうに是認せしめ、やがて淸新なる、偉大なる、革進的の思想、道德、藝術といつたやうなものの發生に緣遠からしめる。近年に起きた吾國の事例でいふなら、那の南北朝問題に對する新聞雜誌の態度などがそれでジヤアナリズムが衆俗に媚ぶる餘りに、いかばかり國民をして眞理の探求に臆病ならしめるかが解らう。――とはいふものの吾國の新聞紙はまだ經歷が短いだけに割合に健全に生ひ立つてゐるが、これが歐羅巴の新聞紙のやうに外國政府の秘密保護金や。米國新聞のやうに廣告主の指金一つでどうにでも輿論を代表しようといふのでは、この作られたる輿論のためにどれだけ國民的生活が傷けられ、危くせられるか知れない。紐育タイムスの持主ジヨオヂ・ジヨオンスが、例のTweed Ringに對して歷史的の抗擊を試みた時、敵黨の一人から五百萬弗で新聞を賣らないかといふ相談を申込まれた事があつた。その實新聞の價段はせいぜい百萬弗に足るか足らないかで、ジヨオンス自身も後になつて、「どんな惡魔だつて、あれ以上に値段はつけられまい。」といつた位ださうだが、それでも彼がその申込をきつぱり拒絕したからいいやうなものの、若し新聞が敵黨の手にても渡つてゐたなら、欺かれたる市民の迷惑は

どれ程だつたらうかと思はれる。

最後に記者自身の方から考へてみるのに――現代のジャアナリズムには精神と肉體と兩方面の非常な熟練を要する。彼等は晝も夜もほんの一寸の間も落ちつく閑がない程新材料のために狂奔してゐる。成程新聞には新材料が必要だらう。然しそれは餘りに高價に過ぎはしなからうか。多くの記者はそれが爲に殆ど肉體の破産をしてゐるのだ。

これらは勿論新聞、殊に黄色新聞の殘してゆく惡影響についていつたもので、新聞紙には他の一面にかなり立派な感化があるのは今更事々しく云ふまでもあるまい。今日では新聞紙といふものは社會に一日もなくてはならないものになつてゐるのだ。

▲ジヤアナリズムの將來

黄色新聞はかういふ風に營業としては確かに成功ししたが、公衆の指導者としての地位は段々失ふやうになつて來た。成程黄色新聞の讀者は隨分と數が多い。數が多いには相違ないが、その讀者はいつまでも黄色新聞の讀者であるとは限らない。彼等は時々讀みさして考へ込む。――この瞬間が讀者自身にとつて最も有望で、彼等が讀者としてまた國民として、漸つと自分自身の考察と判斷との上に生活しようとしかかる時なのだ。現に紐育の黄色新聞は相變らず大多數の發行高を示してゐるが、それと打つて變つて政治上道德上の力は段々失ひかかつてゐると傳へられてゐる。

黄色新聞がかういふ羽目になりかかつてゐる側から、週刊、月刊ものは段々と目覺しい發展を遂げようとしてゐる。週刊月刊は日刊もののやうに、讀者にとつて是非讀まなければならないといふ性質のものではない。だから出來るだけ内容の價値によつて讀者を牽かなければならないので、互ひに競爭して讀みごたへのある中味を盛らう盛らうとしてゐる。それからまた週刊月刊は其の配布において日刊のやうに地方的でなく、國民的だといふ利益があるので、地方的もしくは個人的の勢力に從ふ必要が少い。そんなこんなで最近に到つて米國の道德的勢力は段々日刊を去つて、週刊月刊の

上に動いてゐると言はれてゐる。

新聞の商賣本位が止むのは何時の事だらう。人々廣告主の苦情をてんで取り合はぬ事が出來る程販賣紙數が上つたらと言つたが、それは必ずしも信ぜらない。劇場シンヂケエトのやうな大資本をもつて新聞トラストを起すか、それとも國家自らが經營するかしたら如何なものだらうといふ人があるが、それも一つの方法に相違ない。とにかく新聞紙の商賣本位はそれが段々増長するに從つて必ず自分自身を腐蝕しなければ止まないだらうし、教育と教育よりも偉大なる一代人心の向上發展は、いつまでも商賣本位に徜徉ついてゐる新聞と、その讀者とを遙か後方に見殘して往く時があるだらう。私はその時が餘り遠くないことを豫言し得る。思ふに新聞紙の商賣本位が止む時は、新聞紙は社會敎育の機關として、最も適當に、最も近代的のものとなるだらう。私はまたそれを豫言し得る。

本號に掲載する筈なりし諸名家の

高等遊民の處置問題

は頁數超過の爲め次號の誌上を飾ることゝなれり



數奇傳 補遺(一)

田岡嶺雲

(1)

人間の「現在」は常に醜惡てある、苦痛てある。過去は回顧の追懷に美はしく、未來は憧憬の希望に輝く。現在に惱む時、人は未來を望むか、否らざれば過去を懷ふ。但未來を有する者は過去を懷は無い。前途が絕望の暗き雲に鎖された時、人は唯過去にのみ活きる。

固より現實を離れた時、過去は觀照の對象てある、過去が其現在たりし時に有した苦痛も哀愁も、脫實した一種の幻相の如く、只美はしい者となる。併し、美はしいには美はしが、想像の廓大鏡に映つた未來の華々しいに比して、記憶の望遠鏡から覗いた過去は何となく寂しい佗しい美はしさてある。六尺の病牀に身を横たへて、死の黑き影を望みて一日々々を生き行く吾には此の幽かなる寂しさを辿つて、想出の昔を味ふより外に樂みは無い。今の吾には過去は唯一の慰安てある。數奇傳は固より自己の告白ては有るが、我が過去の罪過を追悔するより生ずる良心の呵責に堪へかねた懺悔の聲ては無い。寧ろ現在の悲痛を忘れやうとして美の對象として過去を取扱うた一種の藝術品(固より拙劣な)てある。

但し予は空想と想像とを交へたる作り物語を語らうとするのではない、固より宗教家が其の罪惡に對する如き嚴厲の態度を以てではないが、藝術家の敬虔と誠實を失はざる限りに於て、予が過去を語るのである。

予が再び茲に此稿を續ぐ所以は、過去が今の吾の唯一の興味であるからである。

(2)

「土佐はよい國南を受けて薩摩嵐がそよ〳〵と」大平洋の長風を受け、黑潮躍る南國の、殆ど積もつた雪といふものを知らない、又病人か老人の外は綿の入つた物を着ることのない暖い明るい輕々しい氣分の内に生れた吾には、北の國の寒さに鍛はれた意志の勁い執着力に缺けて居る、予が半生迍邅の本も茲にある。

予が凡ての事をなして、竟に何事をも成し得なかつたのも、禍根は要するに茲に在る。一時の感情に驅られて、忽ち熱し忽ち冷める。學者たらんとして得ず、新聞記者たらんとして得ず、教育家たらんとして得ず、哲學者にも非ず、詩人にも非ず、政治家にも非ず、全く沈淪して世俗の人たり得ず、全く超越して學界の人たり得なかつた所以は、實に予が一事に執着して、飽く迄も之を遂行する意志の力の乏しさに坐する。予にして今少しく一事に膠着する辛抱有らしめば、今少しく何かに成り得てゐたのかも知れぬ、而して予が半生も今少し平板であつたかも知れぬ。

凡て我が鄉國の人は其成功に常に一簣を缺ぐ所がある。大關たり得る迄には達する、而かも遂に橫綱たり得ない。要するに執着に乏しい南國の民の已むを得ぬ缺點であらう。

(3)

又南國の民の弊は其空想的なる所に在る、理論的に哲學的に物を攷察するといふ長所も有るが、併し實行的奮鬪的な生活には不向きである。

自分の樣な學校時代に、字と畫とは及第點を得たことが罕に、紙捻を捻り柿の皮を剝ぐことすら滿足には出來ない者は例外であるが、兎に角我が鄉土の人は眼と口とに長けて、手と足とに拙い者が多い。自分が一

時老莊哲學の虛無主義を信奉して、自己の不檢束な放縱な頽唐的な品行に對する本心の呵責を、善惡無差別の哲理に藉辭して竊に自ら解いて居る樣な生活を送つたのも、幾分かは此鄉土的環境の感化が有ると思ふ。

予が半生の迍邅は其自からの放逸から得た結果なりとすれば、我が數奇傳の波瀾は、蓋し其一部分を鄉土の影響に歸することを得る。

(4)

予の運命を數奇ならしめた鄉土の影響が今一つある。夫は土佐人に通有な反抗的氣質である。

土佐は海國であると共に、一面山國である。海岸線を縫うて直ちに連綿たる一帶の山脈が有つて、內へ入れば入る程峯巒が重疊し、國境に至つて險峻を極めて居る。此の山國の影響を受けた爲めでゝもあらう、我が鄉國の人には善くいへば不羈、惡くいへば物に拗る一種の氣分がある。此が自由の呼號が土佐から起つた所以でもあり、又薩長の如く明治の政府に瓜の蔓の閥閥を形造り得なかつた所以でもある。

予自からの思想からいつても、毎に一時の大勢に逆ふ方面へと流れ易い。歐化主義の盛であつた時、予は國粹保存主義の信者であつた。世界主義の盛であつた時、予は寧ろ國家主義の信者であつた。物質主義に對して、予は神祕主義を信じた。個人主義に對して、予は無我主義を信じた。文明の華耀に對する自然複歸の非文明論をも唱へた。文壇に寫實主義が全盛であつた時に、予は傾向主義を唱へた。自然主義に對して、予は寧ろローマンチシズムを謳歌した。予の思想の經過には或は矛盾が有るかも知れぬ、併し其時に盛なる者に反抗するといふことに於て、恐らく一貫してゐると思ふ。

予は皇城の前を過ぐる每に、必ず竊に脫帽して衷心の敬禮を捧げた忠君愛國主義者であつた。若し其以後の予の思想に多少なりとも異つた色彩を帶び來りたりとすれば、そは所謂官僚主義の僞忠君愛國の壓迫に對する一種の反抗からであらう。

予は此くの如くにして世間の順潮に乘ずることが出

來ない、寧ろ好んで逆境に立つたともいひ得る。

予の半生は實に不平と不滿との半生であつた。

(5)

予の故郷は鏡河の流域の一小村で、高知の市街の朱引區內ではあるが、高知市の市街其者が既に谿間のや丶廣い所に建てられた街で、予の村は勿論起伏した丘陵に圍繞されて居る。此の丘陵は次第に高く、南北各々一里許りにして蜒々たる峯を成し、相並行して連つて居る。

併し其の山も河も極めて平凡で、河の水は淸いには淸いが、急湍も無ければ、曲瀨もない。山も圓味を帶びた禿げた樣な山で、樹も無ければ巖も無い。若し古來山水の秀美な地が偉大なる人物を生むものであるとせば、此くの如き凡山凡水の地が、吾々の如き凡人を生むんだのは當然の事であらう。

人はよく故郷に對して、懷かしいとか忘れ難いとかいふ思慕の情を持つてるやうであるが、予は何ういふものか、そういふ故郷に對し優しい心持を些少も感じない。若し有りとすれば鰹の味と、楊梅の味を想ふなのみである。支那の詩人が松江の鱸と何とかの蓴菜と云つた如く吾々も唯食物の味によつてのみ故郷を想ふことが出來る。吾々の如きは人相學でいへば他住の相であり、三世相では故郷に住めぬ生れ合せであるかも知れないが、併し又山水に人を惹くに足るものが無いといふのも、一つの原因であると思ふ。

(6)

我が家には過去の血脈を誇るべき系圖が無かつた。朧げな言ひ傳への外には、數代以前の祖先すら明らかでない。唯曾祖父代までは素町人で、祖父の代の頃は零落した百姓であつたらしい。我等の父は一面には我が家の中興の主であると共に、又我等から言へば父其人が即ち我家の祖先である。從つて我が家には所謂家柄なる者の誇がない。父の手によつて建てられた家の新しきが如く、我が家族の間には黝んだ過去が蓋ひ被さつた重苦しい作法や典禮のやうなもの丶束縛が無かつた。夫に父は士分に取立てられたとはいへ、陪臣の輕

格て、切米を貰ふ奉公人に過ぎなかつたから、我等の家の中には尊大とか倨傲とかいふ貴族的の氣風は固よりない。我等の育つた空氣は、少しも保守的な因習の囚の無い率直な自由な者であつた。

我等が有する平民的の野性は、恐らく多く此家の空氣の感化から來たものであらう。

(7)

予の生れた家は三面に田が有つて、前に灌漑用の小さな溝が流れてゐる。其溝の水を引いて、小さな池を拵へ、それが客間の向ふの庭の泉水となつてゐる。客間と云へば大きな立派な室の樣に聞こえるが、僅か六疊の小座敷で、それが予の家の一番立派な座敷である。以て予の家の大概が想像される。併し亦、其程貧乏でもなく、父が勤儉の努力で吾々が知つて後ち、裏へ土藏が建てられた。白堊の一構を、俄に我家に光彩を添へたやうに思つた。

予は世界を見ない間は、此んな家でも可なり大きなものであると思つてゐた。が、大阪へ留學した後、大阪の學校の眞中を大きな一本の柱で支へた廣い生徒控所とを見た後は、家に歸つても、自分の家が如何にも貧しい小さな家のやうに思はれてならなかつた。

吾々の生れた家には、追懷に吾々をつなぐ歷史といふものが無い。父母が歿くなつた後は、其家を偲び、其家を懷かしむには、餘りに古い匂に乏しかつた。で、吾々兄弟は、丁度巢から立つた雛鳥のやうに、自分の家を後にして、別れ／＼に他鄕の人となつてゐる。

予は唯予の家の庭の泉水の傍に立つた小松と、生籬をなした山梔子の白い花の曉の夢の樣な幽かな匂と、前栽にある四五本の蜜柑の木が、溫き南海にも薄霜の置く晩秋の頃に、黃色の實を着けるのを覺えてゐる位のものである。

(8)

並行して南北に連る山脉の南の峯を鷲尾といひ、北の峯を鵠の森といふ。

鷲尾を越へると、直ぐ南は海濱で、山の頂は眺望に富み、脚下に洗ふやうな海が見える。吾々が小學校時

代、遠足と云へば必ず此の鷲尾に登つたものである。

昔時、此の鵠の森に城があつた、南の鷲尾にも城があつた。鷲尾の方から鵠の森の方を攻めたが、なかなか陷らないので、遂に水の手を絶つに至つた。鵠の森の城主は山の谿間に白米を流して、遠くから望めば、宛然水が流れてゐるやうに見せかけて、城中に水の盡きない事を示した。

城は終に陷つた。鵠の森の人々は城を枕に討死した。其の恨が遺つてか、今でも七月の盆の日には首の無い馬に首の無い人が乘つて、峯の上を馳違ふ、而してそれを見た人があれば、其の人は必らず死ぬると、云ひ傳へられてゐる。で、盆の日には北の方を見まい見まいとする、心配は一通りでなかつた、吾々が幼少の時、死の恐怖といふものを感じた、是れも其の一つであると思ふ。

高知の市中の金子橋といふ所に一構への古い屋敷があつた。其屋敷に非常に古い、二抱へもありさうな一株の巨木があつて、其枝は蓋ひ被さるやうに道に梢を差翳してゐた、其蔭は晝でも薄暗かつた。若し其の下を通る時、躓いて倒れた者は必ず病んで死ぬると謂はれてゐた。

予の好きな貸本屋へ行く途中、必ず此老木の下を通らねばならなかつたのは、予の大いなる苦痛であつた。予は何とも云へぬ不安な心持に驅られながら、小さな胸を躍らして、オツ／＼と其下を通つた。さうして無事に通つてしまふと、ホツト安堵の胸を撫下した。

予が幼少の時、經驗した死の神秘に對する恐怖の一つてある。

(9)

恐ろしいと思つた事が今一つある。それは予の家から一町ばかり隔つた所に一人の老いた啞者の女が住んでゐた。此啞者は背丈が高く、毛髪は銀の筋を束ねた樣に眞白く、其の默つてゐる樣が、斯う神秘を封じた妖巫を見るやうで、恐ろしかつた。それだけでさへ予は其啞が不氣味で、其家の側を通るのが厭であつた。でも其家は小學校に行く途中に當つてゐるので、毎日

通らねばならなかつた。

或日、予は晝食に歸らうとすると、其啞者の家の前に人立ちがして何か言ひ罵つてゐる。今此所で人殺しがあつて、若い女が殺されたのである。今考へると、多分それは痴情の果てか何かで、物を言ひもしない聞きもしない啞者の家が殺すのに便宜が可いと思つて此所に連れて來て殺したものであらう。

籬の間から覗いて見ると、家の緣側に女の死體が横たはつて、何だか紅い血が流れてるやうであつた。臆病な予は其れ以上詳しく見る勇氣がなかつた。直ぐ其所を離れて、逃げるやうにして馳せ歸つた。それからといふものは、予は一層其啞者の家が不氣味になり、夜などは何うしても其家の前が通れなかつた。

(10)

是れも亦同じく予が幼少の頭に死といふ事を考へさせた事柄である。

或夜突然物の爆けるやうな凄まじい響がして、戸や障子が激しく震動した。翌朝見ると、障子の棧や紙か破れてゐた。

それは予の家から七八町を隔てた小高い山の上の、火藥庫が爆發したのであつた。さうして其火藥庫の番人が黑焦げになつて死んで居つたといふ事を聞いた。

極めて幼少の時の事で、其跡へ行つては見なかつたが、何となく、今でも其の火藥庫の入口に彈飛ばされた黑焦げになつた番人の死體を眼の前に見るやうな心持がする。

(11)

小兒は小なる大人であり、而うして其の小なる一身は大人の凡てゞある。即ち小兒は小なる大臣たり、小なる大將たり、小なる藝術家たり、小なる哲學者たり、小なる理學者たり得る。

筆を持つ外に能の無い吾々も小なる畫工であり、小なる小說家であり、小なる役者である時代もあつた。

其頃予が鄕里の新聞社に、年信といふ畫家が來た。此年信は芳年の高弟で、人の顏を描くに從來の畫家のやうに、側面から見た鼻を書かず、正面から見た形を

簡單な線を以て描いた。中央に眞直ぐな線を引き、そうして其の下に直ぐ小さい孤を描いて鼻と見せた、それが、如何にも眼新らしくて、吾々も盛んに眞似て武者繪などを書いた。

小説は纔に字を覺えた頃から、馬琴の物などを耽讀してゐたが、殊に宮崎夢柳といふ人の譯になつた佛蘭西革命の小説が予の心を惹いた。それを眞似て幼稚なタド〳〵しい筆を振つて、小説を書きかけたことがあつたが、何時でも一二回書いてはよした。

予の家の近くに芝居小屋があり、父が其芝居小屋の株主であつたので、屡々且つ自由に芝居を見ることが出來た。予は予の家の倉庫の中に鎖帷子があるのを引張り出して之を着て、大將になつては思入れをしたり、見得を切つたりして、天晴一廉の名優になつたつもりて芝居の眞似をやつた。

(12)

予は幼少の頃頭が大きくて、出額てあつた。て、兄によく『大頭、大頭』といつてはからかはれた。予は口惜しくは思ひ乍らも、四歳も年上の兄に抵抗ふには非力であつた。又頭の大きいのは智慧の多い證據だといふやうな議論を吹きかける知識も無く、只一圖に兄にさう云はれるのが怨めしかつた。

又其兄は、予の眼の瞳の傍に今一つ瞳の樣なものゝあるのを發見して、其の友人に向つて昔の重瞳の偉人の話をしてゐたのを聞いた事があつた。それを聞いた時は予は平素の怨めしさをも忘れて、何となく嬉しくも感じ、心強くも感じた。

けれども其大きかつた頭も、年を取るに從つて終に人並の6と3/4の帽子をきるのに過ぎぬものとなつた。それに、予の重瞳が若し眞の重瞳であつたとしても、舜のやうな重瞳てなく、項羽になり損ねた重瞳であつたらう。

(13)

幼少の時、伯母の手に養はれて、別家するとになつてゐた。予は八歳の頃から別に小さい家を構へて、伯母と二人て住んだ。

伯母は長く京都の公卿の奥に仕へて、言葉なども吾々の耳に聞き馴れない大和言葉が多かつた。伯母はよく其の出會した蛤門の戰爭の時の樣を話して聞かしてくれた。躬ら薙刀を提げて、自分が仕へた姫君を守護しつつ兵火の中を潜り拔けたといふ事が、如何に小說好きな予が其頃の小さい頭腦をそゝつたらう。

此伯母は三條實美公や岩倉具視公などを見知つてゐて、襖に張り付けた兩公の肖像繪などを說明して聞かしてくれた。又、背丈の低い而も聰明な福羽美靜氏が當時神祇伯たりし白川家に出入したことなどを話して聞かしてくれた。

伯母と共に住んでゐる時、伯母に敎へられて始めて手紙といふ者を書いた。

幾歲の時であつたかよく覺えてゐないが、予が小學校に行き始めてからのことであつた。其頃予の兄は廣島に遊學して伯父の家に行つてゐた。其兄に宛てゝ年賀の手紙を、伯母に敎へられて、其口移しのまゝに書取つた。これが予が手紙といふ者を書いた始めであつた。

(14)

伯母と二人別家してゐた隣家に桶屋があつた。其桶屋の主人は四十歲ばかりの顏の赤い、眼の銳い、眉の太い、如何にも惡相の男であつた。僅か一間しか無い堀立小屋に八十歲程の老母と二人で住んでゐた。此男は何かにつけては、始終此年寄を突慳貪に叱り付けてゐた。で、予が母親に邪慳に振舞ふと、お前も今に桶屋の貞の樣になるだらうと、よく云はれ云はれした。貞といふのが桶屋の主人の名であつた。

予が何でもない事に、今でも聲を厲まして人を怒鳴り付ける習慣のあるのは、小供の時分に受けた此桶屋の感化が、知らず識らずの間に予の頭腦に深く喰ひ入つてゐたのであらう。

孟母の三遷も此んな邊に意味が有るのであらう。

大陸巡遊日記（四）

漱石生

九月十二日

今日も無類の快晴だ。

九時十五分發の汽車で伊太利亞のミラノへ行くことにする。

汽車はルツアアンの町の背後をぐるりと廻つて、それから湖岸を走る。昨日左岸に見たリギ山が車窓の左側に見える。湖水を渡り來る朝風が涼しい。

汽車は崎嶇たる岩山の谿谷を傳ふて進む。左に又は右に湖水を見ることもある。隧道が少なからぬ。箱根の谿川をもつと深くし、處々に大小の湖水をあしらひ、汽車道の左右に見る岩山がもつと峻險で、その岩山のつい後に、見上る許りの高峰が連續して居て、その高峰の鋸の齒のやうな頂上が、一二合目まで雪で蔽はれて居るのだと想像すればいゝ。この雪を頂いてる大連峰が即ちアルプスである。ブルンネン驛を過ぎた處で、右方に、峰と峰の間の廣い窪みに氷河が朝日に輝いて居るのが見えた。

ルツアアンから三十六哩の、海拔千六百呎許のエルストフエルド驛附近では、右方遠く、高峰の紆曲した谿間に所謂コントオテツド、グレエシヤア(扭れ氷河)が大きなSの字形に傾斜緩るく懸つて居るのが見えた。凄いやうであつた。

汽車は次第に谿を上る。時に右に、時に左に見ゆる谿は次第に深く見下ろされる。谿の傾斜は四十五度以上、偶には九十度かと疑はれる程に急だ。殆んど一面に岩屑の急な岩が露出して居るのだが、にも拘らず松や杉に似た木が危うく根を岩に絡ましてそゝり立つて居る。溪の底は大小の岩塊が亂立した早瀬川で、岩に

激する奔流が淙々と鳴つて居る。これに比べりや、保津川なんか生やさしいものだ。汽車は斯んな溪に架した鐵橋を幾つか渡つて、兩岸のうち、傾斜の緩な方をと擇んで行く。窮した場合には已むを得ず隧道を潜る。谿が急なのと、山を突き拔けた向の谿間が高いので、汽車も眞直に隧道を潜る譯には行かぬ。一つ山を螺旋を畫いて潜り上るとがある。海拔二千四百二十八呎のグルトネレン驛を去つて間も無く拔けるバッフェンスプルングの螺旋隧道は、百十五呎の上りて、長さ十三丁半餘もある。出たかと思ふと又隧道だ。鐵橋を渡る時には、眼下に早瀬が見えて、左右の岩山が川まて削つたやうに急なのが能く分る。絶景だ。全車の米國人がしきりと撮影しやうとするが、隧道が多いのでいつも失敗する。隧道を出たと思つて窓を外づす。さあ橋だとカメラを向けやうとすると、直ぐ暗い隧道になる。一人て不自由らしかつたから、僕も廊下へ出て手傳つてやる。窓の開閉を僕が受持つて、橋がありさうだと僕が注意する。奴さん上等のコダクを胸に當てゝ今や遲しと待構へる。ピシャッ〱と幾枚か撮つたが、成功したかどうか覺束ないものだ。

やがて有名な海拔三千五十呎のワッセン村を橫に見下す處へ來る。此村のお寺に尖塔があるのだが、線路がその山峽を紆り曲つてついて居るので、始終その塔の位置が變つて見へる。高さ二百六十呎の鐵橋を渡つて向側の山の中を幾つか螺旋を畫いた隧道て上へ上へと上る。八十二呎だか上つて山の上部の橫つ腹へ出て、又も三度目に鐵橋て此方側の山の上部へ移る。そしてその次の隧道を潜つて、頂上近い、傾斜の少し緩な橫つ腹へ出た時に窓から覗いて見ると、ワッセン村は遙か谿底になつて居る。次に上り百十八呎のナキスベルヒ隧道を拔けると、右にゲッシエエネンの谿稍や廣く開けて、その谿の遠くに壯大なダムマ氷河が見える。

ゲッシエエネン(海拔三千六百四十呎)ては汽車は四五分しか停車しない。僕はプラットフォムへ飛び下りて、やつとサンキチと繪葉書二三枚と買ふ丈けの餘

谿があつた。

これから直ぐと世界最長の隧道たるゴットハルドの隧道へ入る。最高點が海拔三千七百八十六呎で、長さは九哩四分の一あるといふ。固より複線になつて居る。千七百九十九年スヴロフ退軍の際のセント、ゴットハルドの通路の五六千呎下を、眞南に向つて開鑿されて居るのである。通過するのに二十分餘かゝつたやうに思ふ。

隧道を出てからは、今度は下りに下るのだが、山腹の傾斜が全じく急だから、又しても螺旋隧道で山の中をぐる〳〵廻り下つては谿へ出て、次の山の底を廻り〳〵下つては一段と低い谿へ顔を出す。斯くて漸次に下つて行く。フレッジヨ螺旋隧道といふのもプラト螺旋隧道といふのも、共に長さは八百六十間許りで、百十八呎下るのである。

谿は次第に開けて來る。左右の岩山に處々白絹を垂れたやうな瀧が見える。飛彈の山道を行くやうな感がする。

家が瑞西と違つて石葺のが多い。急に栗の林が多いのに氣が注く。伊太利へ入つたといふ感がする。

谿間に平坦な處があるやうになる。今まで川岸は何の木も無い岩だつたのが、川柳の生えてる處もあるやうになる。

谿が開けて線路が山腹を遠ざかると、山の後のアルプス連峰が能く見える。連峰の濃いコバルト色と巓の雪の白色と、空の青とが極めて鮮やかだ。

汽車はテイチノ川の左岸を傳ふて走る。時たま森の中を走る。瀑布が多い。玉簾のやうなクリピアスカの瀧といふのなど、殊に美しかつた。十二時卅五分ベリンツオオナ驛に停車した。

此邊へ來ると家屋が全く今迄繪畫で許り見て居た伊太利式のだ。町の東と西とに頗る趣味のある古城が見える。停車場構内の物賣——多くは葡萄酒賣の賣子が、日本のと同じやうに、肩から紐て箱を腹の邊へ吊下げて居るのが、皆んな燕尾服て、純白のシャツを着て居たのは見て淸々しかつた。

それからはテイチノの大谿谷を右に見下しつゝ、谿の左の山腹を傳ふて下りに下る。

一時半頃ルガアノに着いたが、此邊の平野は拓かれて畑となつて居る。畑には玉蜀黍畑があり、蕎麥畑がある。何だか日本のやうな氣がする。

町を外れてから、ルガアノ湖を横斷する長橋を走り行く。全く濱名湖の長橋を行くやうであつた。あれよりも一體の景色が大きい丈け違ふ。汽車はビッソネ、マロッジア、メラアノと湖畔の小邑をずん／＼素通りする。

谿はいよ／＼開けて平野となる。左右の山は漸次低くなり。漸次遠のく。伊太利亞の平野といふ語が懷出される。三時前には何處にも殆んど山といふものが見えなくなつてしまつた。ミラノへ停車したのは三時十分であつた。

ミラノでは音に聞く大寺院とサンタムブロオジヨだけ見れば澤山と、下車するなり手荷物二つ共預けて置いて、ドウオモ行といふ電車に飛乘る。單語だけ二三十知つてる伊太利語が役に立つのが可笑しいやうな氣がする。

カシイドラルは是迄幾度か寫眞で見、繪畫で見、繪葉書で見て、その壯麗さを想像して居たのだが、實地に見て見ると一層その宏大壯麗なのに嘆美の眼を瞠らざるを得ぬ。

正面三十六間半、右左外陣の幅四十八間、奧行八十一間、總て白色大理石のゴシック式建築で、屋根には長短九十八の小塔が槍の穗を並べたやうに突出して居る。殿堂外壁に飾付けられて居る大小の大理石塑像が二千許りある。菓子屋の店頭に飾られて居る家屋を摸した精巧なキャンデイを見るやうだ。堂內へ入る。

辷りさうに平滑な黑白の市松模樣を爲した大理石の石疊が先づ冷やりと眼に映る。壁には綺麗な彫刻物がずらりと嵌められて居る。本堂と側堂とを限る五十二本の大圓柱が、仰がねば見えぬ程に高い天井まで、大並木道の如くに左右に並列して居る。圓柱を一巡するのに十五六歩を要する。本堂中央に立つて、遠く正面

の聖壇に對すると、自づと崇高の念が起る。うるさく案内を勸めるガイドを斷つて、左右の側堂、左右の外陣にある幾十の紀念像を見て巡る。

最後に右外陣の隅から、階段を百九十四段上つて屋根の上へ出て、更に最高塔内側の石階三百級を上つてその絕頂へ達する。ミラノの市街は愚か、郊外の平野が廣く遠く見渡される。塔が細いのと高いのと、柱も欄干も纖細な彫刻が施されて居るのとて、如何にも脆さうな、崩れさうな氣がする。脚の戰慄を制しかねた。

暫く展望を恣にし涼風を貪つてから恐る〱下りた。下からカソリックの僧さんが上つて來る。黑繻子の寬濶な衣を綱のやうな細帶で腰の處で括つて。前へ珠の太い長い珠數を垂らして居る。胸には首からの細い鎖に十字架を光らして居る。頭がお芥子坊主なのは可笑しい。

堂前の廣場から電車でトリノ町がヸットリア町と交叉する處まで行く。サン、タムブロオジオ寺へ行きたいのだ。何號といふ電車がその邊へ行くのか一向判らぬ。廣場へ停車する電車の車掌に

『サンタムブロオジヨ？』

と訊くと首を振る。次のに訊くとうなづく。乘つてから車掌に

『クワント』

と乘車賃をたづねると、『ディエチエ』とか何んとか答へるから、一かど伊太利語を心得て居るやうな顏して、ポケットから二十チエンチッシミの白銅を渡すと、銅貨一つ釣錢をよこして『グラチエ』と言ふ。たゞの觀光旅行は該國の國語に通ぜんでも出來るものだと大に心强くなつた。斯んな具合なら羅馬もナポリも存分愉快に見物が出來やう。

サンタムブロオジヨは、現今の寺は十二世紀頃の、ロマネスク建築の小さな寺だが、創立は遠く四世紀で、セント、オウガスチンが洗禮を受けた處、またテオドシウス皇帝がテッサロニカの虐殺後入寺を拒ばれて終に懲罰の苦行を餘儀なくせしめられたと學校で敎はつたとのある古寺である。本堂の左右兩側にフレスコが

あつたが感服する程のものぢや無かつた。

七時十分發の汽車でゼノア經由で羅馬へ向ふ豫定なので、氣は急くが、然しレオナルド、ダ、ヰンチの「最後の聖餐」の原畫のあるサンタ、マリア、デレ、グラチエが近さうだから、ヰットレ町を西に、右へ初めての橫丁ツエナレ町とかいふのを走るやうにして步いて行く。突當の角に見える小寺院が正にそれだ。寺の西側に小さな煉瓦家があつて、その大きな扉に

Cenacolo Vinciano

と札が掛つて居る。此處から入るのだなと思つて近寄ると、日曜閉館、週日午前九時半開門午後四時半閉門としてある。時計を出して見たら六時前であつた。殘念だが詮方が無い。

その右橫丁を北へ少し行くとボッカチオ通といふがあつて、左にノルド、ミラノ停車場がある。前の廣場を縱橫十文字に電車の線路がある。電車は引つきり無しに來るが、行先地が書いて無くて、唯番號が書いてあるので、僕の行くべきスタチオオネ、ツエントラアレへは何號のに乘るべきものかと、停留場に立つて思迷ふて居ると、此廣場から北へ通ずる橫丁の向に、煉瓦造の大きな石油タンクのやうなものが見える。何だかと側の人に訊くと、カステロだといふ。城の後にはヌオヴ、バルコといふ大公園もあると敎へて呉れる。

公園を見步くだけの時間は無ささうだが、城だけは見られさうだ。急いでその橫丁を拔けて城の側面へ出る。タンク樣の物は城廓の角櫓であつた。現今は貯水池か何かに用ひられて居るのださうな。城の一部に、市立美術館があるといふとだが、入つて見るほどの時間が無いから、引返してダンテ通をドウオモ前まで步き、再びかの大理石の大殿堂の外觀を賞して電車で停車場へ歸る。「一號」と札の下つてる電車と記憶して居たから間違は無かつた。

構內の飮食店で夕食を喫しながら考へる。七時十分發のには充分間には合ふ。然しゼノアは曾遊の地である。再び下車して見物する丈の價値は無い。素通すれば、折角伊太利西岸を走つてる線路も、夜中に通ると

になる。有名なピザの斜めな鐘塔も見えはすまい。フオロニカ驛迄て見えさうに思はれるエルバ島も見えはすまい。ボロニヤ、フイレンツエ經由の羅馬行が九時にあるから、それにしやうと、緩り構へて食後更にジヤンボンを下物に醇良の葡萄酒を傾けた。

二等の喫煙と書いてある車室へ入つて、廊下に遠い、左側の窓下の一席を占領する。プラットフオオムを枕賣が枕を車に積んで賣りあるく。

「シイニイ、ペリアアジユ」

といふやうに聞こえる。伊太利語が珍らしいので、能くは判らぬながら同車の男女の對話に耳を欹てる。此列車は乘換無しの羅馬行と知つて居ながら、言葉の稽古にと思つて、

「こりや羅馬行の汽車てすか」

「途中何處かて乘換へるのですか」

「何時に出るのてすか」

などゝ、すまぬ譯だが相手の返事には無頓着て訊ねて見たりする。遲れ走に乘込んだ客が、空席は無いかと車室を覗いて尋ねると、澄ました顏して

「ありませんよ」

と答へても見る。自分ながら厚かましいと思つた。

バルマに停車したとは微に覺えて居たが、晝の疲勞てぐつすり寢込んてしまつて、ボロニヤで停車したのも、フイレンツエで停車したとも知らずに、眼が覺めたのは翌朝六時頃、テロントラ驛を過ぎて左にトラシメノ湖が見え初める處であつた。(完)

(巡遊日記は餘りに冗漫に失する恐あれば、羅馬古跡の巡歷、ナポリの風光、ポムペイの發趾、水鄕のヹネチア、獨逸、和蘭、白耳義の旅行等は、異日機會を見て、題目を更めて記述描寫することとし、本日記は一先づ本號にて打切ることとす。讀者諸君の寬恕を仰ぐ。七月十五日 繞石生)

舟游

（隅田川の舟游を記す）

黑頭巾

其一

◉吾輩、嘗て、隅田川兩岸圖卷といふものを見るに、上下二卷の卷物、一は、綾瀬より、兩岸に沿ひて品川に下り、一は東岸を描く。一幅の中、四季あり、風雨あり。武家の行列もあり、美人も徘徊す。隅田川に於ける風光と世態との變態、双眸の中に在り。

◉東岸に於けるは、墨堤の變遷尤も驚く可きものならずんばあらず。竹樹蕭疎、處々、瀟洒の隱宅らしきあり。

◉兩國橋畔の變遷に至つては、維新前後の日本を象徵するに足る可く、尤も趣味饒きものならん。此の圖卷に描きし橋は。忠臣藏義士の渡りしものより幾回か架けかはりしものなるべし。今は、電車、其の上を通じ、風光全く一變す。

◉日露戰役の頃、今の新兩國橋は架設せらる。其の頃、舊橋は、尙ほ並びて殘り、新舊の文明と趣味とを對照しつゝあり。

◉吾輩は、舊兩國橋の渡り初の錦繪一組を藏す。三夫婦曾孫、列を正して練り行く、三枚續き也。老爺は上下を著け、老媼はうちかけを被り、平和の氣象あり。

◉此の圖卷に載する兩國橋は、實に繁榮を極む。武家の劍槍旁午し、僧尼あり、力士あり、紅裙あり、島田あり、舊日本の人物を悉く欄干を以て縁ち取れる籠の中に、盛り上げたらんやうなり。

◉今の江東は、國技館、半空に聳え、恰も、觀音堂の淺草に於けるが如く、巍々として、他の萬事を壓倒す。今の人は、淺草といへば觀音、兩國といへば力士を聯想するのみ。

●江東、中村樓、井生村樓の名、江湖青年の血を湧き立たしめし事あり。樓上に於ける辯論、ゼスチユーア、フイギユーアも拍手も、皆、橋畔の水を動搖せしめたり。江東の名は、吾が憲政發達史に記念せらる可し。

●昔の江東は、武家を聯想す。本所は旗下の巢窟也。「割下水」の名は「殿樣」を憶起さしむ。

●東京にて、溝渠四通するは、唯だ本所あり。這般の風光、大阪にては、商業の脉管を爲す。東京にては、昔、武力の中心地たり。交通運輸の便、すべて、武門の爲に活用せられたる也。

●「御米藏」は、河に沿ひて、昔の面影を留む。藏前は則ち新日本の色彩あり。高等工業學校、此の敷地に建設せられ、江東と、相望んで、今、兩國橋の東西に、商工業の新世界を現出す。

●本所を、林のやうに、並び立てりし檣は倒れて、無數の小烟突、大烟突峙ちて、橋畔を俗化しつゝあり。

●兩國橋の東に、義經堀とかいへる小さき堀と橋ありて、或は八幡太郎東征の遺蹟地とか唱へしを、今、一面の廣地となり、橋畔には、日露戰の忠魂碑高く立てられ、公大山の題字を刻す。

●烟火は、兩國の凉味を發揮す。江戸の花の一とす。烟火の地點また變遷あり。昔のは、今の新大橋に近かりき。

其二

●兩國の「昔の趣味」の漂へるは、橋の東西に於ける藥屋なるべし。山鯨は熱くるしけれども、夏の土用に、江戸兒の味噌汁に入る。濃厚を以て酷熱を壓倒するものなるべし。

●此の邊の藥舖に、種々さまぐ\のものを陳列して、今の醫藥の進步に逆行して、依然として繁昌を飾りつゝあり。百々しいに至つては、殊に、其の極奇なるもの。唯だ橋西の「四ッ目屋」は、敎科書に、空しく舊記憶を再燃せしめて、兩國の一記念物となりぬ。東京に四ッ目屋無く、今、四ッ目屋は、唯だ大阪に在り。

●十五代將軍の出てし一ッ橋の屋敷は、日本橋倶樂部となり、濱町の停留場の前に在り。園池尙ほ當年の面

影を留む。此の地帶は、昔し、學者私塾の集合地たり。關東の學問を一新せし徂徠の蘐園も亦た此の地帶に在り。風物何となく、瀟洒たり。今、變じて攀柳折花の衢となる。淺野の降灰、眼前風景を一變す。

◉兩橋橋の東西、すべて浪人學者の淵叢たり。必ずしも濱町のみに非ず。本所も、傳馬町方面も亦た然り。武家の巣窟の近くして交通の便あるのみならず、殊に、隅田川に近し。「出門一笑大江橫」の光景、學者文人の雅懷に適せずんばあらず。

◉大川端の語、頗る趣味あり。風光一變すと雖も、尙ほ舊時の趣味を偲ぶに足るものあり。此の地帶、眼界濶く、兩國橋下、江東江西を大觀す。大川端は隅田川の風光に於ける一中心地たらずんばあらず。

◉大川端に、今、水泳場あり。大兒、小兒の顏、無數、西瓜のように水面に浮ぶ。場に面し、途を隔てゝ、×××あり。江西の知名の一旗亭とす。某日夕、某會員の一行、此に舟を艤して、上流に溯り、淺酌低唱、江上の涼風に浴するなり。

其三

◉吾が一行は、廿四人、和船二艘に分乘し、兵站船一艘を伴ふ。船は、紅白の帶を以てテントと爲し名古屋提灯を釣り廻はし、柳橋の美人、席上を斡旋す。

◉舟游は浴衣を宜しとす。風颸々として袂を吹く。冷々として江上の涼味を溯る。小盃を擧げ、徐ろに詼謔を弄し、胸を開き、團扇を閑却す。

◉屋形船の趣味、現代に廢たれたるは惜むべし。夏の江戶趣味に、再興せしむべきは唯だ形屋船のみ。

◉屋形船は、簾を透して、蘭燈の光あり、淡き人の影あり。微茫たる江流の夕に、緩く溯洄して往く。涼味は情味を載せて浮ぶ。

◉交通の發達は、動もすれば詩趣を滅却す。一錢蒸汽の隅田川を橫行するに及び、屋形船廢して船宿の名、尙ほ僅かに存す。

◉忙がしく飮み、忙がしく語る現代の人は、閑天地を隅田川の舟に求めずして、汽車に搭じて別莊地に奔る。別莊は軒を並べて、豪奢あり、清涼無し。假令、萬里

の長風、吹き到るとも、氣韻を齎らしら來ず。閑を求めて偏へに閑境を貪ぼり。却て忙裏に閑地あるを知らざる人は、風流を解するの人に非ず。

◉江戸は交通の發達無く、閑游に遠行するを得ず。舟を唯一の清樂地とす。涼を舟に求め、月を舟に賞し、雪を舟に見る。隅田川は江戸人の公開せる別莊ならずんばあらず。

◉今、東京を中心點として、海に向つて、海水浴場の大なる半圓を劃しつゝあり。海水浴場の在るところ、必らず別莊あり。此の別莊圈の直徑は次第に延長しつつあり。

◉吾輩は、東京の外に、海水浴場の發達と共に、內に、隅田川の舟游の趣味の流行を希望せずんばあらず。是れ、今の忙がしき都人に對しては、一道の涼味を、近く、紅塵堆裏に發見するの良法たる也。

其　四

◉舟に伴ふ美人は浴衣を著るを可とすべし。客の、浴衣揃の中に交はりて、いろ〳〵の濃艶ある裝を凝らせるは、草花の中に、造花を雜ゆるやうにて宜しからず。夏の夕の涼味は、夕顏花なるべし。

◉**「揃の浴衣」などいふは田舍者の爲さゞる事也。**舟游に、「揃の浴衣」は、涼味を添へ得る如し。

◉若し、客と美人と、すべて「揃の浴衣」を著けたらんには、又た一興なるべし。粹者ひとり粹なるを得ず、無粹者ひとり無粹なるを得ず、滿舟、すべて一色の「揃の浴衣」なるは、涼風を煽る所以ならずとせんや。

◉吾輩、嘗て、師宣の繪卷の舟游を見る。棹さす男の裸になりて、胸當に褌ばかりなるが、胸當も、褌も、めづらしき美しき錦繡を著けたるを見て、流石に、元祿の豪華を偲びたり。船頭は、極めて、いなせの好き男にてありたし。

◉舟中の女は、美ならざるも、善く歌ひ、善く語れば可なり。船頭は、船べりを往來する者なれば、徒らに、野卑なるは月下の畫趣を滅却せん。

其　五

◉船進み、景移る。如何なる好き坐敷にて、好き庭園

に對せんも、尅移りて景變はらず。船中の囑目の次第に進みて興の湧くに及ばず。

●坐して青山を看るも山變ぜず。坐して山水の動くを見るは車あり、車は忙はし。舟中、風景を賞するも、閑にして靜かに、優に興趣を味ひ得るの樂あるに若かず。

●舟中に見る隅田川の沿岸は、すべて美化して見ゆ。岸上に、紅塵の十丈なるも、船より見れば畫趣あり。家を越えて綠樹多く、墨堤の邊を過ぐれば、兩岸の別莊、清楚愛す可きもの少からず。其の多くは、樹色を點綴す。雲無く、まさに晩れんとする時、觀音堂に沿ひて、西天の富士山、夢のように峙つ。

●待乳山は、西岸の翠堆、第一とし。暮靄、樹を籠めて、半天の燈光、水に蘸す。これより以上、沿岸の家漸く野趣多し。

●河蒸汽の、時々、往來して、餘波、吾が舟を動搖す。興趣を破るべく、思はれて、實は、靜坐の單調を破りて、新趣を刺激す。其の奔波の、淘湧するとき、江水も亦た涼光を發す。

内藤湖南博士の「奉天訪書譚」及び幸田露伴博士の「江戸と江戸文學」とは共に次號本欄の讀物たるべし。

人物評論（三十一）

阪谷市長論



△阪谷芳郎男

文學博士　三宅雄二郎

備はるを求むれば阪谷男は元より足らぬ所がある、併し東京市長として最も適任といふ語を保留し置くとしても、頗る適任といふべきである、少くも先づ適任といふべきである。男の如く性格の整つたものは珍しい。身體はキヤシヤの樣でも柔術の一手で弱いものを取つて抛げる位の事は出來る。學識は人並以上に有り、單に經濟財政のみでなく、可なり廣く理解することが出來る。辯も相應に宜い、議會の答辯に魔誤つくこと

なくスラ〳〵と行ける。或る局面に當れば其事務は整理する、無駄の無い樣になる。そして公職を利用して儲け樣とする如きは全く無い。

君子にして才ある方である。今日迄殆んど順境續きであつたが、彼の樣な性格は順境續きの資格がある、自ら順境を求めずとも自然に順境となる。人が順境として與れるのである。色男金と力は無かりけりといふが、彼は色男であつて金と力がある、奇妙に都合能く生れたものだ。爵位の方から言へば内田子の方が順境である、同じく富豪から嫁を貰ひ、大臣と爲り、子爵と爲つて居る、併し人受けが阪谷の樣でない。市會が全會一致で市長に推さうなどといふ事は無からう。

阪谷男は當世珍しく揃つた人物である。我帝都の市長として相應し居るといふべきである、併し譬へば精好なる機械の樣で、隅から隅まで揃つて居るが、場合によつて如何はしく感ぜられる。日本で村田銃を使用したのは他でない。是は大體に於て佛國のグラーに據つたものだが、グラーは機械が精好に過ぎて戰場の實用に適せぬ恐れあるに因る。村田銃は稍之を簡單にしたものである。更に例を擧げれば男は名刀の如きものである。見て立派で又能く切れる。併し桐野利秋の使用した刀は普通の倍位の厚味にしてある、そしていふには、戰場で人を切つたりするはまだるい事だ、骨を敲き折れば宜いのだと、其重い刀は寧ろ鐵棒に類したのである。其名立たる猛將である事を察するに足りる。男の精好なる機械に似る事は甚だ結構だけれど、周圍の事情が其運轉に適して居るか如何か。

男は左程弱い人物でない。己れの守る可きを守つて動かぬであらう。男氣の缺け居ると思ふは誤つて居る、けれど性格の反對なる者を擧げるとなれば、故星亨氏の如きである、氏は容貌に於て男と正反對であつた通り、殆んど凡てに於て正反對である。男の長じ居る所は氏の長じ居らぬ所である。併し氏の長じ居る所は男に缺けて居る。星が一たび醜き體軀を運び出せば、それ迄騷しく議論して居たものも皆沈默して仕舞ふ。生憎氏は善くない事をしたものであつたが、若し善い方面に其力を發揮したならば隨分見事な結果があつたであらう。氏は實に生れ乍ら壯士肌のものを服するを得た。近來市會で力あるもの、森久保氏にしても、江間氏にしても、壯士上りである。壯士でない連中でも一通り二通りの綱で縛る事の出來ぬ手合である、中に温和しい人もあるけれど、活動の中心と爲つて居るのは星に似て小なるものである、星ならば威服するであらうが男は如何であるか、男に最も缺けた所は此野獸の樣なものを取扱ふ事である。奮闘するにしても正宗の刀では追付かぬ、鐵棒を揮り廻さねばならぬ。ダンマニーに比べて微弱なものだが、男は此微弱なダンマニーに制裁を與へ得るであらうか。唯此頃ダンマニー連も少しく己れの過ぎたるを悟り、温和しくし樣として居るらしいから、別段急に是ぞといふ事はなからう。併し慾に目の無い連中、事に由つて何をするか知れぬ、從來の經過に徵すれば男は隨分難局に臨みつゝあるものといふべきである。

併し男は順境續きであつたにせよ、可なり經驗を積むで居る、官吏な

り議員なり實業家なりの呼吸に通じ居る所がある、野獸の如きものを取扱ふに慣れて居らぬが、是とて左程變つた事のあるべきでもない、大抵に扱ひ行けばそれで濟むも知れぬ。且つ柔能く剛を制するともいひ、是の正反對なる調子に出る方が、鬼の眼に涙、案外氣の毒と感じさす事もあらう。只それが何の位であるかは分らぬ、先づ今の處凡て滑かである、案外生むより易く、理想通り、次第に着手する事が出來ないとも限らぬ。理想を事實にするには隨分歳月を要する、餘り市民の負擔を重くせずに、帝都を帝都らしくし樣とするには仲々骨が折れる。今後幾回かの選擧に重任し、一生掛る積りでやつて何事か見る可きことがあらう。遠大な計畫は遠大な計畫、手近な事もそれ〳〵ある、その邊に抜かりはない。財政整理だけでも差迫つた一仕事である、最早や極まつた事だが、水道なり、下水なり、少らず思料を要する、築港も仲々の仕事である。何から始め何の順序で進むか、流石思慮緻密だけに多くの誤はなからう。男に取るべきは如何に見縊つても市政を是迄より惡くせず、少しでも善くする所があらうと思はるゝ所に在る。何か手掛ければそれだけ幾らか改良である。小公園の事は實際の必要を感じたのであらうが、是も宜い事である、成るべく早く設くるが宜い。市民の負擔を重くせずとも、帝都で利益を得居る大小の富豪の寄附を奬勵しても、帝都の装飾を爲し遂ぐる事が出來相である。帝都の富豪は帝都に冷淡である。京都大阪よりも富豪が多くて、それ程市の爲に盡さぬ。此等は何程か勸誘したならば可なり應ずるものがあらう。大阪に一人で百萬圓を寄附し、現に公會堂を設けつゝあるが、斯かる事は望み難いとするも、似た事は爲し得べきである。其邊には富豪に縁があつて人受けの宜い男の如きは頗る嵌り役と思はれる、

男自らにしても國務大臣たるが宜いか、東京市長たるが宜いか、略ぼ見當は着いて居るであらう。今後大臣と爲る運命は稍々覺束ない。伎倆あるにしても事情が許さぬであろう。事情が許すにしても一國務大臣するよりは日本の帝都を整備し、市民をして住み易からせ、外人をして東洋の都と思はせる事が歴史上に傳はるべき事業でありはせぬか。男の人と爲りが必ずしも大臣に不適當といふではないが、東京市長たる方が實に適當だと察せられる。今後一生を市長の職に委ぬる覺悟で全力を致すが宜い。大阪市に植村俊平氏が市長となつて居るが、是も善い方である。東京、大阪の市政が改まれば啻に兩市の幸のみでなく、帝國の爲に賀すべきである、併し植村氏は既に辭表を出した、善い市長は兎角さういふ事になる。下らぬ連中に細工され、辭職して未練がましい事の無いのを切めてもの事にする樣では情ない次第である。男は自ら正心誠意を以て事に當るといふ。精神一到何事か成らざらん。全力を職務に注ぐ樣にありたい。

△阪谷君の爲に喜び且つ悲む

早川鐵治

阪谷は今日迄順當に來て居て少しも風波に遭つた事がない。父は有名な學者の阪谷朗盧である、僕とは同鄕だが相當の身代のある家だし、無論立派にして育つた、君は四人兄弟の一番末つ子なのだ、即ち育つ時には少しも貧乏といふ事を知らず、大きくなる時には非常に兩親から愛される。多分母はまだ存命の筈だ。一體末つ子といふものは何處でも可愛がられるものだが、君はそれに學問の質が好く、我々仲間で何時も首席を占めて居たから尙ほである、英語は何處で始めたのか、何でも箕作麟祥の塾へも通つて居た。そして東京英語學校から我猥抔と同級生になり豫備門より帝國大學の文科に入り、十七年に其政治經濟科を卒業したが、其時も一番優等で出た。卒業すると直に又大藏省御用掛かに命ぜられ、間もなく高等官六等の奏任四等といふ待遇を受けた。是が又異數である。普通には高等官七等の奏任五等といふ待遇を受くべきので、大學を卒業して洋行をして來たものでなければ一躍高等官六等にはなれぬのである。添田壽一の如き、洋行して歸つて來て、それで高等官六等に出た。尤も英國に三年位行つて來たからとて大して偉くもなるまいが。併し相場は左樣極まつて居たのだ。間もなく主計官書記官となり、參事官になり、局長になり次官になり大臣になつた。大臣を止めてから初めて洋行し、それから不思議に二度も洋行して居る、が大臣と爲る前には一寸も洋行はしなかつたのだ。

大藏省では當時阪谷、添田と並べ稱せられた、添田は學才到底阪谷に及ばぬけれども、矢張り小供の時には神童といはれ、學校を出ると間もなく英國に往き、ケムブリッヂに學んで歸つて來た。添田は阪谷に比べれば性質が派手である。歸つて來てからは官仕して大臣秘書官になり、松方さんの議員操縱掛になつて居たが、それが憲政黨內閣の時に、最早や日本は政黨內閣になつて仕舞つたと速了し、憲政黨內閣に降つて大藏次官となつた。其頃阪谷は局長で添田の下に使はれて居た。ところが賴みに思つた憲政黨內閣は瓦解する。添田も已むなく一度は其職を去つたが、如才ない彼は其後又臺灣銀行總裁から興業銀行總裁となつた、即ち食ひ外しはせないけれど、今後大臣となるやは疑問である、是に反して阪谷は辛抱して、一時は添田の下に甘んじて居たが、遂に次官になり、大臣になり、男爵に迄なつた、其間格別苦勞もせず、新聞にもいたく反對も受けず、段々に出世した。所謂鰻上りに上つたのである。が果して國務大臣となつたのが仕合せであつたろうか、否國務大臣たるの器であろうか。氏は政治家たるよりも寧ろ事務官であろうと思ふ。君は大藏省の活字引であつた。何でも能く知つて居る。凡そ活字引としては此樣な人は又とあるまい。

曾て君が大藏大臣となつた時、同鄕の友人が相會して常盤に氏を御招待した事があつた。その時犬養に勸められて僕が祝辭を述べさせられたが。僕は起つて斯ういつた、今夕私は喜と悲との二つの情を以て阪谷君を迎へる。同鄕同學であり又同級生であつた阪谷君が今日大臣と爲られた事は非常に喜ぶべきである。然るに悲とは何事であるか。といはれるであらうが、それには所以がある。君が行政官で居れば事務官である。未來永劫其地位に危い事はない。けれど今大臣となれば最早や一個の政治家

である。すれば今後政變のある時には閣僚と去就を共にせねばならない。何時かは大臣の位置を去らなければならぬ。君は大藏省に甚だ必要な人である、それ故其大臣を去るといふ事が遺憾である。是が私の悲む所以である。敢て玆に喜と悲との情を以て御挨拶に及ぶと。

果せるかな程なく豫算問題で山縣伊三郎と衝突して野に下つた。扨て野に下つて活動するかといふに、是迄が順境にのみ育つた人だから俄に野武士と駒を爭ふことは難い。又實業家と机を並べて事業をするのも六かしい樣である。で此數年間薩張り氏の活動を見ない。それが此度計らずも市長となられたのは阪谷君の活動の機を得たのである。是は大に祝すべきである。東京市も亦、男爵であり、一箇の大臣である阪谷君を市長に得たのは意外にも好い人物を得たので甚だ喜ぶべきである。が僕は矢張り前に於けると同樣、君に對して此喜に加ふるに又悲を以てするのである。それは此東京の市政はボス制度になつて居る、星亨が往年亞米利加に往き、ニューヨークのタマニホールのボス制度を見て來てそれに倣つた以來左樣なつて居る。何事もボスに相談せなければならぬのである。處が此度も阪谷君はボスに推されて市長になつた。即ち中島ボス、森久保ボスに推された。此中中島ボスは多年市政に關係して來て居るもの、森久保ボスは又三多摩の壯士頭で、子分の爲には死生を賭してもやる。所謂長脇差の俠客である。左樣いふものを相手にして果して無事安穩に操縱して行けるか如何かが疑問である。若し操縱出來ぬとすれば市長を罷めるより外はない。又市は君が大藏省に居る時とは違つて、色々穢いことを聞かねばならぬ、我々は阪谷男と違つて貧乏ものの腹に生れ、初から雜誌をして居る。閥族以外に立ち、隨分實業家にも伍すれば野武士にも交る、それでも穢いことを聞くのが兎角厭である。近來實業界にも御疎遠になり、而かも政界に立戻つたといふのも畢竟此樣な理由からである。我々の如きものですら猶ほ且つ穢い事に堪へられぬのに、況してや阪谷君の如き、それを見、それを聞いて果して辛抱が出來るであらうかと疑ふ。

君は何も今社會に出て働く必要はない、澁澤男の愛娘を貰つて居つて生活の憂もない。然るに何を苦んで此樣な處に飛び込むか。職が無いといふのなら大學にでも出ればよい。大學にでも出れば適れの教授である、其處で相當の穗積の樣に卒業生の世話をして後進を引立ててやるも宜からう。又貴族院にでも入つて紈袴の子弟でも教育してやるが宜い。貴族院には人がない。三島彌太郎の如き、大した學問もないけれど、只豫算が幾らか分るといふだけで彼の通り調法がられて居る、何も實業界に經歷あるでもなく、官歷といつても僅に北海道廳の技師であつた位のものが、抽んでられて正金銀行の頭取となつたでないか。それに比すれば阪谷は豫算も實に能く分れば官歷も高い、而かも貴族院に入るべき人格も備つて居る、それは阪谷も三島も等しく新華族だが、でも阪谷は其生立からして紈袴の子弟らしく育つた人である。三島が貴族院でもてる位なら阪谷は必ず大にもてると思ふ。それ故一方仕事を見附けたいふ點からは御出度いといはうが、一方君の始終の爲には御氣の毒だと考へる。

尾崎を無能だなどとけなすけれど、それでも尾崎はまだ是迄永年多くの陣笠連中や野武士共を操縦した經驗がある。其治才の果して有りや否やは知らぬけれども、併し色々案はある人だ、が其案を實行せんとすれば勢ひ鈍くなる。それ故力が出せぬのである。之を思へば阪谷氏の最後も亦彼れ位で濟むであらう。學識豐富、行政の知識もある君を、ムザ〳〵尾崎よりも惡からうと言はせるのは殘念である。それかと言つて君が自ら勇を奮つて事をやるなら必ず失敗する。それ故僕は先年氏を常磐に迎へて喜び且つ悲むだと同樣の辯令を以て、此度も亦御挨拶に及ぶのである。

餘談ではあるが、大藏省に於ては嘗て添田、阪谷と並べ稱せられ、何れが先に大臣となるかと言つたものだ。其頃僕がいふには、添田の氣質は天下を取る人である、先づ添田が大臣となるべきである。阪谷は事務官として永く大藏省に止まるべきである。大藏省に無くてはならぬ人であると、が其順序はあべこべて阪谷が先に大臣になつて添田は此先なれるものやらなれぬものやら覺束ない方が多い。次に稱せられたのは荒井賢太郎と若槻禮次郎とであつた。が荒井が一日上だから勅任官にしたいけれど餘地がなく、止むなく朝鮮にやつた。今では其處に度支部長官かなんどをやつて居る。所が其下に居た若槻は、其後大藏次官になり、貴族院議員になり、錦鷄間祗候になり、今度は大頭公に跟いて歐米漫遊に行つたから、此後第三次の桂内閣が作られる時には屹度大藏大臣の位置を占める。實に運は妙なものだ。

その次に稱せられた大藏省の傑物は神野、片山であつたが、其後神野は印刷局長位で餘り出世せぬ、片山は今日本銀行の局長である。大した發展もない。此中阪谷が一番早く榮達したが、併し是から先の運命は大抵分つて居る。すれば今後は若槻、添田である。若槻が早く大臣となるか、添田が又入つて來て活躍するか。併し今分では若槻の方がより多く資格を備へて居るらしい。人の運命といふものは妙なものである。

内田と僕とも曾ては同列に居たものであつたが、其後内田は全權公使になる。大使になる。子爵になる。外務大臣になる。最早や今日では世間で僕を内田とは相撲にして與れまい。是も何かといへば僕が憲政黨内閣に忠勤を勵だ結果である、又大隈伯の爲に十有餘年苦節を守つて政黨に顔出しせなかつた爲である。若槻や若くは仲小路廉が大臣の望があるのに早川鐵冶は今頃政黨に入つて陣笠で居る、之を見て若い人達に言ふが、主取りを大切にせなければいけぬ。それから辛抱せなければいけぬ。段鑑は此早川に在る。今やつと政友會の新米の陣笠で、小さくなつて居る。久し振りで又政界に出て徐ろに風雲を眺めて居る。

阪谷は僕より年は二つ上だが、併し學校では同窓であつた、同郷で同窓だから僕は最も能く君を知つて居る、恐らく此邊に居る人で、君の人物事情を知ること僕に越すものはあるまい。

△其前途やトすべきのみ

草莽の人

今度阪谷が東京市長になつたので、大いに市政を刷新するだらうなどと期待して居る人もある模樣だが、之が非常の間違だ。阪谷といふ人はさういふ人ぢやない。阪谷はいはゞ能吏で、事務はよく執れる。又勉強もする。頭腦もなか〳〵よい。人物は品がよくて、惡るい事をする人でない。官吏としては先づ申分のない方である。然し人物が何となく小形で、いはゞ固つたやうな處があつて、人の上に立つて、いろ〳〵の人を使つて仕事をさせる事は得意でない。分り易くいへば、次官局長としては理想的の材だが、大臣としては器が小さいやうに思はれる。况んや今日の東京市といふものは仕樣のないもので、市會とか參事會とかの議員などには隨分如何はしい奴が多いから、此等を相手として仕事をするなどいふ事は、到底も阪谷に出來る事ぢやない。今日の東京市長としては先づ第一に、惡るい事をする奴は、警察力を利用してピシ〳〵縛り上げて了ふといふ非常の權力と斷行力とを持つたものでなくてはならぬ。然るに阪谷にはさういふ事を望むことは出來ないのである。

私の考ふる所によれば、市役所の役人共からは、今の市長はコセ〳〵して駄目だといふ惡評を受け。市會や市參事會からは、理屈や議論が多くて自分達の言ふ事を聞かぬといふて攻撃され、双方から板挾みに攻められて、一二年で辭表を投げ出すことになるだらうと思ふ。尾崎ならば少し位攻撃されても、それを辛抱して居ることも出來たが、阪谷は正直だから、到底も長くは居たゝまれないだらうと考へる。要するに彼の前途や卜すべきのみで、氣の毒なものと思ふ。

人或は彼の後立として澁澤があるから、澁澤の後援で以て旨くやるだらうなどいふ人もあるが、澁澤はもういはゞ歴史的の人で、今日ではあの位の人が澤山ある。勿論澁澤は人物として實業界に珍らしい人で、巾着切のやうな事はせぬし、又あの人の世話になつた人が實業界に多く居るから、實業界に於てなら、まだあの人の力があるかも知れぬ。然し實業界と東京市政とは又自ら別だ。私は澁澤の後援があらうがなからうが、阪谷は到底も成功すまいと思つて居る。

△新市長阪谷芳郎

鵜崎鷺城

阪谷男が東京市長として適者であるか、不適者であるかは事の成敗を見てから軒輊するのが至當で、市長の職に著いてから間もない今日彼れ是れ批評を加へるのは少し早くはないか。世間には案外甘く遣つて退けるだらうと云ふものも有らうし、不成功に終るだらうと頭から判定するものも有らうし、凡そ議論は見方によつて如何樣にも立つ。併し東京市政の實情から推して阪谷男の立場はなか〳〵容易でない、暗礁もあれば波瀾もある、一つ違へば難船するかも知れぬ、此險惡な海に船を入れた阪谷男の自信と勇氣には感服するが、男は何程か自分を樂觀して居る氣味が有るように考へられる。

常盤會の森久保作藏が市長になつて貰ひたいと交渉に行つた時、阪谷

は極めて無雑作に承諾した。世間では不思議に感じた位である、森久保も恐らく案外に感じたで有らう、最初から阪谷を市長に推す氣はなく、胸に一物の有つた森久保の策は此一諾によつてスッカリ破れたとすれば小氣味が好い、併し阪谷が森久保等の腹の底に鬼が住むとも蛇が住むとも知らずして引受けたのは詰り將來に一の禍根を殘す譯になる。其事は後に述べるが、兎に角常盤會でも清和會でも阪谷を推すことに議論が纏まつた。而して阪谷の方には格別六箇敷い條件もないらしく、唯だ自分の理想を行ふことが出來るならばといふ世間並の極めて漠然たる辭令に過ぎなかつた。

阪谷はこれまで洋行して、外國の都市の實況も視察したで有らうし、書籍の上でもいろ／＼此方の研究をしたで有らうから、都市政策について、相當の抱負と理想を持つて居るに相違ない、現に男自らも日頃市政に趣味を有すると公言して居る。それは何樣の理想抱負であるか、誰も未だ直接聴いた者はないが、無論實地に行つて見ようといふ考へであらう。處がこれが大きな間違である、市長になつて思ふ存分經綸の行ひ得らるゝものなら文句のない話であるが、今の東京の市政はそれが出來ないような組立になつて居る、尤も阪谷が斷じて行へば鬼神も避くといふ膽力と決心とを以て掛れば格別だが、果して阪谷にそんな大氣魄が有るだらうか。

これまで藩閥以外の地から一番餘計に大臣を出したのは東北と岡山である。東北から後藤、原、齋藤、平田、岡山から菊池、犬養、小松原、阪谷、どちらも同數だから面白い、殊に岡山は三人とも文部大臣で阪谷だけ大藏大臣であるのは奇である。阪谷は岡山の大儒朗廬の第四子で生れが生れだけに漢學の素養がある、初め箕作秋坪の三叉學舍で英語を學び、東京英語學校から東京大學文學部に入つた。其頃の文學部は今と違つて哲學、和漢文の外に政治、理財の學をも敎へたもので阪谷は其科に居た。十七年同じく卒業した者の中で少し立身したのは添田壽一と久米金彌位のもので濱田健二郎は大阪商業會議所の書記官が止り、平沼淑郎は早稻田の講師、棚橋一郎は郁文館の校長、季家祐二は知事まで漕付けたが死んだ、其外の者は死んだか活きたか分らぬ。阪谷が出世頭になつたのは一番で大學を出たのと、男振りが好いのとで澁澤の令孃琴子さんに見染められ穗積陳重の媒妁で金緣婿となつたのが餘程與つて居る。最初から大藏省育ちで主計官、參事官、主計局長、次官、大臣と順序好く進み、二十年以上も此省の飯を喰つた丈けに財政のことはなか／＼明るい。官務の傍ら專修學校、海軍主計學校、慶應義塾、帝國大學などで財政經濟の講義を擔當し、其方の著書もあつて、自分ではオーソリチーを以て任じて居る、殊に去年瑞西に行つて世界の有名な經濟學者の會議に參列してから非常な天狗になつたらしい。

第一次西園寺内閣の大藏大臣は戰後經營といふ大問題を控へて居るから、甘く財政上の伎倆を示したら阪谷も大分估券が附いた譯だが、財政計畫の大違算から内田山の肝癪玉に觸れて中途で躓いて以來何だか運氣が惡くなつたようである。第二次内閣の出來る時も本來なら阪谷に相談の

一つもあるべき筈だが、西園寺は阪谷に一瞥も與へないで山本を引張り込んだ。是れは井上に遺憾した譯でもあらうが、一は阪谷では大きな屋臺骨を背負つて立てぬといふ考へが有つたのかも知れぬ。

江木冷灰博士は最初の西園寺内閣を昔婿内閣といつて『無復君王怒偃師、錦棚新架太平時、登場多是金鍋婿、蕭艇朝衣吏猶眉』といふ詩を作り阪谷や加藤を嘲つたが、阪谷を尋常一様の駙馬扱ひにするのは少し氣の毒である、學問もあるし、頭も好し、意見もあるし、議論をさせても引けを取らぬ、伊藤、大隈のやうな口達者を對手にしても立派に遣つて退ける。大藏大臣としては一度も議會に立たなかつたが、次官局長の時議會での說明振りは振つたものだ。若槻禮次郎もなかなか手際好く遣つたが、これまで大藏省の政府委員中何といつても阪谷を以て白眉とする。併し人物は大きいとはいへぬ、大臣としてもヤハリ属僚根性が抜けぬと見え、何から何まで自分で仕事をするといふコセコセした風が有つたから配下の者は餘り喜ばない、隨分陰口を叩く者もあつたらしい。阪谷が罷めて松田の爺さんが來ると、大藏省の連中は前大臣に比べると器が大きいと賞めたものだ。尤も阪谷は大藏省に長く勤めて隈から隈まで知り抜いて居るから自然斯うした態度になつた譯だらうが、大臣の貫目は確に乏しかつた。

夫れ以來阪谷は大分長い間官界から遠ざかつた、尤も一生浪人をしても差支ない丈けの財産もあるし、澁澤といふ守本尊を控へて居るから物質上の心配とそ無けれ、精神上の煩悶は無いともいへぬ。漸く五十に手の届いた許りで樂隱居をする年配でなし、一廉の力もある身で無爲に過すのは苦しいに相違ない、といつて、妙な立場になつて居るから近い將來に大臣になれる見込もない、第一澁澤にしても可愛い婿をいつまでも埋木にして置きたくない。其處へ東京市長といふ椅子が出來たから、阪谷も二つ返事、澁澤も遣らす氣になつたらしい、とはいへ澁澤も心配になると見え、自分で市の關係者に婿のことを頼み廻り、歡迎會の一つも開かせんと景氣を附けやうとして居る。

如何に財政上の手腕があるとて、吏務の經驗があるとて、法學博士男爵の肩書があるとて、腐敗し切つた東京市政を調理する上に大した効能の有るものでない。市の多數黨たる常磐會は海に千年山に千年の古狸で惡い事にかけては金箔附の箸にも棒にも掛らぬ代物の寄合であるから、大概の者は手古摺て仕舞う。最初尾崎を市長に迎へる時は君でなければならぬ樣に云つたが、爾後十年間の有様は何うであつたか、踏んだり蹴つたり馬鹿に仕放題である。尾崎も癪に觸つたであらうが、西洋人を女房にして生活に困るといふ弱點があるし、根が野武士育ちだから狼のやうな手合の中に交つて十年間辛棒したが、阪谷は大學を出てからトントン拍子に進んだ倖運兒で、未だ曾て難局に立つた經驗がない、人間が未通に上品に出來て居る。迚も貴公子肌の阪谷と破落漢肌の連中とソリの合ふ譯はない。それなら阪谷は鷹揚に構へて盲判を押す人かといふと、それも出來ない、といつて醜類共を巧みに操縱し自分の言ふことを聞かせる丈けの機略材幹もない。表面は一人の異存もなく阪谷を推した體にな

つて居るが、裏面にはイキサツがあつて市會の中には初めから阪谷を喜ばない者も少くない、醜魁森久保も今分は據所なく好市長を得たなど丶猫を被つて居るもの丶、段々本性を暴露して陰に陽に阪谷を窘め出す算段を廻らす、また阪谷にしても尾崎のように喰ふに困る身分ではなし、執着心が強いといふでもないから、罷めることになる、爾うなるとタマニー黨は我が計成れりと自分等の自由になる千家尊福なり關係筋の田健二郎なりを擔いで後釜に据えるような結果にならぬとも限らぬ。從使四年間無事に任期を勤めるにしても、結局は常磐會の傀儡たるに過ぎぬ。お飾的市長としては肩書も好し、形貌、態度、人格も備つて居るし、政府筋との交際も多いし、實に立派なものである。また實際をいへば伏魔殿のような東京の市長は餘程飛離れた大人物か飾物かでなければ難かしい。

△前市長と新市長

角田眞平

前市長と新市長とに似て居る所がある。尾崎君と稍々同じ年代に、一方は國會議員、一方は政府委員であつた、共に議場に經驗を積んで居る其間に似た所がある、何で左樣いふかといふに、今度新市長は小さな政府の代表で議會に臨む、國會の方は何でも九十日の議會に開會の日は初は七十日、それから六十日、五十日、三十日、甚しきは二十幾日又は十幾日ほかない時があつた。休みがあつたり、一日置きにあつたりで日數は減つたけれど、兎に角阪谷男は斯樣な場數を經て大きい攻擊に會ふ事や質問される事には慣れて居る。市廳では每月又は隔月に市會が開かれ。其處で只小さくさいなまれればならぬのだが、男が果してそれに堪へらる丶か如何か。是が疑問である。議會の攻擊に慣れ、大太刀に對した人が今度數の澤山な小太刀と對陣が出來るか如何かであろが。今迄對陣し慣れた上に今日迄四十年も東京に住居していかにも六かしい市會と市會議員の事情を知りつ丶、男に今新に入つて來られた事故。餘程奮發して掛られた事と思ふ。此點で私は甚だ樂みに思つて居る。一方市長たると一方政府委員たるとに又似た所がある。で私は男の將來の手腕に望を屬して居る。

尾崎君は永年從事して居たが行政にはどうも不適任な人かと思ふ。君は政府攻擊の少數者の代表者として論戰するには極めて珍しい勇者である私は殆んど卅年間親しく知つて居るがそれは珍しい勇者である。けれど行政の仕事は早くし樣とて早く出來ず、又遲くし樣としたものを急に早くする事もある。事をするには其影響の勘定が必要である。即ち好い影響があるか、それとも故障があるかを十分に觀察するが肝腎である。舟を着けるには棧橋が入る波をよけるには防波堤が必用である此用意がないと舟は沖にまご／＼する、港は役に立たぬ又場合によつては逃げ道をこしらへて其波を一方に逃がして置いてそれから仕事をするこんな工合にあらゆる方に響く處を觀察して扠て仕事をすべきであるのに、尾崎君に

は斯様な複雑なる呼吸を解せぬといふ譯か、理想があつても其理想を遂行する順序の研究が足らぬ是れが世間でいふ其無能といふのではなからうか。

仕事は仲々今日世間で言ふ様てはなくして居る。が是は尾崎君の腕に依つて爲されたか、或は只尾崎君の名に依つてのみ行はれたか、其處を世間で知つて居るものだから無能呼はりされたのである。乍去頭はどこ迄も頭であるから手足が働ても夫れでよろしいのです只頭らしい所を見せぬといかぬ尾崎君が將來行政の長官となる場合には大に此に注意すべきである。

尾崎君は平日人の權利義務を重んずるからそれに留意する好い考を持つて居る。が如何いふものか仕事の上になるとそれを忘れる。人を設けば各々其所管がある。助役が三人あれば三人乍ら仕事が違ふ。課があれば又其所管が皆違ふ。然るにフイと考へると此人と思ふ人に他の管轄に屬する仕事をもさせる。例へば下水工事に於ける田川氏の如き。電車市有に於ける田川氏の如き、此等の仕事は盡く田川氏の管轄内でない。又部長を擱いて直に課長に用を吩付け、部長の知らぬ間に課長々市長だけが仕事して居る事がある。或は課長を擱つて直に掛長に用を吩附ける事がある。此様いふ事は極めて行政上の禁物である。自身が直接に下僚に接近して色々聞いたり用をさせたりする事は差支ないけれど、一應それを其管轄の長官に通じて置かなければ不順序である。仕事の上に又行政上に大影響がある。是が腦中を統轄して互に勵みて仕事をさせるには不利益な事である。所管の頭になつた人に責任を持たせて、之に多くの指圖は要らぬが。只極めて必要な質問を歴次するのが大切な心掛である。

自身で仕事をするといふ、左様な煩はしい事をする要はないけれど、彼れが好く出來たが何故好く出來たか、彼れが案外早く出來たが何處か手が脱けて居りはせぬか、後れるが何故に後れるのか、而かも彼れは豫算よりは大層安くなつたが、それで宜いのか、安くなるには何處か惡い處があらう。例へば鐵管の場合だと、惡い材料を用ひたのでないか、地上に現れる限りは好くても地中に伏せる處は惡い材料を用ひはせぬか、此様な點を平素注意せなければ駄目である、此様な注意を能くして居る人に見られゝば、その善く言はれた場合には非常に主任者が愉快に感ずるし、反對に突込まれた場合には非常に怖れる。是は徒に市會に於て口論紛爭するよりも功がある。が是は有らゆる方面に於て能く要領を飲み込んで居なければならぬ。けれども尾崎君には此飲込方の呼吸に始終遺憾に思はれた點があつた。

上級官廳には東京府がある。又其上に内務省がある。或は農商務省は水源の山林等に就いて關係がある。又山林や土地等には宮内省がある交通機關電柱地下線等には遞信省がある然るに此問題の解決を先きにすべきに其の點に對して不用意の爲故障を生じて懸案四五年を經て要領を得ざりし事もある、又日露戰爭等に於ては市民は莫大な負擔をして海陸軍へは固より外は英吉利に對し、亞米利加に對し、將た伊太利に對して、其他各方面に向つての歡迎會慰勞會其外の事で非常の金を費つて居る。此

時に於て東京市の地位は其宮内省との間に極めて高尚に認められ、特に抽んでたる都市の市長といふ一の取扱を受く可き、左様な先例を作り得る時機であつたと思ふ。殊に先きの文部大臣正三位の尾崎君は都合よき位地であつたのである。然るに此機會を見て逸し了つたのみならず、東京市と宮内省との關係に於ての仕事が圓滿ならずあつた事は、遺憾甚だ此上ない事であつた。而から是が直接に市の仕事をする上に不便を感ずる點の多々あつた事である。要するに若し仕事をしやうとするなら前市長尾崎君には、極めて老練なる兄弟を持ち、此兄弟と有らゆる協議をして仕事の遂行を試むるといふんでないと、又同一の事を將來も繰返すだろうと思ふ。

此機會に於て私は一寸添へて云つて置く事がある夫れは世間には我慢して似せて大人物に成りたがる者がある例せば市會の議場に於て議案中の十が十を、我慢して陰張り物言はぬ事、及び偶に人の知らぬ事を一年に一度位は言つて見て感心な人だと言はれやうと心掛ける者もあると聞く。是が大人らしく如何にも大人物だと見えるさうである夫れ故我慢して左様いふ風の修養を爲し居る人がある。又東洋人の癖として、多く知らぬ事は沈默し、人の談話中にも唯ニタ〳〵笑つてごまかして濟まして居り、自分の知つた事丈け偶にチヨイ〳〵口を出す。之を繼續した人が十人中八人迄感心な人だといふ名前を受けることに成功する。斯様な人物の成功する時代はまだ極めて日本の幼稚な時代である。固より議案を見さへすれば非難論爭するは面白くない夫れは別物である。けれど大小の議案に於て要領を得た手痛き發言をするは極めて必要である、中にては百萬圓のものに一言の質問も入らぬ事がある之に反して只の百圓に對して大に云はればならぬ事がある又或る事柄には仕事をする上に、それが出來上る迄極めて秘密にすべきであると考へたならば、少しも他に洩さずして大に働き、人に叱斥された時にはそれに甘んじて堪へて行く、それが幾年か後に必ず國の爲とか市の爲とか、小にして言へば黨派の爲とか團體の爲とかなるものがある、此時は一時他の叱斥を受ける位は平氣で居る事が必要である。此區別をさへ能く知るなら口を開くと開かぬとの標準にて解かる筈である。今の内心かけて歐米流に發展させぬと東洋流の小形な英雄が澤山出來て仕舞つて仕様がない是では小さな事を知つて居ては英雄でなくなる譯であるから我慢して小事は知らぬ顏をしてゐねばならぬ困たものである。尾崎君は自分で強いて拵へるでなく、大人らしく様子の出來て居る人である。そして極めて大きな事にのみ口を切り、小事は我慢して人の出來ぬ事を從來辛抱し付けて居る。今は事實を一々擧げるは煩しいから擧げぬが左様いふ人である。そこで此の仕方は外觀上には立派であるが、内容、即ち事實の上て仕事をせんとする今日の激しい時代に通用が出來ぬ事である、人を使ひ切れぬ仕方である。廣く大小共に頭に理解し置かねばならぬといふ觀念に遠かる仕方である決して是は市吏員を督勵する所以でない。此點に早く注意を拂へば仕事を擧ぐる事が餘程能く出來たと思ふ。併し君に宜い事には、如何に多く罵られても濟まし得る事である。憚なく獨斷する事が出來る。挫敗して

も言かずに居れる。是は極めて勇者の態て宜いと思ふ。只將來私の今言ふ樣な心掛を持つならば行政長官として成功出來樣と思ふ。

次に新市長の方面からいふと、凡ての上に於て極めて眞面目に仕事する人である。今度は又極めて眞面目で、市會中に何派があろうとも、其何れにも私せず。只善い仕事をさへするなら人は必ず贊成するであろ〻惡い事であつたら又必ず反對するであろうと考へてするといふ意氣込みである。又市會議員の方でも敢て何派といはぬ。何派といつても或は何會といつても單に町名とか村名とかいふ位のもので、內容には何も阪谷派といふものがないと同時に阪谷嫌ひといふものも亦無いのである。卽ち是も市長と同意見で、善い事ならば贊成し、惡い事なら反對すると、今の處では定まつて居る。蓋し是の繼續時間は一年であろう。一年立つと市長なるものが甚だ不滿に感ずる事が出來やう。市會なるものが市長に甚だ嫌足らぬ感を生ずる。此時が卽ち忍耐すべき場合である。卽ち此時が初めて市長の趣味を理解し、事實の市長になり得るや否やの問題の解決する時である。世間では市長をいぢめると現に言ひ、市會議員が多く自分の意思通の仕事をさせ樣とすといふ樣な噂さがある。斯樣な私の量見のあるらしくいふのは、多くの場合に於て誤り傳へられるのである併し今迄の內には時〱そんな疑ひを受けべき事も見えた。

前市長が多く傀儡視されて居たといふのも全く誤り傳へられて居るのである。自己の理想、計畫は、尾崎といふ人の頭の中に始終持つて居たのである。只それが常に周圍の事情を考へ、必ず出來上ると順序を研究してから發表するのでなく、先づ出來るであろうとして計畫をするのである。處が、それが周圍の事情で出來ぬ事が分るに及び、不得止或る者を變更して出す事になるから、人に使はれる樣に見へる、それで傀儡とも見えるのである。此樣に理想を以て仕事をし掛けるのが尾崎君の遣り方である。必ずしも傀儡ではない。

若し市長にして一年中開き居る市會に對し、不平を持つて去るとすれば市長として一年間暖い椅子に倨つて仕事をする事は出來ぬ。如何樣な人にでも出來ぬ。新市長が此問題に逢着するのは是より一年を經過して、の事である。そして一年を經過して後に阪谷男の市長としての眞價が初めて分るのである。併し根氣と正實は最終の勝利であるから其心掛けさへあれば成功する。

そこで、大問題の殘つて居るのは下水問題である。是は度々私がはなした事だから今多くは云はぬ能く調査をした結果更に莫大な金の要ることを明瞭にして夫れから甚だ恐れ多い事乍ら、上聞にも達して此費用には御上の御沙汰が多少共にあるといふ順序である萬事が都合がよろしい又物産、製造、何物をも持ち居らぬ東京市、而かも帝國の代表たる此都市に向つての補助額は、他の都市に向つての補助額よりも多くすべきものである事を、政府並に議會に諒解して貰ふが必要でなかろうか、水道は私が改正局長中傍ら局長を九個月余兼務し居つた事がある、此間に水源涵養の山林の處分、十五區內に於いて百七十餘哩の鐵管敷設の不足第二擴張の計畫等をしたが、是れ又莫大な金を要する。けれども米に次ぐ

水の供給は是非とも遂行せなければならぬ。而かも金を入れた割合に水料を取上ぐる事が出來るのである。そこで大體水に就いての敎育が市民に行渡つて居らぬ。故に東京市は水道のみならず下水道の如きものなり其他市設の有らゆる者に對して講義を一個月一回位四年以上の小學生位のものにする必要がある、是は市吏員でも宜ければ其他又何人の手を借るも宜い市民に取つては大切な問題だから斯う迄せなければならぬと思ふ。

次には築港問題である。是は屢次調査して屢次延期となつて居る。此築港論には二つある。即ち起り來る問題は市の經營と民間の經營とである是が必ず起る。築港は市でするが當然と思ふ、が其實行には四千萬圓又は五千萬圓の金を要する。之を如何するか、早く出來上つて設備を經濟的にする事は、極めて營利的なる民間の仕事の眼目である。それ故必ず此問題に逢着し、出來上つて便利を得るといふ事等を計算せなければならぬ時期が到來しやうと思ふ、其時は理屈がよくていつ出來るかといふのと事實の必要を先きにするとの問題が起る。先づ之を頭に入れて置かねばならぬ事と、又之を何れに決するも早急に有効なる部分から着手し可成其部分から實地に働かせるといふのも研究上必要な問題である。

私は新市長が早く多くの理想を發表せぬ様に希望する。先づ其體質をすつかり理解し、病源を詳にした後に刀を下し、投藥するのが名醫のする事である、それ故暫くは市の實體に付き委しく其構造を知り、經濟狀態を究め、實行し得べきや否やを考察した上で、初めて見込を立てて發表して貰ひ度い、此等の事を等閑に附し、周章しく自己の理想を發表すると、其爲に其事を解決せなければならぬ義務を生じ、多くの煩惱を爲して實益は甚だ少い。それ故決して自己の所見を早く發表する要なしと思ふ。右様の譯を以て、私は築港等に對し、如何にするが宜いとの注文を早く言はぬ積である。

其他交通機關の改良等は言ふ迄もないが、茲に差當り實行して害のない事がある、夫れは外でもない暑中休暇で、是は七月廿一日から八月の末日迄の間に適當に取ること、又七月廿日迄と九月一日とよりは、矢張り八時に出て四時に引くといふ仕方を取り、前に十日間、後に十日間丈け、時間を平日通りに爲して時間を利用したいものである。此二十日間の時間の倹約は。總ての事に好影響を持つと思ふその他市長に非る私から内部の改革に付いて就任早々新市長に注文しては、よくない事とおもふから云はぬ。以上は甚だ多く話したが、突然の御尋れ故不用意の用語が多かつたであろうと信ずる。

△阪谷男の長所短所

無名人

●先づ阪谷男の長所をいはうならば、學問もある。識見もある。人物は固よりいゝ。が、あの人の短所といふべきは、大局に通ぜぬといふ事であつて、兎角部分〱の事がよく分つても、全體に通じての打算を爲

ることがある。之があの人の非常の缺點と思ふ。

●それから阪谷男は非常の心配性の人である。之は物事に忠實な所からも起つて居るけれども、餘りにクヨ〳〵と考へ過ぎる結果はどうも斷行力に乏しくなつて、詰り勞多くして効少しといふ事になり易い。

●阪谷男は學問もある、識見もあるから、自分でよく案の立つ人である。然しあの人が其案を以つて下僚に望む態度に至つて甚はだ感服出來ぬ節がある。下僚と意見を交換するもよい、又議論するのも差支ない。然し之を實行する際には上官は何處までも上官らしい威嚴を以てせねばなるまいと考へるが、あの人の意見はどうも下僚と對立關係になる。それがあの人の弱點と思ふ。

●世の中には道具になる人と、道具を使ふ人と二通りの區別があるやうである。阪谷男は實に有用の器で、錐ならば尖鋭の錐、小刀ならば鋭利なる小刀であるが、どうも道具を使ふ人でないやうな氣もされる。

●阪谷男が東京市長の如き局に當つて果して成功するや否やは、只事實をして之を證明せしむるの外はない。

△新市長阪谷男

田川大吉郎

◎阪谷男は尾崎氏よりも後援者が多い樣である。阪谷男の初めて參邸されたのは七月十三日、而して其十六日には、早くも日本橋俱樂部で、日本橋區名譽職諸君の、熱誠なる歡迎會があつた、而して月の二十八九日には、市實業界の先達者が、又歡迎會を開くとの噂である、此稿が世間に現るゝ頃は、多分、其賑かなる、親睦の宴は既に濟んで居るであらう、尾崎氏は黨界の人だが、市長になつた其頃は、既に改進黨を去つて居て、改進派の人に、白眼を以て看られたし、去りとて政友會との關係も親昵ならず、一部には熱心なる同情者もあつたが、多數は概して知らぬ顔の半兵衛さんで濟して居た、故に尾崎氏の就任當時の光景と、阪谷男新任の今日と對觀すれば、そこに著るしき炎涼冷熱の差がある、而して阪谷男に後援者が多いだけ、それだけ、阪谷男は大變に面白く、やり善く、其位地を感じて居らるゝだらう。

◎尾崎氏は有名なる雄辯家であつたけれど、市長在任の九年間は、殆ど總ての公會に出席することを避けて、所謂公開演說は全く試みられなかつた、僕の如きは、氏の公開演說を慫慂して(僕の未だ市に入らざる時)而して拒絕されて、失望したこともある、氏が、たま〳〵演說されたのは、今年の春頃、立憲青年黨の發會式に演說せられた只其一次であつたらう、其時、氏は、たまの出演だから、大に歡迎せらるべしと内心に期して出かけたらしい、然るに登壇早々、簡單の聲を聞いて、意外であつたと語られ、且つ、時勢の傾向が大に變じて居ると述懷されたことがあつた、これ位な尾崎氏は演說されなかつたのに、阪谷男の演說の伎倆は尾崎氏に劣る、誰も阪谷男は尾崎氏以上の演說家とは思つて居ない割合に、阪谷男は頗る好く演說せらるゝ、現に、尾崎氏は小學校の開校式に

屢々臨まれたが、いつも枯淡沙の如き式辭を朗讀さるゝだけであつた、而し一回も演説され無つたが、阪谷男は其式辭を携へながら場に臨み、而して朗讀はせずに、演説をされ、而して其式辭は形の如く其學校に殘して還るといふ氣の利いたやり方をされた、而して羅馬字會、而して斯道會近來の公會が、男の演説を得て、其儀容が潤飾しつゝあることは、亦一種の流行である、以て阪谷男の意氣の盛を想ふべしだ。

◎かゝる傾向から察すれば、氏は遂々餘程の流行兒と爲らるるに相違ない、それが永久に續くか、當分だけの事かは分らないけれど、兎に角、流行兒と爲らるべきは明かである、尾崎氏に較べれば又非常の反襯である、尾崎氏の時代には何となく寂しかつた、別して實業界との連絡が如何にも疎淡であつた、殆んど其連絡といふべき連絡が無つた、阪谷男が此點に於て至大の後援を有し、直接間接の交渉を有せらることは、東京市に取り驚くべき面目の轉化である、男の在任中は、確に市實業家の帽影笑聲が、目立つて市長室に掩映換發するであらう、但、實業家の來訪は多からうが、外國人の來訪は、尾崎氏の時ほど繁くはあるまい、尾崎氏は如何に考へられたか、動もすれば其主力を外國人の交際に注いで居られた趣がある、米國のエリオット博士が見えた、尾崎氏若し在らば、率先して其歡迎の宴を張られたに相違ない、而して空しく其事なく、所々の興筵歡待に、日々忙殺された博士は、到頭、東京市一夕の饗に與からずして去られた、博士に於ては損得は無い、東京市としては頗る面目を損へた大事であつた、但、これは新市長に對して毛頭云々する關係は無い。

◎借、演説者は演説に躓づく、誰でも其長ずる所に躓づく、これは致し方なき自然の約束である、僕は、阪谷男に對し、阪谷男があまり喋舌り過ぎはせぬか、或は言ひ過ぎはせぬかと氣遣つて居る、例へば日本橋に魚市場移轉の問題がある、市に於ては夙から當業者の歎願を容れて、稍專門的に其方法を調査して居る、今や其調査も殆ど出來上つたといふ噂もある、そんな折柄だから、男の、市場問題に對する發論は、頗る影響がある、言はなければならぬ場合なら兎も角、成べくは、之を控へ目にして置かれた方が、東京市に取つても、男自身に取つても、いろ〳〵便宜であつたらうと僕は思ふた、但、これは僕の杞憂かも知れない。

◎男は日本に有數の鴻儒の家から出られた、從つて其思想にも、演説にも、或は儒流の香味があるべく豫想せらるゝ割合に、男の演説は、其様な特質が少い、此點から言ふと、澁澤男の演説は、其措辭に於ても、其思想に於ても、頗る儒的である、但、簡淨勁拔を以て儒的の文章、儒的の演説だと言ふならば、澁澤男の演説は、豐潤秀麗を以て勝つて居るのだから、そこに多少の註釋を加へねばならぬ、阪谷男のは、矢張、近世思想の匙加減が相應に加はつて居て、其措辭は絢爛とも日へず、勁拔とも日へないが、婉順暢達な所がある、而して聲の調が餘程山本藏相と類似して居る、然も山本藏相の聲は、幾分濁つて居て、阪谷男はズント清んで居る、それだけ頗る聞き易い。

◎日本橋俱樂部での演説の中、市長の交渉委員が見えた際、公平無私、

只至誠を以て局に當る、然も我が覺若し市參事會に容れられず、市會に容れられなければ、直に去るあるのみ、それで宜しいかと念を推して置いたとあつた、洵に旺んなる御決心である、結構なる御趣意である、何にせよ、官界一流の傑である、而して前大藏大臣である、吏務には精通して居られることは勿論である、即ち其多年の經驗と、英敏なる才氣を以て、熱心事に當らるれば、遠からず其治績を擧げらるゝは疑い無い事であらう。

◎僕は只これだけを申して置きたい、其外に多く言ひたく無いが、然らば其治蹟を何れの方面に向つて擧げらるゝことを望むかと曰へば、言ふ迄も無い事柄だが財政的方面である、東京市の財政は世上に頗る附の惡評がある、僕は其惡評を信じないものである、即ち、東京市の財政は、人の謂ふ如く亂れて居ない、先づ〳〵整頓して居る方であると思ふて居るものである、然しながら其豫算の形式は如何にも複雑にして、幼稚にして、耻かしい程である、僕すらが既に此憾みを抱いて居る、況や阪谷男の多年の經驗と、新來の英氣とを以て看られたら、そこにいろ〳〵不滿の點、不備の廉、改良すべく、刪正すべく、一擧にして其面目を改むべき、優越の方法が甚だ多いことであらう、僕はそれを望む、それをさへ旨くやつて戴けば、暫らく外の事功は後廻しにして置かれても、東京市の信用のため、貢獻さるゝ所の莫大なる、男の市長的手腕功業は、頗にして一代の尊敬信頼を博さるゝであらう、僕は、男の爲にも、又東京市の爲にも之を切望するものである。

日本橋倶樂部で、男が以上の如く、説合はざれば去るあるのみだと曰はれた時、代議士高木氏は、去らるゝ必要は無い、其時は、寧ろ市會を解散さるべしだ、吾々二百萬市民は、男のために後援をすべしと演説された、又、他日のために之を記憶し置く。

△現在に得らるゝ最良の市長

中野武營

一國の首府の市長といふものは頗る位置の高いものである。それだから其れには其位置相當なる人格の人を得なければならんのである。其の首腦に其人を得ずば啻に其市政の擧らんのみならず一國の體面にも關係する。聞く所によれば英國の倫敦市長などは其位置尊敬といふものは英國の首相に次ぐ程のものであるといふ事である。之に反して亞米利加などの都市は、どうも餘り市長に重きを置かぬやうである。それが爲めに自治といふものが完全に擧らんのである。日本は英國の方に近いか米國の方に近いかといへば、今日までの有樣では兎角米國に倣うて居るやうに思はれる。夫れ故に市長の如きものは只給料をやつて使うて居るものだといふ風に心得て、いはゞ恰かも使用人視して居る。市民が少しも尊敬を拂つて居らぬ。自治といふものゝ眞髓は、箇樣な事ではいかぬので市民が市長を歸依信用して居なくてはならぬものと考へる。

然るに今度阪谷男爵が市長に選擧せられて、叉本人も快諾を與へたといふ事は、獨り東京市の爲めに祝すべきのみならず、叉日本の爲めにも賀せざるべからざることゝ思ふ。男爵は學位の肩書を持つて居らるゝ人で、學識の豐富なるは吾々が言ふ迄もない。叉學校を出てから以來大藏の局に當り、終には大藏大臣にまでなつた人であるから、財政經濟の事は最もよく承知せられて居るに相違ない。叉海外の事情にもよく通じて居る人である。而して從來の品行といふものは一點の間然する所なく、實に溫厚淸廉の君子である。此人が此局に當つてやる以上は、市政は日を逐うて擧つて行くに相違ないと思つて居る。

然し斯くの如き人を得た事を喜ぶと同時に、只此人にのみ打任せて了ふてのみ置いては駄目だと思ふ。市政は一人で出來るものでない。市會議員市參事會員は勿論、一般市民が市長を尊敬して之を助けるといふ事でなければ何事も出來ぬと思ふ。一體からいふと、市會議員、參事會員等に先づよろしい人物が出て、其土臺が出來てから、市長によき人が出る順序であるが、今日では之がアベコベになつて居るのである。

吾々が從來窃かに憂へて居つたのは、東京市の市會などはどうも黨派的になつて、市長は動もすれば傭人の如く蔑ろにされる傾がある。かゝる場合には、よい人が奮發して市長の椅子に就かうなどとは思ひも寄らなかつたが、今度阪谷男爵が自ら奮つて起たれたのは、蓋し市政を刷新せんが爲めに、先づ自ら其身を投じて市會、參事會の刷新をも爲さんとする覺悟であらう。此勇氣には吾々實に感佩する。從つて市會、參事會等も其意を體して自ら刷新することを圖らなければ、折角迎えた所の阪谷男爵に對して申譯がないのである。然し市會、參事會が自ら刷新するといふ背後には、一般市民が自ら市政刷新に注意するといふ事が無ければならぬ事で、將來市會、參事會等の議員には、市民の中より有力にして淸廉なる人を擧げることを大いに勉めなければ、此男爵の奮發心に報ゆる途てないと思ふ。

東京市の市政の上に於て將來施設を要すること枚擧に遑あらずであるが、其中の最も大事業とすべきものゝ一つ二つをいへば、先づ下水道の布設である。之は是非やらなければならぬ。東京市がまだ糞尿の始末をつけて居らんといふ事は實に野蠻の狀態を脫せぬものといはなくてはならぬ。禽獸でさへも一通り自分の糞尿の始末をするので、糞も人の見えぬ所でやり、叉其あとには土をかけたりする。聞く所によれば、高等動物で自分の糞尿の始末をせぬのは、猿だといふ話だが、思ふに猿は木に棲む奴だから糞尿を始末する觀念がないので、地上に棲むものは大抵其觀念を備へて居る。然るに都市に棲む人間にして糞尿を家毎に溜めて居るなどいふ事は殆んど禽獸にも劣るものといはなくてはならぬ。東京に來る外國人などは、頗る之を嫌いものにして、野蠻の風習として嘲うて居る。米國などでは先づ下水の始末を第一にし、下水の設備が出來てから人家を作ることになつて居る。そして下水の設備の爲めには非常なる費用をも惜まぬのである。帝國の首都たる吾東京市に於てまだ此下水が出來ぬといふ事は實に恥かしい次第である。東京は最早日本の東京にあら

ずして、世界の東京であることを考へなくてはならぬ。日本に於て世界の人を待つ所の座敷である。其客座敷に於て糞尿の始末も出來て居らぬといふは、頗る日本の躰面にも關すると思ふ。而して下水の設計は已に市區改正事務局に於て出來て居る。夫れ故に市民が一致して新市長を助けてやることにすれば之は近き將來に於て出來ることゝ思ふ。之は總ての衞生の上にも大いなる關係を有つて居るのであるから、斯くの如き總ての本になる事業に着手するといふ事は市政の第一であると思ふ。

其外家屋の建築制度の如きも嚴重に定めたいと思ふ、今の東京は頗る茫漠として餘り廣過ぎる。而して商賣區といふものに、何も商賣をせずに一々出稼するものも住つて居る。此等の區域を充分に立てゝ商賣區には商賣人のみ住ふといふやうにし、商店を縱横に建てゝ、市の體面を充分に飾りたい。又道路も改築して、其等の商賣區に適應するやうなものにせれば都市たるの體裁をなさぬと思ふ。數へ來ればまだ〳〵澤山あるが、要するに市政の甚だ多事なる時であるからして阪谷男の新市長になられたるを機とし、市民皆力を併せて援助を與へ、以て其目的を達せしめなくては、其恥は他人の事でなくして市民自らの恥となると思ふ。殊に吾々實業家としては市政の事に關係が厚い故充分力を盡して行かうと思ふ。

要するに自治體といふものは富者と貧者との混合體であるからして、動もすると、富者と貧者との感情の衝突があつて、自治の精神を誤ることが往々ある。而して此衝突を避くるには、富者と貧者の双方の事情を盡し、富者は貧者を憐み、貧者は富者の力によつて充分自己の勞力を捧げて市の繁榮を圖つて行くやうにしなくてはならぬ。即ち恰かも一家同居のものと思ふて互に力を盡さなくてはならぬ。

阪谷男爵は學問といひ識見といひ、人格といひ、實に二百萬市民の充分なる尊敬に値する人で、現在に於て得らるる最良の市長であるから、市民一致協力して此市長を援助し、以て東東市の繁榮發達を圖らむことを衷心より希望する次第である。

△阪谷芳郎男

林田龜太郎

人物を評論するといふ事はなか〳〵容易の業でない。殊に先輩を評論するなどいふ事は甚だ不遜な事であつて、自分の敢てしない事であるけれども、若し斷つてとの事であれば、自分が平常見聞した一端をお話して其責を塞がうと思ふ。

阪谷君は人も知つて居る如く、漢學者の阪谷朗廬の子であつて、大學に居る時も、ずつと順境續きで餘り苦學した人でない。隨つて苦勞人でない。それだから人間が大變穩和に出來て居る。然し大學に居る時の成績もよし、温厚篤實の君子風の人といへば、あの時代前後に於ける大學卒業生中の一二の人であつたらうと思ふ。

それから大學を出てから大藏省に入つて、ずつと大藏省に居据り、終

に大藏大臣までになつた。其財政上に於ける功蹟は私にはよく分らないけれども、政府委員として議會に出て、委員會や議會で、上下兩議院の隨分いぢけた財政上の質問に對しても、其答辯明快流るゝが如くやつてのけられた成績を見ると、今までの政府委員中一二の人として指を屈せねばならぬと思ふ。今まで政府委員として名を成した人を擧げて見ると白根内務次官、阪谷大藏次官は先づ第一であらう。無論近年には若槻とか仲小路とかいふ立派な人が出て來たが、此等の立派なる人の中でも阪谷君などは特に目立つ人であつて、議會に關係ある人々は皆驚歎して居つたのである。

又阪谷君は大變に英語が旨い。だから外國人との應待などにも尾崎君に餘り劣りはしまいと思はれる。演説もなか／＼上手で、田尻さんの感化を受けたのであるかどうか知らんが、諧謔などを交へて上手にやる。テーブルスペーチユ家としては日本の中でも一二の人であると思ふ。

東京市の一番大切なことゝいへば、日本帝國も同樣、先づ差當つては財政の事である。而して此人は大學を出てから、其方面をのみやつて來た人であるから、今度東京市長となられたのは、最も適材を適所に置いたものといへるのである。

阪谷君は已に學校に於てよし、行政官としてよし、而して其家庭や品行の點は無論莫しである。世界の模範的紳士といはるゝ英國の紳士に對しても少しも耻ぢるなき立派な人物である。簡樣な立派なる人を東京市に戴いたのは、東京市の爲めに幸福な事である。が只一つ阪谷君に惜む所は苦勞といふ事に餘り逢つた事がない事で、東京市の如き矢釜しき舅、小姑の多い處に於て、其盤根錯節をどういふ風に切り拔けて行くか之が眞に阪谷男の利器を試めす試金石であると思ふ。然し自分は今迄の行く處として可ならざるなき阪谷君の履歷から推しても必らず成功すべきことを信じ且つ祈つて居る。

△新市長に對する希望

子爵 秋元興朝

私は明治二年から四十年以上東京市に住んで居るけれども、東京市政には冷淡な方で、別に今まで深く心を用ひたといふ事もない。從つて新市長に對する希望といふやうなものも餘りないけれども、此頃世間が新市長に對して希望して居る其希望を聞いて見れば、隨分無理な、殆んど空論と思はるゝやうなものが多いのに驚くから、私は寧ろ新市長に對して世間の希望などに動かされぬやうにして貰ひたいとの希望を持て居ることを一言しませう。

一體政治學とか政治論とかいふやうな學術上の研究ならば、時としては理想論も空論も必要の事があるかも知れぬけれども、東京市政の如き實際問題に對しては、私は少しも空理空論を容るゝの餘地がないと信じて居る。

然るに世間には斯らいふ希望を有つて居るものがある。即ち東京市は

散漫でいかぬ。もつと集密的にして三階建にしなくてはいかぬなどいふ議論がある。此議論には私は反對である。といふのは詰り出來ない相談と思ふ。私は專門家でないからよく知らないけれども日本と西洋とは建築の様式が餘程違はなくてはならぬといふ話だ。例へば窓を一つ作るにも日本の如く風や地震の多い國では西洋のやうには行かない。家屋を建てるものは誰でも非常の場合は別として、平常は吾々が住んで安心して居らるゝものでなければならぬ。然るに日本では若し三階以上にして平常安心して居らるゝやうな家を建てやうとすれば非常に金がかゝつて、如何に金利を安く見積つて四朱か五朱と計算しても、家賃が大變高いものになつて、到底も住む人はあるまいと思ふ。だから私は之は空論として反對して置く。

又道路はコンクリートでなければならぬといふ説もある。之なども專門家の話によればどうかと思ふ。歐羅巴は光線は薄いからコンクリートでもよいが、日本は光線が強くて、夏などは反射して暑くて困るといふ話だ、夫れ故に此れなどもやつてよいかわるいか疑問の事と思ふ。

日本の國是は維新以來開國進取であるから、僅かに消極主義を執る必要はないが、日清、日露の大戰役には金もかゝり、總ての機關も膨脹して來て居るから、所謂華を去り實を採るの方針になつて來て居る處に、東京市のみ前にいつたやうな、實用に適せぬ、疑問に屬する外形丈けの施設をするといふ事は、一國及び一般民間の方針と矛盾しはしないか。矛盾しては、國の不經濟である、故に私は之を希望しない。

私の希望をいへば、さういふ外觀上や疑問に屬するやうな事業は斷然廢して、もつと實益のある實地の事をやつて貰ひたいと思ふ。例へば下水道の如きものを、秩序的に早くやつて貰ひたい。又荒川の開鑿の如きは東京市の事業なるや否やはよく知らぬが、あゝいふ實害の明かなるものは是非共早く除かねばならぬと思ふ。

要するに外觀上の事や、疑問に屬する事は例令世人の希望はあつても斷然やめて、偏へに實益を起し、實害を除くことに全力を盡して貰ひたいと思ふ。是が私の新市長に對する希望である。

九月一日に發行すべき

秋期大附錄號

の豫告は卷頭に在り

和歌

○　後藤むくろ

さみしさに草豆の蔓をひきあぐるそのつるさきにつきし花かな

どん底にわれをひきずりゆかしめよすゝり泣きゆく山ほとゝぎす

あゆみ來しこの青海もこゝろよくわれを迎へず默し居るなり

夕ぐれの空氣にゝじむ赤き火をさびしがりつゝ吸へる煙草よ

とろとろと溶ろけて赤き泥いろの濁れる海にそゝぐさみだれ

○　小澤嘉一郎

夜の秘密つゝみて遠くこみどりの樹立はねむる月光のなか

夏となればまた東京の蒼き夜が幻のごと魂をいざなふ

さらば都！かくてもろくもうばはれて故里(くに)へかへりしあはれさ思ふ

河とほく霧にかくれてみえぬ夜を故國へかへり來涙しつゝも

眠り誘ふ皐月まひるの靜けさに思ひやるかな君がまなざし

いたづらに荒凉のゆめつゞけつゝ生くるいのちの淋しや皐月

○　町田不破

山青し間もなくねむの花咲かむ妻より少し疾く散りし花

彼の山の麓に露のゆるるさま君がふるへて持てる杯

思ひ出づ銀座の街の石だたみあゝ亡妻の輕き足どり

何一つ買はでかへりし三越もとはの別れとならしめしかな

今日もまた白きベッドの片端にさびしく笑ふ妻を見にゆく

○　山田清美

散るよ花　童貞ひくく讚美歌す脩道院のいしだ

ゝみかな
老い給ふ母に烈しく物言ひぬまがつみの口よ咀呪はれてあれ
高熱にわが唇は乾き果つ濕しに來よ君は涙に
くろがみをめて梳き給ふ一時は君何事も忘れてまさむ
わが戀の淸くてありし今日までが僞りの如思はれて來ぬ

○　林　久男

日をさけて咲くと聞きてはなつかしみ黃なる花見に野に來りけり
少年のゆめ悉く破れ去りし痛き心に野の草を踏む
霧深き谷間を走る汽車の窓につらき悲しき身をもたせける
峽にわく白き雲よりなほかるき心を欲しと切に思へる

○　齋藤微花

ひか〳〵と麥の穗さきを泣き濡らしはたまた笑みて散る晩春の雨

松の花きいろに光りこぼれ落つかの山脈に旅たゝむかな
うすべにの花がこと〳〵戀ひごゝろあつめて光る六月の晝
ほのあかく胡頽子が光れるはつ夏のあしたすゞしく渡るかぜかな

○　前田黃昏

麓よりうす青色に晴れて行く御山もよろし初夏に入る
するどくも瞳を白く吸ひつくる五月眞ひるのがらすの破片
白々と繃帶なせる吾が足のうすくらがりに見ゆるも淋し
灰色に曇れる空のやるせなさやるせなきまゝくるゝ一日

○　鶴尾春醉

白の法衣すがたすなほに裝ひぬそのすなほさに自らが泣く（四國路にて）
おとなしく野こえ山こえ旅ゆかむ旅はつれなきものときくきく
日は黃ばみ灘のうねりぞかき濁るわが泣くとこ

ろまだつくるなし
海はとろみ鳥しのびかに舞へる頃空はかなしく
澄み渡るかな

○ 岡本翠月

青き夜の若葉の青の溶け出づるさわやかさにも
匂ふガスの灯
通夜更けて消えもゆくなる唱名を聞けばまぶた
がふるひ來るかな
手をとりて脈は止まれど目の開く聲のするかと
までど冷たし

○ 田村胡春

忍びかに霧ふる夜を鳴く鳥もさびしや人を思ふ
こころは
草踏めばわがうしろより匂ひいづ蓬の花もさび
しいかなや
手に染まる蓬の香などなつかしみ河原の露に濡
れてかへりぬ

○ 桃山星の介

やすらかに皐月の夢は桃割を結ひて眠りし妹に
くる
梨の花香もうすうすと咲きにけり別れし人と酒
の酌みたや

○ 櫻井秋人

酒の香のやゝにうすらぐ居酒屋の眞夜中すぎを
吾ひとり飲む
いとはしくされど流石に捨ても得ずふるふ手に
またとれるさかづき

○ 紀水櫛

あさ晴れや口漱ぐ水の冷たさにけふ五月よとお
もふうれしさ
青草にひたと臥したるわが皮膚に息をかよはす
初夏の土

○ 戸田露葉

青ざめし夜の磯邊になきしやくる小さき花あり
浪のたつ間に
いろ白き君がうなじにほんのりとあせする初夏
の白日のかげ

○ 竹村天双

涙なく別れしことの忘られて今日もそれのみ思
ひつゞくる
見渡しの河原につゞく山蔭の若葉夕づくこの日
淋しも

○　寺川紫皐

持てるすべて捨てはてし後の安けさを知れど願へど思へどされど

縁日の店の莚の古雑誌ふと我が歌を見たるさびしさ

○　池尾紅花

善光寺かいだん廻りをするごとく手探ぐりに入る夜の我が室

物足らぬ心地に今日も又暮れぬかくてゆきにしわれの半生

○　越野花聲

この呼吸一と度止めば死すといふあまりにもろき命なげかる

うつし世にかゝる月夜もあるものか故知らずして心清かり

○　山村芳郎

砂ゆけば見知らぬ人のあとを追ふ心地に海の青き音かな

青々と海に浮びてくれてゆく春の岬のうす櫻かな

○　鹿納春吉

紫陽花の日に色さめてゆくごとく我が衰ふる日のまさり來ぬ

ひそ〳〵と若葉若葉にこもりつゝ青き風そと吹くは悲しき

○　石黒流花

風青き木立盡くれば紺青の安房の港の赤き帆が見ゆ

皐月雨暗き帳場に物思ふ淋しき友と物語りする

○　三島穗明

君は街に行き給へわれは赭土の畑に青き蓬摘みなん

夕されば一もと梢しよんぼりと立てるが上に星光るかな

○　米田春調

しらしらと闇に光りて流れゆく浪花の街の初夏の川

静けさは物見やぐらに人ごみをはなれてひとり灯をばみる時

○　山本實

青波の騒ぐ海あり山の子はその海思ひ淋しかるらむ

旅にゆきし友を思へば靜やかに夜の流れきて悲しうなりぬ

○　　　　　　　　葉山綠也

ひと時は心なごみぬ暮ぎれの立三味線のくれなゐの音に

さめざめと泣き倚るべき人もなく流人の如くつゝましく居る

○　　　　　　　　大木多喜男

合歡の花さびしく咲かば故鄕のはらからわれを思ひいてまし

物におびえするどくなりし神經にいたいたしくもにじむ夏の日

○　　　　　　　　松島落果

松のかぜ夕日にひとときつばくらのとびかふも憂し春のくれかた

松かぜのあをむころともなりぬればわれのいのちのさびしくあるかな

○　　　　　　　　訥　鷃

ふと君に逢ひて語らふ目を落し靴もて碎く春の土くれ

ふとの熱おもひのほかに去りやらず外は緋桃の咲きつゞくかな

○　　　　　　　　井筒千律

初夏の港の暮れよ靜やかに烟を吐きていまだ出ぬ船

幾日も髯を剃らざる男來て米の値を云ふ淋しき日かな

○　　　　　　　　佐久間夢塔

しとやかにベツトに臥する佛蘭西の女を思ふ若き合歡の葉

春雨に幼き合歡の葉はぬれて嘘晞する夜のしつけき

○　　　　　　　　三木海鳥

少年は銀笛などを鳴らすかないろいろの花の匂ふ夕べを

むらさき野樹にも草にも夏うごくある夕ぐれを人戀ひわたる

○　　　　　　　　森　青　栗

若き日の泣場と定めし古里の芝川裏も春はゆくらむ

夏來ぬとステツキとりてつといでぬ銀座の宵の人込のなか

○　菱若葉

うつら／＼夢をおもへばかなしくも夢におぼる
ゝ吾れの衰へ

○　和田信義

何となく望を得つる心地して枯れし林に木蓮の
しろさ

鶯色の荒蕪の中にほがらかに光る湖あり雲のう
つれる

○　田中かい子

あれもこれも泣きたきことの多くある夕ぞ人よ
早くいねかし

○　清野りじあ

夢のよな淡き思ひ川晩春のうすらあかりによみ
がへりくる

晩春はかなしからずやさらさらさら風ににごれ
る黄なる落日

○　野々村淡霧

夏姿乗せ行く車その護謨の輪も輕やかに暮るゝ
黄昏

○　須賀紫浪

落葉松（からまつ）の木立をすかし鉛色に六月の湖鈍く光れ
る

乾きはてし白き河原をしつとりと濡らす小雨と
三味のつれ弾き

○　横田湖峰

あながちに快樂（けらく）の日をば願はざりわが官能のに
ぶれるまゝに

○　中田夢十

まつわれる女の肌に新らしき色見出でたり我は
愛せん

何事もうつろの我に障なし淋しさのみが悲しか
れども

○　尾木雨聲

ゆゑしらぬこのかなしみにまとはれて生くるが
われの運命なるべし

○　石井保

思ひ亂るやゝうれそめし麥の穗にほのかに雨後
の日光のさせば

○　山下源吉

こしかたを顧みるとき色も香もなしと知るとき
涙流れき

○　安藤竹露

うす黄に松の花ちる夕暮は三味の音こそなつかしまるれ

○ 二木富太郎

海つゞき明るき野邊を行く汽車に小さきいのちをしばしまかせむ

さくさくと少女ふみ行く白砂のちさき響に佗はゆらぐかな

○ 今泉碎巖

ノラよノラよマグダよわれも家出せむされどふたゝび故郷（くに）に來べきか

○ 江間成文鳥

淋しくて獨り歌をばうたはむとビオロンの糸買ひにゆくかな

○ の総子生

旅に一人盞とるもうら悲し名知らぬ海のやゝに暮れ行く

綠日の街を歸りて我が宿の戸に倚り桐の花の香を吸ふ

○ 平林毛孔子

天地にひとり住みたきわりなさにつられていそぐ北の國へと

○ 森一雄

力なきまなこひらけば木立みな曇天のもとかぜなびにけり

○ 蒲池翠花

あはれ出てゝけふも行かんか美しき吾運命をつなぐ市場に

○ 中里富

月見草黄ろく赤く咲けるありこの六郷の夏の川風

○ 吉原浮愁

さびしやと君のいひける百合の花うすら白みて月の夜に見ゆ

○ 石橋三男

故郷の傾く家に知らぬ子の數多居並びわか老いを見る

○ 高桑朝雨

ちら／＼と若葉踊れば波に似て筑波の晴るゝさつきは來る

○　　　　　　　　福田雲城

いとせめて心靜かにしばらくを物思はゞと裏山に入る

○　　　　　　　　小川流葉

泣きぬれて松にもたれて見おろせば騷がぬ浪のさらに悲しき

○　　　　　　　　守野午後草

ゆふぐれのつかれし空を裏街の子等にはやされ過ぎ行く鳥

○　　　　　　　　菊池一紅

はぐれたるわが魂を夏といふ恐ろしきものがさいなまんとする

○　　　　　　　　原赤穗

事々がみなあたらしき悔となり心の上に落ちきたるかな

○　　　　　　　　田坂幻花

臥てあれば時計の音もさゞめきもたかぶる耳に痛き夜かな

○　　　　　　　　野口青鳥

悲しさもはた嬉しさもわれといふ男にかゝる旅のなつかし

選者云ふ、原稿輻湊のため、本月も掲載するを得ずして次號に廻しゝもの十に七八なり。諒察を乞ふ。

應募和歌は
東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

閑古鳥

高田蝶衣選

閑古鳥四時絶やされぬ言ふ爐の火　月精
僧衣の糊もどる日々雨の閑古鳥　同
下山捷徑森怖れもす閑古鳥　同
閑古鳥木移りに枯るゝ病あり　同
幾日解かざりし笈しらべもす閑古鳥　同
親子杣の行方閑古鳥の知れるのみ　銀竹
秘め畚荷贓品と見る閑古鳥　同
斧初めし夜の夢怖る杣や閑古鳥　同
鐘餘韻樹肌に泌むや閑古鳥　同
其尋ね人ならん逢ひし閑古鳥　同
昔千坊の殘礎見る杉間閑古鳥　圖桑子
遠夜見舞に餅呉れて閑古鳥鳴かずやと　同
閑古鳥僧連れて寄進の木選みに　同
閑古鳥入二三屍守る晝燈　同
断夢惜みて神庭を歩す閑古鳥　雨春草

めくれ色紙を蟲なめし閑古鳥の房　同
木株拜む宮なるを閑古鳥鳴けり　同
階ふめば猿泣きのして閑古鳥　美田
打ち傷を洗ふ草汁や閑古鳥　同
うしろ向きに登山もするや閑古鳥　同
黄に照るは雨後の濁瀧閑古鳥　天梅
夜な女影見る瀬はこゝや閑古鳥　同
夜泣樹は蛇の嗅や閑古鳥　同
草痒う過ぐる裏溪閑古鳥　明分
閑古鳥宵鐘に燈炊ぐ習　同
佛地探りし復命や院に閑古鳥　同
閑古鳥蛇忍ふ足絡み草　三光鳥
閑古鳥灘見峠裏松高き　同
遺旨體して郷黨に見ゆる閑古鳥　同
岩上の人誘ふ花や閑古鳥　茄豆路
夜泣止の蛇骨拾ふや閑古鳥　同
熊も來て盤掘る溪や閑古鳥　同
閑古鳥岩毎に名ある景に住む　困郎
閑古鳥僧都の死相月に見る　同
閑古鳥書院の月に秘謀あらん　同
閑古鳥樹下彫しものゝ甕　柳子

火中無難に阿倉ありぬ閑古鳥　同
斧木片奇に高飛ぶや閑古鳥　同
閑古鳥地すべりし溪に供養あり　哭鬼哉
屋根石の落てる凶言ふ閑古鳥　同
閑古鳥雨絲過れる島の寺に聞く　石羔
腰綱に崖崩す閑古鳥啼けり　同
砂喰ひの鮎となり閑古鳥に去る　寢覺草
墨流して呼ぶ雨ぞとも閑古鳥　同
神斧觸れけん岩襞や閑古鳥　不寢庵
面縛の王迯られぬ閑古鳥　同
靄深う書窓うつ葉あり閑古鳥　三石
谿の崩れに雲ゆけば風や閑古鳥　同
あやしう釣る谷間の橋や閑古鳥　歌男
夜は街に灯もなき湖畔閑古鳥　同
閑古鳥友としよし書の古哲　耳山
閑古鳥闇に話さぬ神秘かな　同
神の湖濁れば雨と閑古鳥　破句迷
圖を按じ觀を求む山閑古鳥　同
閑古鳥雲吸ふ杉のそゝり立つ　紫明
小厮具して風穴も見つ閑古鳥　同
蛆の家へ水上げ車閑古鳥　杜城

よべ落ちし岩や山田に閑古鳥　同
曉の雲にぬれ鳴く閑古鳥　竹美
袖言葉のころこゝらや閑古鳥　同
白檜谷出て紅檜原閑古鳥　東寧
閑古鳥某の僧の浴瀑と聞く　竹梅
三夜の夢を占ふ御籤閑古鳥　茶の門
兩釆邑劃す地域を閑古鳥　楊杞子
山鹽の掘り盡し跡や閑古鳥　神風
山颪に光りものして閑古鳥　蒂柿
溫泉香の身を浸す夕霧閑古鳥　雨霽人
寺格倒れも歸化僧に活きぬ閑古鳥　百花
湖心平ラ透く竹藪や閑古鳥　雲洞
秣ふ間も帶ぶ大命や閑古鳥　詩泉
をちこちに瀧の音して閑古鳥　稻塢
死出の山は知らず此山閑古鳥　稚句郎
一山に二寺は治せずよ閑古鳥　吐生
木の竹に生え負けし谷や閑古鳥　觀葉樹
巖に縋りて伏す葛花や閑古鳥　青栗改 蘇枋子
閑古鳥桑山蝶の高飛べる　湖峯
魔に歩まぬ馬夜更けたり閑古鳥　一箕
避暑の湖畔雨多し裏山閑古鳥　天行子

僧の鼻赤しと鳴くか閑古鳥　鬼水

課題　七夕雜題　八月五日〆切
　　　秋の雲　　九月十日〆切
規定　一人三十句限。用紙半紙　淡路假屋在釜口髙川蝶衣宛。
　　　中央公論俳句と表記の事
注意。毎回遲着の稿多し、期日嚴守せられ度し、

○　蝶衣

腐ち實の光る谿路や閑古鳥
婢を簀卷せし寨主病む閑古鳥
汁に入るゝ蛇壺にあり閑古鳥
百合窪や宮創め守る籠り杣

評論

民主黨の優勢

(ウイルソン氏大統領候補決定)

一

六月二十五日米國民主黨大會、バルチモア市に開會し、七月一日遂に現ニユゼルシー州知事、前プリンストン大學總長ウッドロー、ウィルソン氏を大統領候補に選定す、是れ實に民主黨の幸福にして、亦た米國民の幸福なる可し、

然れども事茲に至る迄の徑路は、太た容易ならざり

き、先づ開會劈頭、假議長問題の論爭生ずるや、保守派のパーカー氏擧げられ、ブライアン氏以下進歩派は一敗地に塗れたる觀ありき、ブライアン氏は奮激せり、彼等は去つてロオスエルト氏と合し、新黨派を成立せしむ可しとさへ傳へられき、然れどもやがて進歩派の勢力は回復せり、二十七日同大會を通過したるブライアン氏提出の決議案を見よ、

『今や我黨の行程より見るも、國家の歴史より見るも、正に危機に際會す、吾人は是時に當つてジエフアソン及びジヤックソンの政黨が依然として人民政治と法律上の平等を主義とする戰鬪士たることを我が合衆國民に宣言す、而して吾人は人民に忠實なるの證據としてモルガン、ライアン、ベルモント、其他國家より特典を求めんとする階級の代表者たるか若しくは之に恩義を受け居るものを大統領候補たらしむるに反對なる旨玆に宣言す』

是豈破天荒の宣言にあらずや、是保守派領袖に對する最大打擊也、玆に至つて民主黨大會は最早や進歩派の支配下に置かれたるものと言ふ可し、左れどウイルソン氏當選は猶急速に來らざりき、紐育保守派の首領モルフヰ氏等は奇計を廻らして、同じく進歩派中にても、自己等に緣近き下院議長クラーク氏を擧げんことを謀れり、是に於て投票回數五十六に及びぬ、保守派及びクラーク派が愈形勢非なるを見、滿場一致、ウイルソンに贊成することなしたりしは、實に投票開始後三日を經たる時なりき、

二

如何にして進歩派代表者ウイルソン氏の勝利を見るには至りたる、

吾人を以て之を觀る、ロオスエルト氏の功蓋し第一に居らん、何ぞや、ロ氏は固よりウ氏の選定を希望せざるのみならず、其落選を豫期したる人也、氏は自己が市俄古共和黨大會に敗北したる如く、ウイルソン、ブライアン一派をベルチモア大會に敗北せしめ、自己が成したる如く舊政黨を脱去せしめ、以て新興の國民進歩黨を强大にせんことを翹望したりき、彼の股肱は之

が爲めにブライアン氏と會見したりき、是時に當つて民主黨領袖以爲らく「若し急進派を虐遇せん乎、民主黨は分裂を見るに至り、共和黨二分の爲め生じ來れる良好なる形勢をも逸するに至らん、如かず彼等の候補を擧げて成功を期せんには」と、是恐らくはウ氏當選の眞相なる可き也、

然かも此外に擧げざる可からざるは、ブライアン氏の活動是也、氏のバルチモア大會に於ける奮戰猛闘、獅子の如く吼へ、夜叉の如く荒れたりしが、是皆な黨の爲め、ウィルソン氏の爲め、主義の爲めにして、毫も一身の利を思はず、人あり之に自ら候補たらんとを勸むるものあるも、斷乎斥けて受けず、公平の心事、誰か嘆賞の想に堪えん哉、

三

ウィルソン氏擧げらる、吾人は民主黨の形勢益々有望となり來れるを想はざるを得ず、蓋し一方に於て共和黨分裂を見たるのみならず、他方に於てウ氏は共和黨の勢力範圍たる東部諸州の人心を收攬し來れるの感あればなり、

然れども來る十一月に於ける勝敗を決定するものはタフト、ロオスエルト、ウィルソン三派が今後に於ける活動振に依ること多からん、傳ふらく、ロオスエルト氏一派は本月五日頃を期し新政黨の結黨式を擧行し、活動を開始す可しと、此新黨の大會こそロ氏の勢力をトす可き好機會なる可き乎、

土帝退位說

土耳其皇帝退位說紛々たり、曰く皇帝大位を皇姻に讓り、身を風塵の外に置かんとすと、

吁嗟マホメット五世、平民的君主として、私行又瑕瑾無く、前帝アブダル、ハミッドの淫樂に耽ける類と同日に語る可からず、政を觀ると亦頗る勵精を極めたり、而して此浮說油起するもの、それ何の故ぞ、

是に至て吾人は一九〇八年の衆民平等の公約を無視し、爲めに國內の調和を空しからしめつゝある青年土

耳其黨の政治を遺憾とせざるを得ざる也

獨露兩帝會見

獨露兩國皇帝、去七月四日波羅的海岸バルチスキーポルトに會見す、獨逸宰相ベートマンホルウエヒ氏、露國外相サゾノフ氏等之に從ふ、天下萬人の注目俄然として玆に聚る、况んや獨逸第三皇子アダルベルト親王と露國第一皇女オルガ內親王との約婚さへ喧傳せられたるに於てをや、

然れども其收め得たる結果は如何なりし乎、獨逸皇子と露國內親王との結婚政略は不成立に終り、一六六二年英帝チャルス二世がブラガンサ家の皇女を迎へて孟買(ボムベイ)を獲取し、印度發展の機會を得たるが如き成功は夢にだも實現を望む可からず、又伊土戰爭に干涉して利を其間に占めんとする獨露兩首相の希望も一應失敗に歸したるが如し、日淸戰爭にて旅順膠州灣を得たるは甘き經驗なれども、柳の下にいつも鰌は居らざるを奈何、

然らば則ち同會見の英佛露三國協商に及ぼせる影響は如何、少くとも多少獨露の接近を促したるに相違無からんも、未だ根底的に之を動搖するを得ざりしに至ては疑ふ可からず、次ぎに露獨兩國海軍關係問題は如何、蓋し露國が其地理的關係上、海軍計畫に於て假想敵と見做すは獨逸たらざるを得ず、從つて今回の五億圓海軍擴張計畫が獨逸を驚駭せしめたるは勿論なれども、露國政府は上下の輿論に壓迫せられて、何等の讓步をも獨逸に約せざりしものゝ如し、

然りと雖も、吾人を以て之を見れば、猶一事の注意せざる可からざるものあり、何ぞや、兩帝會見は兩國の對支那政策及び對日本政策に何等かの影響あらざる乎是也、

夫れ獨逸の對露政策はその歐洲に於ける南下策を制止するに在り、他なし、是れ目下盛んに土耳其に向け前進しつゝある墺獨兩國膨脹の鋒先と衝突せざるを得ざれば也、此故に獨露の親近は、勢ひ露國の銳鋒を他

方面に轉向せしめずんば不可能也、獨帝能く之を知る、知つて而して策す、その極東に於ける露國の活動を慫慂し、日露親近を防害するあるも、何ぞ怪むに足る可けん哉、

茲に於て切りに疑ふ、獨帝の訪露は、東洋問題に關して成効したる乎否乎を、吾人は桂公の訪露の結果如何を見て、之を推斷するの外無きを覺ゆる也、

緩衝國論

英國に一種の論者あり、盛んに緩衝國論を說く、曰く露國をして印度を衝く能はざらしむるものは、その中間に交通困難なる阿富汗斯旦あるに依る、阿富汗斯旦に於ける鐵道の發達を防止するは、是則ち英領土の安全を期する所以也と、同一の論者又た曰く波斯橫斷鐵道計畫は是れ亦露國を印度と接近せしむるものにして危險何物か之に過ぎん、英國は宜しく此目論見に同意す可きにあらざる也と

英國の見地よりす、理義或は斯くの如きものある可き乎、然かも此政針の爲めに、阿富汗斯旦の交通困難を極め、叛亂起る毎に政府も送兵の手段に苦み、國內久しく擾亂を見るに至り、波斯の內亂も亦同一の現象を示すが如きは、是果して何等の醜怪事ぞや、吁嗟自國の利益の爲めに隣國を犧牲にして、恬然たり、斷じて是れジヨンブルの鄕土の名譽にあらざる也、

オリムピツク競技

瑞典國ストツクホルム府開催世界運動大會は、悉く南阿、英、米、瑞、佛等選手の勝利に歸し、我日本選手は悉く失敗せり、就中マラソン大競走に於ける二十着迄が、皆な外國に占められ、我が選手の如き半途中止の止むなきに至りたる如き、何等の憾事ぞや、

吾人は之を見て、我邦人が自負强く、小成功に會する毎に忽ち「世界レコード破り」などゝ稱せるに係らず檜舞臺に上れば、實力遙かに及はざるを認め、寧ろ今

後の修養を要する大なるとを想はずんばあらず、然かも斯くの如きもの、何ぞ獨り運動の末技のみとせん哉

（備考、四年の後即ち一九一六年次回オリムピイック大競技會伯林に於て開會せらるゝ豫定なり）

葡國前朝の遺臣

葡國帝政黨領袖コウセイロ大尉、屢々短兵を提げて葡國北部に侵入す、葡國政府之を憤り、告發遂に缺席裁判を見るに至る、判決に曰く被告を重禁錮六年に處す、彼曾つて義勇の將校として邦國に勳功あり、故に減刑茲に至れる而已と、

吁嗟コウセイロ大尉は、前朝廷唯一の忠臣、マヌエル二世の復位を希望して、南船北馬、櫛風沐雨、茲に二年に及ぶ、政見の異同は之を措き、何人か其勁々たる高節を欽慕せざらん哉、大清朝廷滅びて一人の義を唱ふるもの無きに對比せよ、ブラガンザ王家猶以て幸ありと言ふ可き也、

獨逸人口增加率減少

若し人口の增殖にして國運の隆盛と相伴ふものならしめん乎、一九一一年度の獨逸死亡率は、斷じて慶賀す可き現象にあらざる也

普魯西に於ける出產數の死亡數超過數は一昨年に於て五十八萬一千を稱へたりしが、昨年度に至て俄然四十九萬に激減し、巴威に於ても八萬四千より七萬三千に激減したり、是何故ぞ、是果して何の故ぞ、

米國の條約無視

米國下院、運河法案を通過し之を上院に廻附す、中に曰く沿岸貿易に從事する米國汽船は、巴奈馬運河通航料を免除せらる可しと、是則ち內外汽船間に差別を置く偏頗不公平の規定にあらずして何ぞ、英國が七月中旬斷乎抗議を試みたるも亦自然の事のみ、

一九〇一年英米ヘイ、パンスフオート條約第三條に

曰く、運河は全然均等の條件下に各國商船及軍艦に對して開放せらる可し、通航條件、通航料其他の點に於て孰れの邦國の臣民若くは市民に對しても偏頗の處置ある可からずと、此文字靈あらば、恐らくは泣かん、

退嬰外交の賜

米國商工務省の報告に依れば在米日本人數は一千九百十一年度（昨年）に於て差引二千四百二十六人を減じ之に布哇の減小數を加ふれば、合計三千二百五十四人を減じたりと、

感謝せよ、是れ霞ケ關退嬰外交の賜也

（以上懷沙隱客）



涼しい物の話

△河鹿の話

理學博士　丘淺次郎

河鹿は山の中の、細い谿間（たにあひ）の、水が極く綺麗で、そして急に流るゝ谿川に棲んで居る。河鹿の棲む谿川は、其兩側には必らず木が茂つて、夏にも極く涼しい處ばかりである。

東京近邊で有名なのは先づ箱根で、東京から汽車の便利のよい處といへば青梅と秩父である。青梅は隅田川の上流で、秩父は多摩川の上流で、何れも河鹿の鳴く所まで汽車が架つて居るから便利である。先日私は青梅まで行つて來たが、水が綺麗で、景色丈けでも涼しい處である。昔行

つても宿屋に休息して居ると、河鹿の鳴聲が聞えて大變に涼しかつた。

河鹿の居る處は、日本では何處といつて限られて居らぬ。山の細い、綺麗な溪流のある所ならば何處にでもゐる。先年私は青森から奥羽線を通つて來たが、秋田縣の横手に泊つた時、平源といふ宿屋の、川に臨んだ奥座敷などは河鹿の聲の聞き續けで、何時までも去りたくないやうな心持がした。

河鹿の喰ひ物は人が誰でも知つて居るやうに、飛ぶ蟲を捕つて食ふ。死んだものをやつても決して喰はない。飼つて置くものが生きた蠅などを捕つてやるのはその爲めである。

河鹿の體（からだ）は先づ東京近傍では、雨蛙位の大いさで、雨蛙よりも、痩せて細く、如何にも身輕ろく見える。實際飛ぶことも餘程早く、一間以上も跳れるから手で摑まへることは容易でない、それだから之を捕るには網を持つて行かなくてはならぬ。

河鹿で鳴くのは雄ばかりであつて、雌は鳴くことがない。雄の鳴くのは、矢張り夏、蟬の鳴くのと同じで、詰り鳴聲によつて雌を呼び寄せるといふのであらうが、然し蟬ならば其事が極めて明かで、暑いのを少し我慢して眺めてゐると、鳴いてる雄の傍に雌の來るのが分るが、河鹿ではさう容易には分らない。然し永く見てゐたらば、矢張り其通りであらうと思ふ。

東京の理髪店とか或は其他の店などで、よく河鹿を飼つて置くのを見るが、飼つて置いて鳴くのは、何處から捕つたのでもよいといふ譯ではなく、捕つた場所と、捕つてからの世話の仕方による相である、よく鳴くのは値段もなかなか高く、廿圓とか五十圓とかいふものもあるといふ。然し暑苦しい東京の店先きで、小さな金網の中で鳴いたのでは、鳴聲と其周圍と調和しないので、一向に涼しくない、目を瞑つて谿川の音や、木葉の葉擦れの音でも想像して聞けば涼しいかも知れぬが、目を開いて眼前の牢屋の如き金網を見れば寧ろ河鹿に氣の毒なやうな氣もされる。

河鹿には咽喉の左右に聲を出す爲めの特別の一對の嚢があつて、其嚢を膨らしてあの鳴聲を出すのである。

△氷河塔の話

山崎直方

ライプチヒに遊んだときのことである、一八一三年ナポレオンとの大戰爭に捷利を得たる記念にもと市の南部に今一大塔が建立の最中である、未成品ではあるが中々のみものであるからと石橋君に促されて見物に出かけた、電車に乘て行く中、僕に是非見せるものが今一つあるからとて塔の少し手前の停留所で下りた、此のあたりは最早市の町端づれであつて新開町が次第に行儀よく發達しつゝある、まだ枝張りの若々しい行樹の蔭に、鏝の痕乾はかぬばかりの歩道を辿ること幾許もなくして、とある四辻に出た、こゝにはさゝやかな植込みがあつて、其中に石塊のど

ラミツドが立つて居る、是なり是なりと石橋君は僕を導て是が此地の新名勝、氷河塔である、塔の由來は前へ回はつて碑文を見たまへと云ふ、塔の高さは四メートル許もあらうか、大きなものは俵程のものから、下て頭大のもの、拳大のもの、猶小さい砂利まで交ぜて、大小幾多の石を掻き集め、之を無造作に積上げセメントで固めてピラミツド形にしてある、石は主に花崗岩、片麻岩其他種々の晶質剝岩などであつて凡て此邊の平野には露はれて居らぬもののみである、塔に刻める碑文は左の通りである。

幾十萬年の昔。氷河時代の頃スカンヂナヴイアの大氷河の一支、南に流れて此あたりまで來た、そしてそれがスエーデンから齎らして來た無數の石を此處に遺こした

今茲一九〇三年ドイツ共同信託所及ライプチヒ不動產會社は此等の散亂せる石塊を集め、爰に其發見地に此記念塔を建つ

此塔は貴紳の庇護により維持せらる

文は簡であるがよく解つて居る、新開町の經營者が地均らしの時に、ごろごろ出て來た石塊を無造作に搬ひ去るに忍びず此塔を立てたのである、げに此石は一塊一片皆貴重なる歷史を持て居るのである、宏大無涯の自然力を語つて居るのである、之を捨てずに根氣よく拾ひ集めたは、流石にどこまでも學術を標榜せる此國民の思慮ある仕打ちとして敬服せざるを得ないのである、いでや爰に少し許り此石の歷史を述べて見よう、

氷河時代とは何か、幾十萬年とは云へ、地質時代から云へばまだうら若き第四紀の頃に我地球は幾度か嚴寒の氣候に出遇たのである、其結果としてヨーロツパも北アメリカも其北半は全く堅氷の下に鎖されたのである、此地方では今でこそ氣候溫和に人文最も開け、文明の華を我物顏に咲かして居るが、偖て其の頃の天地は宛ら今のグリーンランドや南極州附近の光景と撰ばなかつたのである、今日でもヨーロツパにはアルプスとか、スカンヂナヴイアとかの高山に登れば、千古不滅の雪を見ることが出來る、此雪が凍り凝まつて氷となり丁度蝋でも熔かしたように、雪線以下の下界に流れ落ちてくるものが即ち氷河である、しかし此等の氷河は其規模が誠に小さいのである、氷河は其名の示す通りに細長く谷を傳ふて流れ落ちて居るのである、それが氷河時代の氷河となると規模の雄大なる、到底之と同日の談でない、此等は氷河と云はんよりは寧ろ氷原と云ふべきものである、大陸的の一大氷盤である、其時ヨーロツパに於ては其大氷河源はスカンヂヴイアに在たのである、スカンヂヴイアは今も高寒性の山が延亘して居る、其上に降り積つた氷雪の層は推算によると、少くも其厚さが一七〇〇米に達して居たものと信ぜられて居る、筑波山や比叡山の高さの二倍にも當る厚さの氷の衣を被ふつて居たと云へば、之を聞くだに腋下既に涼風の起る想をなさざるを得ないのである。

此スカンヂナヴイアの高峯から自然の傾斜に從ふて大氷河は四方に放射して流れたのである、殊に南の方面に著しかつた、其一は西南に向つて末端はテームス河口からライン河口の邊に及んで居る、眞南に降たも

のは北ドイツの平野を被ふてハルツ山を始めとしドイツの中帶山脈の麓に達して居る、氷河塔の碑に記してある南に流れし一支とは此ことである、又東南に向つたものはフインランドを埋めてロシヤの大平野に溢れ一方今のキエフの都の邊まで又一方はボルカ河の下流近くまで溢れて居た、此等は固より別々に獨立せる氷河を造て居たわけではなく、互に相連接しつゝ、主として此方向を指して流れたのである、固より今の北海もバルト海もあつたものでない、バルト海の如きは最も深い處で今二六〇米もあるのであるが大氷河は全く之を埋めて流れて居たのである、源泉のスカンヂナヴィアでは千數百米の厚さがあつたこと前に述べた通りであるが、其末梢の中帶山脈に達して居た處でも四五百米に達して居たことは、今も此山脈に其痕跡があるによりて察せられる。

近來南極の探險が次第に其歩を進めて、此方面には一大陸が横つて居ることが知れて來た、イギリスの探檢隊が發見したエドワード七世高原の如き、更に其南に横はつて居てノルウエのアムンドセンによりて發見された南極點を戴けるハーコン七世高原の如き、何れも其高さ富士の巓を摩せん許りなる、海拔三千米以上の大高原である、しかし云ふまでもなく之が漫々たる氷雪の一大高原である、而して之が自然の傾斜に沿ふて氷河となつて流れて居るのである、流れると云ふ語は或は當らぬかも知れぬ、極めて徐々に蠕動して居るのである、此等探檢家の紀行を讀む度毎に常に想像するのは彼の大昔の大氷河である、スカンヂナヴィアの大高原からヨーロッパに汎濫したのも、又ラブラドル高原からアメリカの五大湖方面を侵したものも概ね斯の如きもので其規模更に大なるものであつたらうと思ふのである。

氷河が流れるときは、其幾百千米の厚さの氷の層を以て地盤を壓しつゝ進行するのであるから、其重量の大きいだけに、地盤を破壞し侵蝕する力の大なることも想像せられるであらう、これが爲めに一旦氷河を以て被はれて居た山などは、何れも稜角を失ひ圓く滑かになつてしまうのである、スカンヂナヴィアの山になどは其好例を示して居る、

氷河は一面に地表を被ふて居るものゝ、其間には又之を貫て抽立せる山嶽も稀でない、南極州に於ても亦グリーンランドに於ても屡此種の山脈があるのである、此等の山嶽より崩れ落ちる石は氷河の表面に横はつたまゝ氷河に伴はれて遠隔の地に搬ばれるのである、又中には氷河に有り勝ちの裂罅の中へ落ちこんで、遂に氷河の底に達し氷河と地盤との間に挾つてしまうことがある、しかし氷河は絶へず動いて居るから、これらの石は宛て物を研く金剛砂のように、上には重い氷河を戴きつゝ之に伴はれて次第に地盤を削磨し、又石塊其物も互に相摩擦して次第に圓みを帶びて來る、斯く地盤も石塊も相摩擦して行くのであるが此等には何れにも其表面に掻き捺たような條痕の殘つて居るのが常であつて、これが又氷河作用の一特徴と認められて居るのである。

此等の氷河の表面に横はれる石塊や、又氷河の底に陷つた石塊なども遂には氷河の末端まで搬ばれて、氷河の溶けると共に地上に遺されるのである、之を堆石と名ける、此ドイツ平野の中には此堆石の堆積せるも

のが丘陵脈を造り、殆ど連續して其長さ約一〇〇〇粁の遠きに延びて居るものがある、又時には四顧渺茫として山を見ざる平野の中に幾抱へもある大岩塊の轉かつて居ることがある、里の人は之を棄子石と呼んで居るが、其棄子の親は即ち氷河であつて、之に伴はれて遠方の山から來たものが氷河の溶けると共に置き去りにせられたのである、猶此外に氷河の溶けた水が此等の石や、礫や將た更に其粉碎せる泥土を流して地表に新たに地層を造ることも少なくないのである、

今の北ドイツの平野は嘗ては一面に此大氷原の下に埋て居たのである、ベルリンの傍らにあるリューダースドルフと呼べる村の石切場には氷河の夥はしき擦痕があつたことがある、ドレスデンの都からハンブルグの港へかけて流れるエルベの河筋、其他オーデル河、ウエーゼル河の下流と其支流アラー河を始として此平野の河流の流れる方面が西西北を指して自から一定の規矩あるは、次第に退却せし大氷原の邊縁と平行して其間に親密の關係あるを語つて居るのである、我がライプチヒのある所も亦一時は全く氷の底にあつたのである、其近郊に散亂せる石塊は其れも嘗て氷河が搬んで來たものである、而して其石塊は何れも今日スカンヂナヴイア半島を構成せる岩石に等しきより、遠く彼の地より來たものであることも亦明かになつて居るのである、北ドイツの平野と一概に云ふのも實は丘陵逶迤たる地形が多いのである、それが皆昔の大氷河が持て來た石や砂や泥から出來て居るのである。地表から百米乃至二百米も下らなければ氷河以前の地盤に達しないのである。

曠世の英雄ナポレオンを破た國民の力は强かつたには違ひなからう、雲に聳ゆる大記念塔を建てゝ之を誇るも亦一興であらう、しかし此力も自然の力の大なる事に比べては未だ言ふに足らぬものがある、自然の力は其一擧手の勞を以て、忽ち氣候を變化し、大陸の大部分を舉げて白皚皚の世界と化し、之を反覆すること三回の多きに及び、年を費すこと數十萬年の永きに達して居る、其間には地形の變化も著るしかつたらうが、生物群の興亡も亦甚だしいものであつた、氷河時代に氷に鎖された部分のヨーロッパ大陸の面積だけでも無慮六百萬方粁に及んで居る、ナポレオンの全盛時代に於ける、其帝國の面積は或は之と頡頏せんも、其命脈は槿花一朝の夢の間に過ぎなかつたのである、之に克ち得たる國民の力とてさまで驚くにも及ぶまい、氷河塔は形こそ小さけれ、其語る所は戰捷塔に比して更に大なるものがあるのである、否、氷河塔の外に自然の記念塔は或は數百里に連なれる堆石脈となり、或は數多の居然たる棄子石となり、又風光明媚なる無數の湖水となり、其他到る處に過去の自然史を說て居るものが少くないのである、遊子一たび科學の眼を以て見渡せば此平野の上に横はれる自然の敎訓の多きに驚かざるを得ないのであらう、而して更に大自然力の宏遠なるを感ずること一層切なるを覺ゆるであらう。

△扇と團扇の話

戸川殘花

德川時代には扇子即ち末廣を儀式に獻上したもので、是は明治の初年迄繼續した。一束一本といふが、一束は白扇をいひ、一本は切地をいふ白扇を切の函に入れて之を高貴の人に獻上する、又高貴の人からも下々に賜はつた、即ち此場合には今日の勳章といつても宜い樣な處がある。今日では白扇を持てはそれに寄合書きとか若しくは何か畫とか字とかいふものを書くか、德川時代では書畫會かであれば格別、白扇を持つことが先づ儀式であつた、勿論夏冬通して持つ、即ち扇は煽ぐ爲なのである希臘人、羅馬人の杖と同じく、是非それを持たればならぬのであつた。又侍は刀を持たなければならぬのだけれど、君公若くは將軍などの前へ出る時は、次の間又は三間も隔つた所に刀を置く、所謂丸腰と稱へるものだ、が白扇だけは離さない。只極めて高貴の人の前へ出る時にのみ之をも持たぬのだ、是等を通觀するに總じて扇子は儀式に用いたものだ。扇子を末廣といふ、此末廣といふ語に面白味があり、祝儀の意を表はして居る。で今にも地方に殘り、冠婚葬祭等に廣く用ひられて居る。

　後水尾帝は元和、寛永時代の天子で在らせられたが、大層趣味に富ませられた、此天皇の御好みの扇の風は茶に燕してあつて、普通の扇より少し大振りの骨數も多いものであつた。それで京都邊では色々形の變つたものを用ふる代りに、色々地紙の變つたものを用ひた、その製造は多く僧侶などがした。

　扇の種類別をすると、先づ一種、軍扇といふものがある。是は古くから合戰の繪卷物に描かれて居る。所謂陣中に用ひたもので、能く表に北斗星とか太陽とかを出したものだ。已に源平時代から用ひたと思ふが、後世は多く其强さを尊ぶ處から、鐵若くは骨製の骨を用ひた、所謂鐵扇など稱するものが是で、如何にも武骨に作られて居る。

　それから德川時代には女持ちの扇子らしい一種小形のものがあつた。是は多く金泥などを用ひ、それに土佐風の繪を描く等繪を描いたものが多かつた。又同じ德川時代にも南畫を描くことの流行した事があつた、即ち支那人の風を學んだものと見えて、扇面に書畫を書く、寸尺の頗る伸びたもので醫者。儒者。詩人。文人先づ墨客の多く用ひたものだ、併し是は概して略式で正式には矢張り白扇を持たねばならぬ事となつて居た。小笠原流などの儀式は德川時代に細かく發達したものだが、其物の授受等は凡て扇子で以てあしらふ事となつて居る、所謂浪人ものが謠を謠つて一錢二錢の合力を受くる時にさへも扇子を以てするのである。

　末廣の發達は武家時代に於てし、德川時代に於て最も盛になつたものだ。王朝時代には中啓といふものがあつたが、德川時代に及んでも裝束を着ける時には扇子を用ひずに此中啓を用ひたものだ。扇子の廢れて來たのは洋服を着る事が全く其原因と思ふ。洋服には扇子は如何にも携帶に不便である。西洋の儀式に扇子は全く不用であるから、古風を重んずる處なら格別、他では一切用ひぬ事となつた。併し今でも能役者、茶の

宗匠、又は小笠原流の先生などは必ず扇子を所持し居る有樣である。

尙ほ一つ扇子に就いて言ひたいのは、貴人の前に出る時には扇子を盡く開いて無遠慮に煽ぐといふ事はなく、必ず半開きにして少々體を斜にし、少し風を入れる位である。此一例を見ても日本人が電車汽車又は航海中に禮儀を知らぬなどといはれるけれど、元來禮儀は餘程能く發達して居るので、只それが西洋風にならぬといふ丈の事だ。扇子屋は東京では御影堂といつて今の日本銀行の少し先の方にあつたが、今は無くなつたか知らぬ。

それから團扇は、文學的にいへば古いものである。源氏物語に出て居る。即ち夕顏の卷に團扇の事があるけれど、今如何樣なものやら分らぬ「白き扇のつま糸を焦したるに此花を折りて參らする」とあるが、此扇は團扇の事であろう。つまを焦したるそれで此扇子が出たのであろうと思ふ。その時分の扇は如何樣な格好か知らぬけれど、如何にも扇では趣味がなくなるとて種彥の田舍源氏には之を團扇と書いて居る。勿論支那には朝扇といふものがある。緣が圓く、黑塗にしてあつて繪が描いてある。之を上海邊から北京あたり、重に都會の婦人、いや寧ろ藝者だが、それ等が今は輿の上か馬車の上で緩やかに使つて居る。東京名所圖繪にある樣な大きなものだ。それは即ち昔から支那にあつた團扇に起源して出來たのであろう。團扇といつても扇同樣矢張り煽ぐので、只圓い所が違ふだけだ。

王朝時代にあつた檜扇は支那から來た型であろう、此檜扇の型や、其後に於ける日本の色々の形が變遷して橫濱の輸出扇が出來た。象牙や羽根て作つたもので淸楚の味はない、所謂寶玉を飾るので美しい迄である。

即ち王朝時代より支那から入り、日本て扇となり、又團扇となり、濃厚のものが淸楚と僞り、それが後に又濃艶のものとなつて西洋に出る。そして扇は却て今では日本に廢れて團扇ばかりが盛になる樣な現況である。

◎

是迄團扇の事を一番能く書いたものは近松であろう。即ち道成寺道行であろう。是には仲々澤山團扇の名が擧つて居る。德川の末頃には團扇賣といふものは非常に風流なものであつた。扇賣は德川時代には左程なく。足利時代にはあつた。道成寺道行にも、奈良團扇、深草、武者繪、おやま繪などと色々團扇の種類があがつて居るがおやま繪といふのは即ち役者、藝者の樣なものの繪を描くのである。又津島の大團扇といふのがあるが、是は多く祭に使つた、塗り板で朝祭りの繪を描く、又矢張りそれにも見るのだが、只繪團扇といふものがある、黑線の柄で房が着いて居る。是は奧向の女中などの用ひたものだ。榛原の處には今も奈良團扇、深草團扇の型があるが。彼れは多く納涼に用ゐたものだ。備中に七八十年此方撫川團扇といふのがある。透かし團扇である。即ち字だけが透かしになつて居るので、歌や俳句が書いてある。頗る風流なもので。今は岡山名物となつて居る。

德川時代には高貴の人の飮食の時に必ず團扇を以て煽がせたものである。丁度今の煽風機代用である。が種類は何の團扇と限らぬ。但し無地

であつて華やかなものではない。坊間に最も勢力のあつたものは斯ういふ形のものだつた、即ちきりの稍短い上部の稍扁く、胴の丸の稍張つたふづくらしたものであつた。似顔繪の團扇があつたが、それは多く芝居茶屋等に用ひられた。高貴な人には勿論用ひられなかつたが、奥女中には用ひられた。大きな芝居があれば必ず其役者の似顔が出る。多く豐國ものであつた、明治の初迄はあつたもので芳年なども書いた、鮨屋には大きな團扇がある。それは蠅を追ふ爲なのである。大きなといへば金澤の團扇がある。二尺四方位もあるか知ら、それは今でもあるのだ。

謠曲の班女に扇の事が澤山擧げてあるが、是が道成寺道行の起りかと思ふ。「班女の閨の内には秋の扇の色云々」とある、是が初めて道成寺道行は是から換骨奪胎したものと思ふ。此班女の謠曲は鎌倉時代に出來たものだから、扇の足利時代に行はれた事は知れる。又朝顔日記の大井川の段に、露の乾ぬ間の朝顔、あはれ一村雨のはら／＼と降れかしと、阿曾次郎が深雪にいふ處にも團扇が使つてある。又呂昇が常に人を泣かす處もあの朝顔の團扇の處。即ち、阿曾次郎の與れた團扇が深雪の手に忘れ紀念の思出草となつて色々の愁嘆話となる其處である。又熊谷陣屋にも軍扇で敎盛を呼び返す處がある、或は平家方で紅の扇を出すそれを那須の與市に射さすといふ段もある。又昔は扇で腹を切るといふ事があるそれは儀式的に扇を三寶の上に載せて出す。でこれを執くと其刹那に首を斬るのである。或は又非常の用にも立てる即ち護身用としても使つたもので、持ち返して扇の要で對手を突くのだ、又荒馬に乘る時には要を返して馬の鼻面を突くといふ事もある。それから踊の師匠は扇を手から離さぬ。能の稽古にも扇拍子といふことがあつて扇を使つて間を打つ。考へたならまだあるでせう。

今では日本扇の綺麗なものが西洋に賣れる樣だが、私の考では觀劇の折などに白扇を持つことにしたら如何樣に上品で美しかろうかと思ふ。小形にさへ作ればフロックの隱しにも入るのである。

最も厭なものは地位ある人とか名ある人とかの下手な字を書いて貰つたものだ、それから披露目の扇といふ奴。役者か俳諧師の配るそれだ。

廣東團扇は中程から掌の半開きの樣な形に曲がつたものだが、是は支那人が日中の往來に辨髮頭を掩ふ爲の工夫だ。此處に在る是は堀切で貰つたものだが、繪團扇の丸形である。純江戸式を現はして居て面白い。即ち菖蒲の花の紫を大きく出し、其葉を鋭い直線でスーッと描いてあるあたりが特色だ。抱一の句に、「紫陽花や田の字づくしの濡れ浴衣」といふのがある。又俳諧古選に、「雨の日や門さげて行燕子花」といふ句があるが是等は皆純江戸趣味のもので、團扇に描くと妙に涼味を誘ふ。特に抱一の如き、當時河東節を聞いて書いたものだから、聯想は直にそれに行く。で一層の趣がある。序にいふが堀切の小高園は文化文政度の風流人が集つて作つたものだ。此江戸趣味の繪は普通の畫工には駄目だ。左樣、今の處では渡邊省亭一人位なもので、彼人でなければ多分駄目だろうと思ふ。

△氷の話

日本製氷會社の一員

私の處の會社は明治四十年に出來たもので、器械製氷と東京製氷との二會社を合併して一會社となしたものである。すべて人造製氷であつて一晝夜に凡そ百五十噸の氷を製するのである。そして工場が二つに分れて、一つの工場では百噸、一つの工場では五十噸を作る。又深川の工場では五十噸、大阪の工場では六十噸、又靜岡の出張所でも十餘噸を製して居る。一噸は御承知の通り二百七十貫であるから、此業平橋の工場のみで一日四萬貫以上の氷を作る譯である。會社資本は本社支社合せて壹百三十萬二千五百圓である。

冬の如き氷の需要の少い時は片方の工場を閉ぢるけれどもそれでも一日百噸位を作る。それは多く病院とか、冷藏とかに用ひられ又地方の倉庫などに貯藏されるのである。龍紋商店、帝國冷藏株式會社などでも製氷するけれども、公平にいつて、私の方の會社の製氷高は他の何れよりも遙かに多いのである。

今日では人造氷は天然氷を壓倒し去つて、天然氷は僅かに冷藏用位に使はれるのみである。といふのは天然氷には黴菌などがあつて衛生上よろしくない。嚴密にいへば冷藏用としても危險だ位である。然るに人造氷は蒸溜水で造るから、衛生上無害で安心して食用に供せらるるのである。只從來人造氷の缺點とせられたのは柔かであつて天然氷よりも溶け易いといふ事であつたが、段々改良せられて、今日では此點も最早や天然氷を凌駕せんとして居る。

人造氷は如何にして造るかと云ふに、アムモニアが液體より氣體に變化せんとする時には非常に冷ゆるものであると云ふ化學的原理を應用してである。卽ち先づ氣體のアムモニアを壓縮して、之を冷して液體に變化せしめ、其液體を廣い管の中に追ひ放てば急に膨脹して再び氣體に變化する其時に非常の寒冷なものになるからして、蒸溜水を詰めた罐を其冷氣に觸れしめて氷らせるのである。

ここに圖もあるから、いくらも委しくお話することが出來るけれども極くザットした原理丈けを申せば右のやうな次第である。

△水草の話

妙華園主　河瀨春太郎

水草といつてもなか〳〵種類が多い。例へば蓮、太藺、葵、河骨、狼猴草、澤瀉、布袋草(水玉蘭)等いろ〳〵あるが最も普通であつて且つ趣味の多いものは睡蓮だらうと思ふ。

睡蓮は栽培も容易で、花期も永く、又氣品もなか〳〵卓逸である。特に近來外國から來るものには天性美なる上に更らに幾多の人工を加へてあつて、我邦從來の白花黄蕊の一種のみでなく、濃紅緋の如きものもあり、純白雪の如きものもあり、鮮黄琥珀盃の如きものもあり、淡紫瑠璃

盤の如きものもあり、又は紅のもの、薔薇色のもの殆んど數ふるに遑ない程である。また花輪の如きも猪口大のものから、徑、尺に餘るものもある。

此花が西洋でも如何に愛玩せられて居るかは其名を見ても分る。即ち水中の女神 NYMPH に譬ひられて NYMPHEA と命名せられ、又百合花の水面に浮べるに譬ひられて WATER LILY と名けられて居る。

此花の栽培は人によつて、六つかしいやうにいつて居るものもあるけれども、私は何でもないと思ふ。盆栽などに比べては餘程容易い。盆栽には水加減などが要るけれども、睡蓮の栽培には水加減も何もない。普通の池でもよし、又水盤でもよい。只池の水の深さ一尺餘であれば箱及び籠に用土(赤土を除く)を滿たし水面から五寸乃至一尺位までに芽を置く樣に植付ければよい、タヽキ池の場合には、矢張り素燒鉢及び箱に用土を盛つて前に述べたやうにすればよい。水盤の場合は徑二尺、深さ一尺程のものであれば充分である。水盤の底に肥料を施し、その上に用土七分目程を盛り、殘り三分に水を入れるのである。

睡蓮には耐冬性のものと熱帶産のものとあつて、其特徴も違ふが、最も面白きものは此熱帶産中のものの夜開の種類である。一體睡蓮は蓮などと違つて朝寢坊な花で、普通晝咲く奴は七八時頃でなければ花が開かぬ、そして四時か五時に凋むから、實をいへば數仕事のある人は見られない。適切にいへば一家の主人の見られない花である。然るに夜開のものになれば夜の七時頃から翌朝の九時か十時頃まで咲いて居るから、仕事が終つてから靜かに賞美するに大變都合がよい。此頃は日本に於ても納涼博覽會なども流行して來たが、若し此夜開の睡蓮などを池に植え付け、其上にイリユミネーションでもつけたら一層の涼感と美觀を增すことだらうと思ふ。

私が日本にも移植したいと思つて、まだ思ふやうに成功しないのは VICTORIA REGIA といふものである。之は西洋で大きいことからいつて花の王といはるるもので、極めて華麗(エレガント)な花である。もとブラジルのアマゾン河畔にあつたもので、一本の株が三十坪位の池に一ぱいに擴がる、莖も強く葉も大きく、葉の上には人が乘ることが出來る程である。花もなか〳〵大きく、一つの花が白、桃色、赤と變化する。此花はいくら熱くても少しも苦情のない奴だが、少しでも寒いと直ぐ駄目になつて了ふから、寒い時は始終パイプで溫めてやらなくてはならぬ。それで面倒は面倒だけれども、兎に角移植して見たいものと、種を取り寄せては每年試驗して居る。

水草は固より涼しい事は涼しいが、然し日本人の普通愛賞する七草とか葱とかも極めて涼感を與ふるもので、又石菖なども結構であると思ふ。日本人と西洋人とを比べて見れば、日本人の方がどうしても、アッサりした清楚なものを愛し、西洋人の方は濃艶なものを愛するといふ事があるだらうが、然し趣味といふものも變化するもので、近來は大分東西趣味の交換が行はれかけて來たやうである。近來の西洋人は花でもアッサリしたもの、建築でも白木の木目のあらはれたものなどを賞するやう

になり、日本人が案外シツコクなつて來たやうにも思はれる。が然し今の處ではまだ〳〵日本人の方がアツサリ好みであるといへるだらうと思ふ。

新刊批評

▲青淵百話　澁澤榮一著　同文館發行

實業といひ、經濟といへば、皆個人的のもので、國家とか社會とか人道とかいふものとは無關係のものと心得て居るものも尠くない。我青淵先生澁澤男爵は此等の人とは全く其選を異にし、七十年間、國士を以て實業界に活動し、セントルマンとして經濟界を指導せられた人で、其人格德望實に一代に冠絕するの人である。此書は男爵が七十年間身讀體達した、哲理や人生觀や處世訓や經歷譚やを一百篇蒐集したもので、實業界は勿論の事、廣く青年子弟に益すること甚だ多い。男爵は固より學者でも文人でもないから、深遠な理論や巧妙な詞章を此書に求むるは間違であるが、儒教を本とした實踐躬行の修身訓。世路の幾辛酸を嘗め來つた經歷に根ざした處世談。一々肯綮に當るものがある。近來の有益なる好著として之を江湖に推奨する。(定價三圓)

▲獄中記　本間久雄著　新潮社發行

英國文壇の鬼才オスカー、ワイルドの著を譯したものである。原著は歐米の評壇を騷がしたる名著で、我國でも之を愛讀する大家が少くない。我等には何となく衒氣があり、又誇張もあるやうに思はるゝが、然し處々確かに天才的の閃きがあつて、面白い部分もある。(定價四十五錢)

▲伊豆の頼朝　小杉天外著　東亞堂發行

蛭が小島に於ける頼朝を小說的戲曲的に描いたもので、先きから先きへと面白く讀ませる手腕は確かであるが、新聞の讀者を相手にした所爲か、どうも全體の調子が低い。之を純文學上の見地から評されるのは作者たる天外氏も迷惑とせらるゝ所であらうから、只面白い讀物とのみいつて置く。(定價一圓)

▲西洋美術史　玉置　邁著　興文社發行

埃及の古代より現代に至る建築、繪畫、彫刻の歷史を概叙せるもの也。文に生硬の箇所多く、又見識も精透なりといふべからざるも、菊版二百八十頁の間に上下三千五百年間の美術を略述せるの手柄は認めざるべからず。近代畫の寫眞は今少し大きく鮮明なるものを欲しかりし(定價一圓六十錢)

▲白眼　本間　久著　良明堂發行

蒐錄せられたる二十餘篇の文、書簡あり、日記あり、雜錄あり、感想錄あり、評論文あれど、要するに著者の僞らざる心中の叫びを披瀝したるものにして、眞摯の氣多きを採る(定價七十五錢)

▲毒の園　昇　曙夢著　新潮社發行

ソログープ、アンドレーエフ、アルツイバーセフ、カアメンスキー、バリモント、クープリン、サイツエフ、トルストイ等の短篇八篇の譯にして此書を一讀すれば露國文壇の現況を窺ふに足るべし。(定價九十錢)

▲宇宙の統一　加藤直士譯　警醒社發行

ジョセフ　コーサントの著を譯したるものにして、神學及び哲學に興味を有する人の一讀に値す。(定價一圓)

▲日露の再戰　神崎、賀田共譯　東亞堂發行

「紐育ヘラルド」の日本通信員ハリソンの原著「バイカル以東は平和乎戰爭乎」を譯せるもの也。原著は明治四十三年の著述にかゝり日露の關係益々親交を加へつゝある今日に於ては多少力拔けの氣味なきにあらざるも、此書の如き公平なる見地に立てる著書に於て、彼我國力の實際を知悉し居るは必要なるべし。何となれば國際關係は、何時如何に變化するか何人も豫見すべからざれば也。(定價一圓二十錢)

▲處世訓　桂太郎著　寶文館發行

「急がば廻れ瀬田の長橋」は桂公の處世訓の第一義にして、公にも亦「一日に十里の道を行くよりも十日に十里行くぞ樂しき」の詠あり。此書「急がば廻れ」主義の必要なる所以を公の經歷と結び附けて說話し、且つ現下の青年に對する種々の注意を致せたり。(定價六十錢)

▲性慾と人生　村田、齋藤共著　文湖堂發行

性慾を諸種の點より研究して、其正當なる軌道を逸せざるやう教育せざるべからざるを說述せるものにして、記事は科學的といふよりも文學的といふべき箇所多きが如し、(定價金一圓)

▲愛の學校　三浦修吾譯　春秋社發行

伊國の名著にして世界の各國語に譯されたる「クオレ」の飜譯にして、人間の眞生活は「愛」の一語にあることを深く〳〵感ぜしむ。何人も一讀すべき好著也。卷頭の德富蘆花氏の序文面白し。(定價一圓三十錢)

▲森　水野葉舟著　新潮社發行

葉舟氏は小品文家としては恐らくは海内獨歩の地位を占むべき人なるべし。何れも淸新にして、氣が利き、氏獨得の詩想を讀者の胸に傳へずんば止まず。此篇氏の小品三十餘篇を集め、暑中の讀物として極めてよし。(定價三十五錢)

(中付の一)

中央大學學生募集

○法科大學（英法科）（獨逸法科）

○經濟科大學

○商科大學

○各科專門部（正科）（別科）

○大學豫科（英語科）（獨逸語科）

○英語專修科

右學生を募集す○大學の入學は豫科卒業又は入學試驗及第者○專門部の入學は中學卒業又は入學試驗及第者○大學豫科の入學は中學卒業又は同資格者とす○法科經濟科に於ては從來の外別に夜學科を設け新學年より各級完成毎日午後五時より授業す、○九月二日、同九日、同十六日入學及編入試驗擧行○九月十一日より各科の授業を開始す○學則は申込次第送付すべし

明治四十五年八月

東京神田錦町　中央大學

三版

鮫島大浪氏著

わかれたる女の日記

定價四十五錢
郵稅四錢

發賣元 良明堂

東京々橋區西紺屋町
振替東京一四七〇番



諸新聞雜誌評判記

中央新聞

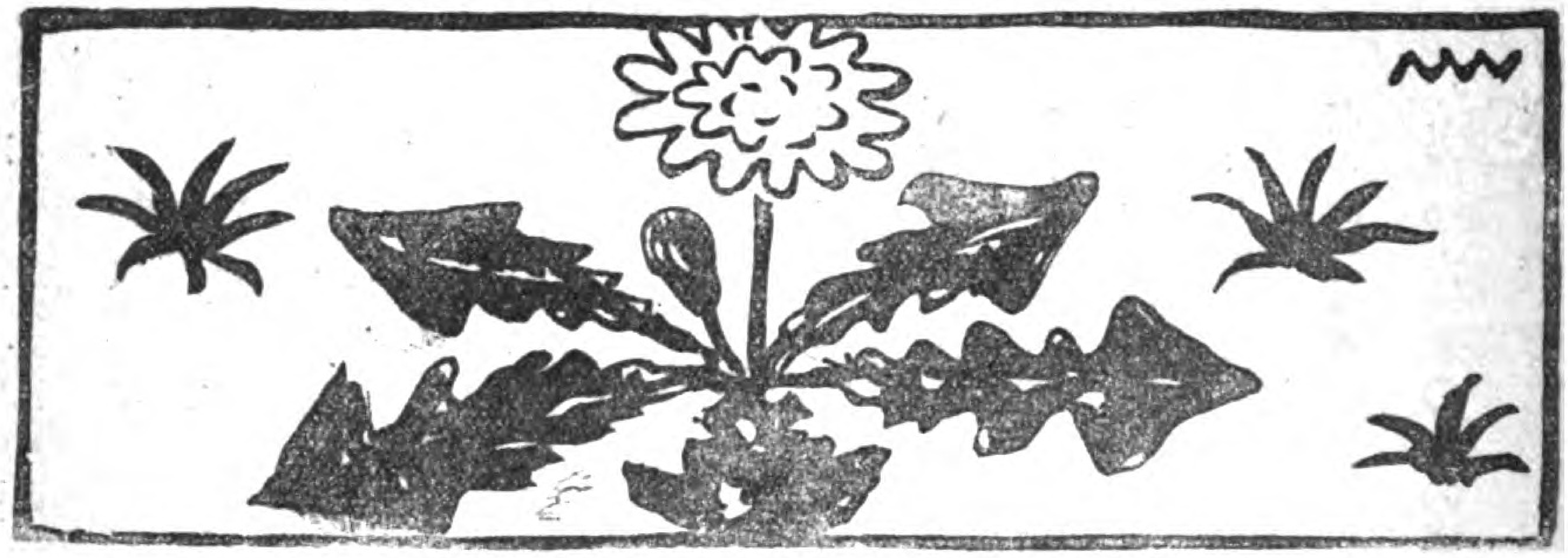
別れて後の若き女の心理を日記體に綴りたるもの、文章輕快にして讀者を倦ませぬ流石に慣れたものなり、六ケ敷理窟は惜き電車の中や宿屋の二階に寢轉んで讀むには肩の張らぬ面白い讀物なり、裝釘亦美くし。

新潮

輕快な筆、輕快な觀察、讀んで居て肩が張らず面白い。小說と謂ふよりは事實として見た方が一層興味が深からう。

成功

青年文士大浪氏が苦心の作の小說にして着想嶄新きび〱しき筆致なか〱に面白し



テレジヤのかなしみ

野上彌生子

一

ほんの一夜泊りと云つたのに、三四日たつても横濱の父親や玉子からは何の便りもなかつた。土用が明けたばかりの頃で、後戻りをしたやうな烈しい暑氣は、青い木の蔭に圍まれた郊外の家の中でさへ堪え難い位ゐに感じられた。その代り夜の月は殊に瑞々しく晴れて出た。日中のきら〳〵する程強い太陽の光線に疲れた目には、薄水色に暮れ行く夕空、その中に浮び出る紅い丸い月、これほど美しく心地よい見ものはなかつた。お信たちは毎晩月を賞めながら涼んだ。作次が町から買つて來た岐阜提灯を坐敷の軒に下げたまゝて、他に灯も置かず、自由に月の光りの流れ込んで來る緣側で遲くまで團扇を動かして涼んだ。

『本統にお父樣はどうなすつたんでしよう。玉子がまたこの暑い中を見さかひ

もなく、方々引つ張り廻してるんぢやないかしら？」

とお信は作次や元代を相手によく横濱の噂をした。作次は人一倍蚊ぎらひなので、植木の空鉢に拵えた蚊遣火を一人で氣にしながら、鉢の中を透かしたり團扇であふいだりした。燻べるものが少くなると、庭下駄をつッかけて、箔のように銀色の月光の摺られた黒い植木の下を通つて、植木畑の方から杉ッ葉や檜葉を取つて來た。新たな焚きものが加へられると、ぱち〱と彈ける音がして、青臭い匂ひと共に、盛んな煙が小さい土燒きの鉢の上から、淺い軒にまつ直に立ち昇つて、月の光りの中に白く溶けて行つた。

その明けの日の夕暮であつた。元代はお信に云ひつかつて、大きな竹箒と鋏とを持つて門の外に出て、長く大屋の植木屋の裏に續いた、緞のようになつた杉の垣から今宵の蚊遣りに焚く青い葉を摘んでゐた。夕燒けが美しく燃えて、天地のすべてのものがその薄赤い影のうちに隈どられて見えるような晩方であつた。空には桃色の雲がところ〲に靜かに浮いてゐた。地の薄緑に透いた所には、新酒の黄色い液のような透明な夕日の光があつた。この空の下をいくつかの鳥の群が鳴きながら通つた。たゞ一羽つうーッと聲もたてず流れて來る鳥もあつた。これ等の鳥の群の黒い翼にも夕燒がうつッた。元代は淋しげなその鳴き聲に我ともなく摘む手をとゞめて、鳥の歸つて行く向ふの堀割の森の方を見上げるような事もあつた。森の木の鋭角を不規則に無數に連ねたような輪劃の上にもうす赤い隈が見えて、その上の深い水色に澄んだ空の中に、たつた一つ金色の大きな星が出てゐた。元代は其點からず——ッと半圓の視線

を描いて一渡り空を眺めまわしたが、森と反對の東の空に、オブラートのような月が淡く浮いてるばかりで、他にはまだどの星も見えなかつた。頭の上の空はたゞ美しい夕燒けの光ばかりであつた。元代は今更のやうに、

「綺麗な夕燒！」と云ふような事を思つて何となく眺め入つてゐたが、いつとなく心には長崎の尼學校の禮拜堂の窓硝子の事を思ひ出してゐた。こんな夕燒の頃にはその窓硝子の二三枚が火の板のように燃えた。その時分は大柢食後の遊歩時間なので、生徒たちはその赤い硝子窓の下を通つて思ひ〳〵の友達と一緒に、洋式の正しい幾何學的の植込みの續いた夕ぐれの庭を散歩した。其處此處の木蔭や並木の後からは誰が始めるともなく讃美歌の合唱が起つた。元代は校費生なので、そんな時間は他の生徒と同じように庭に出て散歩するような自由を持たぬ事が多かつたけれども、そうした事は少しも不平ではなかつた。校内の雜役にはその中に又それ相應の悅びも慰めもあつた。當番のように極まつて、童貞の老校長をはじめ其他の先生たる尼達の用事を足すので、從つて他の普通の生徒たちよりもそう云ふ人々に接する機會の多い事もその一つであつた。又校費生は元代を入れてすべて十人餘りもある中に、白井さんと云つて評判のいゝ上級生の一人から不圖した事から人となりを見込まれて、妹のように可愛がられて親切にせられてゐると云ふ事も便りない元代には非常に嬉しかつた。この白井さんは年も元代などよりは六つ七つ上であつたが、その人が島原の富裕な酒造家の實家を飛び出して、束縛の多い質素な尼學校の校費生などを望んで來るまでには、いろ〳〵な悲しい世の中を見たのであつた。白井さんの住んだ悲

しい世の中。それはまだ元代などは窺ひ知る事の出來ない異國であつた。元代の悲しみには一家の離散があつた。窮乏があつた。顔さへ見知らぬ戀しい母の死別があつた。何かの序からそう云ふ事に話が及んで、元代が氣弱く涙のにじむ瞬をした時、

「まだ〳〵あなたなぞは何ンにも知らない。何ンにも知らない。此上もない幸福な身分ですよ。」

と白井さんは訓すような調子で云つたが、不圖、

「ねえ元代さん、まあこんな人があつたらあなたどう思つて。あなたがそれほど懐しがつて入らつしやるようなお母さんも信じない、お父さんも信じない、姉さんも信じない、まして……まあ凡ての骨肉や愛情の關係をすべて信じない、いゝえ信じきつてゐて凡てから裏切りせられたような人があつたとしたら?」

と白井さんはこれまで口に上せた事もない言葉を連ねて話した。

「そんな人があるものでしようか。」

　元代はそう尋ね返す外は知らなかつた。白井さんのその言葉は何となく空恐ろしくつて、我ともなく顔が眺められたが、白井さんはもう熱の落ちたような不斷の冷靜な顔つきに返つてゐた。而してそれには答へないで、何か他の事でも思ひ出したように、テーブル越に默つて下の庭の方を見おろしてゐた。二人は二階の自習室の窓際で話してゐたのであつたが、何となく悲しい壓えつけられるような沈默の續いた後、白井さんは又言葉をついてこんな話をした。

「私の先祖にはね、はりつけになつた人が二人あるんですよ、え丶宗教を信じて、その時分には島原邊では殊に堅く禁じられてゐたんてすからね。それが二人ともみな娘なの。一人の娘は初めて繪蹈の行はれた時に、滿坐の中て繪像の上に泣き伏したんてすつて。」

二人はそれからいろ〳〵信仰上の話などもした。白井さんは机の上に置いた元代の右の手を自分の左右の掌中に挾んて、

「あなたはいつまても此まゝにこうしてゐらつしやい。何ンにも世の中を見ないて聞かないてゐらつしやい。私などは否應なしに突き出されたんだから悲しい、そして傷だらけの心になつてやつと歸つて來たようなものてすよ。てすからね、本統の信仰に入るまてにはもちつと〳〵うんと苦しまなければいけないのてす。」

と力を籠めて挾んだ手を押えつけて、

「あなたのこの手が美ましい。生れたまゝの淸い手だから。」

と云つた。元代は其瞬間の白井さんの激しい苦痛の現はれた靑白い顏をまともに見てゐられないような氣がして、腑向いたまゝ何故に出るとも知らぬ悲しい淚を流した。白井さんが北海道にあるトラピスト修院に入る決心をして、校長樣にお願ひしてあると云ふ話を聞いたのもその時てあつた。

「私はこの世の中にはなんにも心殘りはない積り。校長樣から早くお許しが出ればいゝ、とそればかりを此頃は祈つてるんてすけれど、あなたに別れる時は悲しいかも知れない。」

と云はれた時は元代は又止め度もなく涙が流れた。

それは東京に來る一日ばかり前の事なので、もしか急に許可が出て此休み中に北海道に行つてしまふやうな事がありはしないか知ら、と元代は垣に添うてあちこちと歩いて、杉ッ葉を竹笊に摘み入れながら、頭の中にはその事ばかりを思ひ續けた。而して此頃の生活のうちにいつとなく眼にふれて來た世の中のすがたと云ふものが、一ッ〳〵新らしいこれまでと異なつた悲しみになつてうつるにも、白井さんの言葉が思ひ合されるやうで、空怖ろしかつた。

「手紙をあげなければ、いつも葉書ばかりですまなかつた。」

と何となくあはたゞしいやうな氣持ちで暮してゐる此頃を悔いながら、學校の窓が見えてもするやうに懐しさうに、も一遍空を見廻した。夕燒の色どりはいつの間にか褪めて、うす紫の黄昏の中に月の面が光りを増してゐた。元代はふえて來た簸蚊を拂ひながら一杯に摘みためた笊を抱えて門口の方へ引き返しかけると、向ふの停車場からの曲り角に添うて、思ひもかけずたゞ一人戻つて來る父親の姿を見つけた。

「お父さん――。」

と呼びかけながら、元代は竹笊を垣の側に置いたまゝ駈けるやうにして父の側に行つた。

「おや、お一人ですか。」

と門口を這入ると驚いて飛んで出たお信は、一番にそれを聞いて、

「玉子は？」

と不審らしい顔付をした。玉子は横濱を立つ少し前に不意に大磯の楠田の別邸から電話がかゝつて、今日此方に來たから遊びに來るようにと招かれたとかて、停車場まで一緒に出て上りと下りとに別れたと聞いた時、

「まあ何て云ふんでしよう、玉子は。」

とお信は呆れたように作次と顔を見合せた。作次は苦笑ひをして、

「餘り御ゆつくりの樣ですから、お迎ひかた〲私ゃ久しぶりに横濱に行つて見ようかと思つた所てした。今朝出かければよかつた。」

と云ふと、

「なんの〱。」

と父は國訛りて制して

「横濱から此處の間に迎ひも送りも入るもんですかい。」

と風呂敷包みをあけて土産の支那まんぢうなどを取り出した。お信は汗のついた父の着物を洗ひたての浴衣に着換えさして、お茶を入れてみんなしてそのまんぢうを摘まんだりしてる頃には、夜はだん〱月の色になつて風もよく通した。父は風の向きてどうかすると家の内に這ひ込む縁側の蚊遣りの煙を大きく團扇で拂ひながら、

「あちらに比べると此處は夏知らずぢや。それに玉子の今の家は銀行の持家とかで煉瓦造りぢやから、どうも堪らなかつた。」

とさも快さそうに見えるのが、お信には嬉しく眺められた。生活の程度と云ふようなものから云へば玉子の家には及びも付かぬ。あゝも、こうもと思ふ事はあつても、思ふ通りに行かぬ乏しい待遇を、却つて氣樂そうに滿足して呉れるのが有り難いのであつた。

横濱の話はいろ〳〵ある中に、上海の支店長に轉じた玉子の良人が兼て關係のあつた女を内密に上海に呼び寄せた事が分つて、玉子が非常に腹を立てゝると云ふ話は一寸作次やお信に意外な土產話であつたが、

「その女の事なら私玉子によく聞いてゐましたわ。」

とお信は委しい前からの事情を知らなかつた父の爲めに却つて自分からその話をした。それは小春と云ふ名で關内切つての女であつた。その女を自由にすると云ふ事はそうした女の群の中に派手な交際社會をもつてる男の間には名譽ある成功なのだそうで、

「他のみずてんなんぞなら私許かないのだけども……。」

と云ふような事を玉子はお信に云つた。こう云ふ言葉の底には、幾らどんな眞似をしたつて權田を親元にして嫁いだ自分をどうする事が出來るものかと云ふ誇りと、誰に迷つたつて自分のこの顏を忘れて仕舞ふ事は六ヶ敷いと云ふ立ち優れた美貌に對しての深い自信のあつた事は疑はれなかつた。實際その女

は玉子が萬人の中にても直ぐ目につくやうな派手な眼鼻の明るい顏を持つてるのに引かへて、上方女でも見るやうな靜かな淋しい影の添うたような顏立ちであつた。玉子はその寫眞をお信に見せて、

「こんな顏がどこがよくつて男は大騷ぎするんでしよう。」

と笑つたが、

「でも氣立ては可愛いのよ。先達て年忘れのような事を目論んで銀行の奧樣方とより合つた時にね。みな樣が今日は殿方に負けずにやりませうつて、大勢藝者なんぞよんで騷いだんでしよう。その中に彼女がゐてね、私一人に附きつきりてはたの者には手も觸れさせない、と云つたような仕方が可愛かつたから、私歸りに引つ張つて家に連れて來たと思ひなさい。宅て呆れたような困つた顏をしてたのがどんなに可笑しかつたか……それをきつかけにちよい〳〵顏を出しますよ。」

と得意らしく話したのをお信は聞いた事もあつた。

「どうもあの連中のやり方は……あれて可いものかなア。」

とその委しいいきさつを默つて聞いてゐた後、父は色々見て來た事に思ひ合せるような云ひ方をした。

頓て氣疲れのした父のためにお信は床を伸べようとして、押入れのある玄關に行つたが、ふと帽子掛けに今まで氣のつかなかつた珍らしい夏帽子のあるのを見つけて、

「お父樣、立派なお帽子をお求めになりましたのね。」

と云ひながら、それを持つて又坐敷に戻つて來た。

「そうだつた。一寸貸してくれ。」
と父はお信の手からその帽子を受取つて、
「どうぢや作さん、これは吉田（玉子の良人）のお古だそうぢやがな、玉子が是非冠ぶれと云ふんで、まあこれて見物して歩いた次第ぢやが、どうも頭だけ豪い紳士になつた譯て……。」
と父はいつもの氣作らしい高笑をした。
「これはあんたに畫土産にしよかなア。」
「結構てすね。」
と作次は高價な舶來パナマの端を無造作にいぢり廻して見たが、お信にはその顏に、
「吉田のお古なんぞ……」
と云ふ意味がよく讀まれた。それと共に父の帽子の黄色く古びてゐる事に氣のつきながら、一寸と如何する事も出來なかつたのが、急に胸にせまつた。
元代はいつの間にか奧の間に行つて、釣り手の環を鳴らして蚊帳を吊つてゐた。

二

お信は何か燃え上るものをじつと押えてるような氣持て玉子の大磯から歸るのを待つてゐた。それは漸く何年かの思ひてこうして暫くても親子姉妹が同じ屋根の下に起き臥しするようになつたのに、まだ幾日もたゝないうちから、もうその生活に馴れて珍らしくもないと云ふ風に、自分勝手な遊び方をして

ゐる不快も交つてはゐたが、それよりも先夜父と玉子が横濱に行くのを見送つた停車場からの歸り途に、元代から玉子が内々目論んでゐると云ふ事――つまり作次に父の行末を見て貰ふ頼みは到底ないから、權田の勢力に縋がれ――と云ふ話を聞かされてから、悲しい思ひにまじる口惜しさ腹立たしさが耐え兼ねられてゐるのであつた。

「玉子はいつまで大磯に行つてる積りでしよう。あんな我儘者ッたらありやしない。今度歸つて來たら私うんと云つてやる事がある……。」

とお信は胸を納めきれぬように腹立たしく作次に話したが、

「止せ、止せ。お父樣がゐらつしやる間は餘計な事は云はないがいゝ。」

と作次はなだめる樣に止めた。

「だつて餘り馬鹿にしてるんですもの……。」

とは云つたが、元代から洩れた話はまだ作次には耳に入れてなかつたのであつた。お信は幾度も彼に打ちあけようとしたが、未だ國元からの送金を待つてゐるほどの餘裕もない生活の中に、親身に父や妹を迎えてくれてゐる心も汲まずに、其上にも彼の病弱な身體を鞭打つような玉子の冷たい言葉を良人に取り次ぐに忍びなかつたのであつた。

天氣は續いてよく照つた。その烈しい熱氣の中に思ふまゝな繁殖を遂げた夏の植物は、伸びられるだけ伸ばした枝や、繁らされる丈け繁らし擴がらした葉を、少し持て餘したように疲れて、青黒い陰影を

作つたまゝぽつさりと垂れてゐた。たゞその中から如何なる暑さにも負けずに根氣のよい聲をあげてゐるものは蟬であつた。全く蟬は寄生虫てゝもあるかのように片時も樹木から去らずに、家の周圍に氣倦い氣の遠くなるような響を立てた。作次はその時分、可なり見物にも飽きた退屈な父を誘ひ出して、近郊の川や沼や又海の方にまでも釣りに行き始めた。父も釣りは好きて、輿に乗つて毎日のように出掛ける事もあつた。夕方おそく魚籠に入れて歸つた魚を、お信は元代に手傳はして忙しく煮たり燒いたりして、待つてゐた夜食を賑やかに笑ひながら食べた。殘りのものは竹串にさして日干に拵えると云つて、父に一聯づゝかゞつて貰つて軒近い庭木の枝に提げたりした。こんな事を皆んな寄り合つてしてゐると、これがもう十年も二十年もずつと續いて來た明け暮れのような氣がして、頓て又幾何もなく父は日向の山の奥へ、元代は長崎の尼學校の厚い窓の中へ、散り〳〵になつて行くと云ふような事は嘘のように思はれた。けれども嘘と思はれぬ日は近づいて來る。お信はその悲しい日を思ふと、玉子が自由のきく權田の勢力に縋ろうとする事も、あながちに責められぬ氣もして、

「情けない。」

と云ふような様子をしてぼんやり柱などに寄りかゝつてゐる事があつた。元代には姉の胸の中がよく分つてゐたけれど、自分から何と云ひ出す事もならずに默つて涙ぐんだまゝ、窓下などに遠ざかりながらお信のそうした物案じの姿を見てゐた。時には庭に下りて植木畑の方を歩いたり、その小い木戸から木蔭のある涼しい小路に出て見るような事もあつた。路の兩側は殆んど植木屋て、所々に百姓屋の草葺屋

根やちんまりした新しい木口の住宅などがあつた。その他は森か牛屋の牧場のようなもので、元代は洋傘を傾けて野生の白い花の咲いた薔薇の蔓などを取つて歸つた。學校の白井さんに書いた長い手紙にはその花片を封じ籠めた。

この薔薇は昨日散歩の時に森から見つけて參りましたのですよ。可愛らしい花でしよう。姉の家は先にも一寸申しました通り東京のはづれの田舍ですから、一足門を出ますとこんなものゝ咲いた森や田畝に參られます。私はこの頃よくこんな所を一人でぶら／＼致しながら貴女や學校の事を思つて悲しい懷しい思ひにふけります。學校でこんな心持ちの致すのは父や姉たちを思ひ出す時でしたのに、いつの間にかあべこべになりました。……

宛名を書く時、元代はふと思ひ付いた事があつて、

おなつかしきポリナ姉さま。　テレジヤ。

と書いた。これは白井さんが名高いテレジヤ童貞の自敍傳をマリイ先生から頂いて、熱病のように讀みふけつてた頃に、元代につけてくれた假名で、ポリナはテレジヤの姉の名前であつた。元代は遠いポストのある停車場の傍まで、散歩がてらに手紙を持つて裏道づたひに行つた。可なり大きな杉森に左右を圍まれた廣い墓地を探し出したのも、そんな散歩の中の隅然な出來事であつた。墓地の中は森の黑い小路を拔けて行くとパッとする程明るく淸淨であつた。その間を縱横に通じた正しい平らな路、一廓々々の墓を取り廻したカナメ垣、杉垣、白い石塔に蔭を落す綠葉の樹木、そう云ふものが美しく寂びて、人遠

い混雜のない空氣の中に浸つたようにひつそりと靜まつてゐる有樣は、何かのお話の時に校長樣から聞いた「靈の公園」と云ふ言葉をはつきりと元代の胸に浮ばせた。元代は長方形の石を置いた佛敎の墓ばかりのような中から、主イエスの後に續いた十字架を探り出そうと熱心に注意して歩いたけれども、此墓地には十字架は極めて稀であつた。元代はなんだか便りないような心持ちて、故鄕の墓地の先祖代々に並んだ立派な石塔の中に交つてるお母樣の墓を思ひやりながら、天主樣の敎を信ずる人達通りに、こんな長方形の石の下に眠つてる人達にも、又先の世て廻り合はれるのてなければ悲しいと思つた。元代は我知らず十字をきつて亡き母の爲めに聖母の御名をよんだ。心はうら悲しく澄んて、東京に來て以來、父や義兄や姉たちに取りまかれた明け暮れの中にも、何となく全身から遠のくものゝあるように、心細く感じられた大事なものを、又しつかりと抱き留めたような氣がして、學校の禮拜堂の黄色く瞬く蠟燭の灯、校長樣の白い頭巾の下にある鳶色の瞳、白井さんの青白い端正な横顏などがまざ〳〵とその心に見えた。

歸つて、

「お姉さん、田畝路の森の先は墓地なのねえ。」

と話すと、お信はおどろいたように、

「あんな所まで行つたの。」

と云つたが、別に留めもしなかつた。元代はその翌けの日も何となく其方に足が向いて又森を拔けて行

つた。墓地は昨日の通りに明るく靜かに清淨であつた。此中の路は、田畝に拔ける近道として通る近所の百姓か植木職人か、蟬取りの長い竹竿をもつた子供などでもなければ、誰も通る人はなかつた。森に添うた小路を撰んで行けば、靑い木の影が薄い單衣すがたの細長い身體にうつッて、風が涼しく吹いた。

一廻りして來て、又植木畑の方から何心なく庭口にかゝると、元代は坐敷から思ひがけない聲が高い調子て洩れるのを聞いた。

「あら、玉子姉さんが歸つた！」

と思つて急いて植込みを分けて行きかけたが、

「もつちやん――もつちやん――。」

と云ふ自分の名が繰り返されてるのを耳にすると、ためらふともなく足をとめた。開け放した夏坐敷の話聲は、あからさまて、そうして一分ても立ち留まつてゐれば、玉子とお信が何を自分に就いて話してるかは厭ても聞かなければならなかつた。元代は急に空怖ろしい事をしたように我ともなく引つ返して又植木畑の方に出たが、

「櫨田さんのあの話らしいわ。お父樣や義兄樣は丁度入らしやらないし――。」

と思ふと氣遣はしくなつた。自分の心の中は姉さんが十分承知してゐる筈だけれども、又今度の大磯て、玉子姉さんがどんな事を櫨田さんに賴んて來ないとも限らない。もしお姉さんまて玉子姉さんの考に同意するような事になつたらどうしよう。そうすればもう學校には歸られない事になる。白井さんにも合

はれないのか知ら。校長様のあの神々しいお姿にも——

足に任せて植木畑を垣根に添うて考へ〳〵歩いたけれども外に何處と云つて行き場はなかつた。向ふの大屋に近い方は午後の水蒔きが始まると見えて、職人や女達が賑やかな笑ひ聲を立てゝ出てゐるので、その中に行くのは好まなかつた。何故あのまゝ坐敷に這入らなかつただらう。這入つてどんな運命が自分を待つか、姉さん達の話をすぐ側で聞いてゐた方が却つて落着いてゐられたかも知れなかつた。それに餘に時刻がたつてもお姉さんが心配なさる。と思ふと足は又自然家の方へ向いた。而して今度は何と云ふ事なしに話聲の聞えぬ勝手の方へ廻ると、流し元に水を使ふ音がしてお信が顔を洗つてる所に出逢つた。

「おそかつたのねえ。」

とお信は濡れた顔に手拭を當てながら水口に立つた妹を見上げたが、元代はお信の兩方の目が赤く泣き脹らされてゐたのにすぐと氣がついて。

「お姉さん……」

とそのまゝ胸がせまるように感じられた。

「どうかなすたの。」

「なんてもないのよ。餘り汗になつたからさ、早くお上り。玉子姉さんが歸つてるから。」

元代は素直に洋傘を持つたまゝ流し元の姉の後を通つて上ると、

「もつちやん何處まで行つてたの。」

と玉子はそれを迎へる樣に坐敷から出て來た。

「もつちやんも呑氣ねえ。私はあなたの事で姉さんと喧嘩までしてるのに――。」

「お玉さん――。」

とお信は忙しく臺所から顏を出して玉子の名をよびながら、きつく目で制した。

「お姉さんいゝぢやありませんか。どうせもつちやんの身の上の相談なんですもの。」

と玉子も亢奮してるような顏つきで姉を見返して讓らなかつた。

「もつちやん、まあ此方へ來て私の云ふ事をも一度ようく聞いて見ておくれな。お父さんもお義兄さんもお留守で丁度いゝ折なんだから。」

と玉子は今までお信と話してゐた坐敷の方へ引つ張るように元代を連れて來て、かう改まつた調子で坐を隔てゝさし向ふと、

「もつちやんはもう權田さんの方の話を姉さんに相談したんですつてね。」

と一番にそれを云つた。玉子のわざと其處までゝ言葉を切つた勝氣らしい口許は、

「なんだッて未だ内證にしてゐなさいと云たつた事を話して仕舞つたんです。もつちやんも思つた程もない、おしやべりねえ。」

と沈默のまゝ語つてるような氣がして、元代はさあつと赤くなつた。

「私はもつちやんの確かな返答を聞いた上て姉さんにも相談しようし、お父様や義兄さんにもお話した方が纒まりが早いと思つたから、それてもつちやん自身てようくまあ考へてゝ下さい、と云つといたんてしよう。」

「濟みません。」

と元代は心からあやまつた。

「濟むのすまないのつて、そんな事を今云つてやしませんわ。だけど姉さんの先刻からの話では姉さんはもとより權田さんのお世話になんぞならせるのは不贊成だと云ふし、又もつちやんもそんな事は御免だと云ふ考だつてね。もつちやん、あなた、本氣でそんな事云つてるの。」

「玉子姉さん、どうぞ私の我まゝを許して頂戴。私是非學校へ歸らなけれやならないんですから。」

と元代は震へながらも、この一言だけはどうしても云はねばならぬと云ふように、はつきりと正しく答へた。

「なら、もう姉さんも諦らめませうよ。」

と玉子はむら〳〵する胸を强いて落ちつけるように靜かに云つたが、矢張りそのまゝ默つてはゐられなかつた。

「もつちやんがも少し世間と云ふものを見てゐれば姉さんの云ふ事がようく分るんだけども……まあ今に御覽なさい、思ひ當る日が來ますから、だけれど何故こううちては皆んな揃つて權田さんの事つて

ばすぐ毛嫌ひするんてしよう。義兄さんや姉さんはまあ別として、もつちやんまでがそれほど嫌ひにならなくつてもよさそうなものね。奇體だわ。」

と玉子は一寸皮肉らしい輕快な微笑さへ閃めかした。

「ても私はどこまでも櫂田さん黨てすよ。御恩があるんだから。それに旦那様は元よりだし奥様だつて何處に出しても押しも押されもせぬ豪い方ぢやありませんか。お世話になつて不足のあり所ぢやない。勿體ないと思はなきやならないのに……まあ何處が厭なの、もつちやん。もつちやんの何か不贊成な點をあげて御覧な。」

と玉子は云ひ續けて調子を張つたが、それは目の前にさしうつむいて坐つた元代に問ひ詰めるとよりは、次の間のお信に向つて云つてるのだと云ふ事はよく分つた。お信は二人の側に行こうとして立ち上つた時また目を拭いた。涙もろい彼女は情のたかぶると共に、言葉よりは先にたゞ涙が流れるのてあつたが、

「お玉さん、もうそんな事もつちやんに尋ねる必要はないぢやありませんか。」

と玉子の鋭い言葉を押えて置いて元代の側にすり寄る様にして坐つた。

「もつちやん、お玉姉さんの考へと、もつちやんや私の考へとはどうしても違ふんだから困るんてすよ、お父様を如何なさると云はれると、全く私も途力にくれるのてすから――義兄さんが引き取つてお世話する事の出來ないのは、そりや全く意久地のない話てす、それを今までさんざお玉姉さんに云はれたのてすけども……。」

「意久地のないどころぢやない、義兄さんても姉さんても大した見識ぢやありませんか。櫃田なんぞがなんだと云ふんだから、豪いわ。」

「そんなに冷かさないて下さいよ。もう澤山なんだから……。本統は私がいけなかつたの。みんな私がいけないんです。總領の私が他人の家に片づくと云ふ事がもうそも／＼の間違ひなんです。」

と押え／＼てゐたものを一時に投げ出したように咽びながら、

「お玉さんもそう思つてるてしよう。」

とお信は泣いた。

「そんな事まて私云つた覺えはない。」

「云つたつてよろしいの。事實なんだから。私さへ結婚しなければ——氣强く獨立してさへゐればたつた一人のお父様を、いつまてあんな山の中に置いとかなくも濟むんですし、又あなたからこれほど馬鹿にされる事もなかつたんです。」

とお信は激しい感情の走るに任せてまつ青な顔をして云ひ續けたが、言葉を切ると自然に汐の落ちたような平らかな、極端に打ちしづんだ心持ちになつてしまつた。而してこう云ふ言葉は、平生我と我心にも知らず、押し隱し／＼してゐた良人に對しての罪の一片が、不意に目の前に曝されたような氣がして空恐ろしかつた。お信の胸にはいろ／＼な感情が一時に集まつた。

「姉さんはひがんでるんだから……。」

と元代も又何か云はうとしたが、急に口を閉ぢて、濃い眉根を陰のさすほどによせたまゝ、ぢつと姉の考へ込んだ横顔を見つめてゐたが、玉子はぷいと緣側に出て行くと、

『あ――っ。』

と無遠慮な生欠伸をして兩手を大きく右左りにふつた。

『さ、もつちやん水でも汲んで入らつしやいよ。庭にまきませうさ。ぐさ／＼しつちまう。』

と壁の側に震てゐる元代をせき立てゝ呼んでおいて庭に下りた。

『まつたく、水でも打つてゝ頂戴。やがてみんな歸つて來るといけないから。姉さんも臺所をします。ほら又大將が呼んでる。』

とお信はわざと氣輕なことを云つて、途方にくれたような元代を庭へやつた。赤い夕日の中に蟬ばかりの聲がした。元代は姉さん被りの手拭の陰に涙のたまつた瞳を忍ばせて、かひ／＼しいおはしよりて木下路を水汲みに行つたが、こうして姉達を離れて一人になると何とも知れず胸の底から込み上げて來る涙があつた。それは櫨田に行く行かぬ、そんな爭ひの中から出る涙ではなかつた。悲しい、たゞ悲しい。目に入るもの、手にふれるものゝすべてがたゞ意味もない悲しいものになつた。

三

『どうです玉子さん。上海事件の成行は。あなたのようでもない。出し拔けに乘り込んで行つておやんなさい。』

『見つともないわそんな事。さも燒餅やらしくて厭ですわ。私あの女が歸つてあやまらないうちは、いつまでだつて東京にゐてやりますわ。』

『上海で吉田君と女を二人並べてあやまらせた方がいゝぢやありませんか。』

『兄さんは感違ひしてゐらしやるのね。私何も吉田に對して怒つてやしませんよ。吉田ならこそあの女を上海までも引つ張り出せるんですわ。私豪いと思つて感心してますよ。たゞ私の怒つてるのは、女が私を出し拔いたような眞似をしたのが口惜しいんです。全くそれだけは考へても腹が立ちます。かうでうですからつて縋つて來る位だつたら、私旅費ぐらひは心配して立派に立たしてやりますよ。』

と玉子と作次が無遠慮な言葉で上海の女の話などをするようになるまでには、それから此方妙な陰のさしたような三四日が續いた。お信と玉子は半日も口を聞かずに默り込んでる事もあつた。父や作次の前では二人どもつとめて無事な樣子を作つてはゐたが、それでも神經質な作次には直ぐと感づかれた。

『お信、お前お玉さんと喧嘩をしたね。』

と彼は夫婦だけの時にそう云つてお信の顏を強く見た。丁度その頃には父も綿密な老人の注意に、何となく家内の空氣の違つてゐるのを見外ずさなかつた。而して元代を膝近く招いた。

元代は姉達が口論をした時に、自分が玉子から受た相談を口留めを破つてお信に洩らした事について、玉子から非難するような言葉をきいた瞬間、譬へようもない恥辱を感じたので、今度の事は自分からはどう云ふ事があつても洩らすまい、間に挾まつてどれほど心を痛める苦しい事があつても、姉さんたち

自身て口をきるまでは決して何事も話すまい、とひそかに決心してゐたのであつたが、父が氣遣しそうな顔つきをして、

『元代、姉さんたちはどうかしたのぢやないかのう。お父さんにはどうもそんな氣がする。お前は何か知つてる事があるだろう。』

とすかすように優しく尋ねられた時には、元代はなんだか取り縋つて泣き度いような心持ちがした。

『お父さんに隱し事をしちや困るのう。一體何事があつたのぢや。』

『お父さん、ぢや皆んな申しませうね。』

と元代は決心して姉達の衝突の顚末を父に打ち明けた。父は聞いてそれほど意外な話とも思はぬらしかつた。

『よし、よし。そんな事だろと思つた。』

『私さへお玉姉さんの仰しやる通りになればよろしいんですけど、お父さん、私はどうしても學校へ歸り度うございます。』

『そりやお前は學校へ歸るのが當り前の事ぢやないか。お父様もそろ／＼日向の山の中が戀しうなつたわい。』

と云つて父はうす赤い艶のいゝ顔ににこ／＼したが、元代にはその笑顔が却つて淋しげなものに見えた。

その夜の晩飯の時、父は珍らしくお信に一本つけさせて、作次と二人の間に小さい盃をやり取りしな

から、鯛の細作りをあしらつた白瓜の三ばい酢の加減などを褒めた。

『それはお父さん、お玉さんの御自慢の御あんばいなのですよ。』

とお信はともすれば話がとだえて、めい／＼自分／＼の考へ事を始めてるような顔色になる其場をとりなそうとして、向隣りの玉子にしも手な妥協的の笑顔を向けたが、

『それがどうしたの？』

と云はんばかりに見返した済ました目つきを見ると憎らしくなつて、自分もそのまゝ默つてしまつたが、父は無頓着らしく、

『瓜と云へば作さん、日向の山の中などでは、夏の間は何より結構なものでしてな、中々安く買へません。』

と話し出した。

『矢張り町から買つて山へ送るんでせうね。』

『それもありますがきうり、南瓜の季節になると村の女が團體を組んで賣りに上つて來るんです。暑い盛りですからな、木挽でも樟腦取りでも椎茸職人でもみんな買ひますさ。そして鹽をつけちやがり／＼丸かじりにするんですが、水氣が多いんで何より旨い。』

『お父樣もそうして召し上りますの。』

とお信は言葉をさし挾んだ。

「やるとも、よう食べたもんぢや。瓜にはいろ〳〵面白い笑話があるんでの。ほらあの事務所の後谷の川の淺瀬に、若い者たちがよく大きな竹籠に一杯瓜を入れて洒らしておくのぢや。それをずるい職人共がかぎつけて、時分を計つて丁度氷のように冷えきつた旨い所を竹籠ぐるみ知らぬ顔して盜んで行つてしまふ。そうとは知らぬ若い者たちがのそ〳〵引き上げに行つて見て、さア無い。どいつだ〳〵、瓜を盜んだなアどこの小屋の泥棒木挽だと大さわぎ。」

一坐思はずみんな笑つた。

「どうして、山の中は又別天地ですからな。」

と父は笑ひながら作次に向つて、

「留守の間もどう云ふ事をやつてるか、と思ふと些とも油斷がなりません。余り長い間うつちやつて置く譯にも行きせんからな。おひ〳〵私も歸り支度に取りかゝらずばなるまい。」

と云ひ出した時には、作次はじめお信にも玉子にも元代にも、みんなの心に思ひ當る事があつた。

「おやぢは何もかも知つてるんだ。」

と作次はお信から聞きとつた姉妹の衝突と、今宵の初めはたゞ酒の間の笑ひ話のように聞いてゐた父の言葉との間に、堅い連鎖のあるのに氣がつくと共に、彼の氣象としてその上しら〳〵しい引き留めの挨拶などは出來難くなつた。けれども何とか云つて、この善良な尊敬すべき老人に自分の誠意を表はし度いような氣が頻りにした。

「ぢやお父さん、その内日光見物だけでもお濟ましになつてお歸り下さい。この次ぎ御上京になる頃には、私もどうにか目鼻が付いてるでしようから、その時は又改ためていつまでもお逗留を願ひます。」
と彼は正直に云つて、いけぬ口でもう爪までまつ赤に染まつた手を延ばして、義父の前に盃を捧げて自分から酌をした。
「屹度また御厄介になりに來ます。」
と父も滿足そうにその盃を受けながら、
「私もな作さん、今までの生涯をふり返つて見ると、何一つ出來た事もなく、その上重代の家產は傾け盡すし、誠にはや失敗だらけの身の上ぢやけれど、今になつて見るとこれも氣樂ぢやと思ふてゐます。たゞ何にも知らぬ子供達に苦勞さして濟まぬと思ひましたがな。それもこうして立派に身の堅まつた所を見ますともう安心てす。元代もおかげて學校の方て親切にしてくれるし、當人も悅んで勉强したがつてゐますから、今度は歸りに長崎まで送り屆ける序てに久しぶりてルベルさんにも逢つて、委しく先き〳〵の事も賴んで置くつもりてす。こうして置くともう私はなんにも心掛りのない樂隱居ぢや。な、作さん、おやぢは日向の別莊に行つてる、とこう思つてゝ下さい。そうして長生きをして、時々遊びに出て來ますよ。」
と何氣なく述懷した。その言葉には一坐はみんな一つ心になつてしんみりと耳傾けた。
快よく醉うた父が早く蚊帳に入つた後、お信たちはめい〳〵柱にもたれたり、緣側に腰をかけたりし

て涼んだ。月はもう居待ちを過ぎて遲かつた。玉子は廻りの縁の角に膝をくづしながら、うす暗い庭先を眺めて團扇を動かしてゐると、側にゐた作次がその右の肩をたゝいて快活に云つた。

「お玉さん、姉さんとの喧嘩は僕があづかつたよ。」

「なんだか大そうもない、なぐり合ひでもした樣ね。」

と玉子は逆らはずに笑つた。

「やつて見りやいゝんだ。これからは口先でぐづぐづいてるより取つ組あつた方がいゝ。」

「いやな兄さん。」

と玉子は全くわだかまりなく笑つた。お信も元代も微笑した。

一日二日して日光行きの相談がはじまつた時、元代はどうにかして留守がしたかつた。父にも義兄にも姉達にも別れた唯一人の身になつて、ぢつと考へてゐたいようなものが何か知ら胸の底にむらがつてゐた。學校の禮拜堂で祈つた通りに、たゞ一人ひれふして泣きながら祈り度いようなうら悲しい心持が絕えなかつた。この氣分からは深い杉山の奥に隱れた、金殿も朱樓も寶玉の階も皆緣が遠かつた。元代はもうなんにも見物して步るくような氣はなかつた。それに白井さんへ出した手紙の返事がいつまでもおくれるのも心配であつた。もしか北海道に出立してしまつた後に、あの手紙がついたのではあるまいか。白井さんはもう自分たちのような袖の長い、紅やみどりの色どりの交つた女の服裝をぬぎすてゝ、

粗い毛織物の修道服をまとつてゐるのかも知れないと思ふと、繪などで見る昔の名高い童貞たちの白い頭巾をきた面影が、みんな白井さんの姿になつて清淨に相像せられた。

元代は思ひきつて、

「姉さん、私お留守番してゐますわ。」

とお信の顔色を伺ひながらそつと頼むように云ふと、

「なぜ。もつちやん。」

と玉子が引き取つて、じろりと元代の顔を見つめて云つた。

「又二度とお父樣とこう云ふ事が出來ると思つてれば間違ひますよ。もつちやんも妙に變屈なところがあるのねえ。」

元代はもう何にも云はなかつた。默つておとなしく父と姉たちの間に挾まつて、朱の神橋を上手に見ながら大谷川の白い流を渡つた。杉に古りた暗綠色の御山の中に、金と朱と碧の美しい配合も見た。奥の院につゞく廻廊の門に白と水色と紺青と、三つの洋傘を傾けて左り甚五郎の睡猫も見た。中禪寺の湖に近い宿の坐敷から、夕風に白い三角形の帆を張つた西洋人のボートを遠く眺めながら、珍らしいやまめ料理も味はつた。瀧も見て、一夜泊りに歸つた。

留守番に廻つたのは作次であつたが、元代の顔を見ると、

「サア、もつちやん、手紙に小包。」

と渡してくれた厚い封書は待つてゐた白井さんからてあつた。小包も同じ人からてあつた。手觸りてすぐ書物らしいとは知れたが、當てのない事なので不審に思ひながら、元代は着換えもそこ〳〵に手紙と小包とを抱えて窓際に行つた。其處には青い木かげのさす下に小机もあつて、いつとなく元代の坐るところのようになつてゐた。

元代は手紙から先に封を切つた。

『元代さん、先日は長いお手紙をうれしく拜見いたしました。早く御返事を書き度いと心にかゝりながら、今日までのび〳〵になつた事を何卒御許し下さい。佛語の講習會は一週間ばかり前に無事にすみました。校長樣をはじめ、マリイ先生その他みな樣がお暑い中を一生懸命お働きになりました。それこれて私共も可なり忙しい日を送りました。けれどもいくら忙しくても手紙一本認める位ゐの時間のない事はなかつたのでしたが、あなたにあげる手紙をゆつくり書けるような落ちついた氣分になれなかつたものですから、と申す方が本統なのでございます。それは此手紙が恐らく私の只今の生活からあなたに上げる最終の手紙だろうと存じますから、いろ〳〵書けるだけ思ふだけの事を殘らず書いて仕舞ひ度いと思つたのでした。こう申せば直ぐあなたには今私の上に下つてる天主樣の特別なお惠みの事を心づいて、遙かに私のためにお悅び下さる事と存じます。いよ〳〵校長樣のお許しがあつて、私はトラピスト修院に入る事が出來るように相成りました。どうぞあなたも私の爲にマリア樣にお禮を申し上げる事をお忘れ下さいますな。全く私はこれて新らしい世界を見出したのでございます。僞

りのない本統を申しますと、私はまだ〳〵修院に入る事を許可されるほど確かな信仰を持つてゐるのではありません。あの神聖な修道服を憚りなく身につけ得る程、清浄な胸にはなりきつてをりません。古い悩みをも思ひ出します。私はマリア様を愛し、主耶蘇を愛すると共に、往々に人間の愛をも思ひ出します。怒りとか剛情とか、いろ〳〵な不純な文字で表はさるべき感情がまだ心の底にこびりついてる事を見出して、時々非常に驚いたり悲しんだりいたします。けれども天主様は私のこの混雑した胸を十分御承知になつてる上私を撰び下すつたのだと思ひますから、私は一層その深い御思召しに感謝いたさなければなりません。修院の祈禱と默想と苦業とのみなる明け暮れは、おひ〳〵私のこの心を清めて聖旨にかなふようになり得るだらうと決心してをります。

いよ〳〵あなたともお別れの時が參りました。私の北海道に出立いたすのは九月早々の積りに致してをりますから、もしあなたが八月一杯に御歸りになればお目にかゝつて行かれるかも知れないと、覺束ない頼みをかけては居りますが、心細いような氣がいたします。とても貴女は八月一杯にはお歸りなさらないでしようから。

私は今あなたのお机を拜借してこの手紙を書いてゐるのです。そして四年前にはじめてあなたと打ちとけたお話をいたしたのもこの机の側であつた事をふと思ひ出して、懐しく思ひながら書いて居ります。あなたはあの時の事をお覺えになつてをりますか。私はよく覺えてをります。あなたが學校へゐらしてまだ二た月位ゐにしかならない頃でした、お下げになすつて大變やせてお小さかつた。あな

たはあの時お父様からのお手紙をよみながら、いつの間にかそれを顔にあてゝお泣きになつてゐらしつたのでしたよ。私はその時分はお隣りの部屋で、何かの用事で貴女のお部屋に參つたのでしたが、ドアが開いてたので何氣なく這入ると、他の方はどなたも見えなくて、小さいあなたがしよんぼりして泣いてゐらしたから一寸喫驚いたしたのでした。側に行つて、

「何をお泣きになるの、いゝお子だから泣いてはいけません。」

と申しましたら、あなたは

「御免下さい。」

と仰しやいましたね。私はその時なんて可愛い事を云ふ子供だろうと思ひました。こんな事を申すとあなたはお笑ひになるかも知れない。子供だなんて非道いと仰しやるかも知れません。けれどもあの時分はまだ全く赤ちやん〳〵してゐらしたんですもの。いゝえ今でもあなたはどこにか赤ちやんじみた顔をしてゐらつしやる。私はあなたのその面ざしがいつまでも永久に失はれない事を祈ります。とにかく私達はあの頃からずつと仲よしになつたのでしたね。それから今日まで四年の間一日も御一緒に暮らさない日はありませんでした。それに今度一生のお別れと云ふ間際にこんなに長いこと別れ別れになつて居るといふのは誠に意外な事でございます。私はぜひも一度あなたにお目にかゝつていろいろお暇乞ひもいたし度いと念じてをります。けれどもあなたは久しぶりでお父様やお姉様方の慈愛の中に取り圍まれて幸福な日を送つてゐらつしやるのですから、どれほど私が心淋しくあなたを待つ

てゐるかは想像がお付きてないと思ひます。實は私もこの間講習會が了ると直ぐ其晩出立して、あなたと同じく幾年ぶりかに島原の生れた家を訪ねました。修院に入るにきまつた事について少し相談があつたゝのですから。けれども私の父母や兄姉は、私に取つては懷かしい人と云ふよりは寧ろ悲しい人達なのでございますよ。そんな感情の中て私は又殆んど思ひがけもない、十年ぶりにもなる或珍らしい一人の人にめぐり逢つて來ました。私の不用意な心は一時戰場のように混亂して見えました。私は何故歸つただろうと後悔すると共に、これも現世をふり捨てるに臨み、天主樣が樣々な私の過去の生涯を示めして試み玉ふのであろうと決心して、丁度落ち武者のように一目散にその戰場を後にして、マリア樣の聖名の下に逃げ歸りました。もう大丈夫です。てもこれまてにその心を取り靜め得るまでには可なり苦しみました。斷食まて致しました。あなたには何故私がたゞ或一人の人に出逢つたためにそうまて苦痛を甞めたかゞお分りになりますか。それは此世の中て私にはじめて、而したゞ一度戀しいと云ふ事を敎へてくれた人てあるからてございます。而してその人を中心にしては生みの父母も、血を分けた兄姉たちも、私には忍びがたき怒りと憎みの的になるばかりなのてありました。私は人を戀ふると云ふ事は小さい壺に秘められてゐる不思議な匂ひ物のようだと思ひます。一度蓋を取れば匂ひは散じて、空しい壺の中にはたゞ淚が溜まるのみてしよう。私の悲しい日はそれから始まりました。元代さん、私はあなたに私の自叙傳を語るつもりてはありませんてしたのに、ついこう云ふ事まて書きました。けれども私のこの後の生活に於てはかゝる文字は又と使用する機會はございますまい。文

字を使用しない計りてなく、記臆にすら留まらざらん事を祈つてゐますので、二度と再びこんな追懐が頭の隅に隠れてゐる餘地のないように、私はこの手紙を懺悔臺と致しました。又一つにはあなたのお若い美しい生涯の道しるべの爲にもと思つて。あなたも人を戀しいと思ふような日が參るかも知れません。お驚きなさいますな。これは風の來るように。いつとなく何處からともなく誰の身にも參ります。その時にはどうぞ一番に私を思ひ出して下さい。而して小さい壺に手をふれる一瞬間前に、天主様にお縋り申して下さい。天主様の清め給ふ明らかな目と正しい分別とを待つて爲すべき事をなすつて下さい。私の通つたような悲しい路をば忘れても踏んで下さいますな。

元代さん、なぜ私はこう云ふ言葉をこれまでに書き進めたのでしよう。それはこの返事を認める爲めに貴女からの先達てのお手紙をも一度讀み直して見ました時、直覺的にある一種の恐怖を感じたからなのでございます。貴女のあのお手紙には、何か紙の面に現はしてある以外のある悲しい事を隠しながら書いたと云ふような調子が見えました。私はそれが氣になつて仕方がないのです。どうぞもう一度委しいお手紙を書いて私を安心さして下さいませぬか。

あなたのような方は餘り急に世の中を見すぎてはなりません。世の中から見られてはなりません。消い白露をば、天主様が木の葉の陰にいたわつて隠くしてゐらつしやるように――私には出來る事なら私と御一緒にあなたをも修院に閉ぢこめて仕舞ひ度い位ゐにさへ思はれます。けれどもあなたにはまだお父様やお義兄様やお姉様方と共に住むこの世の中がお懐しくゐらつしやいませう。私は決して

それを御無理とは申しません。

ではおひ〱左樣ならを申しませうね。書き度い事は大抵洩らさなかつた積りですが、それでもまだ云ひ殘してる事があるやうな氣がいたします。先刻願つたお手紙を書く事をお忘れ下さいますな。直ぐお出しになつて下されば私ももう一度此處から御返事が書けるかも知れません。北海道に行つてからは何事ももう何はない積りでございますから。さア、も一度左樣ならを申してお別れいたしませう。これが私の現在から申す最後の「左樣なら」でございますよ。

天主樣のおん惠み、聖母樣のおん慈愛（いつくしみ）、みな〱樣の上に遍からん事を祈ります。

八月十八日

ポリナ

親愛なるテレジヤへ

私は先日のあなたのお手紙が此尊い貞童姉妹の名で記されてあつたのを見て、大變に嬉しうございました。あなはこの二人の仇名をよくおぼえてお出てゝしたのね。丁度いゝ紀念ですからあの書物をあなたにお上げしたいと思つてお送り申しますから、どうぞ御受取り下さいまし。テレジヤ、幼な耶蘇のテレジヤ、何と云ふ淸らかな尊い名前でしよう。私はいつまでもあなたをこの仇名で呼びませう。而してポリナの云つたように「テレジヤよ、私は常におん身の事を思つてゐます。」と云ふ言葉を以てこの手紙を終りませう。」

元代は息をこめて夢中に手紙に引き込まれてゐたが、讀んでしまふと長いその紙を膝の上にたぐねた

ま丶、窓の小すだれに青ざめた頬をぢつと押しつけて、

『白井さんはとうとう行つてしまふ。行つてしまふ……。』

と思ひやりながら目をうるましてゐた。けれども最後の便りとしてその人から書き送られたこの手紙からは、ひたすらに悲しい涙の中に泣いてのみはゐられぬような、不安な空恐ろしい形身の言葉が殘された。元代は胸の震ふような不思議な壓迫を感じながら、叉手を伸ばして手紙の或る箇所を繰り返して見た。思ひも寄らぬその人の昔の戀物がたりも元代には殆んど生れて初めて耳にするほどの珍らしい詩であつた。殊に自分がそれと同じような悲しみの緣にても立つてゐるかのように氣遣つた白井さんの書きぶりには、元代は前髮の際まで赤くなつた。

『何を思ひ違つてゐらつしやるんだろう。いやな白井さん、いやな白井さん。』

と思はずさし向つてゞも居るように口走つたが、その時丁度何かしら坐敷から取りに來たらしい玉子の姿を見つけると、元代は我ともなく急いて膝の上の手紙を卷きはじめた。

『長いんだわねえ。何か面白い事が書いてあつて。』

と玉子は通りすがりに無遠慮らしく覗き込んだ。

『こんな御本を下すつたのよ。』

と元代はいつになくあわてたように姉の目から手紙を遠ざけて、小包の封を解いた。

『こんな書物がもう讀めるの。豪いことねえ。』

と玉子は中腰のまゝて目新らしいフランス文字の洋書を一寸と取り上げて見たが、

「いゝ顔をしてるわねえ。」

と口繪についたテレジヤ童貞の、神々しきまで氣品の高い肖像に目をとめた。元代も一緒にのぞき込みながら、

「お立派でせう。」

と嘆美して云ふと、玉子はそれには答へなかつた。而して自分より以外の美しい顏に出逢つた時に示す、何んとなく皮肉らしい競爭的な顏つきて、立ち上りながら、

「靜江のような目つきだわね。」

と云つた、元代は何とも云ひようのないような心持ちて、玉子のあちらに歩み去る足もとを瞬目のまゝ見送りながら、ぢつと窓のすだれに顏を押しあてゝゐると、座敷の父や義兄や姉たちの話聲や笑ひ聲が、遠い〳〵ところからの響のように聞こえた。

「あゝ白井さんに逢ひ度い。もう一度逢ひ度い。」

と元代は思ひつゞけた。

(完)



羽鳥千尋

鷗外

羽鳥千尋は實在の人物である。惜しい事には、今では實在の人物であつたと云はなくてはならない。明治四十三年の夏であつた。己の所に一封の手紙が屆いた。それは己の所へ多く屆く種類の手紙の一つに過ぎない。己の內に書生に置いてくれと云ふ手紙である。併しそれを書いた羽鳥千尋と云ふ、當時二十二歲の青年は一つの注意すべき履歷を持つてゐる。羽鳥は明治四十一年の夏貧と病との爲めに、兼ねて大學へ這入らうと思つてゐた志を飜して、醫術開業試驗を受けようと思ひ立つた。そして半年許り獨學をして、翌四十二年の春前期試驗に及第した。それから又一年許り獨學をして、己に手紙をよこした四十三年の春、後期學說試驗に及第してゐる。醫學と云ふものがどんなものだか、夢にも知らなかつた青年が、僅か一年半で政府が醫師に向つて要求する丈の知識を攫得してゐる。そこで後期實地試驗を受ける準備がしたい。それは田舍の家の机の上では出來ない。羽鳥は當時上野國群馬郡瀧川

村大字板井と云ふ所の家にゐた。その準備として診察や治療の實地を見る爲めに、東京に出てゐたいと云ふのである。同じ種類の手紙が己の所へは多く屆くが、羽鳥のやうな履歴を持つた手紙の主は少い。

丁度或る役所に雇員の位置があつたので、己は賴んで羽鳥をそこへ入れて貰つた。羽鳥は上京して己の所へ尋ねて來た。背の高い、只見たばかりでは病身らしくもない男である。細面で鼻が高く、目が大きい。二十二歳にしては、言語も擧動も不思議な程無邪氣である。一晩内に泊らせて、翌朝電車に乘る世話までして役所へ遣つた。

羽鳥は牛込に借家をして、雇員仲間の何某と一しよに自炊をしてゐた。職務には勉勵する。その職務と云ふのは細菌學を應用した製造で、豫備知識なしには出來にくいのである。それを羽鳥は造做もなく覺えて、殆んどその製造の主腦になつて働いてゐる。併し體には容易ならぬ病氣があるらしい。役所は醫者ばかりの勤めてゐる所なので、診察を受けさせた。病は脊椎にある。結核性のものだらうと云ふことである。

さう云ふ體でありながら、羽鳥は折々己の所へ訪ねて來ても、病氣の事は話さない。今の職務をしてゐては、細菌學の技巧を覺える丈で、病人を視ることが出來ないから、同じ役所の診療部の方へ入れ替へて貰ひたいなどと云ふ。始終試驗を受ける準備の事を考へてゐたのである。

羽鳥は丸二年勤めた。診療部へ入れ替へることも、役所の人に話しては置いたが、どうなつたか己は知らずにゐた。すると突然羽鳥が危篤だと云ふことを、一しよに住んでゐる雇員が電話で知らせた。同

僚の醫學士に頼んで往診して貰つた時は、羽鳥はもう注射薬で僅かに心臟の機能を維持して貰つてゐたのである。

羽鳥は病氣を自覺してから五年目、速成の目的を以つて醫術開業試驗に志ざしてから四年目に、後期實地試驗丈を殘して、二十四歳で死んだ。

羽鳥と同じやうな手紙を己によこして、同じ役所の雇員になつて、去年肺結核で死んだ大塚壽助と云ふ男がある。甲山と云ふ名で俳句を作つて、多少人にも知られてゐた。世間にはなんと云ふ不幸な人の多いことだらう。

下に寫すのは一昨年の夏羽鳥が己によこした手紙である。

* * * * * *

私は一介の書生である。失禮ではなからうか、あつかましい事ではあるまいかと、幾度か躊躇しても思ひ切られないので、とう／＼此手紙を書く。手紙はどれ丈長くなるか知らぬが、その中に一言の僞もないと云ふこと丈は誓つて置く。どうぞ先生の見卸してお出になる遠い麓の群集の中で、小さい聲のするのに、暫らくの間耳を借して下さい。そして「お前は誰だ」と問うて下さい。

私は上野國利根川の畔の沃野に生まれた青年である。羽鳥氏。名は千尋。年は慌ただしく重ねて二十二歳になつてゐる。

父文策は陸軍の軍醫を勤めてゐたが、明治三十二年に十一歳の私を殘して亡くなつた。私は烏許がま

しいが、小學の八年を首席て經過した。三十六年に十五歳て中學二年の試驗を受けて、首席て入選した。それから皇軍がロシアと戰つて捷つた三十八年の春、五十餘人中の首席て中學の業を卒へた。橡栗の殼は裂けて、纔かに綠の芽を吹いたのてある。私は卒業式の日に縣知事の前て答辭を讀み、母校の庭に卒業記念樹を植ゑて、未來を薔薇色に見てゐた。

然るに間もなく近親が財產差押の處分を受けて、一旦東京に上つてゐた私は呼び戾された。混雜の最中、四十年の春、私は端なく病を得た。既に乏しくなつてゐた私の家の財產は、此時消耗し盡された。病褥から起つた私は、猫の額程の田地に運命を繫いてゐなくてはならぬ人間になつてゐた。是非大學に這入らうと期待してゐた私が、小作人となつて草木と同じく朽ちなくてはならぬのてあらうか。

併し私はそれに甘んずることが出來ない。それては祖先に對し、亡き父に對し、十年の苦衷を盡した母に對して面目が無い。疲れた馬も笞うてば奔る。財產も健康も亡くしてはゐるが、なるべく平坦な近道のある目的地を選んて進んだら、行き着かれぬことはあるまい。それには開業試驗を受けて醫師になるに若くはない。それも驅足て遣つて、糊口の資丈が得られるやうになつたら、其上て幾らも學問は出來ようと、私は考へた。

そこて醫書を東京から取り寄せて、田舍て讀んだ。昨年の春前橋て前期試驗に及第した。今年の春後期學說試驗に及第した。さあ、これから實地試驗だと云ふ時になつて、私には東京に出て試驗を受ける準備をする丈の金がない。兼ねて種々計畫した事もあつたが、それは畫餠に歸した。

併し私はこゝに立往生をすることは出來ない。道は窮まれば通ずる。どこかに一條の活路があらうと、醒めて思ひ寐て思ひ、深夜の囈語に屢家人を驚かした末、とう／＼先生に此手紙を上げることになつた。

先生。どうぞ踏みにじられた橡栗の芽ばえを、お庭の隅に植ゑて下さい。私はそこで育つことが出來なかつたら、先生の足で踏みにじつて戴きたい。

* * * * * *

私に今少し父母の事を話させて下さい。

昔天領と云つた利根川の畔の地に、毎年江戸淺草のお藏へ米何千俵かを納める名主があつた。その名主の親類に、水利の相談などの時、飽くまで自己の意見を主張して毫も讓らない、强情な爺いさんがゐた。土地の人は爺いさんを天狗樣と呼んでゐた。私の父はこの天狗樣の子である。

私の生れる少し前に、名主の一族は財産を合併して製絲事業を興した。後に幾軒かの親類が破產したのは、此事業に失敗した結果である。父は同じ親類仲間の醫師羽鳥小右衛門の養子になつて、東京に上つて醫學を修行してゐた。此養家も初め富有で、「小右衛門は福嶋まで往くに人の地面は踏まぬ」と云はれてゐたのに、矢張一族破產の影響を受けた。福嶋と云ふのは、私のゐた村から三つ先きの村である。

明治二十七八年の役に父は軍醫に出身して、二十九年に臺灣に渡つた。度々土匪討伐隊に附いて行くうちに病氣に罹つて、三十二年の春、三十五歲で臺灣の土になつた。私の十一歲の時である。

父は歌を詠んだり文章を書いたりした。日本新聞の寄書家になつてゐたので、陸羯南、內藤湖南等に知られてゐた。又千家尊福、岸田吟香の二人とも交つた。「類題上野歌集」、「婕拾日記」、「宮嵐塔雨」等の著述がある。宮嵐塔雨は近畿に旅行した時の紀行文である。臺灣に渡つてからも「竹風蘭雨」、「觀風察潮」、「臺北の周圍」、「劍潭の記」、「南山北山報告二則」等を書いた。竹風蘭雨は新竹、宜蘭の風土記である。此中には日本新聞に載せてあるものもある。

私の母の里は高崎の肝煎名主と云つて、高崎藩主の御用達をしてゐた家である。高崎市の風俗が厚く、富の程度も高いのは母の祖父の感化に依ると言ひ傳へられてゐる。この爺いさんは毎朝長刀を帶びて、懷には城中で穿く麻裏草履を入れ、足には藁草履を引つ掛けて登城した。出掛けには村中を一巡して、まだ起きてゐないものがあると、起して遣る。夏は高崎まで一里程の間の田の水準を見て、過不足があると思ふと、歸途に教へて遣る。近い驛場へ女郎買に往つた若者が、鼻歌を歌ひながら歸る途で、この爺いさんのちよん髷を見附けると、慌てて足に穿いてゐる麻裏草履を脫いで懷に入れ、着物の裾を端折つて辭儀をしたさうである。この爺いさんは水利の爲めに度々資產を擲つたこともある。

今白髮を振り亂して農家の女と同じやうになつてゐる私の母は、當時上品に育てられ、器量も好かつたので、近郷の評判娘になつてゐたと、縣會議員などの中に、酒の上で話す人がある。

私の母は四十餘年の間まだ人と爭つたことがなく、人に小言を言つたことがない。誰も使ふことの出來ぬと云ふ奉公人を、母は使ふ。現に使つてゐる下男は早く兩親を失つて叔母に育てられ、十四五歲の

時、その叔母と爭つて家を出たものである。我儘で、酒が好きで、どの家にも半年より長くゐたことがない。それが母の許にはもう七年勤めてゐる。私の親類は數十軒あるが、どの家でも事があると、母の意見を問ひに來る。それでゐて母は非常に謙遜してゐる。三十を越してすぐに寡婦になつて、それからは貧苦の中で私と妹とを育てて來た。その爲めに母は思遣りが深いので、人が困窮を訴へて來ると、返さぬに極まつた金をも貸して遣る。かう云ふ母が一族に連累せられて、今のやうな身の上になつたのが、私には氣の毒でならない。

私は學資のないのと、自分が病身なのとから發心して、醫師になることにしたと云つたが、それではまだ十分に動機を言ひ盡してゐない。私の醫師にならうとしたには、まだ自分が病身にならなかつた前の或る記憶に促された所がある。それは母の病氣の記憶である。

明治四十年の春、私がまだ病氣になつてゐなかつた時、或る日母が頭痛がすると言ひ出した。併し只の頭痛ではなくて、母は失神したやうになつてしまつた。妹は留守であつた。私は慌てて「おつ母さん、おつ母さん」と呼んだ。下男がその聲を聞いて驅け附けた。それから薄荷を飮ませる。氷嚢を頭に載せる。醫者を呼びに遣る。その際に母は恢復した。併し私はその夜大切な母を保護する爲めに、是非共醫術を學んで置かなくてはならぬと思つたのである。私は自分の學校の成績の好かつたことを話したが、成績の好いのは私ばかりではない。妹は私より一層好い。さうして見れば、母の躾のお陰が餘程ある。私は母をどうしても保護しなくてはならない。

これから私がどんな人間だと云ふことを話さなくてはならない。それには私の人と違つてゐるやうな性質を一つ〳〵數へて、それを先生の天秤の皿に載せる外あるまい。

* * * * * * *

最初に申したいのは、私が憧憬の子だと云ふことてある。憧憬とは獨逸語 Sehnsucht の翻譯て、あくがれと訓ませるのださうだ。無理な詞かも知れぬが、私は高崎中學にゐた時、高山樗牛の書を愛讀して、今の天才を欽仰し英雄を崇拜する心も樗牛のお蔭て萌したのだから、此詞を用ゐる。高崎の寄宿舍では、生徒共が私の事を本屋だの雜誌屋だのと云つて冷やかしながら、又その本や雜誌を見に、私の部屋に集まることになつてゐた。

樗牛の書て眠を呼び醒まされたやうな心持になつた私は、天人論を讀む。病間錄を讀む。進化論講話や種之起原を讀む。

さて周圍を顧みれば、單に若干の年を閲したと云ふ丈を笠に着て、宇宙の事を疾くに分かり切つたやうに言つて、無造作に私共に物を敎へようとする人の多きに堪へない。

私はさう云ふ人達の言ふ事を聞くと胸が惡くなる。

一頃は聖書を懷にして、野卑なる裝飾と煩瑣なる儀式とのみち〳〵てゐる所謂神の祭壇の前に跪かうとしたが、人の子を牧すると云ふ人達の愚なのに呆れて逃げ出した。そして「どうしても天才てなくては駄目だ」と叫んで、獨力て或る物を求めようとしては、自分の心の内の餘りに空虛なのに氣が附いて、

目を瞬り拳を握る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次に申したいのは、私が驚異癖とでも云ふやうな性質を持つてゐる事である。

私は五歳の時父に連れられて、田舎道を當時の住家であつた玉村へ歸る途中、ふと道端に紫のげんげと黄いろいたんぽぽと一面に咲いてゐるのを見て、「此花は誰が植ゑたのです」、「誰も植ゑないなら、なぜこんなに美しく並んで咲くのです」、「なぜ春になつて一時に花が咲くのです」などと父を問ひ詰めた。父は異様に感じて、歸つてから母に話した。母は私が生れた時臍の緒を首に卷いてゐたので、珠數掛の子は僧になると云ふ迷信から、私の前途を氣遣つてゐたのだから、父よりも一層異様に感じたさうである。

後に私は病間錄を讀んで、「幼時小石の道に偏きを見て不思議に堪へざりしことあり」と云ふ所に來て、はつと驚いた。

私は書を讀んで宇宙の大を説いてある所や、萬物の微を説いてある所になると、息をはずませて讀み續ける。併しさう云ふ記事が或る獨斷的論説の前置に使はれてゐるのに氣が附くと、私は歯をむいて怒らずにはゐられない。何ぞ言の容易なるやと叫びたくなる。「首を擧げ角振り立ててわれ殼を出てたりと云ふ蝸牛を見る。」私はそんな議論をする人よりは、愚な迷の中に彷徨してゐる人の方が好きだ。

私は頬に止つた蚊をぱたりと打つて、手の平に黒い塵のやうな物の殘つたのを見ると、これがぶんと

羽を鳴らして來て、ちくりと私を螫したのだと云ふことが如何にも不思議に感ぜられる。毛のちぢれを見る。指の渦紋を見る。大腿骨頭の海綿質を見る。網膜の Sehsubstanz を見る。人の歌を歌ふのを聞く。猫の足下て鳴くのを聞く。同じやうに挿した Geranium に種々の葉を生じ花を開くのを見る。土を見る。石を見る。空に耀く星を見る。叢に集く蟲を聞く。何事によらず、私は殆ど恐怖に近い驚異を感ずる。

細菌學や心理學や精神病學は私の爲めには驚異の寶庫である。

私は手を自分の胸に當てて、心臓の跳るのを觸れて見て、身うちのをののくやうな驚異を感ずる。人と相抱いて歡を極めようとする刹那、自分の身體の中に働いてゐる怪しい力を思ひ、相手になつてゐる人の身體の中に同じやうに働いてゐる怪しい力を思つて、忽然或る自然學的試驗をしてゐるやうな氣になる。

私は此驚異癖が哲學に往く道てはないかと、竊に思つてゐる。

* * * * * *

次に私は敏感てある。併し衰耗に陷ることがないから神經衰弱てはない。

私はあらゆる節奏、旋律、諧調を聽く毎に、口に言はれない感應をする。夏草の綠の上に、灰色の砂烟を彗星の尾のやうに引いて進む軍隊の大きい子供等の吭から、單調な、無邪氣な軍歌が潮の涌くやうに起る時、私は背に水を灑がれたやうに感ずる。

私は自分ては草笛も吹くことを知らない。それに三味線は耳を掩うて走りたくなる程厭て、ピアノやヰオリンは食を忘れる程好きである。

郷校の宿直部屋から夕暮に洩れるオルガンの音にも、私は臭橘の垣根に足を駐める。

會堂に坐して心が冷灰の如くになつてゐた時、讃美歌の肉聲が空氣をゆすると、私の胸は器械的に共鳴した。神田の會堂であつた。或る夕明るい燭の下で、色の白い細面に、漆黒な髯を長く垂れて、白い服を着た酒井勝軍さんが、赫く銀の鞭を揮つて、「ああ主は讃むべきかな」と歌つた瞬間に、私は確に切實にクリストを懐つた。

明治二十年の夏用事があつて東京に上つて、歸途浦和驛に着くと、教員らしい色の白い青年に引率せられて、小學生徒がプラットフォオムの柵の外に整列してゐた。生徒等の目はもう車に乘つてゐる誰やらの上に注がれてゐる。旗に「送學事視察員一行」と書いてある。忽ち青年が相圖をすると、生徒等は足踏をして、「蒼の花に附く蟲の」と歌ひ出した。

私は肩から背へ掛けて戰慄を感ずると共に、目には涙が浮かんだ。そして周圍の人の恬然たる顏を見て、却つてそれを怪んだ。

私は自分て詩を朗讀しても同じやうな感じを起す。

私は書棚に書を並べるにも、床に花瓶を置くにも、庭に朝顏の鉢を据ゑるにも、かうてなくてはならぬと云ふ、動かすべからざる位置や排列がある。書籍の裝釘の意匠なんぞに強烈な好惡がある。

私は好きな詞がある。廢墟、暮春、春鳥、埃及、壁畫、藝術、故郷、刀、革、甕、踏靑、種を蒔く、その外イタリア、スパニアの地名、梵語、僧の名などである。私の妹は詞の好惡が一層强烈で、榭と云ふ一語に並ぶ好きな語はないと云つてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は思想も行狀も積極的である。

小學校にゐた時は餓鬼大將であつた。一日も何もせずに暮らすことが出來ない。平凡と云ふことを罪過のやうに思ふ。何事にも旗幟を鮮明にせずにはゐられない。敵として恐るべき人物でなくては、身方として用に立たぬと信じてゐる。八方美人主義は死んでも學ばれない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は饜くことを知らぬ知識欲を有してゐる。それも器械的に博く識りたいのではない。身の程を知らぬやうではあるが、「天才を與へよ、然らずば死を與へよ」と叫びたい。

幸に私の Psyche は健全なやうである。小さい時から今年まで頭痛のしたことがない。五日五夜の間通計十二三時間眠つた丈で讀書したことが度々あるが、頭はなんともなかつた。半年程殆ど書齋から出ずにゐて、足も腰も立たぬ程疲れて、頭丈はつきりしてゐたことがある。

烏許がましいが、私は少くも既往に於いて學校で儕輩に負けたことがない。

小學校には五歳で這入つた。當時はまだ年齡の事を細かに詮議するやうな事はなかつた。私は一年級

の學科が餘り容易なので、二年級にゐる從姉の所へ拔けて往つて、二年級の讀本を一しよに讀みたがつた。玉村の小學校で、私は始終首席を張り通してゐた。

私は八歲の時始て漢文の素讀を授けられた。當時玉村に父の義弟で縣會議長をしてゐた人が中心になつて組織した晚翠吟社と云ふ詩社があつた。後には玉振學舍と云ふ塾も出來た。そこへ埼玉縣久喜の人で、中島蠔山さんと云ふ人が聘せられて來てゐた。長い髮を麻の紐で結んでゐた。木食道人と云ふ渾名があつた。私は學校から歸ると、すぐに本の包を抱いて中島さんの所へ走つた。私は十五歲までに、孝經、四書五經、文章軌範、十八史略、唐宋八家文と云ふ順序に讀んだ。中學に這入つてから人の困る漢文が、私にはやさし過ぎた。

私が高等二年を濟ました時、父は「幼年學校か中學校かに這入れ」と言ひ置いて旅に立つて、それ切り歸らなかつた。十五になつた時、母が人と相談して中學二年に這入らせてくれた。一年前の春から英語も少し學んでゐた。丁度前橋の中學で同盟休校があつて、一二年生の落第者が多かつたので、高崎の中學では二三年の編入試驗がひどく賑つたが、私は四人の優等者の中に算せられた。

それと同時に郡敎育會展覽會と小學校選書畫其他成績品展覽會とに出品して置いたのが、どちらでも一等賞を得たので、私は縣と學校とから旌表せられた。その式場から歸つた時は、母が父の位牌の前に燈を點して、私を連れて往つて拜ませて泣いた。これが私の小學生活の終である。

今高崎の中學に往つて見れば、當時の敎師は殆ど皆去つてしまつてゐる。何か事のある度に、私が級

を代表して式辭を讀んだ庭には、只一株の柳のみが舊に依つて戰いてゐる。

二年級の學科は少しも骨が折れなかつた。そこて高崎の町の雜誌屋に通つて、日本派の俳句や新詩社の歌に耽つた。飛入りて末席に置かれた私は、先づ文章家だ、歌よみだと云ふ名を級中に馳せて、次に級の首席に上つた。

五年級は私の最得意の秋てあつた。これまて敎員の手に經營せられて、不體裁を極めてゐた校友會雜誌を、私は獨力て引き受けた。原稿を募集する。廣告を掲示場に張る。原稿用紙を印刷する。印刷所變更の折衝に當る。表紙を改める。口繪の製板、カットの彫刻を指揮する。組入、字詰から挾み込む色紙まて世話をする。刷新の辭から、運動記事、編輯便まて自分で書く。校正に前橋まて何度ても走る。其年の學期試驗の準備中にも私はこれを廢せなかつた。文藝部委員と云ふものが十人餘りゐたが、小心な上に筆も立たなかつたので、何もかも私一人てした。そして雜誌は縣内總ての小中學て評判せられる讀物になつた。

卒業試驗の時も、試驗の四五日前に、私は原稿用紙を机の上に山のやうに積んて書いてゐた。周圍ては得點順序の當てつこをして、誰が一番、誰が二番などと云つてゐた。私も内心こんな事をしてゐて試驗をしくじつたら、亡き父に濟まず、母に顏も合せられまいと、流石に膽を冷やした。併し成績が發表せられて見れば、第一の不勉强家たる私が矢張首席てあつた。

その時私は高等學校も此通りだ、大學も此通りだと、心中に豫測してゐた。丁度連戰連捷した皇軍が

滿洲て最後の勝利を贏ち得た明治三十八年の春の事てある。
併しそれははかない夢てあつた。私の病氣は此時芽ざしてゐたかも知れない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

知識欲の話の序に、私はどんな學問に嗜好を有してゐたかと云ふことを申したい。
私は歷史が一番好きてあつた。小さい時義經や辨慶の話を好んて聞いたのを始として、歷史上の事柄が何かの端に覗はれる度に、私は戀人の姿をちらと見るやうに感じた。
新聞を見ても古い地名や古い人名や年號が何かの記事の中にあると、それからそれへと思索して、歷史上の連絡を求めて、私はいつも知識の範圍の狹いのを歎いた。
中學の歷史の教員は疲癃の病ある尫弱の人てあつた。その人が缺勤する度に私は悲しかつた。その人は瀨川さんの西洋通史を種子にして教授してゐた。私はすぐに西洋通史を讀んだ。浮田さんの上古史を讀んだ。姉崎さんの印度古代史を讀んだ。ランケ、モムゼン、オルデンブルヒなんと云ふ人の書いたものを、原文て讀んて見たい。サンスクリットを讀んて自分て研究したい。こんな空想を馳せて、私はいつも望洋の歎を發してゐた。
次に好きなのは博言學てあつた。サンスクリットが讀みたいと思つたことは前にも云つた。それからインドゲルマン語系の大體が知りたいと思つた。私の中學にゐた時代には英語の雜誌が二種位しかなかつたが、それを讀むにも人の目を附けぬ所に目を附けて、分に過ぎた望を懷いてゐた。

次に好きな物を強ひて擧げれば、理學であつた。併し數學が厭だから、これには望を繋がなかつた。

最後に私と文藝との關係を一言したい。

私は文藝に對しても敏感を持つてゐると信ずる。併し私は最初から鑑賞の一面に甘んじて、製作の一面には指を染めようとしなかつた。負けじ魂はあつても、どうも詩を作ること丈は自分の領分でないと思つてゐた。

新しい俳句、短詩、長詩いづれも試みたことはある。併し私は、一度も製作力の迸り出るやうな感じに遭遇しない。只海潮音や春鳥集を讀んで、酒に醉つたやうな心持になつた丈である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は彫塑と繪畫とを音樂に次いて愛する。併し今の日本繪、就中人物畫は毛蟲のやうに嫌つてゐる。書も面白い。篆刻は少し遣つて見た。

碁と將棋とは人のするのを見るも厭である。

私は酒も煙草も口にしたことが無い。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

私を蹉跌させた病氣の或時期に、私が擔架に載せられて高崎の病院へ往つた記事がある。病氣は明治四十年の春、十九歳の時に發して、それと同時に私は俳句を始めた。それから四十一年に開業試驗を受けようと思ひ立つまで、一年餘り俳句を弄んでゐた。それて當時の記事がほとゝぎすに載せられてゐる。それ

をこゝに寫してお目に掛ける。

『十月二十四日の事である。新しい病兆が現はれた爲めに、急に外科手術を受けることになつて、高崎市綿貫病院へ往く。行程三里。

人々に抱かれて擔架に乘る。柔かい布團を厚く積んだのがソファのやうで工合が好い。仰臥した上にアアチのやうな物を拵へて、その上に白布を掛け、布の端を垂れて體の兩側を覆ふ。日が好く照つてゐて、白布の下の小天地が非常に明るいのが嬉しい。七時半に發する。大勢で送つて來てくれる樣子である。枕頭にあつた秋海棠と小豆色の魚子菊との鉢植二つ丈を下男に持たせる。

好い天氣だ。蓑蟲が明月でも覗くやうに、首を延べて野を見る。

見渡す限の田の面に熟してゐる稻の色に驚く。まだ刈る人は見えぬが、天氣が定まり次第一齊に刈り始めるだらう。收穫と云ふ大戰爭の前の少時の平和だなと思ふ。弓弦を引き絞つた處だなと思ふ。好い感じである。

秋天に劃す俳句の新領土

玉村の町に入る。こゝで人々に別れる。跡は一行十一人になつたさうである。「大學病院行見合せ」と云ふ電報を打たせる。一行がぞろぞろと長い驛をねつて行くのだから、人の視線を惹くこと夥しい。首を擡げて裾の方を見れば、後から歩いて來る伯父や叔母の袖の隙、肩の間から、口を開いたり指さしをしたりして、戸口に立つてこつちを見てゐる町の人の姿が幾つとなく見える。物好きに往來に飛び出し

て執念く見てゐる奴もある。「あれ〳〵、あゝ云ふ物が通らあ」などと云ふ頓狂な子供の聲も聞える。死んだものと思はれはすまいかと思ふと、餘り好い心地もせぬ。

生きてゐるぞ擔架の上の秋の我

町を拔けてしまふと、樂々する。又廣野に出る。赤城榛名の山々から右の頰へ吹き附ける風が、もう冬が近いので、うすら寒い。蓑蟲は首を出して見ては引つ込めてゐる。

がた馬車に道を讓るや稻の中

陰の山日向の山や稻の果

九時半倉賀野に着く。町はづれの茶屋に休む。小綺麗な店で、コスモスや菊が一ぱい咲いてゐる。擔架の上に腹這つて、赤酒、鷄卵、ミルクなどを飮む。

菊のよめ茶を出してすぐ機を織る

此菓子はあの菊に似て赤きかな

十時二十分發す。今度は少し身を起して前を見ながら行く。

わが先きをてく〳〵歩く人の秋

少し風が出て來た。蓑蟲が又身を縮める。高崎まで松並木が一里程續いてゐるのである。段々行くうちに大きな町、白い、長い停車場の建物などが見えて來る。佐野村の小學校で鐘が鳴つてゐる。

稻の中に學校の櫻紅葉かな

十一時四十分に着く。受診。入院。非常に疲れたが

菊も無事秋海棠も無事で來し』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

開業試驗を受けて醫師にならうと云ふのは窮策で、しぶ〳〵それに極めたのだが、苦心して人骨を拾ひ取つて、まだ土臭いのを燈の下で弄んで、本の中にある記述と較べて見て、私は本を一枚飜す毎に、目の前が明るくなるやうな氣のするのを愉快に思つた。かう云ふ本に多く挿んである拉甸語にも興味を覺えた。私の癖で、すぐに拉甸文法にも手を伸ばしたが、名詞の變化より先きに進む餘裕が無かつた。

二度の試驗に答案を書くにも、範圍の曖昧な問題があると、先づ問題の研究と云ふものを一二枚書く。答案中の術語には悉く拉甸語、獨逸語を添へる。受驗者が一人でも殘つてゐる間は、私は筆を擱かない。兎に角本縣人の受驗者中では第一であつた。

併し此次の只一つの試驗を受けるには、田舍住まひの机の上では準備することが出來ない。私は早くその準備をして、早く試驗を濟ましたい。そして母の許に歸つて來たい。なぜと云ふに、私が旅行してゐる間は、度々病氣をした母が、家に歸つてゐた四年間一度も病氣をしないのを見て、私は母の心理狀態を察すると、どうも長く遠く離れてゐたくないのである。それに私の爲めには此試驗は一段落で、それから先きに眞の期待があるのだから、急がずにはゐられない。

私の家の財政は東京に滯留することを許さないばかりではない。よしや入費なしにゐられるとしても、

少しの小使を郷里から取り寄せることもむづかしい。

東京にはしるべが一人も無い。父が世話をして醫師にした人が二人あるが、それをたよるには忍びない。

私は種々の計畫をして見たと云つた。その一つを擧げて言へば、岩鼻の火藥製造所の診察部にゐる軍醫の下働にならうとしたことがある。併し此運動は私が頼んで置いた人の油斷で成功しなかつた。

先生。とう〳〵私は此手紙を書くことになつたのである。此手紙を先生はなんと思つて見るだらうか。私の方では知らぬ人に遣ると云ふ氣はしない。私は先生の家世を知つてゐる。先生の祖父の名、父母の名、夫人の名、子供衆三人の名を記憶してゐる。先生の長い長い頭銜をすら〳〵と誦することが出來る。先生の書いた物は皆讀んでゐる。先生に逢つたこともある。それは神田の電車の中であつた。私の向ひに來て、先生が腰を掛けた時、私は電氣に擊たれたやうであつた。亡くなつた父に再會したと同じやうな感じがした。これが僞らない事實だと云ふことが、先生に分かりはすまいか。どうも分からなくてはならぬやうに思はれてならない。

先生。どうぞ私を書生にして置いて下さい。私は廢滅に垂としてゐる一家の運命、亡き父の名譽、頼りなき母と薄命なる妹との性命を、一しよに束ねて先生に托する。私は紹介狀は持つてゐない。背後に保證人をも有してゐない。併し私を紹介するには私が最も適してゐると思ふ。私を保證するにも私が最も適してゐると思ふ。

先生。私は此手紙を心血で書いた。此手紙は私の半生の思量が隄を決して溢流したのである。此手紙は私の青春の情火の燄である。せめて此手紙の中から私の稚氣丈をでも味つて下さい。

先生。私はとう〳〵泣いた。そして傍に寢てゐる母に目を醒まさせた。

昔風の大きな家のがらんとした天井の下に蚊屋を吊つて親子三人がゐるのである。私は床の上に机を置いて、細い燈の下に筆を走らせてゐる。もう二番鷄が鳴く。

「體を惡くすると行けないから、もうお寐よ」と云つて、母は厠に往つて、歸つて又横になる。森のある東の方で頬白が鳴き出した。すが〳〵しい、希望のみち〳〵てゐるやうな聲である。頭を擧げて聽く時、前の欄間の明るくなつてゐるのが目に附く。

恍惚として書いてしまつてあたりを見廻す。向うには本箱を積んだ床の間がある。北の床には千家男爵が亡父に書いてくれた書の軸物が掛かつてゐる。その下の置床には何も挿さぬ、赤い九谷の花瓶がある。その傍には蟲の食つた萬葉集が一山ある。二つの床の界の柱には小さい洋畫が一枚吊るしてある。その下に臺灣で父の買つた拂子が下がつてゐる。右の方は奧の間との隔ての襖で、松と鴉と牡丹との繪がある。印には五日一山十日一水と刻してある。その間から多賀城の碑や其外の石摺を張つた奧の間の襖が見える。東の間との界で、背後になつてゐる鴨居には、「正二位陸奧出羽按察使前權大納言源有長」といふ長い名の人が昔泊つて書いたと云ふ「德不孤」の三字の大額がある。左の方の障子の外は庭で、四月に孵えた鷄の雛が鳴いてゐる。

筆を棄てて縁側に出る。見渡す限青田てある。半里の先きに、白壁や草家が帯のやうに横はつてゐるのが玉村て、其上に薄紫に匂つてゐるのが秩父の山々てある。村の背後を東へ流れる利根川の水の音がごうつと響いてゐる。

明治四十三年七月二十一日　羽鳥千尋

鷗外先生侍史

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は**本鄉西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京市東片町局**と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金 口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵劵代用 必ず**一割增**の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢 （集金委托料及送達料）
一金五圓迄 金七錢

一受領證請求は必ず返信料金を要す

明治四十五年七月廿八日印刷納本
明治四十五年八月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷一九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

一時間八百枚の寫眞

撮った寫眞は繪葉書大の寫眞となりて出來上る
園遊會など多人數の集會には絶好の紀念なるべし

今回輪轉焼付機械到着仕候に付、撮った其場で、一時間八百枚の割にて目の廻るほど急速に調製可仕候、八月一日より御注文に應じ申候間御用命被下度奉願上候。

尚昨年より開始致し候一時間寫眞は、大に好評を博し居候外、陶器焼付寫眞、パノラミック寫眞、天然色寫眞など、三越ならでは撮影致しかぬべき特種の設備も御座候間、御愛顧のほど奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

MADE IN JAPAN